

博士学位論文

GIS による言語地理学研究
— 『瀬戸内海言語図巻』 との比較を通じて —

徳島大学大学院総合科学教育部

峪口 有香子

博士学位論文

GIS による言語地理学研究
— 『瀬戸内海言語図巻』 との比較を通じて —

徳島大学大学院総合科学教育部

峪口 有香子

GISによる言語地理学研究

－『瀬戸内海言語図巻』との比較を通じて－

目次

I. 序論

第1章	本論文の目的と意義	1
1.	GISによる言語地理学研究の意義とそこから見出される本論文の目的	1
2.	言語地理学の現状	2
3.	言語地理学の課題－GISを援用した言語地理学研究－	3
第2章	本論文の目的と研究方法	6
1.	本論文の目的	6
2.	LASの成果と課題とは	6
3.	LASの追跡調査について	7
4.	本論文の構成	8
第3章	LASの電子データ化の試み	9
1.	本章の目的	9
2.	電子化の手順	9
2. 1.	データの入手と加工	9
2. 2.	全国市区町村界データの入手	9
2. 3.	LASの電子化	10
2. 4.	ラスターデータの取得	11
2. 5.	空間補正	12
2. 6.	属性データ化	13
2. 7.	シンボルの変更	13
2. 8.	印刷用の地図作成	13
3.	本章の結論と今後の課題	14

II. GISの空間解析を用いた言語分析

第4章 空間検索・標準偏差楕円による言語分析—「さつまいも」を事例として—	16
1. 本章の目的	16
2. 調査・地図化の方法と本論の対象	16
3. 「さつまいも」の方言分布	17
3. 1. 先行研究	17
3. 2. 瀬戸内海全域における方言分布の概観	18
3. 3. 淡路島における方言分布の概観	28
4. 本章の結論	32
第5章 標準偏差楕円による言語分析—「にわか雨」を事例として—	33
1. 本章の目的	33
2. 調査・地図化の方法と本論の対象	33
3. 「にわか雨」の方言分布	33
3. 1. 全国分布の概観	33
3. 2. 通時的考察	34
3. 3. 瀬戸内海全域における方言分布の概観	35
3. 4. 香川県における方言分布の概観	43
3. 5. 淡路島における方言分布の概観	46
4. 本章の結論	54
第6章 カーネル密度による言語分析—文末詞「ナー」「ノー」を事例として—	56
1. 本章の目的	56
2. 調査・地図化の方法と本論の対象	56
3. 全体の結果	56
4. 文末詞「ナー」のカーネル密度による方言分布	59
5. 文末詞「ノー」のカーネル密度による方言分布	72
6. 本章の結論	85
第7章 標準偏差楕円・メッシュ地図による言語分析	
—接続助詞「から」を事例として—	86
1. 本章の目的	86
2. 調査・地図の方法と本論の対象	86
3. 先行研究	87
4. 瀬戸内海域における原因・理由を表す接続助詞「から」の方言分布	88

4. 1. 1.	瀬戸内海地域における方言分布の概観	88
4. 1. 2.	瀬戸内海地域「カラ」における地理的分布特性の算出	97
4. 2. 1.	淡路島における方言分布の概観	99
4. 2. 2.	淡路島「カラ」における地理的分布特性の算出	99
4. 3. 1.	小豆島における方言分布の概観	105
5.	方言分布から推定される変化の過程	106
6.	本章の結論	115

第8章	WEBによる言語地図の公開	116
1.	本章の目的	116
2.	分析手法	116
3.	RとLeafletによる可視化方法	117
4.	本章の結論と今後の課題	120

Ⅲ. GIS 地図をベースとした言語分析

第9章	瀬戸内海地域における言語変化－「コピュラ形式」を事例として－	121
1.	本章の目的	121
2.	取り扱う調査について	122
3.	コピュラ形式の方言分布	122
3. 1.	全国分布の概観	122
3. 2.	「ーだ」における方言分布の概観	123
3. 3.	「ーだった」における方言分布の概観	129
3. 4.	「ーだろう」における方言分布の概観	134
4.	本章の結論	134

第10章	瀬戸内海地域における言語動態	
	－文末詞「ノーシ・ノモシ」「ゾイ」を事例として－	136
1.	本章の目的	136
2.	取り扱う調査について	136
3.	文末詞「ノーシ・ノモシ」における方言分布の概観	137
4.	文末詞「ゾイ」における方言分布の概観	145
5.	本章の結論	153

第11章 淡路島における言語動態

- 「じゃがいも」「さといも」を事例として— 154
- 1. 本章の目的 154
- 2. 取り扱う調査について 154
- 3. 「じゃがいも」の言語動態 154
 - 3. 1. 先行研究 154
 - 3. 2. LAS と 2012 年調査の比較 155
- 4. 「さといも」の言語動態 159
 - 4. 1. 先行研究 159
 - 4. 2. 1999 年調査と 2012 年調査の比較 160
- 5. 本章の結論 163

第12章 逆接の接続助詞について

- 「けれども」「そうだけれども」を事例として— 164
- 1. 本章の目的 164
- 2. 取り扱う調査について 164
- 3. 島別にみた「けれども」の方言分布 164
 - 3. 1. 淡路島における「けれども」の方言分布 164
 - 3. 2. 小豆島における「けれども」の方言分布 167
- 4. 島別にみた「そうだけれど」の方言分布 169
 - 4. 1. 淡路島における「そうだけれど」の方言分布 169
 - 4. 2. 小豆島における「そうだけれど」の方言分布 172
- 5. 本章の結論 173

第13章 小豆島における民俗語彙

- 「神輿」「葬式」「埋葬地」「墓制」を事例として— 174
- 1. 本章の目的 174
- 2. 取り扱う調査について 174
- 3. 「神輿」における方言分布の概観 174
- 4. 「葬式」における方言分布の概観 176
- 5. 「埋葬地」における方言分布の概観 177
- 6. 「墓制」における方言分布の概観 178
- 7. 本章の結論 179

IV. 結論

第 14 章 本論のまとめと今後への提起	181
1. 本論のまとめ	181
2. 今後への提起	188

参考文献

既発表論文との関係

※【注】は、それぞれの章末に付した。

I . 序論

第1章 本論文の目的と意義

1. GISによる言語地理学研究の意義とそこから見出される本論文の目的

本研究は、GIS（Geographic Information System 地理情報システム）による言語地理学研究をテーマにしたものである。

言語地理学とは言語史研究の一部をなし、音声・文法・語彙などの地理的分布にもとづいて言語の変遷を解明する研究分野である。例えば、方言の地理的分布を通じ、歴史的にどのように形作られてきたのか、そして、そこにはいかなる要因や背景が関与しているのか、といった点を究明することが主な目的である。

柴田（1969）は、言語地理学は地方の言語史を再構成することであると定義している。地域的な変種、すなわち、方言の地図化を行うことによって地理的分布を見出し、地域的な変種の時間的な変化とその要因を推定することで、ある地方（地域）における言語変化の歴史をあとづけるという意味である。

本研究は、柴田が定義した言語地理学的研究にもとづき、瀬戸内海地域をフィールド調査の対象地域に設定し、言語変化を解明することを本論文の目的とする。

方言地理学の大きな成果である藤原与一・広島大学方言研究所編（1974）『瀬戸内海言語図巻上・下巻』の調査が開始されてから50年以上が経過し、瀬戸内海地域における方言も変化が進行していることが予想される。そこで、本研究では方言分布の「実時間」上における経年変化に焦点をあて、そこに見出しうる方言分布の変動を捕捉し、瀬戸内海地域での言語変化の解明を目指したい。また、これらの目的を遂行するため、GISの技法を援用する。すなわち、言語地理学を言語研究の枠内に閉じ込めるのではなく、地理情報科学・空間情報科学という新しい学問分野との融合の道を切り開くため、GISを援用し、言語の地理的な分析を試みる。従来の言語地理学の方法を踏襲するとともに新たに地理・空間情報システムをフルに活用した研究であることが本論文の特色である。

日本の方言研究界においてこれまでにGISを利用した研究として大西（2008）が一部にあるものの、本格的に活用された研究はほぼ皆無に等しい。詳細については後述するが、GISについてさらに敷衍すると、地理情報システムと呼ばれるものである。地理空間における事象を扱う言語地理学において、GISへの理解と注目は進みつつある。言語地理学は過去と現在の地理的分布から言語変化をいかに考えるか、という目的をもった学問領域であり、その目的を達成するうえで、GISによる時間と空間に関する分析が、これからの言語地理学的研究において必要とされる。

2. 言語地理学の現状

日本において言語地理学研究が盛んに行われた時期は、1960年初頭から1970年代後半にかけてであり、この期を中心に約400冊の言語地図集と約30,000枚の言語地図が公表され、この数は世界トップである(Lameli et al.2010)。

言語地理学研究は、言語地図の解釈を通して方言分布に見出せる言語変化の種々の現象を追求し、一定の成果を挙げてきた。日本の言語地理学では柳田國男が提唱した『方言圏論』を出発点とし、言語地理学＝文献国語史の解明といった目的を掲げ、国立国語研究所を中心に柴田(1969)『言語地理学の方法』、グローターズ(1976)『日本の方言地理学のために』、徳川(1993)『方言地理学の展開』、馬瀬(1992)『言語地理学的研究』らの研究によって進められ、隆盛をみたが、真田(1990)によって指摘されたように、80年代以降は研究動向が地理的研究から社会言語学研究へ移行したため、言語地理学的な研究自体が後退する傾向にあるのは事実である。

日本の言語地理学は、小地域をフィールド調査の対象とした研究と、全国あるいは関東地方、中国地方などといった広範囲を対象とした研究の両面から進められてきた。前者の代表は、柴田(1969)による、新潟県糸魚川地方での調査で、その後の言語地理学的研究の草分け的存在となった。この研究の影響を受け、全国各地での言語地理学的調査が行われた。その結果、全国各地で微細言語地図が次々に作成された。一方、微細言語地図に対し、全国や地方など、広域な地域を対象とした鳥瞰的広域言語地図もこれまで多く作成されている。日本における方言の全国規模の調査には、国立国語研究所編(1966-1974)『日本言語地図第1-6集』、同編(1989-2006)『方言文法全国地図第1-6集』などがあげられる。地方単位での研究成果として、広戸惇(1965)『中国地方五県言語地図』、藤原与一・広島大学方言研究所編(1974)『瀬戸内海言語図巻上・下巻』、大橋勝男(1974-1976)『関東地方城方言事象分布地図』などがある。このように日本において言語地理学的手法に基づいた調査研究は、半世紀以上も前から本格的になされ、多くの成果を上げてきた。

2011-2015年度文部科学省科学研究費基盤研究(A)「方言分布変化の詳細解明—変動実態の把握と理論の検証・構築—」(代表:大西拓一郎(国立国語研究所教授))の調査研究が2011年からスタートし、新たに「方言の形成過程解明のための全国方言調査」をはじめ、21世紀初頭の日本全国の方言分布解明に乗り出している。前世紀に行われた方言調査結果との比較を行うとともに、現在の分布を明らかにすることで、時間を隔てた方言分布の変化が解明できると考えられる。

方言研究がことばの地域差に関する研究である以上、地理的視点からのアプロ

一チを無視することはできないはずである。言語地理学に新たな視点を導入し、今、研究自体を再構築する時期であると確信する。

方言形成の過程を明らかにする研究においては、方言圏論、孤立変遷論に基づく既知の分布理論の分析のほかに、徳川宗賢（1972、1993）は、分布領域に対して正確な距離や方向・面積などの測定を実施することで、言語伝播の速度測定につながり、絶対年代による中央語史の再構築に有効な知見を見出しうると述べた。方言の地理的伝播速度による研究はその後、一連のグロットグラム調査を実施した井上史雄（2003、2004）によってすすめられ、方言は年速 1 km の速度で伝播するという結果が導かれた。

言語の歴史的変遷と地理的条件が伝播速度に基本的に働いているのは事実であるが、この伝播速度に影響する要因は、伝播速度が問題となる語形の使用頻度数とも関係し、また語形の使用領域のほかに使用場面、さらには社会・文化的要因が言語変化に複雑に絡み合う。このような状況のもと、20 世紀後半に行われた諸研究の継続と、さらに新たな知見を生み出すためには、言語地理学における核心的課題である方言の空間分析が可能となる新たな分析手法として、GIS を用いて多元的な視点から言語変化の状況を把握することが、日本語の諸方言の過去・現在・未来において言語地理学的研究は極めて重要な意味をもつ。

以上のことを踏まえて、次節では言語地理学の課題についてみていく。

3. 言語地理学の課題—GIS を援用した言語地理学研究—

第 3 節では、GIS を利用した言語地理学の新たな可能性について述べたい。

言語研究への GIS を用いた分析手法の導入は、まだ緒に就いたばかりである。たとえば、既存の言語地図を GIS 利用によってデータベース化した試みとして大西（2003、2008）、鳥谷（2006）の研究が見られ、社会言語学のフィールド調査で得られたデータを GIS ソフトによって言語地図化する試みとしては松丸（2003）、中井（2005）があり、さらには『日本言語地図』の電子化が熊谷（2013）によって進められている。

また日本の方言研究界では、各地の方言の実態に関する膨大なデータが蓄積されており、それに見合った将来と展開が必要であると考えられる。GIS を利用した方言のデータ分析は、停滞しがちとみられる言語地理学の状況を打破することができるはずである。

GIS を援用しつつ、地図データと属性データを管理し、言語地理的事象を時空間上で捉えることは、これまで試みられていなかったデータ分析を可能にする。例えば、方言研究に GIS を用いることで、多種多様なデータの利用が可能になり、

時間軸に関する分析が可能となることにともない、多くの現象を包括的に考察することができるようになる。

また、『瀬戸内海言語図巻』は現在紙媒体でしか存在しないが、この言語地図の電子化を行うことにより、GISの技法を利用した方言の地理的分布の解釈や言語変化についての時空間分析ができるばかりか、追跡調査との経年変化を明らかにするための比較・対照も、同じ土俵の上で可能になる。データの階級区分における階級数や階級区分の方法を変える場合、手書きの地図だと、その都度、最初から描き直すことになり作図には描き換えるたびにかなりの時間を要するとともに、誤差を生じることになるが、GISを用いれば言語情報のデジタル化が可能となり、コンピュータで作図する場合は設定を変えるだけで容易に描き直すことができる。また近接性やポテンシャルの測定など、膨大な空間データを用いた高度な統計解析も手間がかからず容易に行うことができる。

GISの最大の利点は、主題の異なる複数の空間データ群が存在する場合でも、それらのデータを重ね合わせて表現できることである。このような特性を活かし、語形ごとのレイヤ地図を重ね合わせ、瀬戸内海域の言語鳥瞰地図と微細地図を交互に示し、視覚化し表示することにより、詳細な方言の分布、ことばの伝播模様を探り言語変化の実情に明らかにすることを示した。

また、GISを用いた空間分析の事例として、高坂、関根（2005）によると、近年のGISは、空間分析、空間モデリング、そして空間統計学とシフトしてきたとされる。初期におけるGISの利点は、空間データの蓄積、更新、表示の能力にあったが、今日では、空間データ分析に頻用されるようになってきたという。利用の範囲は種々の分野に及び、犯罪分析や疫病学においても、空間モデリングや空間統計が援用されている。

永家ら（2011）は、東日本大震災の際、社会福祉施設が潜在的にどのようなリスクを抱えていたのか、施設立地の側面から分析を試みた。具体的には、地形的側面、施設立地の特性（標高、海岸線からの距離、高台までの最短距離）などについてGISの手法で明らかにするものである。東北3県の福祉施設の地理的分布状況を表したもので、分布志向性分析を用いて分析を行っている。岩手県と福島県における福祉施設の地理的重心は、海岸線から100 km程度離れた内陸部にあるのに対して、宮城県は海岸線に近い場所にある。また、標準偏差楕円は3県のうち宮城県が最も小さく細長い。施設立地傾向からみて、宮城県は海岸線に近く凝集度が高いことから、他の2県と比べて津波被害のリスクが高い施設が多かったということになる。このような事例を参考に、地点データ・地理的分布の空間解析を言語地図にも応用し分析を試みる。

本論文では、このような方法をもとに、それぞれの事例に基づいた検討を行うことで、言語地理学研究の新たな展開の可能性を提示したい。

第2章 本論文の目的と研究方法

1. 本論文の目的

本研究の目的は、1974年に藤原与一・広島大学方言研究所によって出版された『瀬戸内海言語図巻』（以下LASと略す）の追跡調査を実施し、方言の経年比較といった視点から言語変化を探ることにあるが、これら一連の工程ではGISを用いた言語地理学研究のもとに進めるという点が新規的であり、日本の方言研究界においても新たな方向性を示すものであると確信する。

LASの刊行以来、本図巻を対象とした研究も多くみることができる。追跡調査だけでも、室山（1977）・岸江（1981・1983）・広島大学方言研究会（1986）・友定（1988）・佐藤（1990）・町（1999）などをあげることができる。これらは、いずれもLASの調査地域内で、同調査から一定の年数を経て追跡調査を行い、方言がどのように変化しているのかを考察したものである。これらの研究成果も大いに参考にしながら瀬戸内海地域における言語調査を企画・実施し、室山（1999）の指摘した瀬戸内海言語の近畿圏の影響の増大と共通語化による言語変化といった仮説のもとに、当地域における言語流動の実態を解明することを目指す。このような点で、本研究の成果は方言伝播の新たな理論を生み出す可能性を秘めていると同時に、停滞している言語地理学研究への貢献も大いに期待できるものと思われる。

2. LASの成果と課題とは

第2節では、LASについて説明する。LASは、上述したように藤原与一・広島大学方言研究所編が発刊した言語地図である。これは鳥瞰図的な視点に立つ、世界でも類をみない、日本の言語地理学的研究の成果であるといっても過言ではない。LASは、老年層と若年層の二層を対象とした計251図からなる言語地図であり、地理的な言語変異を描き出すと同時に世代間の言語変化を浮き彫りにしたものである。調査対象地域は、一大内海多島地域の瀬戸内海域である。調査時期は1960年から1965年の5カ年、LAS完成までには実に14年の歳月を要した。和歌山、大阪、兵庫、岡山、広島、山口、福岡、大分、愛媛、香川、徳島の各府県で特に瀬戸内海に含まれる地域を対象に行われた。総調査地点数は計842地点（島嶼部701地点、沿岸地点141）で各地点、老年層のみならず少年層を対象とした方言調査を実施した。老若二世代における地理的分布を同時に提示したことで「見かけ時間」上の方言差を映し出すことに成功している。

3. LASの追跡調査について

第3節では、追跡調査について論じる。追跡調査とは、LASと同様、瀬戸内海島嶼部および瀬戸内海沿岸地域において2011年10月から2014年12月まで筆者が行った大規模方言調査（通信調査・面接調査）のことである。筆者が行ったこの調査を以下では峪口調査と称する。ただし、今回の追跡調査では、約50年前の同一人物に対して調査をしているわけではない。

調査対象地域を詳しく述べると、瀬戸内海島嶼部各地をはじめ、大分、福岡、山口、広島、岡山、徳島、愛媛、香川、兵庫、和歌山、大阪各府県の瀬戸内海沿岸の諸地域である。

調査方法は、通信調査が主で、臨地面接調査も一部並行して実施した。通信調査では、各地の教育委員会および公民館などの機関を通じ、回答者に調査票を配布頂き、調査票の返送をお願いした。

通信調査では第一次調査として、2011年10月から同年12月までに瀬戸内海域の市町村教育委員会、公民館、漁業協同組合等の協力を得、約600地点で、1962年以前に生まれた生え抜きの方々から回答を得た。第二次調査は2012年8月から同年9月に実施し、こちらも約600地点のデータを得た。第三次調査は2013年4月から2014年12月に実施し、150地点のデータを得た。第四次調査は、2015年6月から9月に実施し、150地点のデータを集めることができ、現時点で得られたデータ数は、1500地点である。

臨地面接調査は、2011年10月から2014年12月にかけて随時、各地を訪問した。訪れた地域は、香川県小豆島、豊島、香川県さぬき市、香川県綾歌郡宇田津町、香川県観音寺市（大野原町、豊浜町）、香川県高松市（牟礼町）、香川県坂出市、香川県東かがわ市（三本松、黒羽）、兵庫県姫路市（家島、坊勢、白浜町、大塩町）、淡路島、福岡県北九州市、大分県国東半島、広島県尾道市から愛媛県今治市にかけてのしまなみ海道、広島県大崎上島、徳島県徳島市、阿南市（椿泊町、橘町、海陽町、鳴門市（鳴門町、里浦町、瀬戸町）である。なお、香川県での調査には香川県話しことば研究会の島田治氏に人選をして頂き調査を遂行した。

第一次調査、第二次調査、第三次調査、臨地調査と併せて、1,500人の各地生え抜き話者（1962年以前に生まれた男女）から回答を得た。なお、各章によって調査人数には異同があることを断っておく。

調査項目数は161で、挨拶・文法・語彙・民俗に関する質問項目が中心となっている。なお、調査項目はLAS調査で取り上げられた項目を大幅に採用した。

4. 本論文の構成

本論文は、大きく分けて、序論、GISの空間解析を用いた言語分析、GIS地図をベースとした言語分析、結論の4部構成となっている。

このうち序論は第1章で、本論文の目的と意義、これまでの言語地理学研究において言語地理学がどのように取り上げられてきたかを概観し、これからの言語地理学のなすべき課題を明らかにした。またGISを利用した新たな言語地理学の方角性を示した。第2章では、これまで筆者が行ってきたLASの追跡調査について詳細に示した。第3章では、紙媒体でしか存在しないLASの電子化の過程を述べ、GIS地図の可能性を示唆する。

具体的な事例に基づいたGISの空間解析による言語分析は第4章・第5章で、空間検索・標準偏差楕円による言語分析、第6章ではカーネル密度による言語分析、第7章では標準偏差楕円・メッシュ地図による言語分析を、それぞれの事例による検討を行う。第8章では、WEBによる言語地図の公開について論じ、従来の言語地理学研究とは違う方法論を提示する。

GIS地図をベースとした言語分析は、第9章・第10章・第11章・第12章・第13章で、瀬戸内海全域と、よりミクロな視点からそれぞれの事例による検討を行う。

結論は第14章で本論文のまとめと、今後の言語地理学に対して本論文が提起する問題を示す。

第3章 LASの電子データ化の試み

1. 本章の目的

本章では、LASの電子化の工程について説明する^{注1}。また、電子化の対象とした、LASの50年後の変化をみるために瀬戸内海域島嶼部および沿岸で行っている追跡調査の結果を併せて示すことにし、実時間上の言語変化について考察する上で電子データ間の比較の有効性について述べることにしたい。

2. 電子化の手順

2. 1. データの入手と加工

近年、GISで扱える図形データや統計データを提供するウェブサイトが急速に増えている。特に、国土交通省や国土政策局、総務省統計局などのGIS関連サイトの充実が著しい。ここでは、そうしたウェブサイトのうち国土交通省の国土数値情報を紹介し、そこからデータを入手あるいは加工する手順について説明する。

まず図形データに関して、サイトから国土数値情報を入手する手順を述べる。つづいて加工する方法について詳述する。最後に、LASを大型スキャン^{注2}にかけて読み取り、画像をデータ化し、属性データ^{注3}を作成していく具体的な手順を示す。

2. 2. 全国市区町村界データの入手

国土交通省国土政策局国土情報課の「GISホームページ」のサイトでは、GISの利用に役立つデータなどが無償で提供されている。ここでは一例として「国土数値情報行政区域データ」のダウンロードの手順を紹介する。まずこのサイトにアクセスをする。http://nlftp.mlit.go.jp/ksj/gml/gml_datalist.html

ベクトルデータ^{注4}の「行政区域（面）」をクリックすると図1が現れるので、ウィンドウをスクロールダウンするとメニュー画面に「ダウンロードするデータを選択」が現れるので、ダウンロードしたい都道府県をクリックしてダウンロード画面に進む。次にデータのダウンロードの選択という画面に進み、ダウンロードしたい年度の地図をクリックする。このように、県別のアーカイブファイルを1つずつダウンロードする（今回作成を試みた地図情報は、平成25年度版の地図をダウンロードして作成を行ったものである）。なお、このデータは圧縮されているので、解凍先をフォルダに指定して解凍する。zipファイルを解凍すると、dbf、sbn、shp、shxのファイルが生成されるが、これらは順に属性データ、投影情報、インデックスデータ、説明ファイルである。この「行政区域（面）」のシ

ープ形式ファイルを、GIS (ArcMap) にデータを追加する。シェープファイルには地理座標系^{注5}の情報が含まれていないので、別途 ArcCatalog で地理座標系を日本測地系 2000 (JGD2000)^{注6}に指定する必要がある。

また県別では扱いにくいいため、ArcGIS のジオプロセッシングツール (データ管理ツール>一般>マージ^{注7}) を使用して 1 つのシェープにまとめておく。以上のように、地図データの作成を行う。



図1 行政区域 (面) のダウンロード画面

2. 3. LAS の電子化

地図をデジタル化するためには、単にスキャナで読み取りデジタル画像化するだけでは意味がなく、読み取った地図をもとに GIS 化することが重要である。こ

うすることで LAS と峪口調査図を重ね合わせたり、経年変化の言語動態を調べたりすることが容易になる。そこで、以下では LAS の GIS 化の手順の説明を行う。

まず、この LAS の資料について概観する。LAS は、各図、老女、少女二層図を上下に対照させた計 251 図から成る。調査時期は 1960 年から 1965 年の 5 年間、LAS 完成までには実に 14 年の歳月を要し、総調査地点数は 842 (島嶼部 701 地点、沿岸地点 141) で各地点を臨地調査した結果に基づく 2 冊の言語分布の図巻である。両巻とも、各図、縦 57 センチ・横 101 センチの分布図を二つ折りにし、凡例記号は黒一色で、ゴム印を作成し 1 つ 1 つ地点と照らし合わせ押印して地図化されている。項目の内訳は、音声関係の項目 18、文法関係の項目 102、語彙項目 121 を含む、各項目には関連する項目があるものが多く地図は上下巻あわせて総計 251 枚となる。さて現在では、デジタル技術が進歩したため、以上のような大盤の地図であっても、大型スキャナがあれば電子化が可能となる。

2. 4. ラスタデータの取得

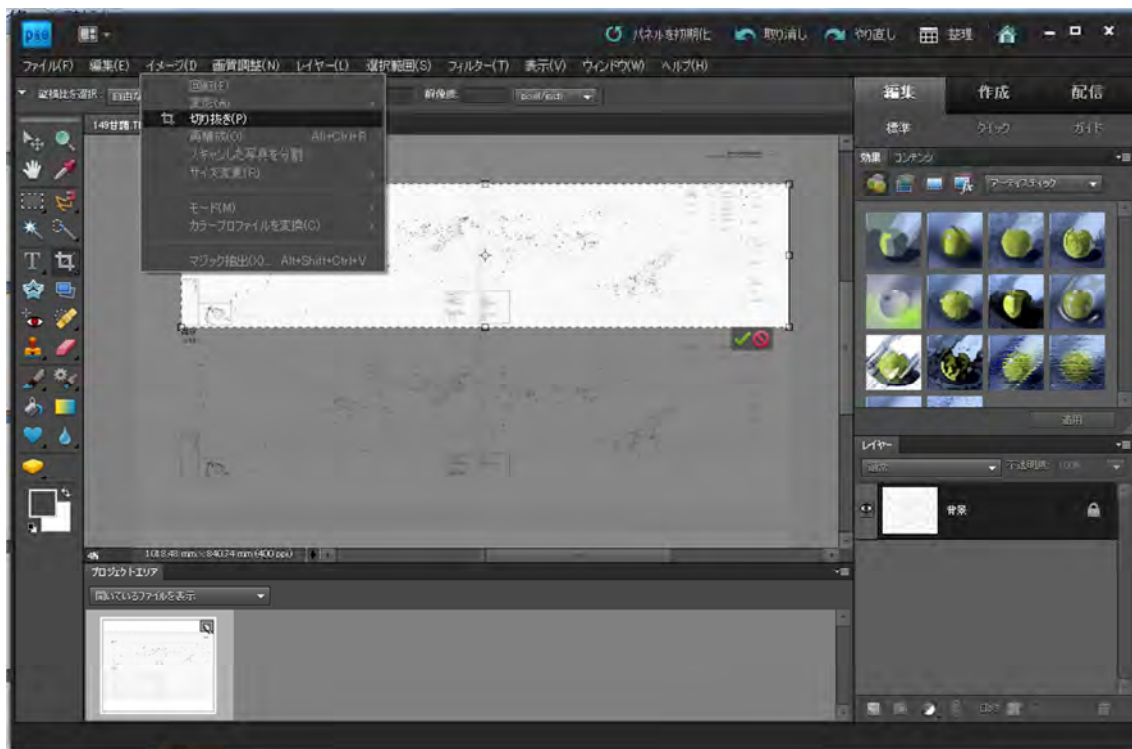


図 2 地図の編集作業

まず、ラスタデータ^{注8}を取得するには、一般にマップをスキャンするか、航空写真や衛星画像を収集する。スキャンしたマップデータセットには、通常、空間参照情報は含まれていない。このため、ラスタデータセットを他の空間データと

併せて使用するには、マップ座標系に合わせる、つまりジオリファレンス^{注9}が必要になる。マップ座標系は、マップ投影（地球の曲面を平面に描写する方法）を使用して定義される。

そこで、LAS を大型スキャナで読み取り、ラスタデータを TIFF ファイル^{注10}で取得する。データ化するためには、いくつかの作業が必要となる。LAS は二層図になっていることから、Adobe Photoshop Elements9 を用い、地図の編集作業を行う（図2）。

2. 5. 空間補正

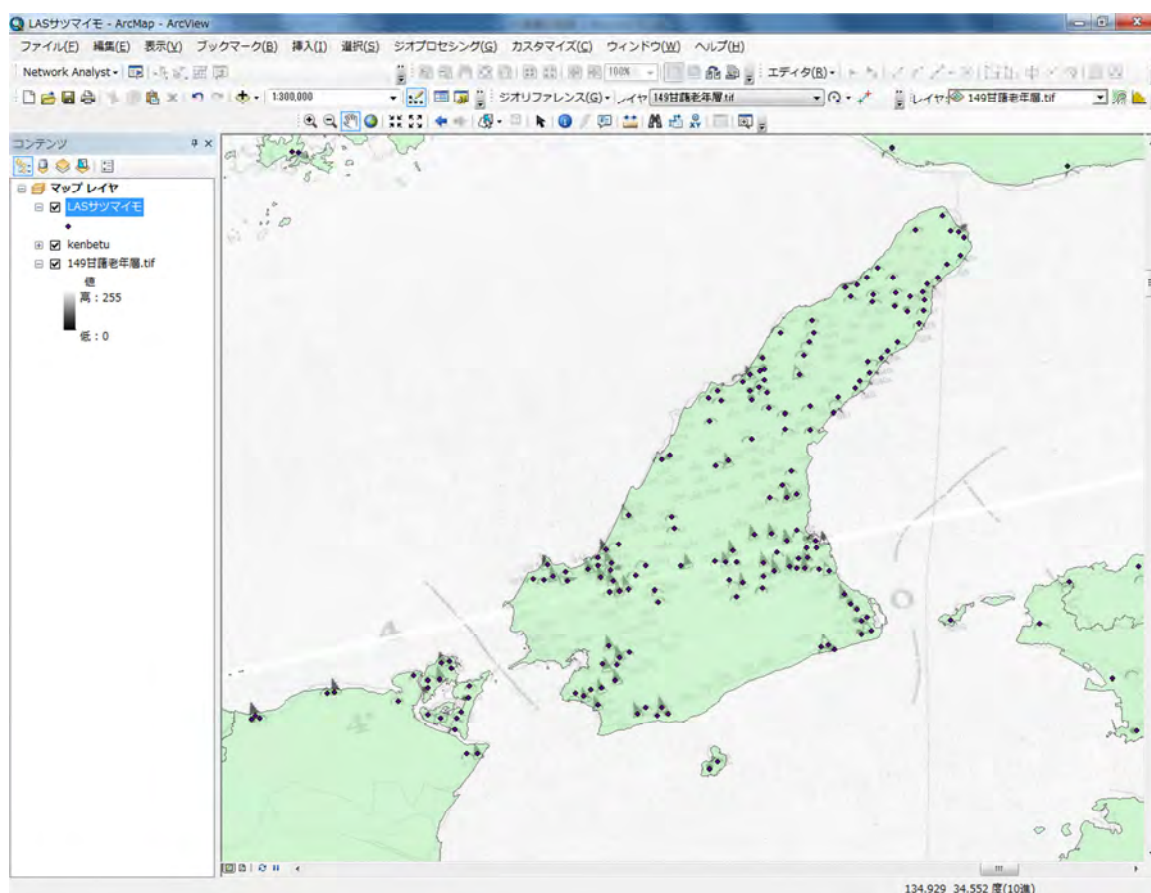


図3 ジオリファレンス後の地図

次に、上述した国土交通省の地図との誤差を抽出するために、ESRI 社の ArcGIS9 を使用する。LAS を現在の測地座標系に登録するには、図中の座標と測地座標との対応関係、すなわちコントロールポイントを指定する必要がある。コントロールポイント^{注11}は、主として拡張されていない県境界や、地理的特徴物に設定した。これらのコントロールポイントを基にして、LAS を相似変換で、現

在の投影座標系にフィットさせた。地図の空間的歪みは大きく、アジャスト変換^{注 12}を行い補正した。コントロールポイントは、各項目地図によって異なり、約 50 地点に及ぶものの、地域によって粗密が大きくみられた。適宜、空間的補正をしてジオリファレンスを行った。このように ArcMap でジオリファレンスを施して、背景図として表示させる（図 3）。

2. 6. 属性データ化

次に、LAS における調査地点のポイントデータを新規シェープファイルに生成し、文字情報を属性テーブル^{注 13}に入力しデータベースを作成する。この属性テーブルには、地物に関する情報が数値、テキスト、日付などのフォーマットで保存される。すなわち LAS においては、調査地点にポイントデータを打ち、方言形をテキストで一つ一つ入力していかなければならない。地点の重なりや凡例などに注意しながら、適宜原図を確認し作業を行った。

2. 7. シンボルの変更

以上のように、2-2. で取得した基図に、2-3. で作成した新規シェープファイルを重ね合わせると、地点データのシンボルのみ表示されるようになる。次に、シンボルの表示と変更の作業を行う。新規シェープファイルを作成したファイルのテーブル・オブ・コンテンツを右クリックしたあと[プロパティ]をクリックすると、[レイヤプロパティ]ダイアログボックスが現れるので[シンボル]タブをクリックする。

左側のレンダリングリストで[カテゴリ]の下の[個別値]オプションを選択し、カテゴリが格納されている属性フィールド（方言形）を選択する。続いて[すべての値の追加]または[値の追加]をクリックし、表示するカテゴリを特定する。[値の追加]では、フィールド値のサブセットを選択して、カテゴリとしてレイヤ表示に含めることができる。

カテゴリの表示に使用するシンボルを特定する。このためには、各カテゴリのシンボルを右クリックして、シンボル プロパティを変更するか、別のシンボルを選択し、凡例記号を決めていく。

2. 8. 印刷用の地図作成

次にマップのレイアウトを整えて出力する際に方位記号や縮尺などの様々な情報をつけ加えていく。

まずタイトル表示は、[表示]→[レイアウトビュー]とクリックしデータビューの

中にレイアウトビューを表示させる。そのあと、[挿入]→[タイトル]を選択するとタイトルを入力するボックスが表示されるので、ここでタイトルを入力する。

次に、方位記号を表示するには[挿入]→[方位記号]とクリックし、ダイアログボックスを表示させ、候補の中から使いたい方位記号を選択して[OK]をクリックすると方位記号がレイアウトビュー上に表示されるので、適当な位置に移動させる。

縮尺記号も[挿入]→[縮尺記号]とクリックしダイアログボックスを表示させ、候補の中から使いたい縮尺記号を選択して[OK]をクリックすると縮尺記号がレイアウトビュー上に表示されるので、適当な位置に移動させる。

最後に凡例を表示させるには、[挿入]→[凡例]とクリックし[凡例ウィザード]ダイアログボックス（凡例項目選択）を表示させる。候補の中から使いたい凡例項目を選択して[次へ]をクリックすると、[凡例ウィザード]ダイアログボックスが表示される。ここで、凡例のタイトルや、凡例フレームの設定が可能となる。全て入力すると、設定した凡例がレイアウトビュー上に表示されるので、それを適当な位置に移動させる。

作成したマップをワードやパワーポイントに貼り付けるのは、マップをエクスポートしてファイルに保存をする必要がある。マップをエクスポートするには、[ファイル]→[マップのエクスポート]とクリックし、ダイアログボックスを表示させる。[保存する場所]を作業用フォルダに設定し、[ファイル名]を入力し、[保存]をクリックするとエクスポートされる。以上の作業を経て言語地図が完成する。

3. 本章の結論と今後の課題

本章では、LASの電子化の手順に触れ、当言語図巻の50年後の変化をみるために瀬戸内海域島嶼部および沿岸で行った追跡調査の結果との比較を行い、言語変化がどのように進行しているかについて考察してきた。

研究目的にも触れたように、紙地図を電子データ化することにより汎用性が増し、コンピュータさえあれば誰もが利用することが出来るようになる。紙地図をGIS化するには、相当な時間を有し、大変な労力がかかる。

しかし、今後は言語地理学の分野においても、デジタルアーカイブの第一段階として、このような情報技術を用いたアプローチには大きな可能性があると思われる。

具体的には、地図を介して各種の地理情報を照合するオーバーレイと呼ばれる方法や、言語内（方言）・言語外の地理情報を多角的に分析することができる。さらに言語変化に対しても過去に行われてきた変化の跡づけるだけでなく、未来の言語変化を予想することも可能になると思われ、言語の地理的分布のメカニズ

ムの解明につなげていくことが可能になるはずである。

最後に言語地理学における GIS の活用についてみてきたが、その応用はここにあげたものに止まらず、さらに多様な利用が可能であろう。

【注】

- 注 1 以降、本論文では、各章の始まりごとに番号を（１）（２）（３）...と振りなおす。
- 注 2 本研究で用いた大型スキャンは、GRAPHTEC MASTER JET JW1000 を使用した。
- 注 3 属性データは、空間オブジェクトとリンクした、空間情報以外のデータで、ID、距離、面積や周囲の長さなどである。
- 注 4 図形をポイント、ライン、ポリゴンの 3 要素で表現する形式の図形データのことを指す。
- 注 5 地理座標系は、3 次元の球面を使用して、地球上の位置を定義することをいう。
- 注 6 測地系とは、地球の重心に座標系の原点を置いた、世界で共通に利用できる位置の基準のことをいう。
- 注 7 複数のレイヤを 1 つのレイヤにまとめてしまう機能のことをいう。
- 注 8 図形を格子状に並んだ画素の集合体として表現する形式の図形データのことをいう。
- 注 9 紙地図をスキャンしたイメージや、任意に入手した地図イメージファイルを GIS の地図画面上に取り込んで同じ位置で重ね合わせて表示する機能のことをいう。
- 注 10 非圧縮のデータのことをいう。
- 注 11 コントロールポイントは、ラスターデータセットと現実の座標で正確に特定できる位置のことをいう。
- 注 12 アジャスト変換は、レイヤの座標をある場所から別の場所に変換することをいい、主に歪みの多い地図に用いられる。
- 注 13 シェープファイルの属性データを意味し、このデータは行にレコード、列にフィールドを配したテーブル形式で表現されるので、属性テーブルと呼ばれている。

II. GIS の空間解析を用いた言語分析

第4章 空間検索・標準偏差楕円による言語分析

－「さつまいも」を事例として－

1. 本章の目的

本章では、GISの空間解析による言語分析を示し、語彙「さつまいも」を事例とした考察を行う。同調査の質問項目は全体で約180項目に及ぶが、この中から「さつまいも（甘藷）」の項目について、今回、実施した調査結果をもとに分析を行うことにしたい。また、過去において当地域を対象とした調査があり、これらの結果との経年比較が可能である。以下では、これらの結果を併せて示すことにする。

2. 調査・地図化の方法と本論の対象

本章で比較・考察の対象とするのは、LAS（1974）、1999年合同調査は徳島大学・神戸松蔭女子学院大学・園田学園女子大学3大学合同調査、2012年度に実施した淡路島での方言調査、峪口調査（2011-2012）である。

LAS（1974）は、第2章で紹介したように、老女（当時明治生まれ）・少女（当時中学1・2年生）二層図を上下に対照させた上下二巻、計251図からなる言語地図集である。1960年から約5年間、計842地点（内海島嶼部701地点、沿岸部141地点）で面接調査を行い、その結果を言語地図化したものである。

1999年合同調査は徳島大学・神戸松蔭女子学院大学・園田学園女子大学3大学合同で、1999年8月8日から同年8月10日の2泊3日で行なわれたものである。調査地点は、淡路島全域61地点、調査対象者は、生え抜き（昭和18年生以上）である。調査結果は公刊されていない。2012年度に実施した淡路島での方言調査は、通信調査と面接調査を実施し、第一次調査として2011年10月から12月にかけて、淡路島各集落の回答は76地点であった。第二次調査は、2012年8月以降に実施し、調査地点は18地点である。第一次と第二次調査を合わせると、計94地点分のデータが淡路島から回収された。なお、この調査データをもとに岸江信介ほか編（2013）『淡路島言語地図』を公刊した。この報告では、上記の第一次・第二次調査で得られたデータをもとに大半の調査項目について解説を行ったが、一部、データの解説ができなかったものがあり、そのうちの重要と思われる項目を今回ここで取り上げる。

峪口調査は、LAS追跡調査を行うため、瀬戸内海島嶼および沿岸における全域調査を2011年から約4年間にわたって実施した。なお本章では、1,300人のデ

ータを用いて言語地図化を行っている。以上の調査結果を随時比較し考察していくことにする。

GIS を用いた調査結果について、空間統計ツールの地理的分布特性を算出し、分布志向性分析を用いて解析を試みる。また、瀬戸内海全域の分布をみるときは、岨口調査の地点は、LAS と比べ広域に調査地点のあることから、LAS と同じ調査範囲内のポリゴンデータを作成し、その範囲内のポイントデータを空間検索し取り出し作図を試みている。

3. 「さつまいも」の方言分布

3. 1. 先行研究

「さつまいも」は、アメリカ大陸原産であり、コロンブスの大航海時代の時に、まずスペインにもたらされ、やがてフィリピン、中国福建を経て 1605 年に琉球に伝えられた。そして、1605 年の薩摩の琉球入り以降に琉球から薩摩にもたらされたという。内地に広まったのは、1615 年 6 月 14 日のイギリスの商館長リチャード・コックス^{注1}の日記に自分がこの芋を琉球から長崎に持ち込み、平戸で栽培したことを記している。

また内地に栽培が普及していったことを、佐藤（1991）は、青木昆陽の努力によるところが大きいといい、昆陽は当時の全国的な飢餓を憂えて幕府に進言し、1735 年に薩摩から種芋を得て今の小石川植物園に植え、さらに下総、上総、伊豆諸島に移植し、これがサツマイモの名称の起こりであり、サツマイモの名は、以後栽培の普及とともに、関東を中心としてその周囲に広がったものと指摘している。

渡来作物の名称には、その出身地・経由地を示すものが多い。その名称は出身地・伝来経路に由来し、『日本言語地図』（以下 LAJ と略す）第 4 集・第 176 図「さつまいも（甘藷）」の地図を大きく分類してみると、東日本から近畿・中国にかけて「サツマイモ」、九州北部から山口などにかけて「トイモ（唐芋）」、九州南部と四国の一部で「カライモ（唐芋）」、九州北西・中国・四国・能登などで「リユーキューイモ」と称している。西日本が複雑で錯綜し、東日本が単純な分布を示している。

江戸中期から、様々な文献にサツマイモが出てくるようになってきた。以下、『日本国語大辞典 第二版』等を参考にまとめて示す。

- 『俳諧・手挑灯』（1745）中「九月〈略〉薩摩芋（サツマイモ）」
- 『雑俳・柳多留 - 八』（1773）「品川は山のいもよりさつまいも」

- 『物類称呼』(1775)「畿内にてりうきういもと云、東国にてさつまいもといふ、肥前にてからいもという」
- 『浄瑠璃・古戦場鐘懸の松』(1761) 二「ホホホホホあなたとした事が、さつま芋か何んぞの様に、是がどこにさもしい物」
- 「甘藷百珍」(1789)「八里半〔栗(九里)に近い味〕」「十三里〔栗(九里)より(四里)うまい〕」
- 『滑稽本・浮世床』(1813~1823)
 - 初・上「琉球芋(サツマイモ)なら一本十六文(そくもん)宛(づつ)もしべいといふ角(つの)を二本生しやアがって」
 - 初・中「しかし家鴨と迄もいくめへ薩摩芋(サツマイモ)の精霊さ」
- 『雑俳・手ひきぐさ』(1824)「とっと退き下女に買はしたさつまいも」
- 和田定節『春雨文庫』(1876~1882) 九「いつ何時(なんどき)薩摩芋(サツマイモ)が浪人者を引きつれて京都へ押し込んで来るかも知れぬとて」
- 松村任三『日本植物名彙』(1884)「サツマイモ リウキウイモ 甘藷」
- 夏目漱石『吾輩は猫である』(1905) 一〇「坊ばは固(もと)より薩摩芋が大好きである」

LAJ では現在、近畿一帯はほぼサツマイモで覆われている。しかし、上述したように、『物類称呼』(1775 年刊) をみると、かつて近畿一帯にリュウキューイモが広がっていた時期があり、それが東日本から押し寄せたサツマイモによって追われて、現在の状態になったと考えられる。現在、能登半島の先端に見られるリュウキューイモは、昔、近畿を覆っていたものの残存だといえる。

すなわち、サツマイモが琉球あるいは九州南部に渡来したときに、「唐イモ」の名が与えられ、琉球からある程度離れた土地に到達して、「琉球イモ」となり、薩摩から江戸に移入された「薩摩イモ」となったわけである。この順序で列島の西から東へ向かって分布している。

3. 2. 瀬戸内海全域における方言分布の概観

LAS 第 149 老年層図から作図^{注2}した、図 1 をみていく。共通語と同形のサツマイモは、近畿から山口県周防大島までの地域全体に分布がみられ、一方で、九州には僅か 3 地点しか分布がみられない。また単純化されたイモは、LAS では淡路以西の全域にひろく分布域を形成していることがわかる。カライモ・トイモ系・リュウキューイモ系をみると、カライモが、愛媛の三地点にみられ、トイモ系が香川県西部から愛媛県、山口県西部、福岡県、大分県に分布している。

『瀬戸内海言語図巻』 さつまいも (甘藷)

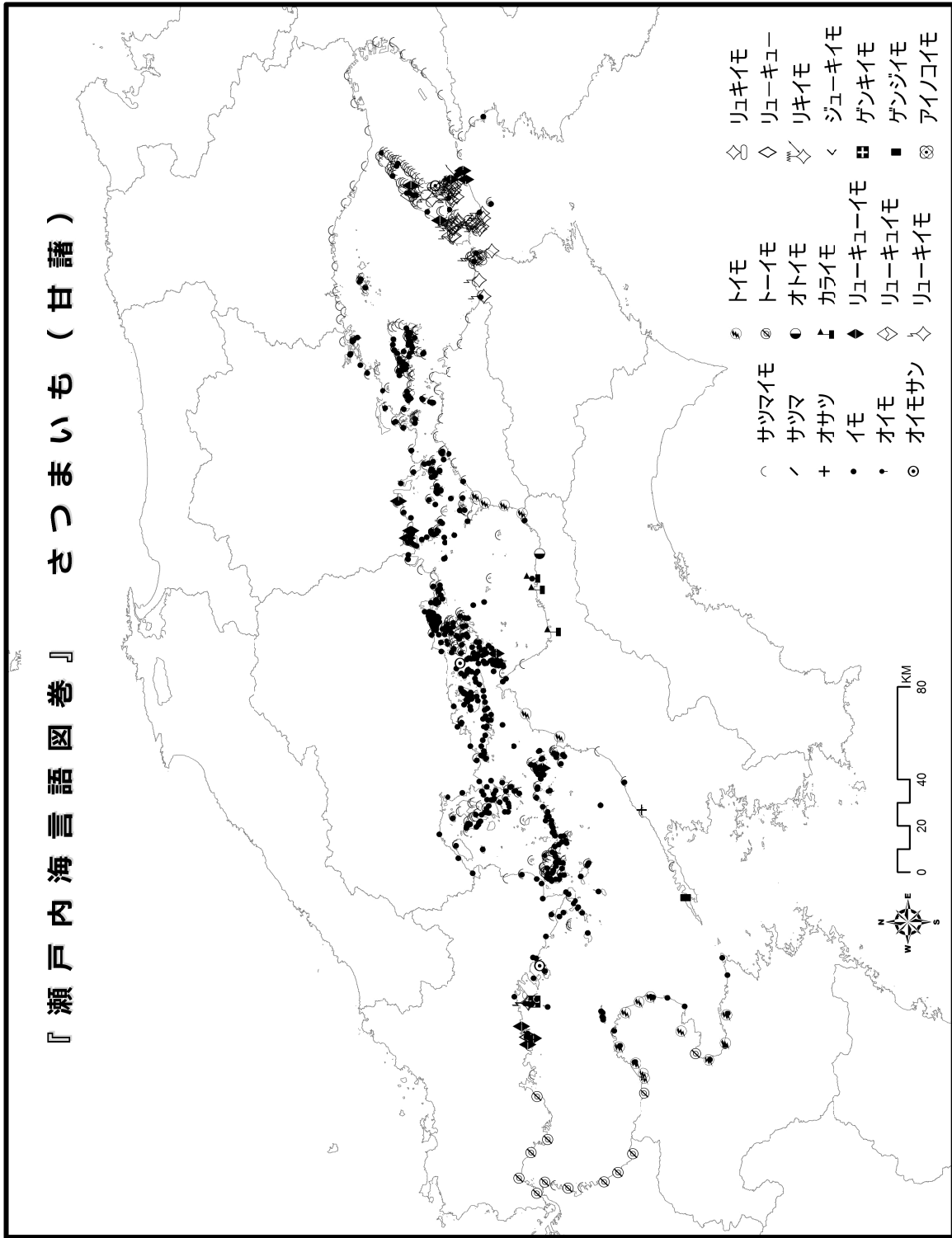


図1 LAS 第149図から作図「さつまいも」

嶮口調査 さつまいも (甘藷)

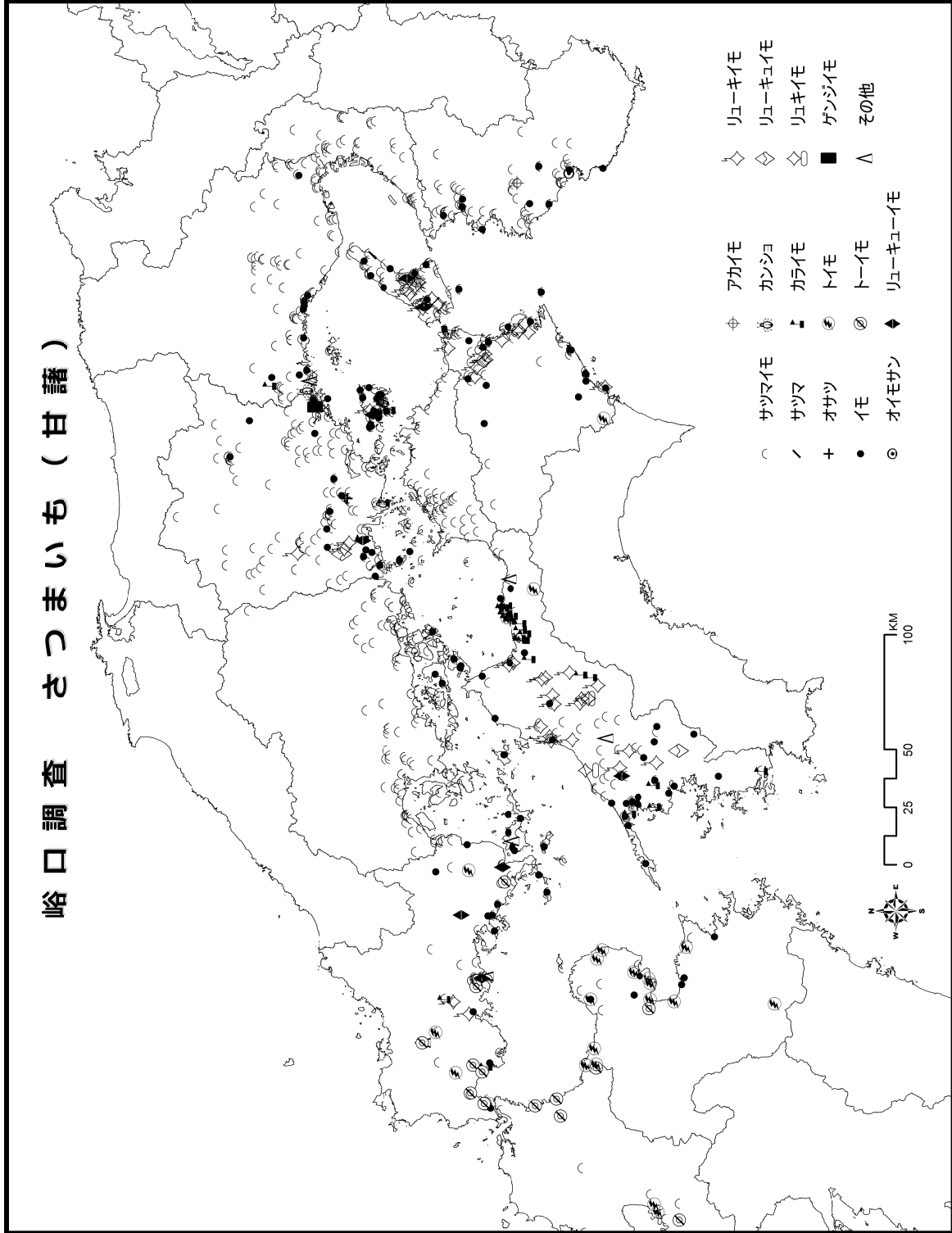


図2 嶮口調査「さつまいも」

『瀬戸内海言語図巻』 さつまいも (甘藷)

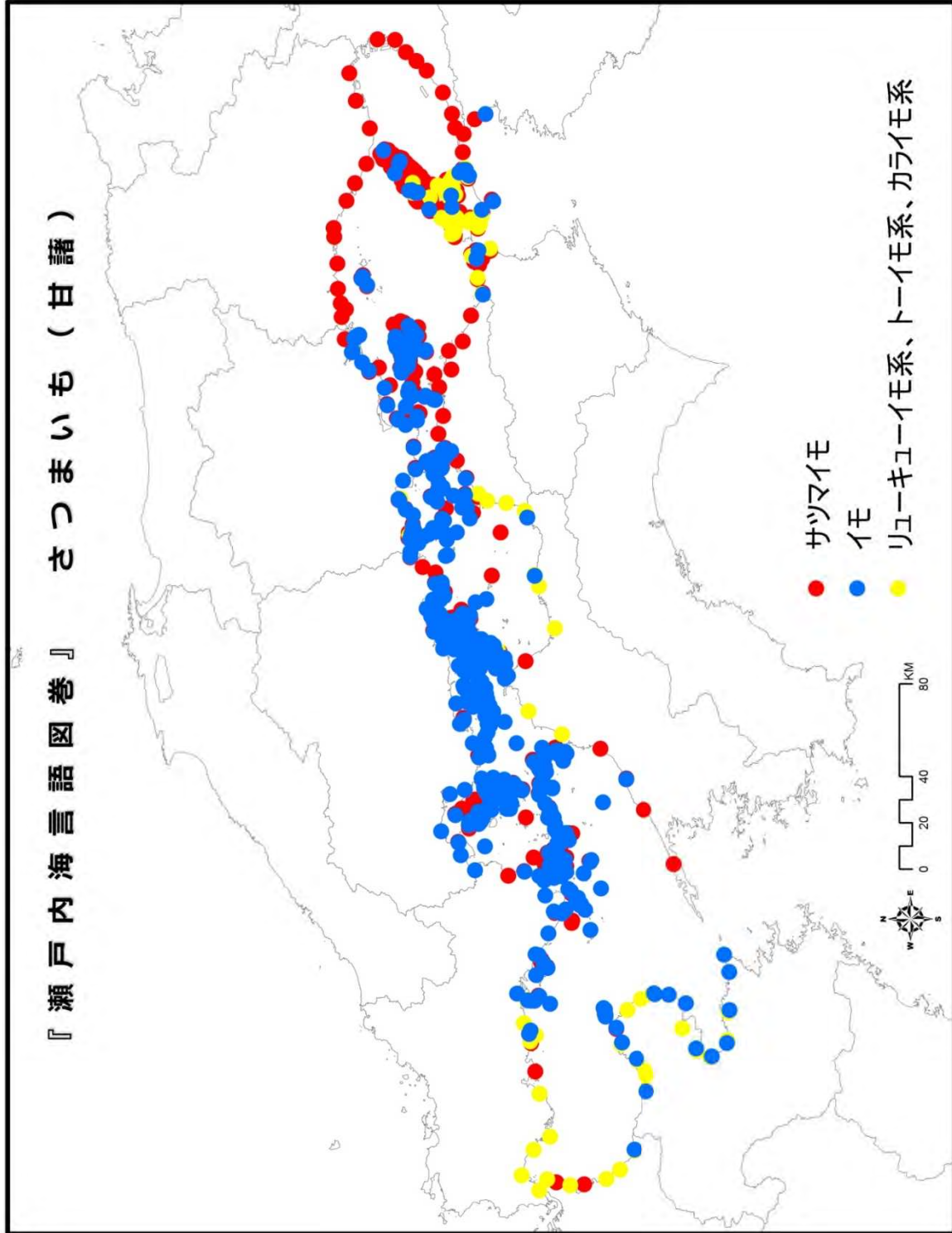


図3 LAS 第149図から作図「さつまいも」グループピング図

峪口調査 さつまいも（甘藷）

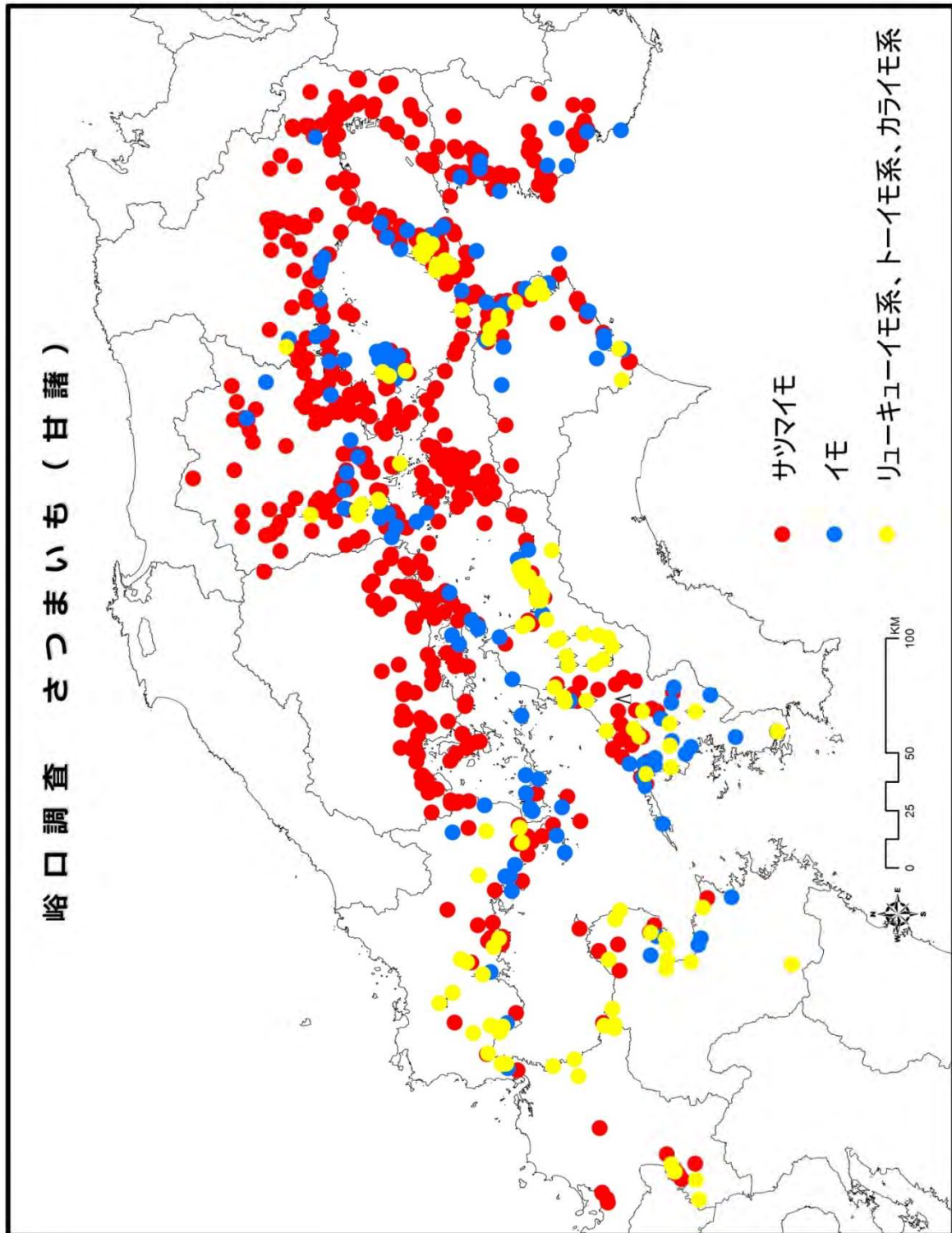


図4 峪口調査「さつまいも」グループピング図

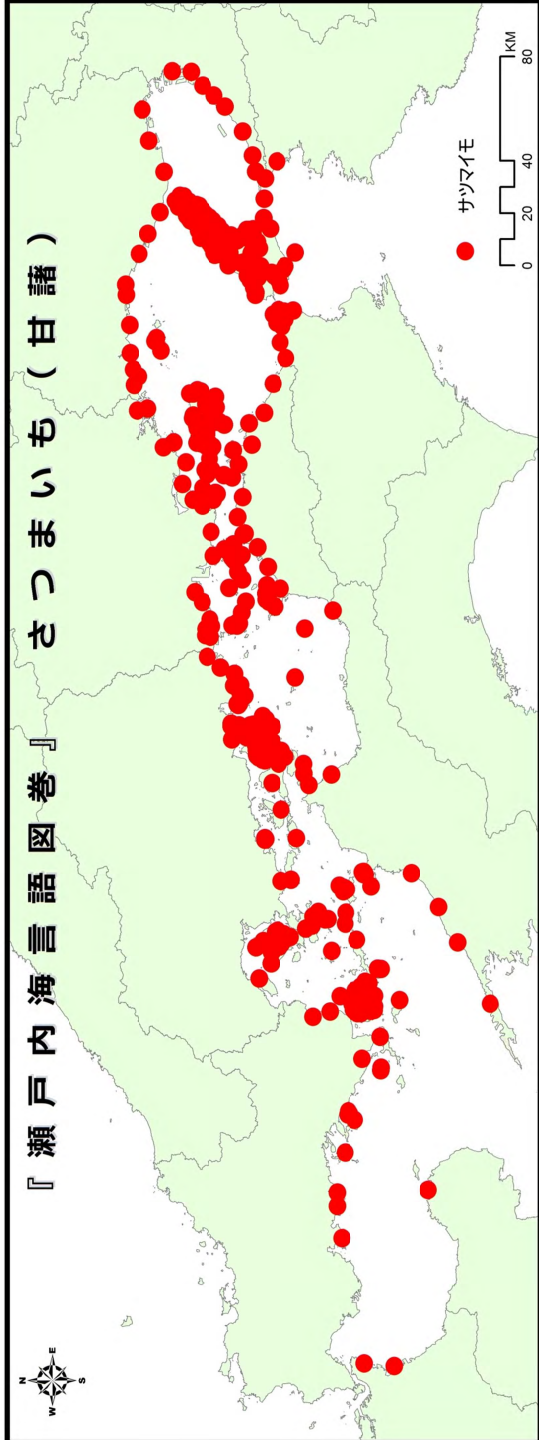


図5 LAS サツマイモ

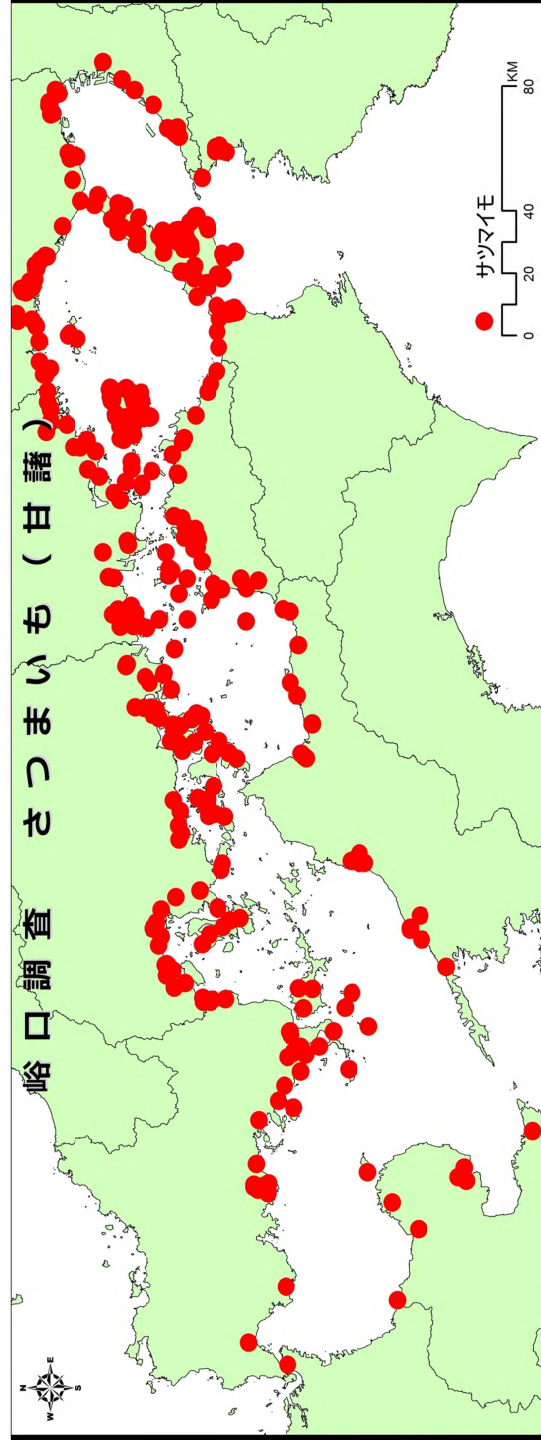


図6 峪口調査 空間検索後サツマイモ

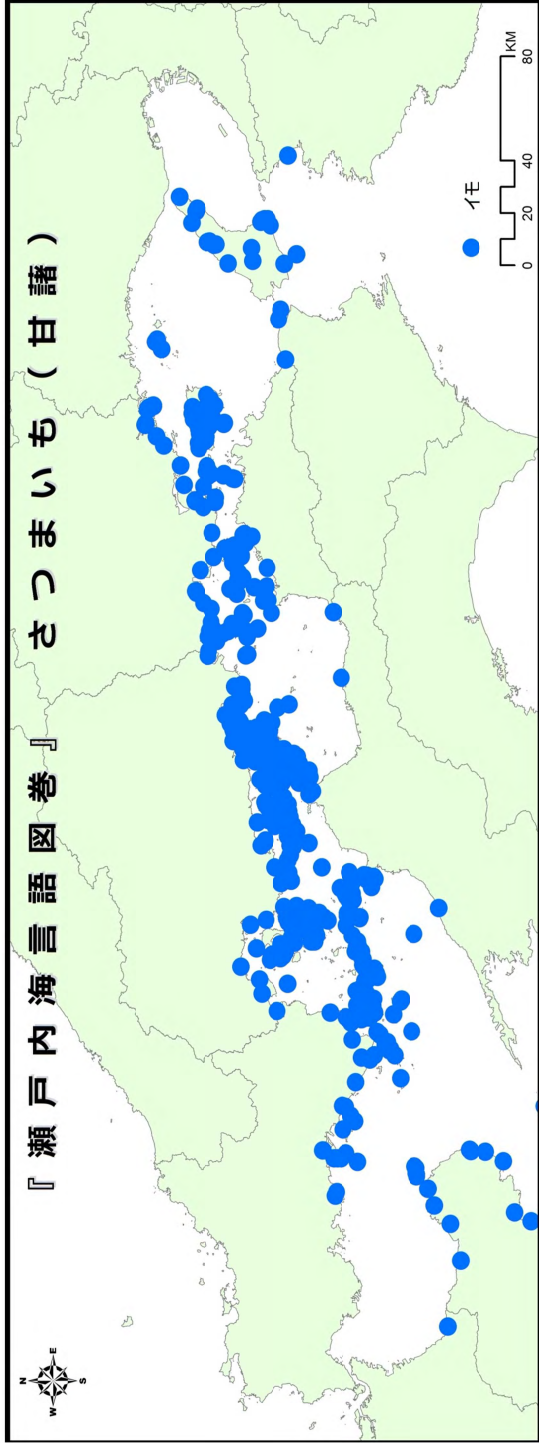


図7 LAS イモ

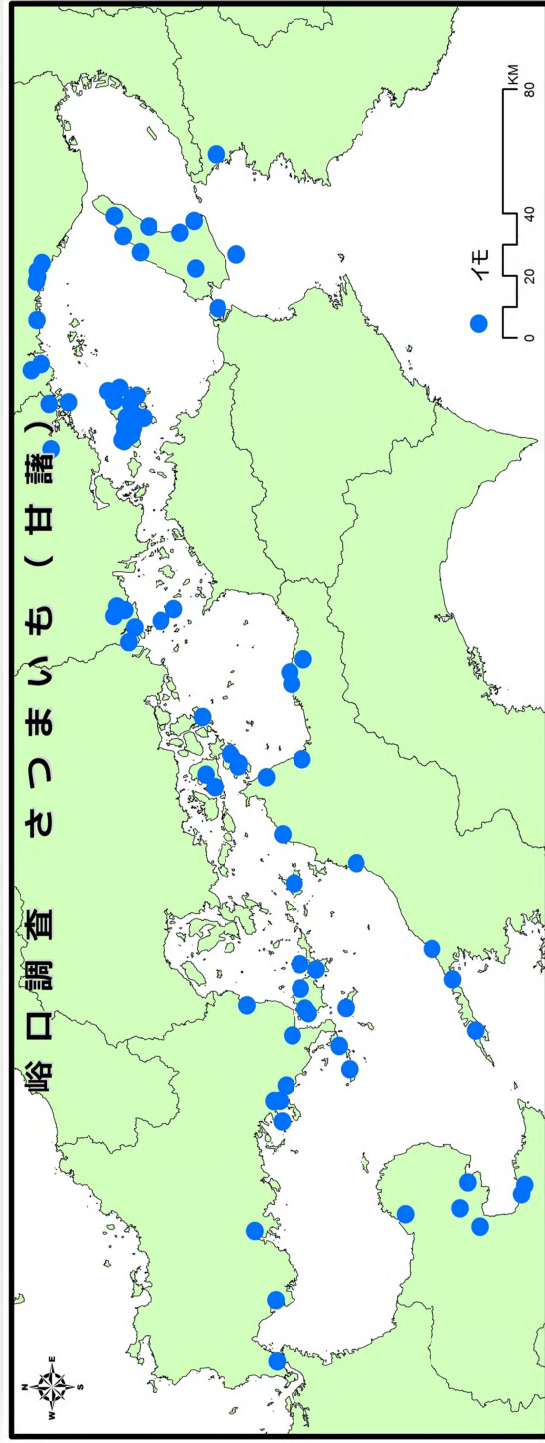


図8 峪口調査 空間検索後イモ

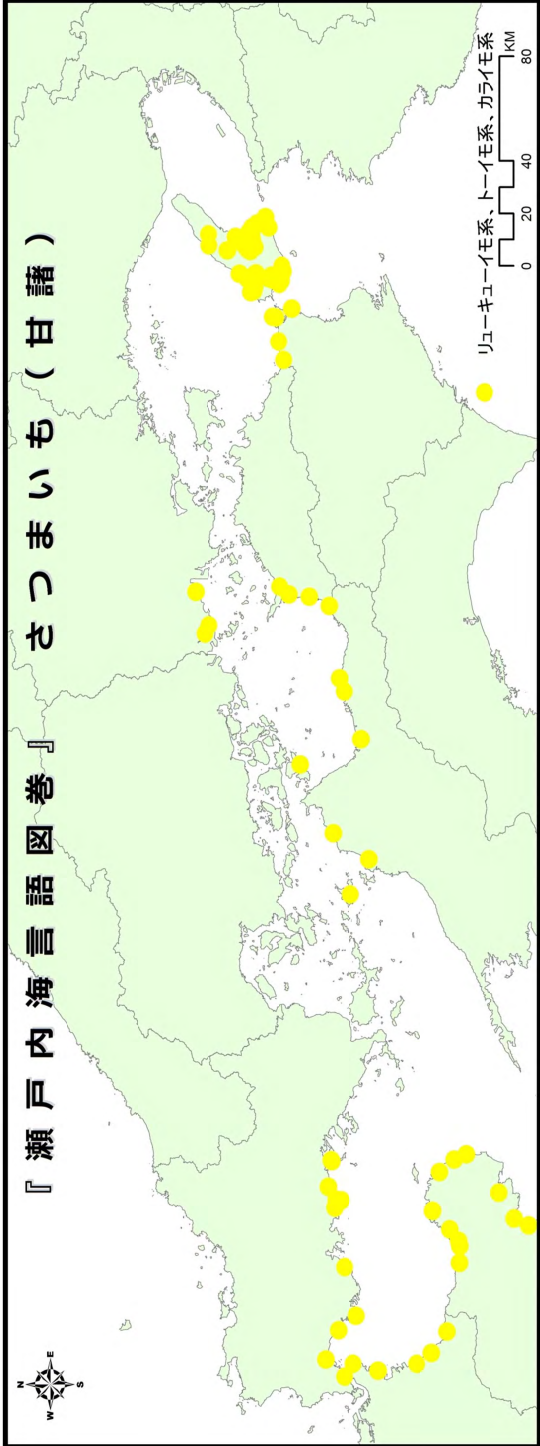


図9 LAS リョーキュウ系ほか

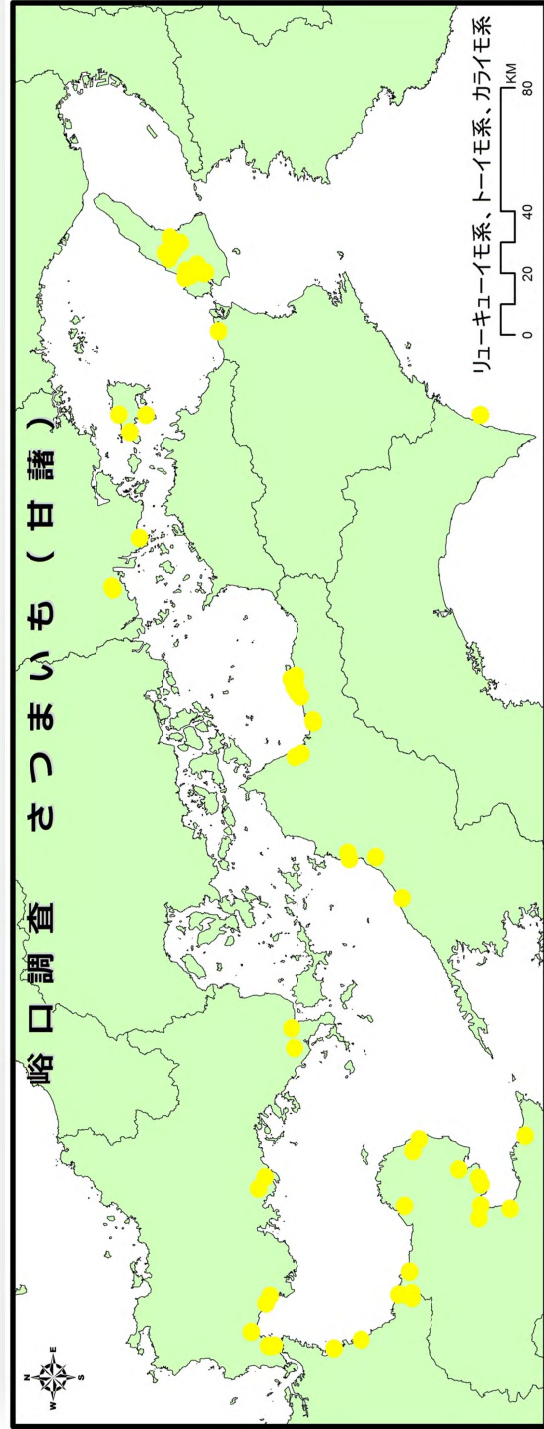


図10 峪口調査 空間検索後リョーキュウ系ほか

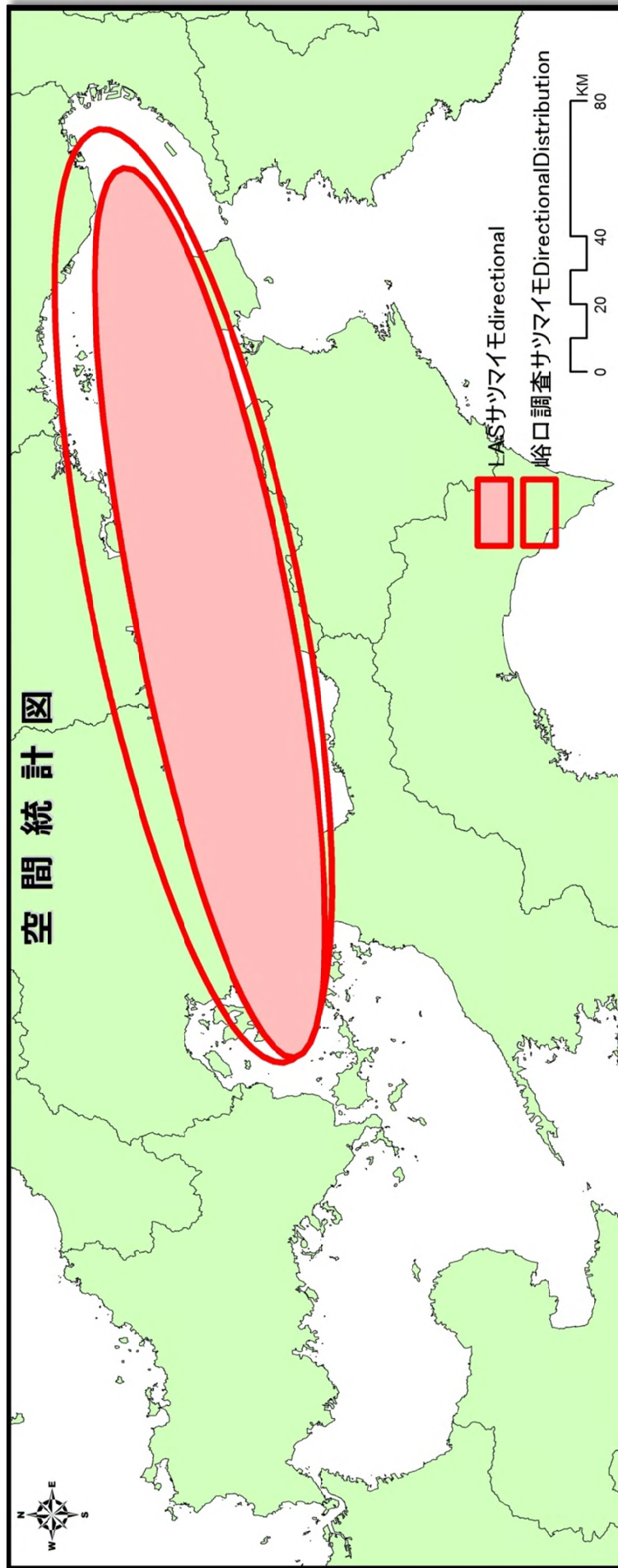


図 11 峪口調査 空間統計図 標準編精円

特にリュウキューイモ系が、主に淡路島南部に盛んに分布がみられ、続いて徳島県・岡山県西部・愛媛県島嶼部・山口県下へ点在している。また LAS では、珍しい形式である、ゲンジイモが愛媛県の佐田岬半島にみられ、ゲンキイモが山口県大津島に確認ができた。

次に図 2 の峪口調査をみていくと、サツマイモは近畿から九州までの地域に勢力が拡大していた。つまり、サツマイモが共通語形として受け入れられ、今まであった方言形がサツマイモに変わっている様子を掴むことができる。また香川県に関しては、サツマイモの語形しかみられない。さらに、イモの分布は縮小する傾向がうかがえる。カライモは愛媛県に多く分布をし、飛び地的に兵庫県、香川県小豆島、岡山県島嶼部、山口県西部、福岡県とみられる。トーイモ系は、山口県以西に分布が盛んにみられ、徳島県、愛媛県と分布がみられる。

つぎにリュウキューイモ系は依然として淡路島南部に特に盛んにみられ、徳島県、愛媛県、山口県西部に分布していました。愛媛県島嶼部でみられたリュウキューイモ系の分布がみられなくなり、内陸部に多く分布していることがわかる。

次に、この二枚の地図で比較するのは、困難な為、グルーピングした地図を作成し比較を試みる。

以下で示す地図は、「サツマイモ」「イモ」「リュウキューイモ系・トーイモ系・カライモ系」と、3つにグルーピングした地図である。

まず図 2 と図 3 を比較してみると、サツマイモの共通語化の進捗状況を把握できる。サツマイモが瀬戸内海西部域に分布を拡大させている一方、図 7・図 8 ではイモが減少していることがわかる。つまり、当地域ではイモがサツマイモに置き換わったといえる。続いて図 9・図 10 のリュウキューイモ系、トーイモ系、カライモ系の図では、依然として LAS 時と同地域に分布が確認できる。なお既存の分布域のみならずそれ以外の地域（小豆島、香川県西部、山口県島嶼部）にも新たに分布が確認できた。

次に、「さつまいも」のデータを使い空間解析の分布志向性分析を用いて分析を試みる。図 11 の標準偏差楕円の図では、LAS の分布領域と比べて峪口調査の楕円が拡大していることから、共通語形のサツマイモが広域で使用がひろがっていることが判明した。

以上、グルーピングした 3 つの語形をみてみると、一番古い語形は、イモである。かつてイモはサトイモの名称として使用されていたが、使用される地域や時代によって、イモの意味は、サトイモ・サツマイモ・ジャガイモへと変化していったようである。甘藷が日本に渡来してきたのは、江戸時代であり、中国・沖縄・薩摩を経て渡来してきたことから、経路地を呼称した名前が今でも残存している。

今回の事例から明らかになったことは、複雑な分布の中にも、古い語形が淘汰され共通語形が拡大する分布、一方、古い語形が未だに地域を限定し残存する分布の2種類あるということである。

つまり、サツマイモの語形は共通語として一般化し、広域にまとまった分布の様相を呈しているが、逆にリュウキューイモ系ほかの分布は、伝承されていた地域のみ地域言語として残存しているといえるのである。

3. 3. 淡路島における方言分布の概観

まずLAS第149老年層図の「さつまいも」から作成した地図(図12)と、1999年に行われた1999年調査の地図(図13)と、2012年調査(図14)の地図を概観し、比較・考察を行う。

「さつまいも」の地図3枚共、全域に共通語形のサツマイモが分布している。その中で、方言形で盛んにおこなわれているのが、淡路(おもに南部)のリュウキューイモ系【リュウキイモ、リュウキューイモ、リュウキュイモ、リュキイモ、リキイモ、ジューキイモ】である。LAS全体地図では、徳島・岡山県西部・愛媛島嶼・山口県下に分布が点在している。その中でも、淡路が特に分布が優勢である。藤原(1976)も指摘しているように、淡路島においては、西方、九州や、山口県下などとともに、しばしば比較的古い語形をとどめがちのようである。

このリュウキューイモ系が経年変化でどのように言語変化が起きたかを言語地図を比較することで推定することにしたい。1999年調査をみると、リュウキューイモ系【リュウキイモ、リュウキューイモ】は、淡路島南部(南あわじ市)に分布がみられ、サツマイモとリュウキューイモ系の併用回答の地点が多くみられた。さらに2012年調査においても、リュウキューイモ系【リュウキイモ、リュウキューイモ】の分布は、淡路島南部(南あわじ市・洲本市)に使用の確認ができ、1999年調査と同じく、サツマイモとリュウキューイモ系の併用回答が目立った。

先行研究で上述した『物類称呼』(1775年刊)では、「さつまいも」の見出し語としてリュウキューイモが立てられており、当時、共通語の位置にあったとみられる。現代ではリュウキューイモ系の形式はサツマイモに追われ、淡路島においても淡路島南部に追いやられ残存しているとみられる。このような現象は近畿周辺部にも散見される。上述した能登半島の例とも一致している。

次に、イモという回答を比較してみる。まず兵庫県において、イモとはどの地域に回答があるのかを、LAJをみて確認してみる。兵庫県では淡路島中央部のみに、「さつまいも」をイモと回答していた。全国的にみると、西日本を中心に分布

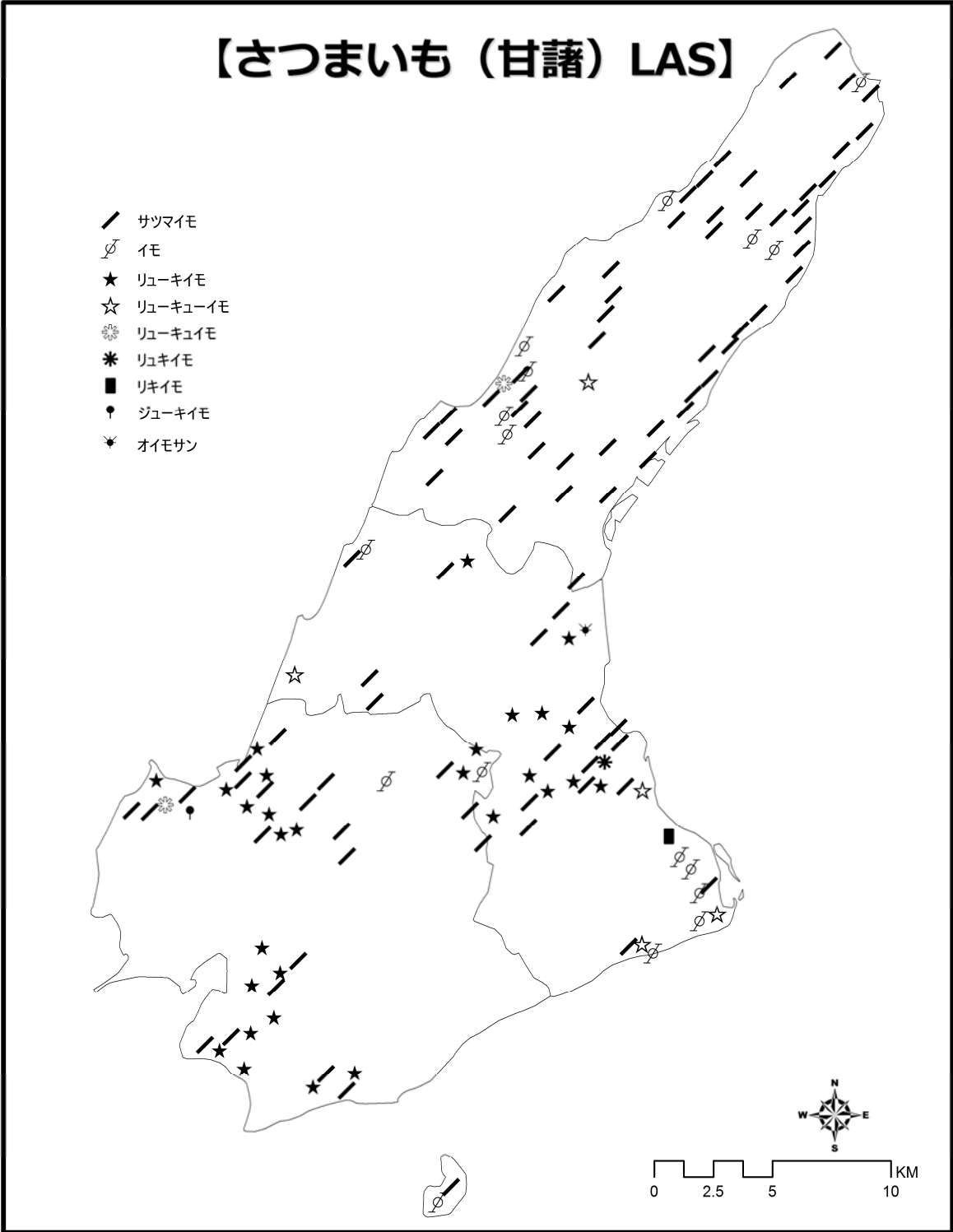


図 12 LAS 第 149 老年層図「さつまいも」

【さつまいも（甘藷）1999年】

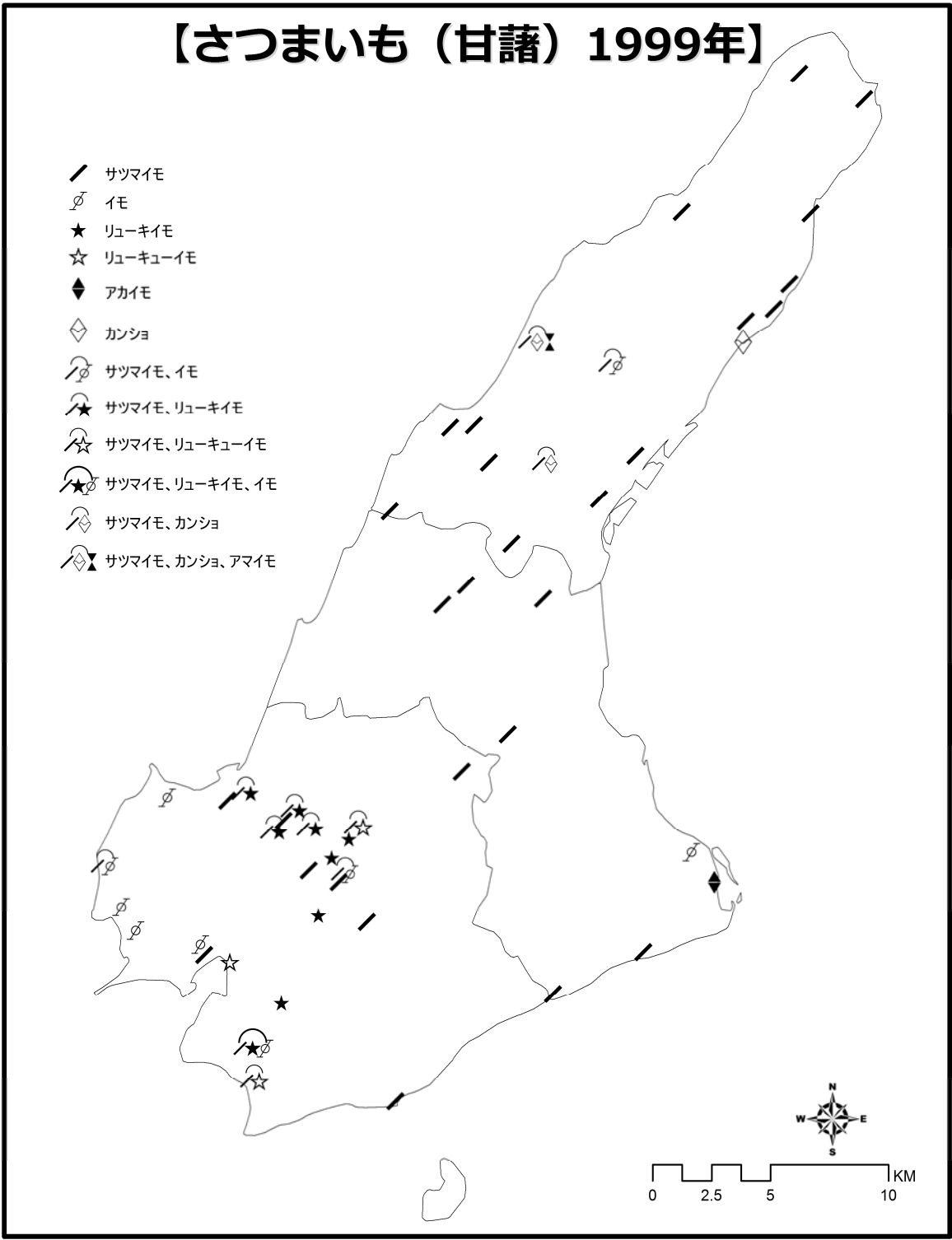


図 13 1999 年調査「さつまいも」

【さつまいも（甘藷）2012年】

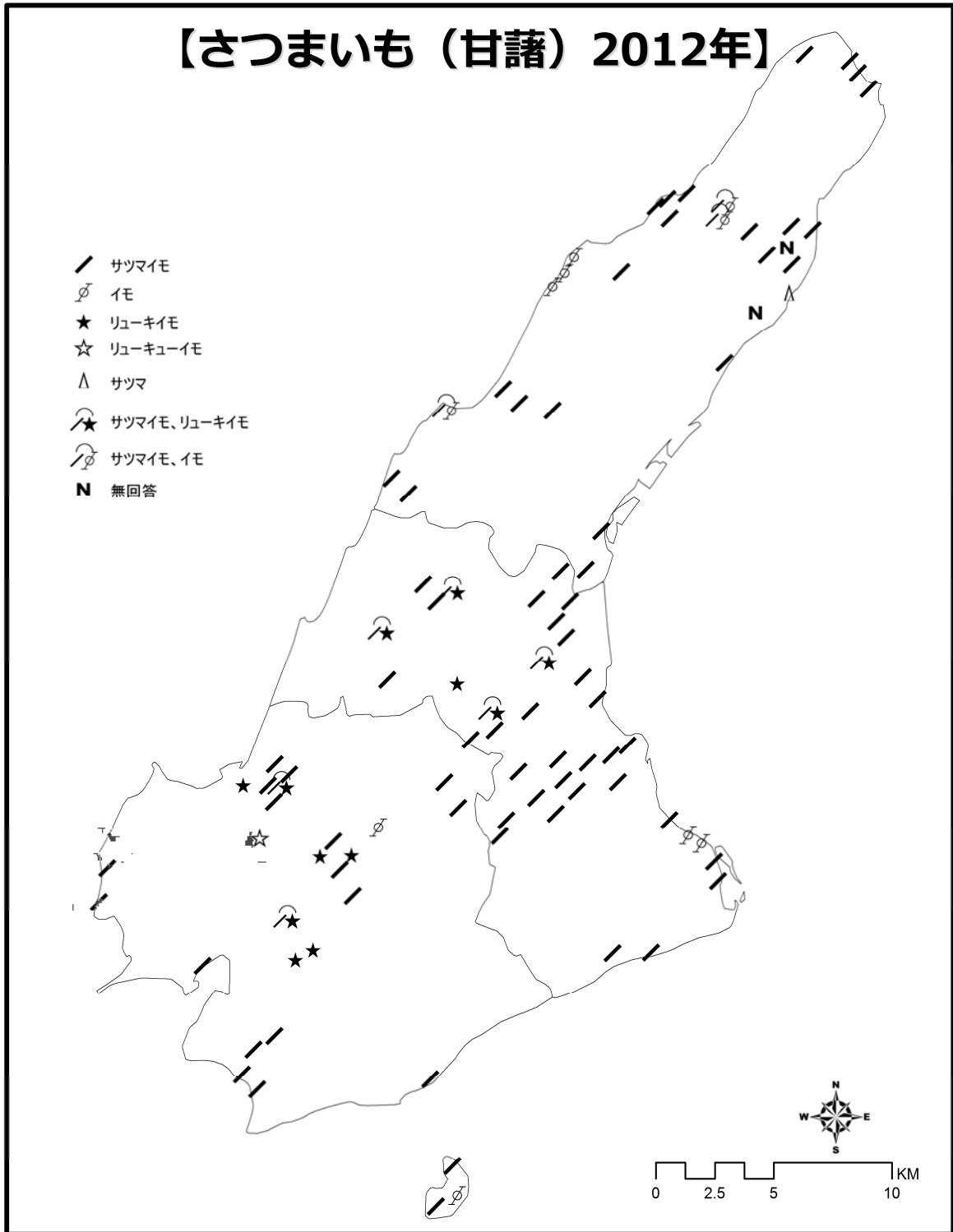


図 14 2012 年調査「さつまいも」

がみられる。LAS では、淡路島全域にみられた。1999 年調査、2012 年調査においては、若干分布の数は減少しているものの、依然としてイモの分布は健在であることがわかった。

また 1999 年調査でみられた、カンショ（甘藷 ganshu）は、「さつまいも」の漢名のことである。そして同じく 1999 年調査でみられた、アカイモ、アマイモは「さつまいも」の別名であるといえる。この他、2012 年調査で分布が確認できたサツマは、イモの部分が脱落した方言形である。

4. 本章の結論

以上、本章で論じてきたことをまとめ、結論を述べる。

LAS の時代で多くみられていた、一番古い語形であるイモは、時間が経つことにより、イモからサツマイモという共通語形へ置き換わっていった。その理由としては、かつてイモはサトイモの名称として使用されていたが、使用される地域や時代によって、イモの意味は、サトイモ・サツマイモ・ジャガイモへと変化していったためである。

また共通語形のサツマイモは、空間統計図で確認できたように、瀬戸内海域で使用の拡大がみられる。一方で、リューキューイモという経由地を呼称とした名前が地域を限定して、今でも残存することが明らかとなった。

今回の事例から明らかになったことは、複雑な分布の中にも、古い語形が淘汰され共通語形が拡大する分布、一方、古い語形が未だに地域を限定し残存する分布の 2 種類あるということである。

つまり、サツマイモの語形は共通語として一般化し、広域にまとまった分布の様相を呈しているが、逆にリューキューイモ系ほかの分布は、伝承されていた地域のみに地域言語として残存しているといえるのである。

【注】

- 注 1 江戸初期に日本の平戸にあったイギリス商館長を務めた人物である。在任中に記した詳細な公務日記「イギリス商館長日記」(Diary kept by the Head of the English Factory in Japan: Diary of Richard Cocks, 1615-1622) は、イギリスの東アジア貿易の実態や日本国内の様々な史実を伝える史料となっている。
- 注 2 LAS を電子化した地図の凡例は、LAS の凡例に近い記号を割り振っている。

第5章 標準偏差楕円による言語分析

－「にわか雨」を事例として－

1. 本章の目的

本章では、「にわか雨」を事例として、方言分布の「実時間」上における経年変化に焦点をあてる。瀬戸内海域では、「にわか雨」のことを、ソバエという。このソバエは、瀬戸内海方言を代表することばである。この事例の検討を通して、瀬戸内海方言が、どのようなうごきをみせているのか、また共通語の受容などどのように関わっているのかを具体的に描き出していくことを本章の目的とする。

2. 調査・地図化の方法と本論の対象

本章で比較・考察の対象とするのは、LAS (1974) および 1999 年合同調査は徳島大学・神戸松蔭女子学院大学・園田学園女子大学の3大学合同調査、峪口調査 (2011-2012) である。

LAS は、第2章・4章で紹介した調査概要に準ずる。1999 年合同調査は第4章で紹介した調査概要に準ずる。

なお、峪口調査は、LAS 追跡調査を行うため、瀬戸内海島嶼および沿岸における全域調査を 2011 年から 2012 年まで約2年間にわたって実施した。なお本章では、1,216 人のデータを用いて言語地図化を行っている。

以上の調査結果を随時比較し考察していくことにする。

3. 「にわか雨」の方言分布

3. 1. 全国分布の概観

まず LAJ 第6集・第255図「ゆうだち (夕立雨)」の地図を概観する。

共通語形と同形のユウダチ系 (ユウダチ・ヨダチ) は、全国的に使用されるが、奄美大島、沖縄、八重山諸島では使用されない。北海道南部から東北の日本海側にかけてニワカアメ、東北の太平洋側にライサマアメ、岩手県・秋田県から長野県にかけてカンダチ、青森県・石川県・島根県などのムラサメ、関東東北部のシグレ、伊豆諸島・和歌山県・高知県などのザブリ、伊勢湾沿岸のハヤテ、四国の一部と九州南部にサダチ、そして奄美大島、沖縄に、ナチグリ・アマグリ・アモーレーなどの諸形式が分布している。

瀬戸内海域においては、まずソバエの各分布が目を引く。瀬戸内海域のうち、香川県の小豆島、手島、直島、伊吹島などの島嶼部においては、ソバエ、ソバイ

の分布がみられる。香川県内陸部では、先述したユーダチ系（ユーダチ・ヨダチ）の分布がほぼ全域に確認できる。

3. 2. 通時的考察

全国の分布状況を概ね把握してきたが、通時的観点による主な先行文献による記述を以下に取り上げる。

瀬戸内海島嶼部でみられたソバエは、藤原（1999）が指摘するように、瀬戸内海域全域にきれいに分布がみられ、然るべき環境に即して分布している。

また浄瑠璃本の「伊達錦五十四郡」にも次のように、ソバエが使用されている。

●「南無三ばら南無三ばらそばへが来た、さいはひの辻堂」

（浄瑠璃本・伊達錦五十四郡[一七五二]三）

「南無三ばら（クハバラ）南無三ばら（クハバラ）」は、落雷よけのおまじないのことを指している。現代語訳すると「くわばらくわばら、そばえが降ってきた、幸い辻堂だ」となる。

このソバエについては、「そばえる（戯）」という動詞から派生した名詞で、ソバエ（戯へ）となり、この類のものが、瀬戸内海域での特色分布をなしているといえる。

近石（1976）によると、ソバイ・ソバエは、島嶼部の小豆島、高見島、伊吹島、及び内陸部の高松、丸亀に分布するといひ、かつてサダチは、旧大川郡、木田郡、綾歌郡に分布していたと指摘している。

これらの語形のうち、もっとも多く日本列島に分布しているユーダチは佐藤（2002）によると、「夕（に）たつ（夕方に現れる）」の意であるとし、またサダチの語源は不明であるが、この「サ」は「さつき（五月）」「さみだれ（五月雨）」「さなえ（早苗）」「さおとめ（早乙女）」などの「さ」と関係があるのかもしれないという。

次に奈良時代後期の資料から、様々な文献にユーダチ・ソバエ・ヨダチ・シグレが登場するようになってきた。

「万葉集」では、次のようなユーダチの使用がみられた。

●「暮立（ゆふだち）の雨降るごとに春日野の尾花が上の白露思ほゆ」

(万葉集[七五九]詠み人知らず・二一六九)

「暮立」のダチ(立つ)は、自然界の動きがはっきり目に見えることを指すという。またユダチは、「夕(に)たつ(夕方に現れる)」の意であり、もっとも古いことばである。

柳田(1927)は、全国の大部分を占める、ユダチ、サダチのような～タチの語形は、天から降ること、神が君臨することの意であるとも述べている。いずれにしても、「～タチ」は自然現象のことを指すようである。

またシグレも、同様に「万葉集」にでてくる。

●「夕されば雁(かり)の越えゆく龍田山四具礼(シグレ)に競(きは)ひ色付きにけり」

(万葉集[七五九]詠み人知らず・二二一五)

シグレは「晩秋から初冬にかけて降ったりやんだりする小雨」の意を持ち、上代の文献例もその意味とされ、さらに『日葡辞書』(1603-1604)にも(「Xigure(シグレ)冬や秋の雨」)がみえる。

3. 3. 瀬戸内海全域における方言分布の概観

まず、LAS第134老年層図「にわか雨」の分布を概観する。老年層図では、ソバエがおよそ全域に分布する様相を呈している。ただしソバエ系の分布は瀬戸内海東部の大阪府にはみられなかった。ソバエ系では、ソバーが山口・広島県備後域・岡山県、スバエ、スバースバイが山口県周防・広島県安芸、ソバイが中部以東に分布する。ソバエは淡路島にも一地点にみられるのみである。一方、ソーバエ、ソーバイという形式は、淡路島、家島、坊勢島にみられ、小豆島の一地点、香川県島嶼の四地にも分布が点在し、愛媛県西部興居島、釣島にも分布の確認が出来た。

サダチ系(サダチ、サンダチ)は、徳島県、淡路島西南端、沼島にみられ、四国東部から淡路島にかけての分布が中心となっている。

シグレ系は、瀬戸内海西部にあたる大分などの九州地方にかなり優勢に分布しており、山口県周防より東にはごくまれに点在するのみである。

すでに指摘した、ユダチ系(ユダチ・ヨダチ・ヨーダチ)は全域にあるが、ヨーダチは比較的分布が少ない。

図1は、峪口調査による調査結果を地図化したものである。峪口調査では、島嶼部にソバエ系が広く分布し、それを取り囲むようにニワカアメが分布している様相がうかがえる。

図2は、図1と同様、峪口調査の結果であるが、ニワカアメに注目した地図（概略図）である。ニワカアメは、瀬戸内海全域に多く分布がみられ、回答数は、473件であった。経年変化の傾向として、ここから共通語形の分布が拡大していることがわかる。

図3は、ソバエ系に注目した分布図で、瀬戸内海島嶼部を中心に分布がうかがえる。ソバエ系だけでもソバエ、ソーバエ、ソバイ、ソーバイ、スバイ、ソバー、ソベー、ソービャーなどの諸形式の使用が瀬戸内海域で広域に分布域を形成している。瀬戸内海方言であるソバエ系が根強く残存しているのは、過疎地域が多く存在する島嶼部の人口流動が少ないことに起因して共通語系の伝播の遅れが生じているのかもしれない。ソバエ系でも地域差があり、淡路島ではソーバイという長音化した形式が集中して分布している。さらにスバエは山口県の周防・広島県安芸に多い。この状況は、LASにおいても同様であった。

LASは、前述したように大阪府および和歌山県にはソバエ系がみられなかったが、今回の峪口調査では、大阪府泉州地域から和歌山市にかけて僅かだが、ソバエの分布がみられた。

図4は、トーリアメとユードチの分布図である。こちらは、共通語形のニワカアメと似たような分布をしている。ニワカアメ、トーリアメ、ユードチの中で一番多く分布しているのが、トーリアメである。LASの少年層の地図では僅か1例のみ徳島県鳴門市にみられた語形であるが、約50年経過した現在、徐々に広く使用されるようになったことがわかる。

図5のサダチ類については、藤原（1976・1996）には、瀬戸内海東部、四国東部から淡路にかけて分布していたと述べられており、LASでは、徳島、淡路西南端、沼島にみられたが、峪口調査では愛媛県南西部、香川県東かがわ市、徳島県徳島市と点在しており、淡路島においてサダチは確認出来なかった。

図6では、その他の語形についてふれることにする。ここで特に注目しなければならないのはシグレである。LASでは九州地方でまとまって分布をしていたが、その他の地域にはみられず、兵庫県上郡と徳島県海南町のわずか2地点のみであった。早晚消えさる語といえよう。

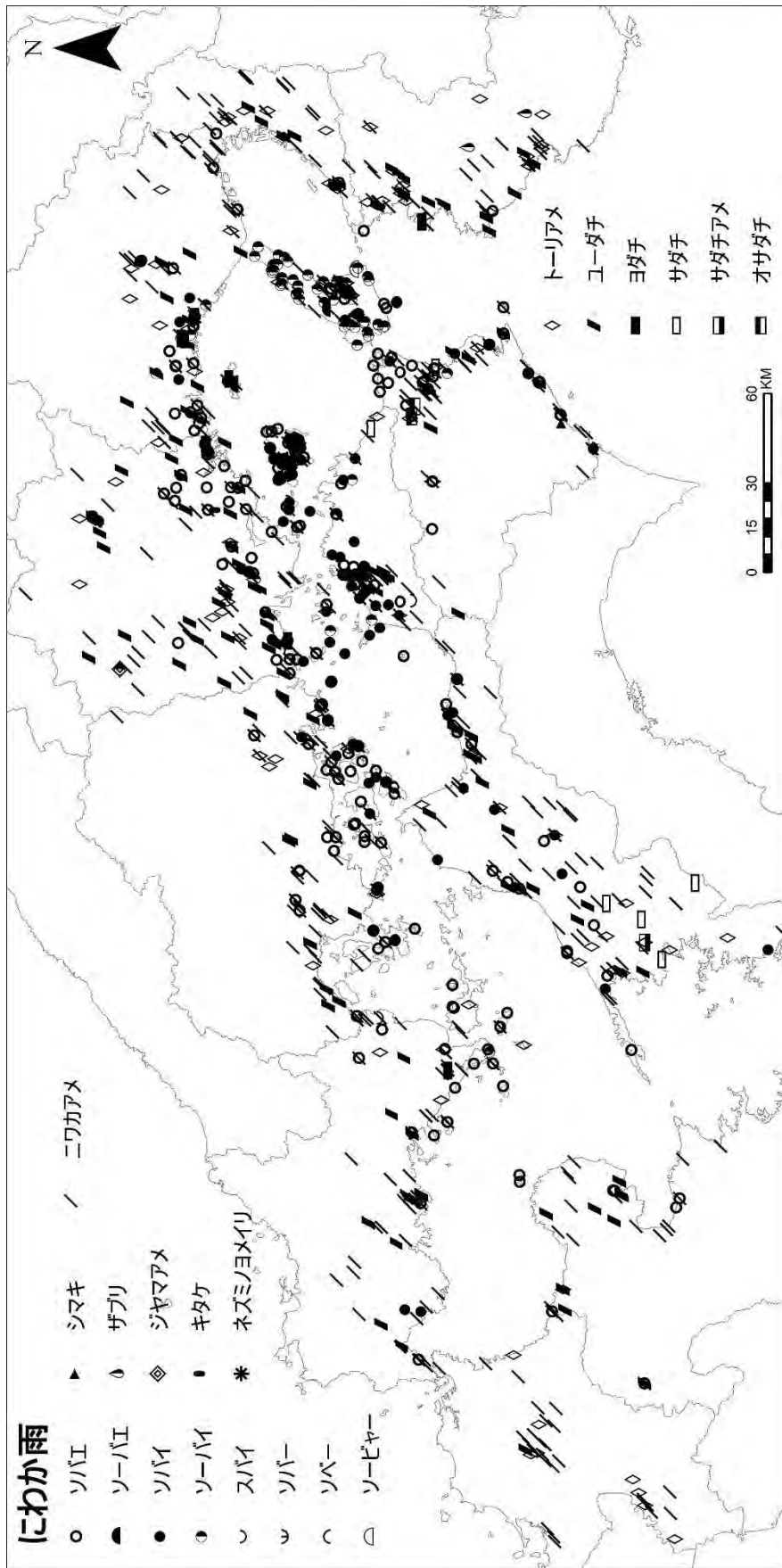


図1 嶮口調査「にわか雨」

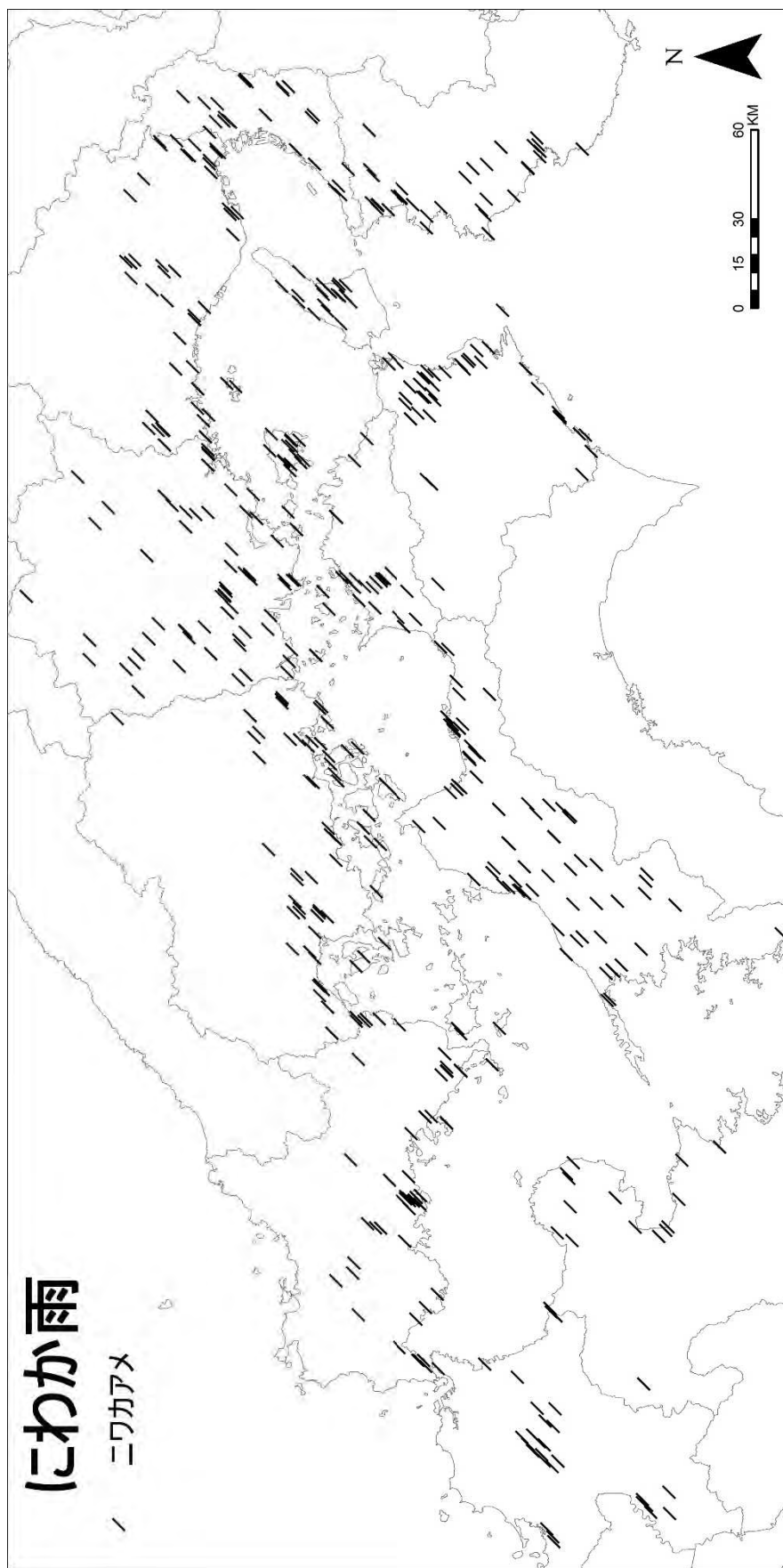


図2 峪口調査「ニワカアメ・ニワカソバエ」(概略図)

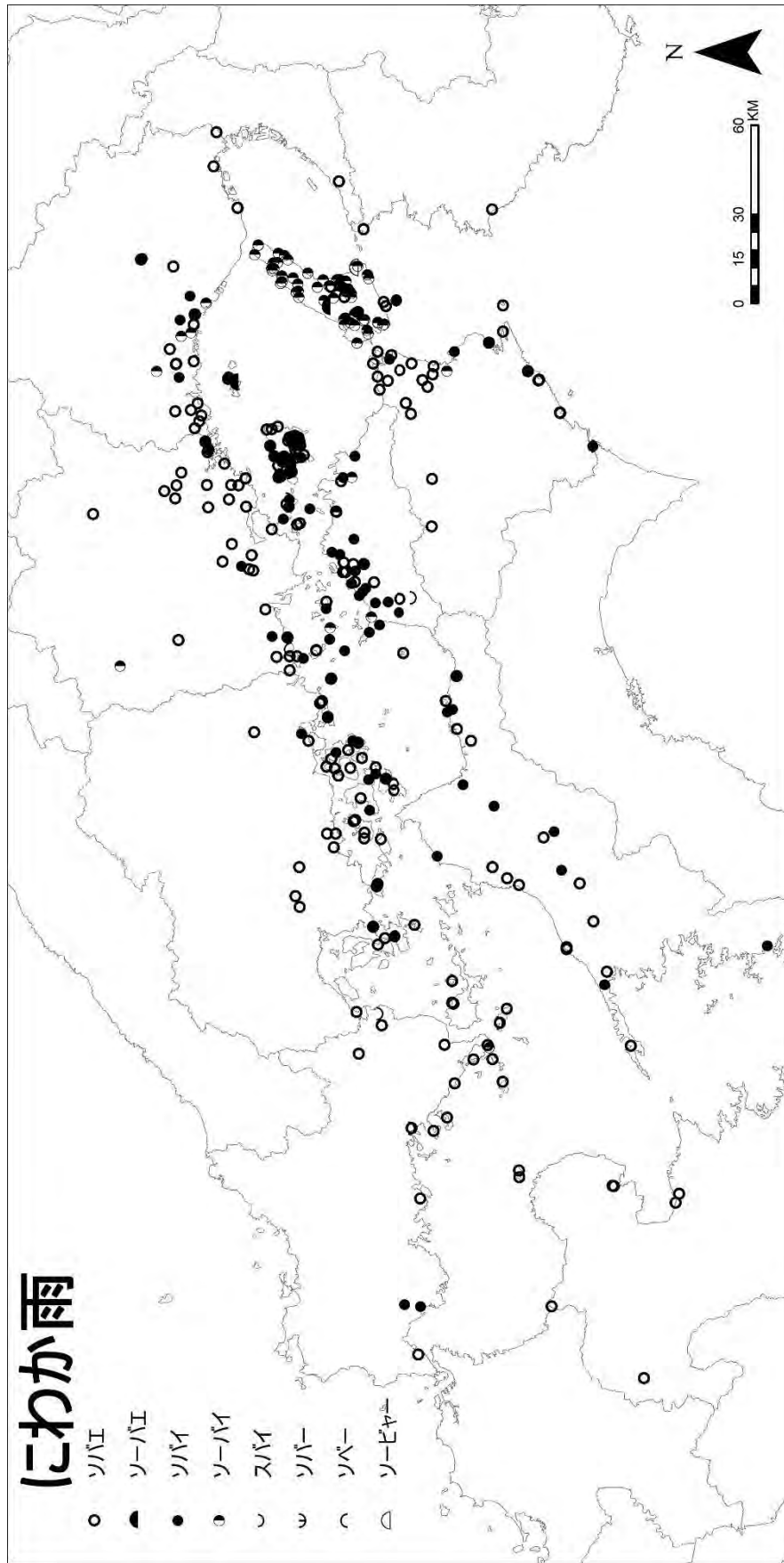


図3 峠口調査「ソバエ類」(概略図)

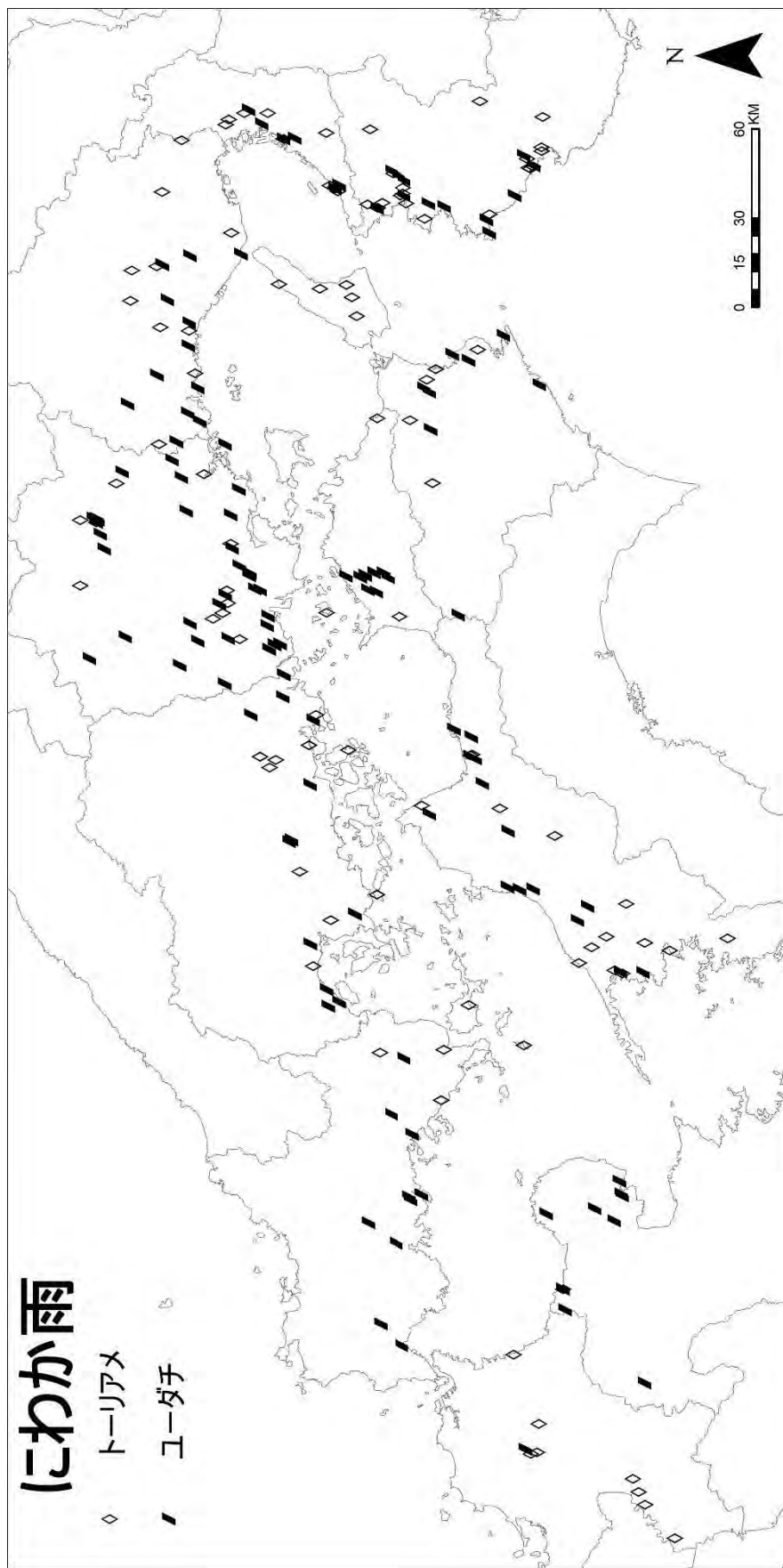


図4 峪口調査「トーリアメ・ユーダチ」(概略図)

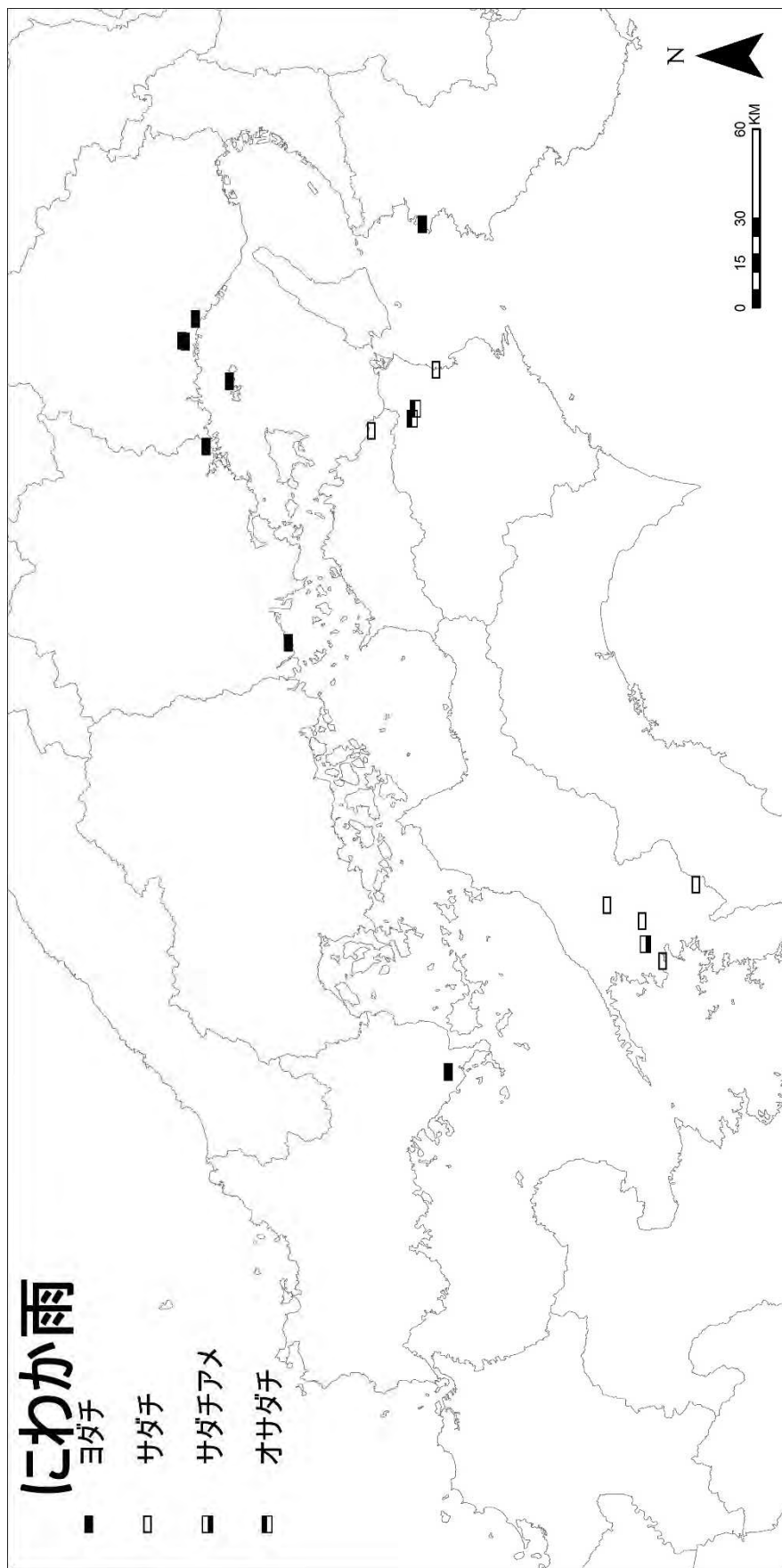


図5 峪口調査「ヨダ子類」(概略図)

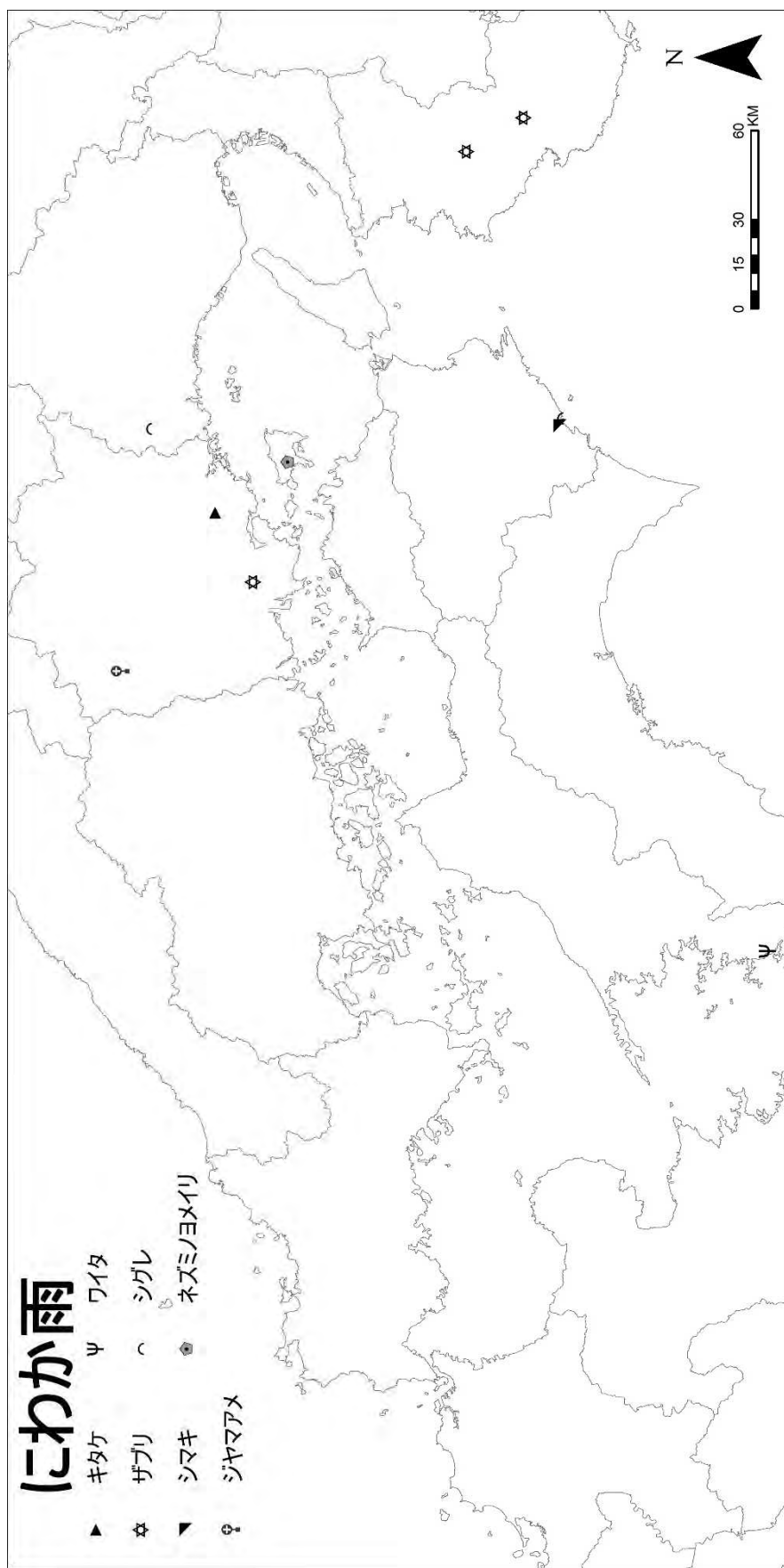


図6 峪口調査「その他の語形」(概略図)

小豆島にみられるネズミノヨメイリは比喩的な表現として定着した形式であり、藤原（1999）『日本語方言辞書—昭和・平成の生活語—』によると、空は晴れて昼の雨降りのことを指すという。今後この語形も消えていくかもしれない。

峪口調査でみられた、シマキ、ザブリ、ジヤマアメ、キタケ、ワイタは、LASでみられない形式であった。また大阪府、和歌山県では、共通語と同形のニワカアメやユウダチが各地で多く使用されていることが判明した。

3. 4. 香川県における方言分布の概観

にわか雨の地図、LAS 第 134 図から作図した地図（図 7・8）と峪口調査（図 9・10）の地図を比較・考察する。LAS の調査地域は、島嶼部と海岸沿いに集中しているが、一方、峪口調査は島嶼部・海岸沿いと一部内陸部にも調査地域が拡大している。

LAS の地図をみると、島嶼部を中心にソバエ類が広く分布していることがわかる。一方内陸部においては、ソバエ類はどちらかというと劣勢であり、香川県西部にはニワカアメの分布が目立つ。

峪口調査ではソバエ類が島嶼部、内陸部ともに広く分布していることが確認され、瀬戸内海方言の伝統的な語形が今もなおしっかりと残っていることがわかった。また LAS において、ヨダチが島嶼部、小豆島、直島、女木島に確認ができる。一方、峪口調査では、ヨダチは確認できなかったが、サダチは香川県東部に分布がみられた。

次に LAS でみられた、シグレは峪口調査では、志々島に分布が確認できた。

その他の LAS でみられた、ワイタ・ワイタアメについては、『日本国語大辞典第二版』によると夏のにわか雨に伴う一時的な強風のことを指すといい、香川県が使用地域という。また近石（1967）では、旋風の意をワイタ・ワイタカゼとし、島嶼部全域、仲多度、三豊に使用されているとしている。香川県では、ワイタ・ワイタアメは確認できなかった。

LAS 第 6 集・第 255 図「ゆうだち（夕立雨）」の地図と比較すると、小豆島ではユウダチは少なく、ソバイやソバエの方が多く使われている。また、この図に見える回答形のニワカソバエやドンドロソバエが今回の調査では回答が得られなかった。国研調査から半世紀が経過し、共通語と同形のニワカアメやユウダチに各地の伝統形式が取ってかわられたものと考えられることができる。今回の調査でソバイ、ソバエなどはいまだ衰退傾向はみられないものの、これら以外の各地の伝統方言が徐々に消えていく傾向が明らかとなった。

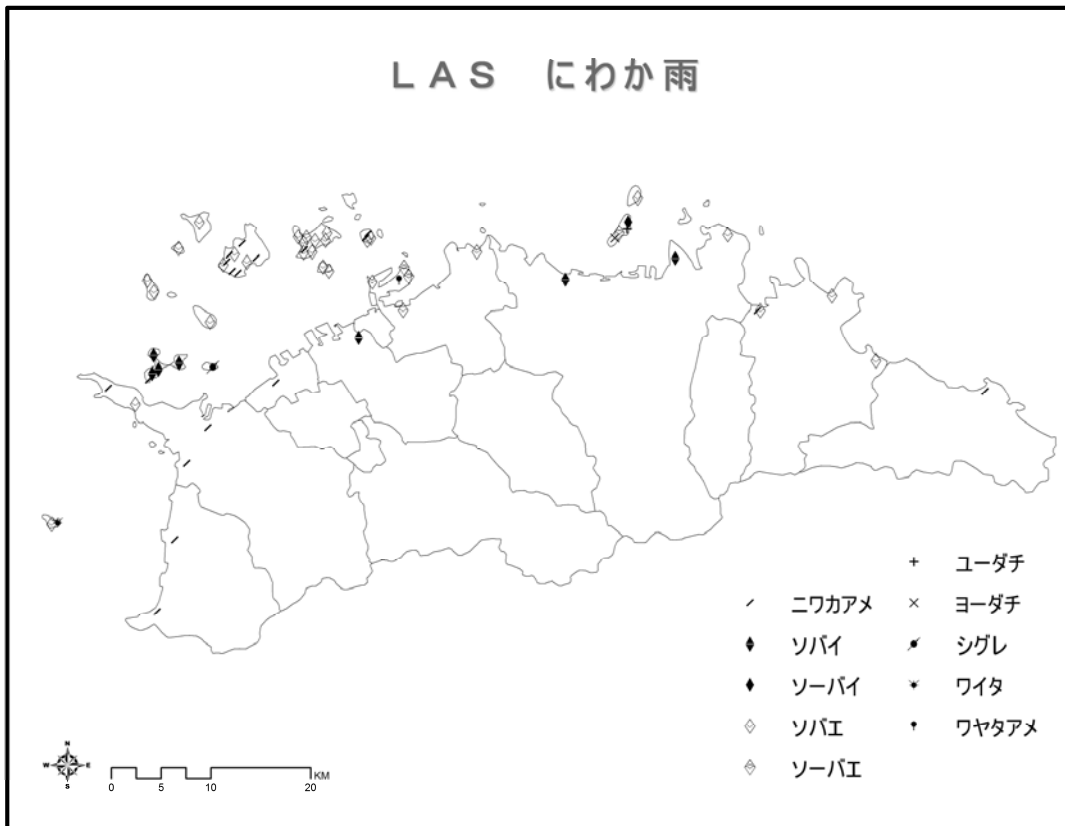


図7 LAS 第31 老年層図から作図 香川県内陸部

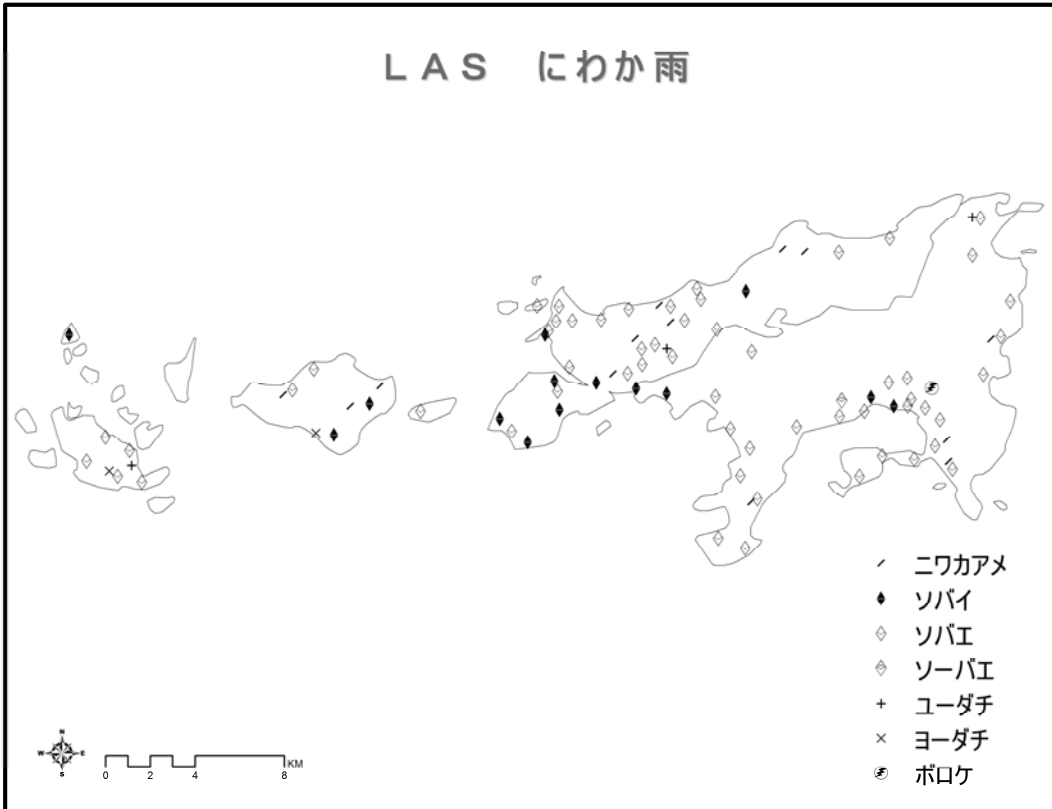


図8 LAS 第31 老年層図から作図 香川県島嶼部

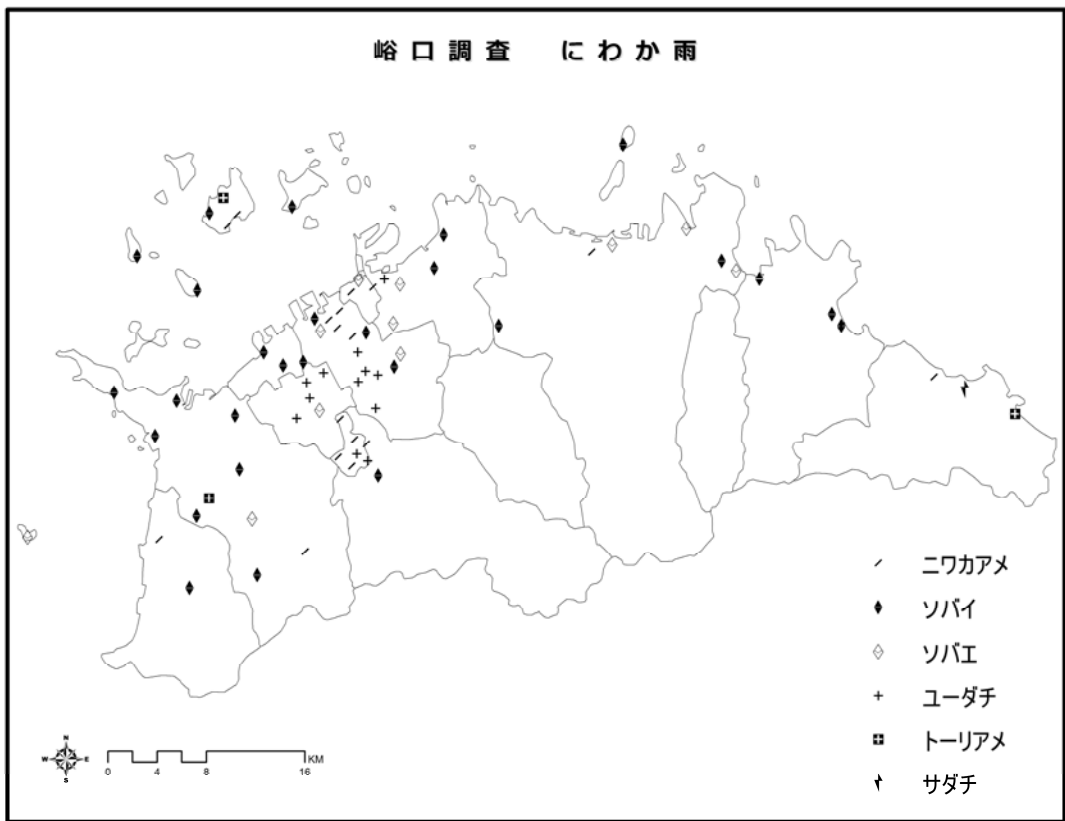


図9 峪口調査 香川県内陸部

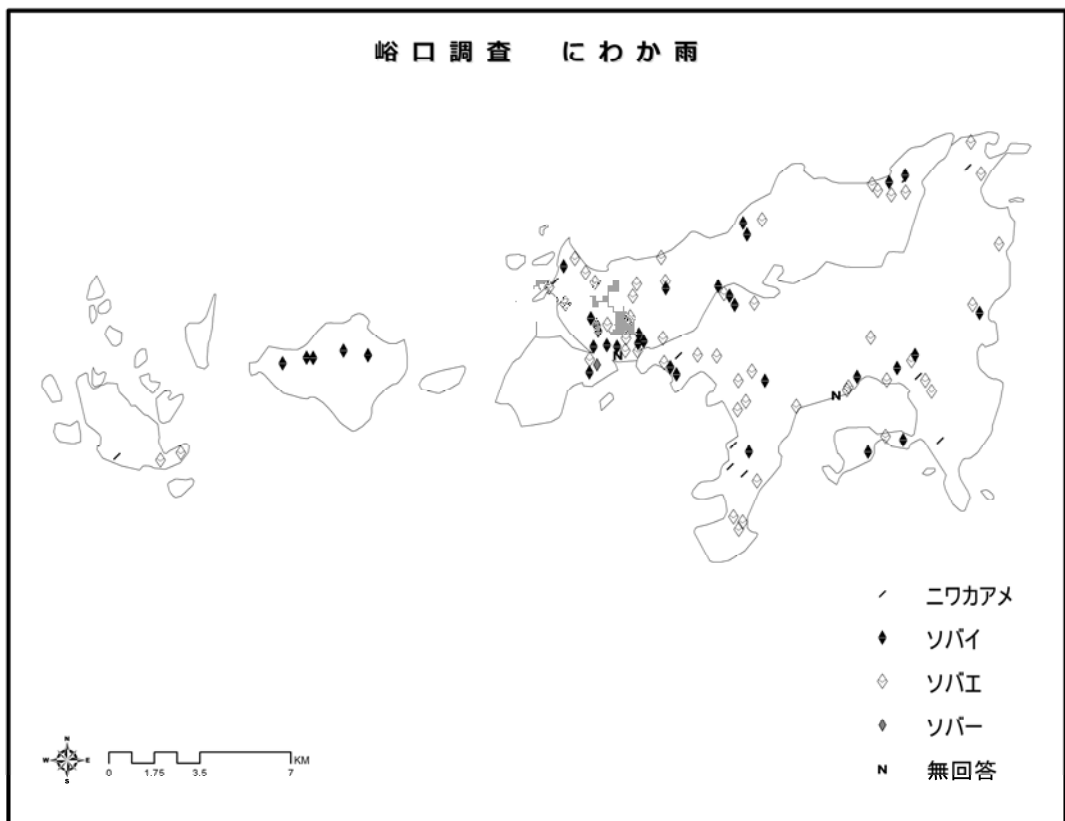


図10 峪口調査 香川県島嶼部

3. 5. 淡路島における方言分布の概観

図 11 の LAS 第 134 老年層図「にわか雨」の分布を概観する。

瀬戸内海方言では、ソバエ類の分布が優勢である。ソ（一）バエは、東部は淡路島から、西部は、山口県まで分布が広がっている。

ソバエ類の分布は、LAS では淡路市、洲本市、南あわじ市にソーバイがあり、ソーバエと分布上、対立している。音変化したソーバイ、ソービャーといった語形もある。

共通語形のニワカアメは、単一回答だけをみると、北部に集中している。サダチ、サンダチは、南部に集中しているが、勢力も衰退気味である。藤原(1996)によると、サダチ形は瀬戸内海地域では、東部に点在しており、まさに淡路島を中心にみられる。

ハヤテは LAJ 第 6 集・第 255 図「ゆうだち（夕立雨）」によると伊勢湾沿岸に分布する語形である。シケについては、洲本市で 1 名の回答があるが、LAJ では、みられない回答形だった。

次に、1999 年調査（図 12）を概観したい。ソバエ形の分布が広範囲に及んでおり、なかでもソーバイの勢力が広くまとまっている。LAS では、ソーバエとソーバイが対立していたが、1999 年調査では、ソーバエがなくなり、長音が短呼化されるソバエとなっている。LAS の分布と同じく、洲本市の由良に複数回答だが、ソーバイ・ソービャーという回答があった。ソービャーとは、由良独特の語形なのだろうか。トーリアメは洲本市に 1 か所回答があっただけである。ユードチも淡路市、洲本市、南あわじ市に点在する程度である。LAS で見られた、サダチ形、シケ、ハヤテという回答は得られなかった。共通語形のニワカアメの回答が増えていて、南部に南あわじ市が増えていた。

次に峪口調査（図 13）を概観する。ここでは、ソーバイの分布域が広く、共通語形ニワカアメも散見される。ニワカアメは洲本市に集中していた。

1999 年調査と同じく、ソーバエの分布がなく、ソバエの短呼した回答が南あわじ市と沼島に分布していた。ソービャーについては上述したが、峪口調査においても洲本市の由良に分布が見られた。LAS では、まったくみられなかったトーリアメが岸江調査では、洲本市に 1 名あったのが、峪口調査では、洲本市を中心に南あわじのと合わせて 4 名から回答があり、増加傾向が窺える。

にわか雨の項目において、LAS、1999 年調査、峪口調査を見渡すと、全体的な傾向として、ソバエ形という伝統的方言形が根強く使用される一方で、共通語形も徐々に浸透しているということであろう。共通語形の浸透は、本土側からの地伝いの伝播と、テレビなどマスコミの影響、つまり空からの伝播も考えられる。

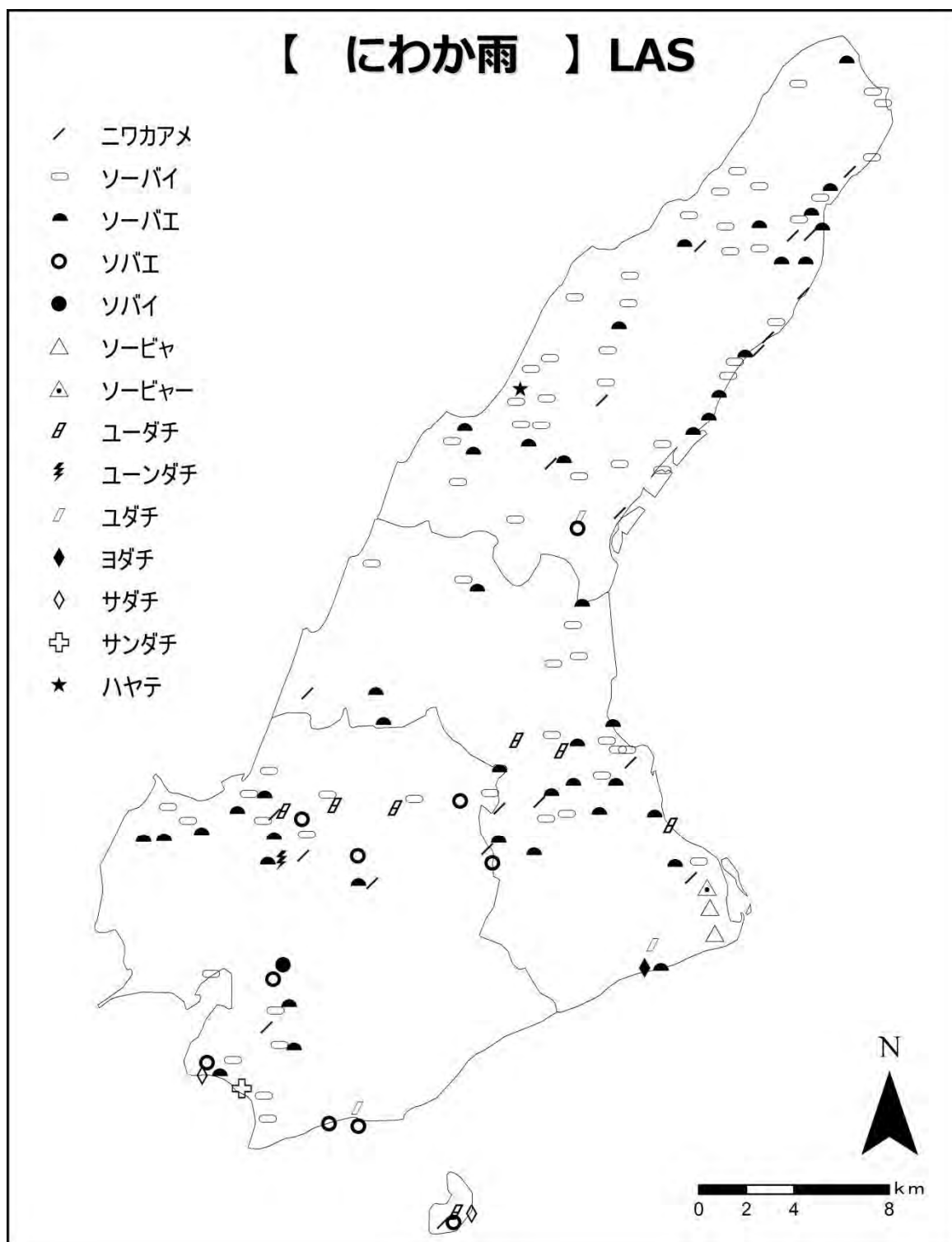


図11 LAS第134老年層図から作図「にわか雨」

【 にわか雨 】 1999年調査

- ／ ニワカアメ
- ソーバイ
- ソーバエ
- ソバエ
- ▲ ソービャー
- ◆ トーリアメ
- ソバイ
- ソバエ
- ⊘ ユーダチ
- N 無回答



図12 1999年調査「にわか雨」

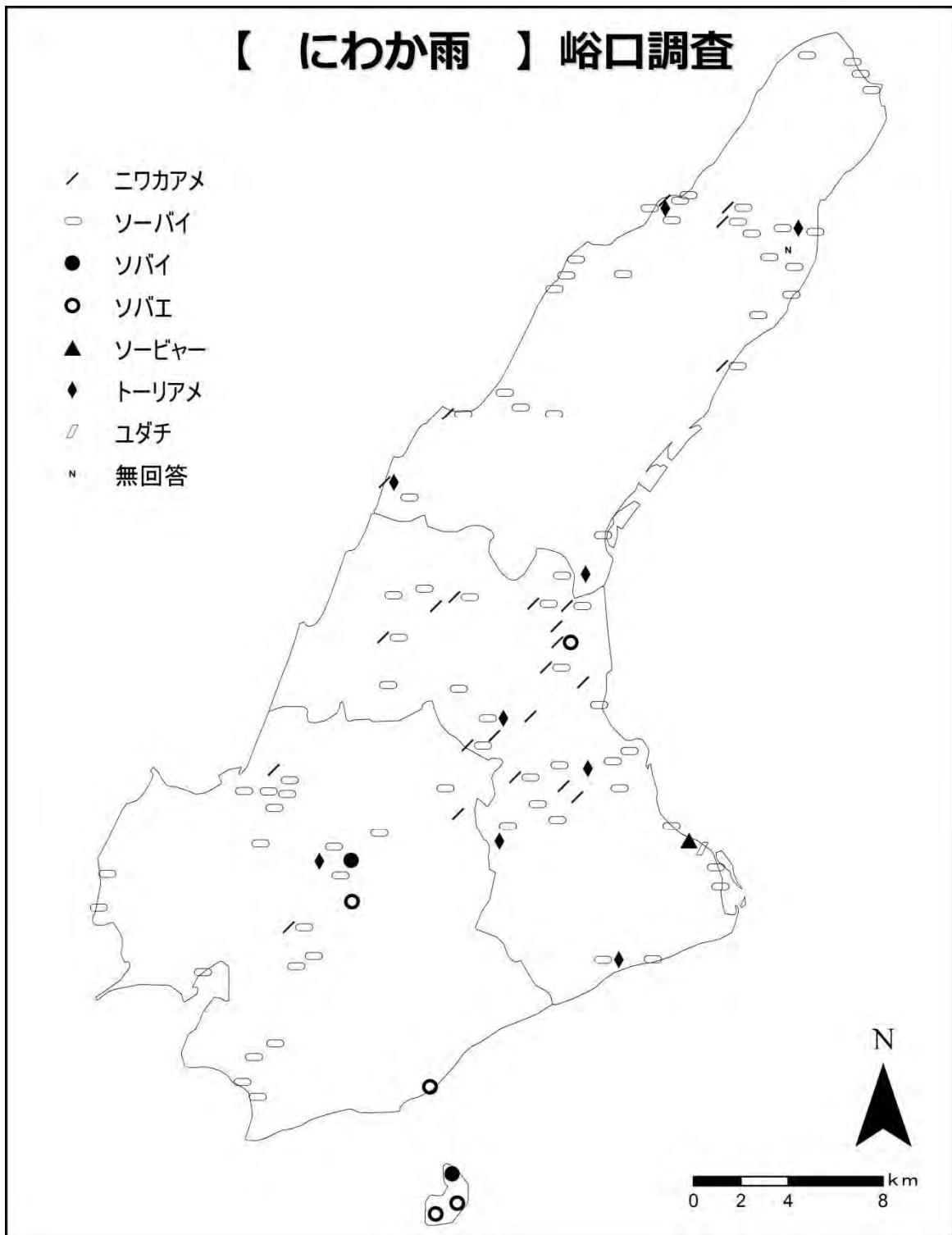


図13 峪口調査「にわか雨」

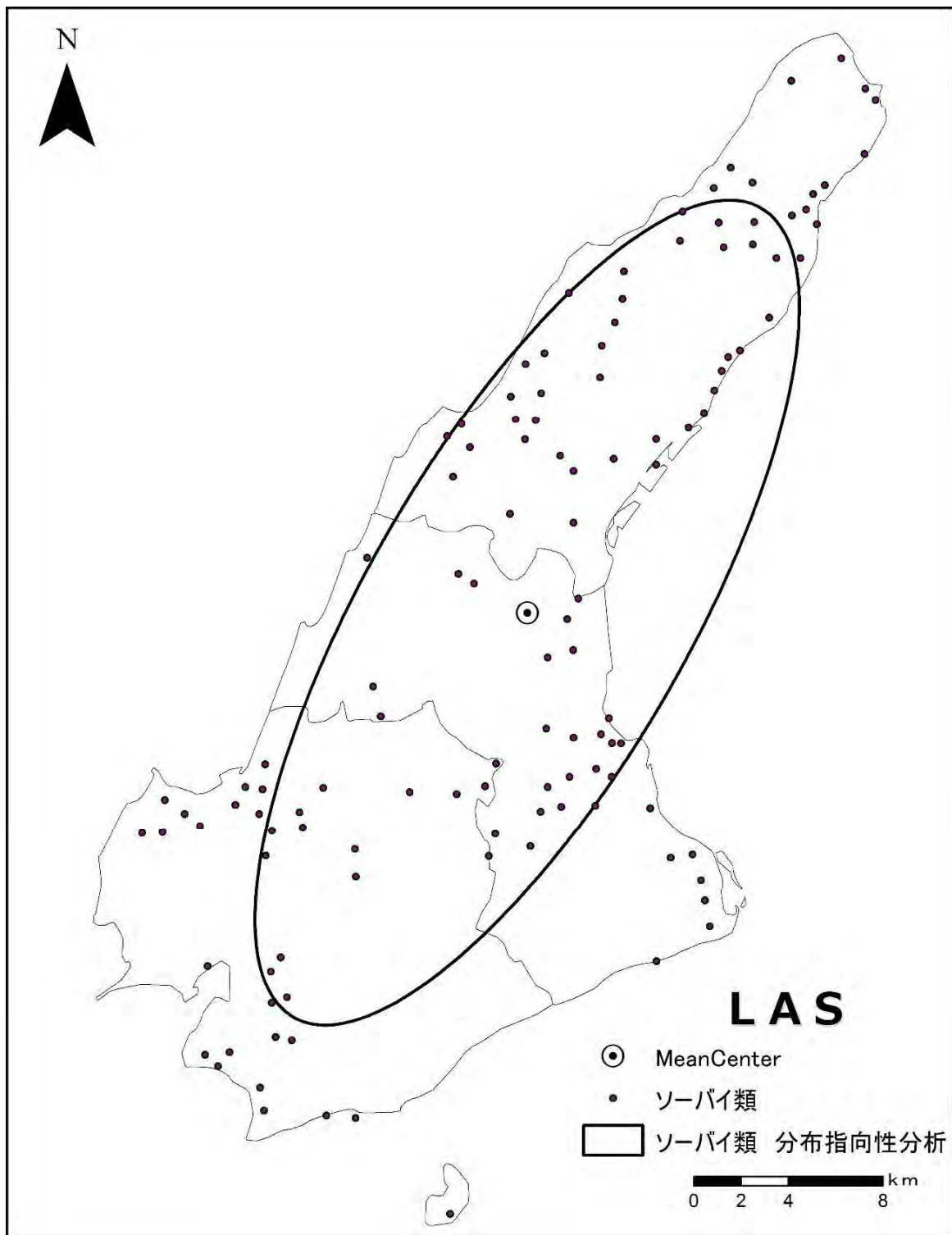


図14 LAS空間解析図「ソーバイ類」

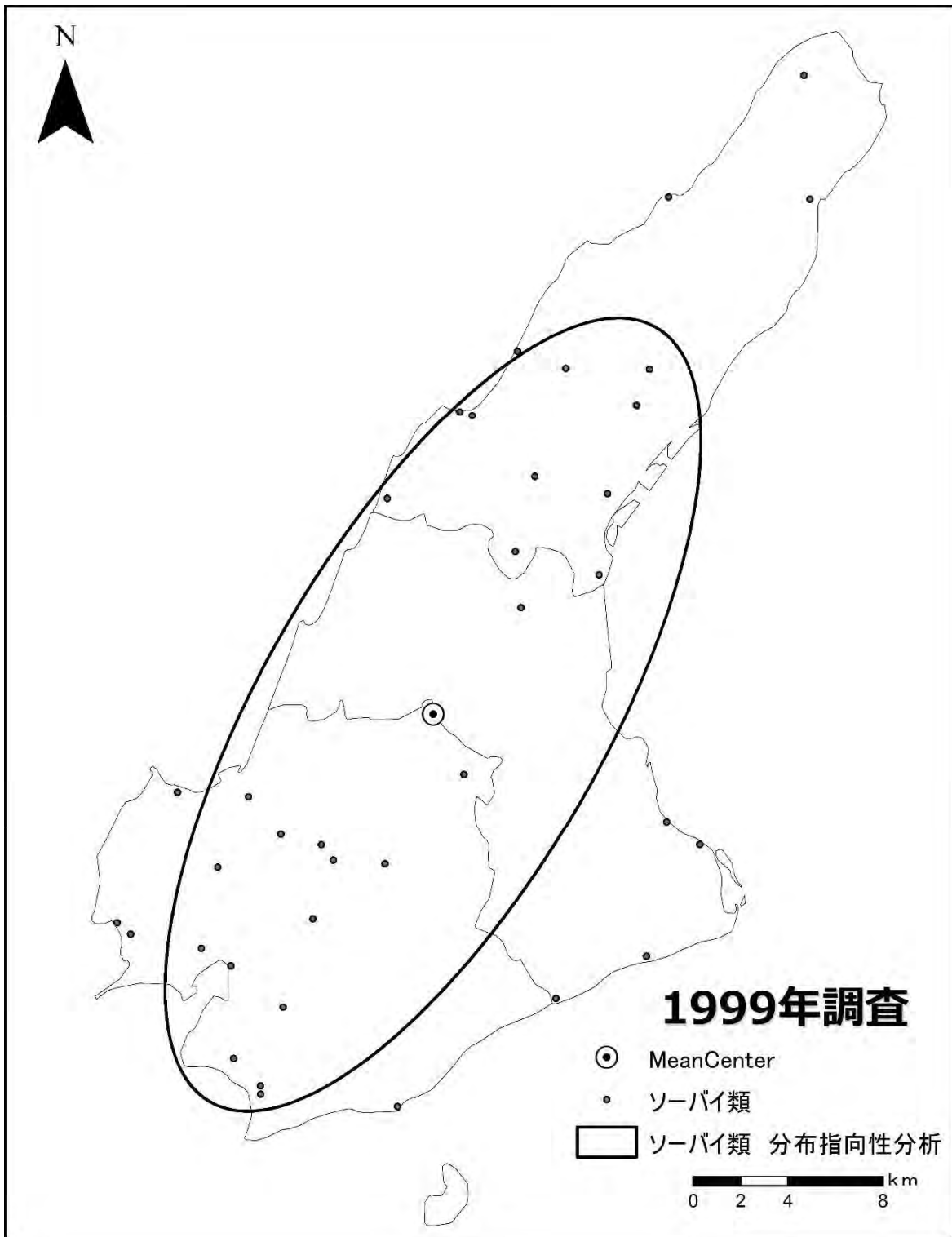


図15 1999年調査空間解析図「ソーバイ類」

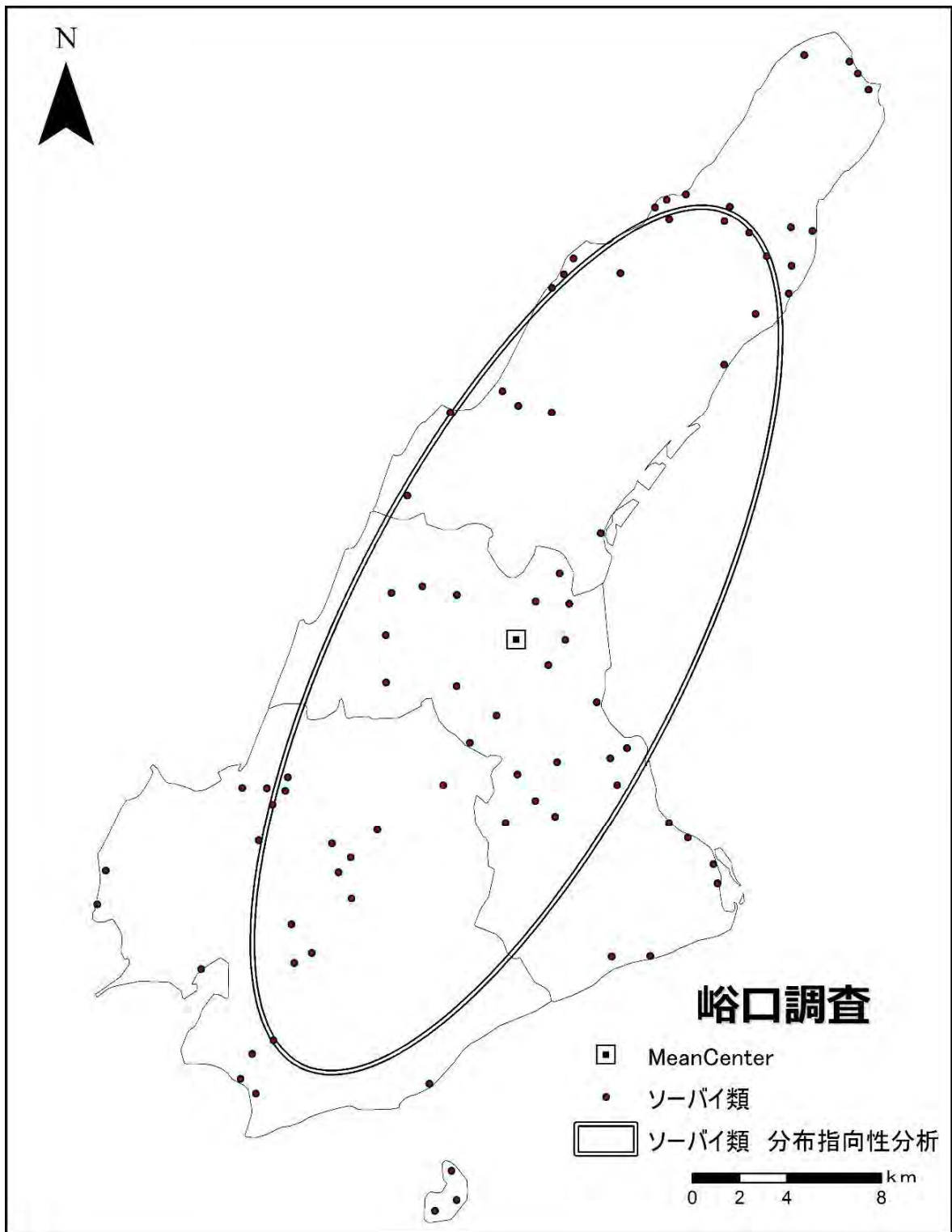


図16 峪口調査空間解析図「ソーバイ類」

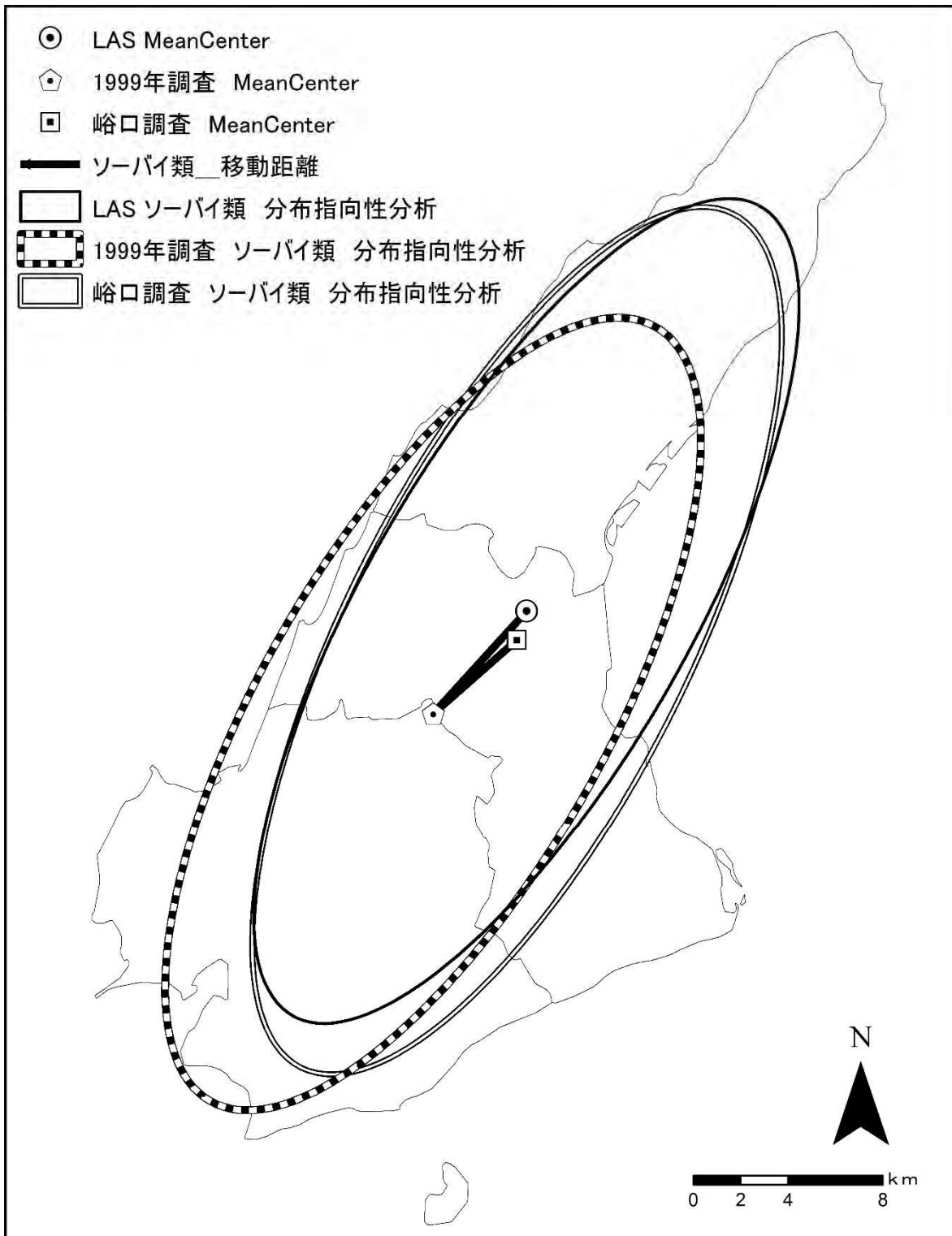


図17 LAS・1999年調査・嵯峨調査 空間解析図「ソーバイ類」

GIS は、基本的に地伝いの伝播を検証するものであるが、空からの伝播をどう関連づけるのか、今後の課題である。

ここでは、にわか雨における淡路島で代表的な分布である、ソーバイ類についての地理的分布特性の算出^{注1}を行う。

図 14 は、LAS から作図した、ソーバイ類の空間解析の地図である。楕円の中心は、淡路市にあり、楕円大きさは、図 15、図 16 と比較すると大きいことがわかる。楕円が大きくなればなるほど、地理的中心点からのちらばりが大きくなる。

分布傾向として、淡路島に広く分布していることがわかる。楕円の傾きは、中心点からみるすべての地点データと分布の位置によって決まる。北部の先端と、南部に分布が多いので、図 14 のような傾きになったといえる。

図 15 の楕円の中心は、南あわじ市にある。全体の傾向として、岸江調査は地点数が少ないので、楕円は小さく表示された。淡路市北部には、分布が少ないことから、楕円の長さは中心点から短く描かれている。

図 16 の楕円の中心は、洲本市にあり、LAS と比べてソーバイ類の分布の数が減るものの、ソーバイ類がほぼ淡路島全域に分布していることから、淡路島と同じ形、同じ傾きの楕円が描かれている。

次に、中心点の移動距離を測定してみる。図 17 の地図は 3 枚の地図を重ね合わせた地図である。LAS の中心点から 1999 年調査の中心点までの距離^{注2}は、南方向に 9.71Km で X 値 3885.837、Y 値 - 358255.1 だった。1999 年調査から峪口調査の移動距離は、東方向に 4.82Km で X 値は -3338.19、Y 値は - 363721.2 だった。ソーバイ類においては、複雑な分布傾向を見せていることがわかる。実時間上の変化で共通語形が浸透しつつも、ソーバイ類という瀬戸内海方言である伝統的方言形が淡路島には根強く残っていることがいえるだろう。

4. 本章の結論

本章は、「にわか雨」を事例として、方言分布の「実時間」上における経年変化に焦点をあて考察を行ってきた。これまでに瀬戸内海をフィールドとして行われた 3 の方言調査を事例として、方言分布の移り変わりをみていった結果、伝統的語形であるソバエ類は、依然として勢力を保って分布していることが明らかとなった。一方で、共通語形のニワカアメ、トーリアメ、ユードチとソバエ類を囲むように使用が拡大していることもわかった。

つまり、ソバエ類は、LAS の調査から 50 年たった現代でも、共通語が浸透していく中、伝統的方言として使用がみられることがいえる。本章の GIS を利用した地理的分布特性の算出は異分野の手法だが、言語地理学で応用して行ってみた。

各地のデータをしらみつぶしに調べることや、話者における社会的属性についても、無視するわけにはいかないだろう。

【注】

注1 楕円については、 $STD \times 1$ の範囲は、確率的に約7割の点が分布している範囲を示している。

注2 移動距離も求め方は、GIS機能であるジオメトリ演算を用いている。テーブル内で直接面積やラインの長さなど計算する機能を指す。

第6章 カーネル密度による言語分析

－文末詞「ナー」「ノー」を事例として－

1. 本章の目的

本章では、文末詞を取り上げ、当該地域の言語変化を考察する。瀬戸内海域における文末詞は広範にわたり、日常盛んに使用されている。主に、ナ行音文末詞、ヤ行音文末詞、サ行音文末詞、カ行音文末詞、ワ行音文末詞などが用いられ、さらに複合形文末詞が数多く存在している。

瀬戸内海の文末詞については、藤原（1958）、佐藤（1975）、江端（2001）など、大半が記述的研究として述べられているものであり、言語地理学的に解釈した報告は多くない。そこで本章では、瀬戸内海域における文末詞の分布に焦点をあて、言語地理学的な視点から実時間上の言語変化を探りたい。

2. 調査・地図化の方法と本論の対象

本章で比較・考察の対象とするのは、LAS（1974）、峪口調査（2011-2012）である。

LAS（1974）は、LAS は、第2章・4章で紹介した調査概要に準ずる。

峪口調査は、LAS 追跡調査を行うため、瀬戸内海島嶼および沿岸における全域調査を2011年から約4年間にわたって実施した。なお本章では、1,300人のデータを用いて言語地図化を行っている。

以上の調査結果を随時比較し考察していくことにする。

3. 全体の結果

ここでは峪口調査における調査結果で文末詞を取り上げる。男女に分け使用率のランキングを示すことにより、当該地域の言語変化を考察する。以下の図1・図2がランキング結果である。

上位のランキングをみると、「ナー」は男性・女性と共に、使用率が高い。「ノー」になると男性の使用率が高いものの、女性の使用率は50%以下となる。

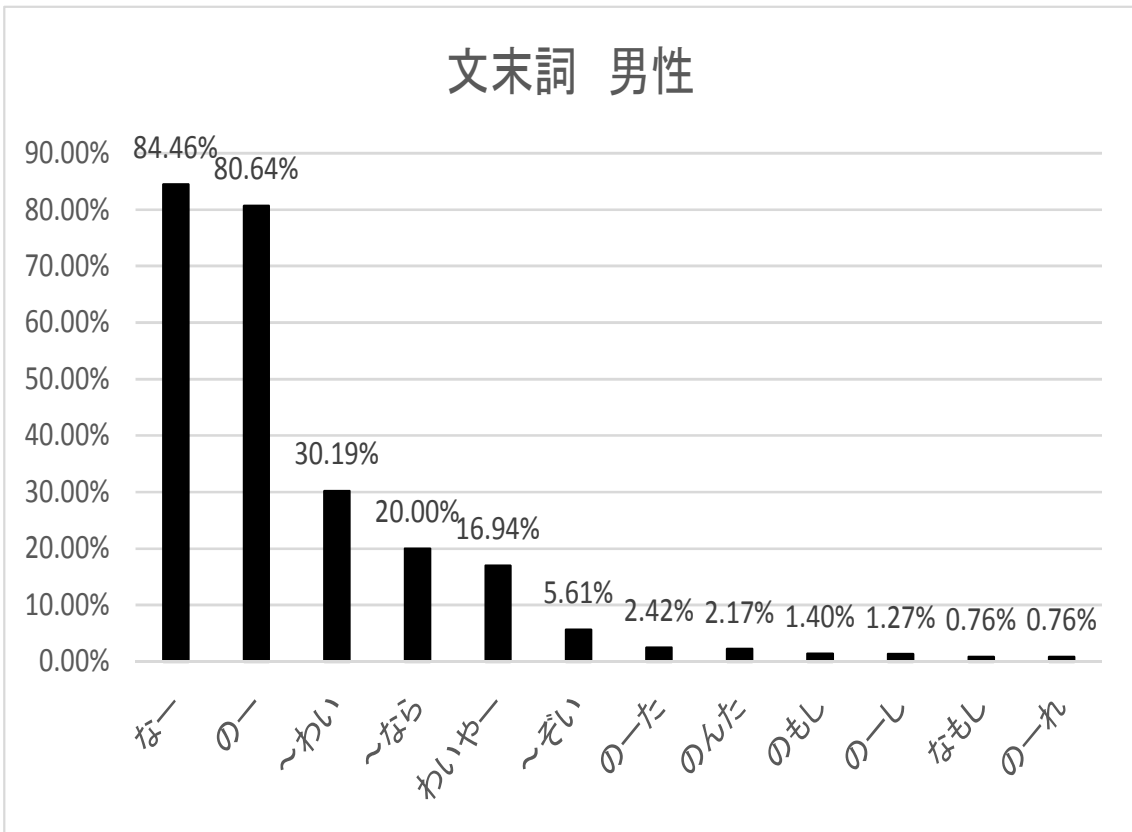


図 1 文末詞ランキング 男性

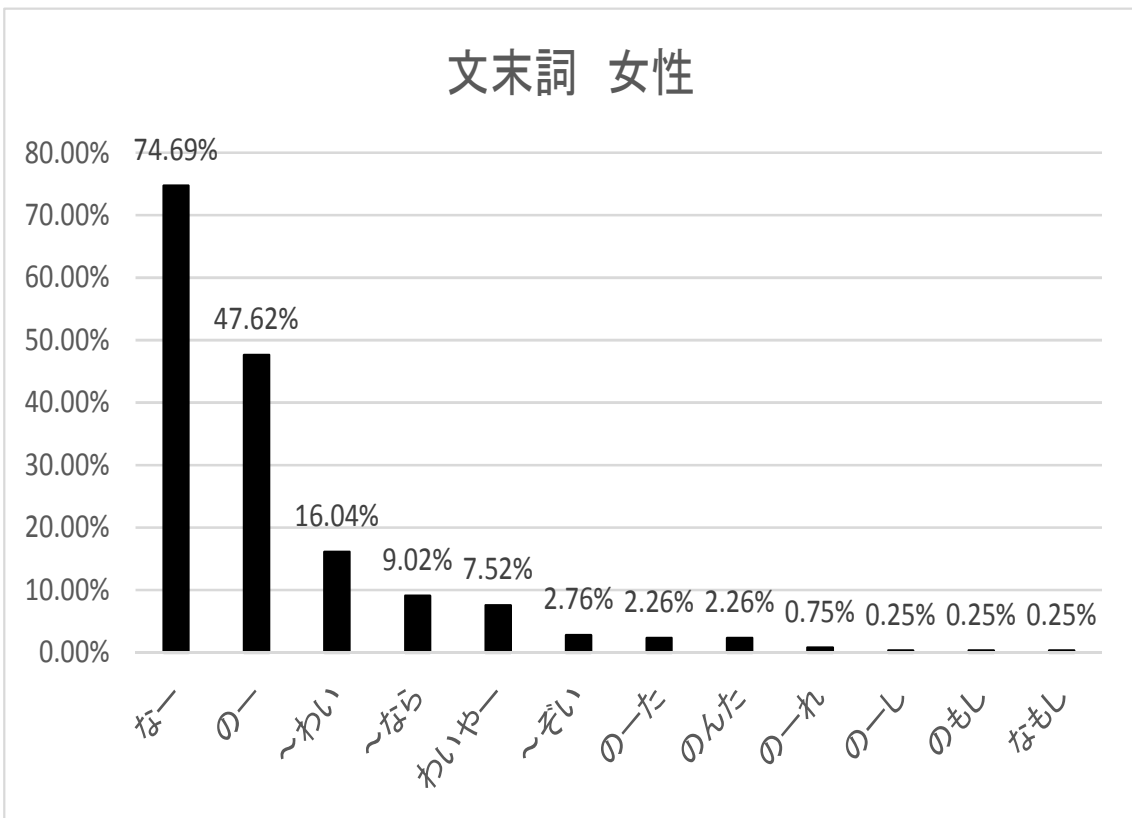


図 2 文末詞ランキング 女性

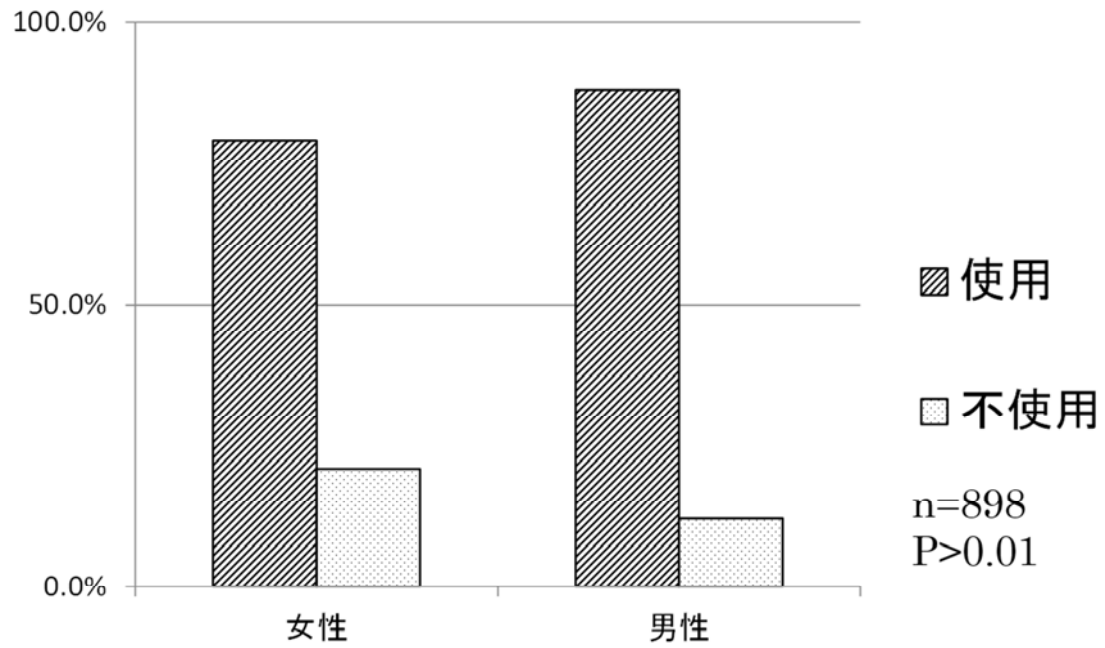


図3 文末詞「ナー」の使用率

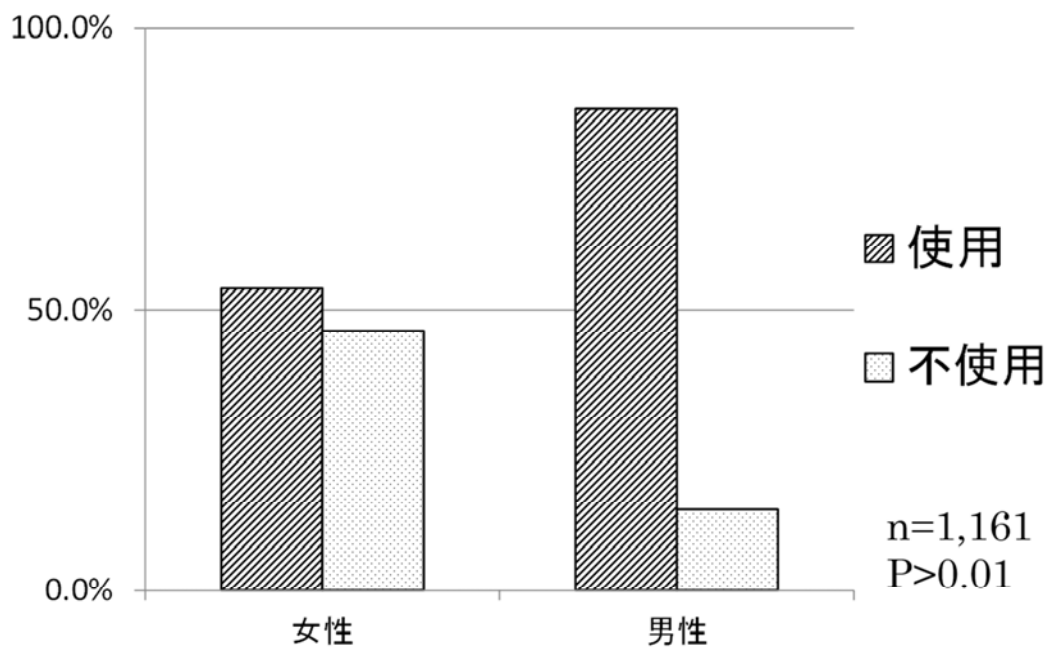


図4 文末詞「ノー」の使用率

「～ワイ」「～ナラ」「～ワイヤ」は、「ナー」「ノー」に比べて使用率が低くなるが、男性の使用が高いことがわ他の語形に関しても女性より男性が文末詞をよく使用していることが判明した。

男女とも値の高かった、「ナー」「ノー」の結果について、カイ二乗検定を行った。

結果は、図3・図4である。瀬戸内海域においては文末詞「ナー」「ネー」が男女ともに使用されるが、使用頻度の点で差がみられ、以下のような特徴が判明した。文末詞「ナー」は男女ともに使用する者が多く、文末詞「ノー」には男女で使用差があり、女性に比べて男性の使用が極めて目立つ結果となった。

4. 文末詞「ナー」のカーネル密度による方言分布

「ナー」を詳しくみていくことにする。図5・図6・図9・図10は、LAS第94老年層図「ナー・ノー・ネー・ニー」の「ナー」のみを取り出し、言語地図化したものである。なお、図5・図6・図9・図10は、言語事象が多いため、概略して作図を行った。またLAS第96図は、ナー・ノー・ネー・ニーが一枚の地図に収められている。そこで今回は、事象毎に地図化を図っている。

図7・図8の老年層図をみると「ナー」は、瀬戸内海東部から広島県島嶼部にかけて、盛んに分布がみられる。一方、山口県以西の分布は僅かである。

方言分布の密度を調べるために、GISの空間解析の一つである、カーネル密度^{注1}を用いて作図した地図をみていく。カーネル密度とは、ポイントデータの分布図を面の密度図へと変換する手法であり、言語地図でもこの図を作成し解析を試みる。

老年層図においては、兵庫県淡路島、香川県小豆島に集中して分布していることがわかる。そして瀬戸内海西部には、「ナー」の分布はないことが窺える。

続いて、少年層図9・図10をみていく。老年層図と同じ様に瀬戸内海東部で、「ナー」が盛んに分布していることがわかる。

カーネル密度図（図11・図12）では、老年層と同じく兵庫県淡路島と香川県小豆島に集中して分布し、広島県から愛媛県までの島なみ街道での分布が減少していることわかる。つまり、LAS時においては「ナー」の分布は、近畿系の分布をみせていて、内海域では東部中心に分布していたことがわかる。

続いて、峪口調査の地図^{注2}（図13・図14）をみると、「ナー」が広域に分布し、主に島嶼部以外の、内陸部に広がりをもって分布していることがわかる。四国での使用も広がっている。

さらに、カーネル密度図（図15・図16）をみても、内陸部に使用がひろがり、

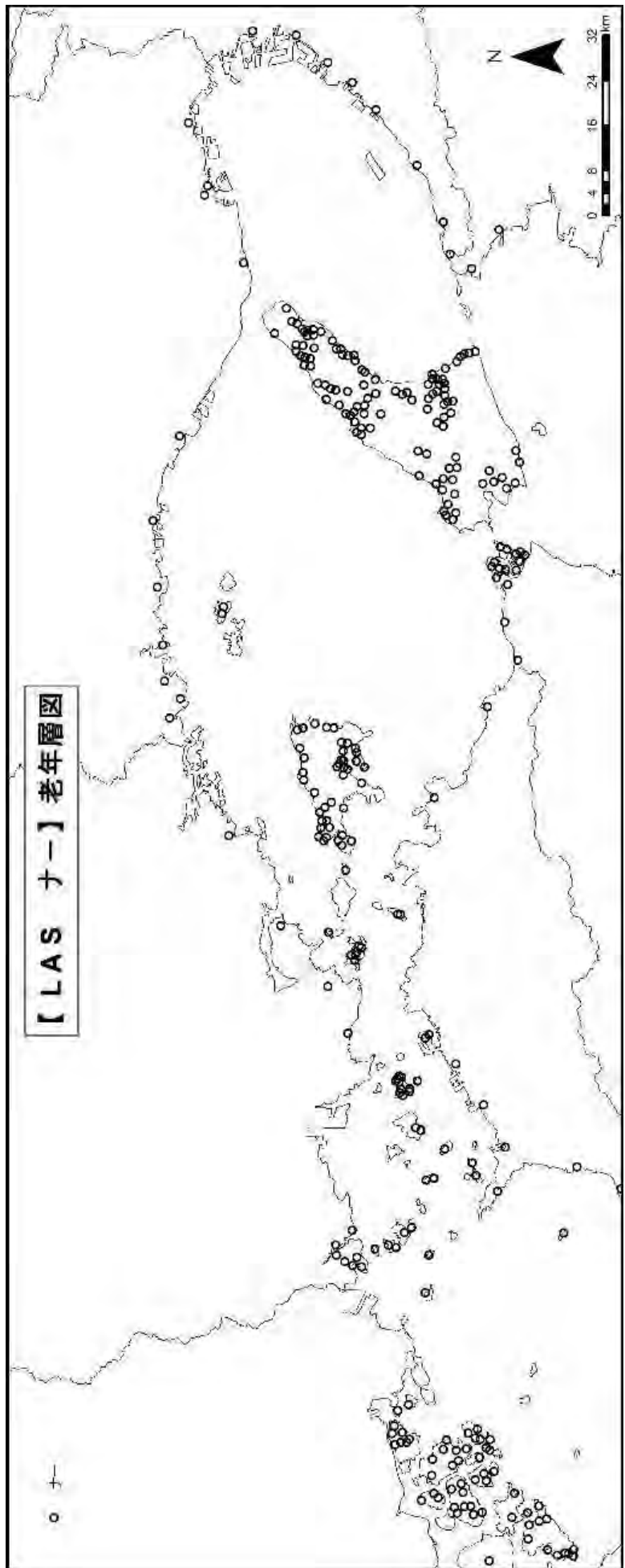


図5 LAS第96図から作図（瀬戸内海東部）

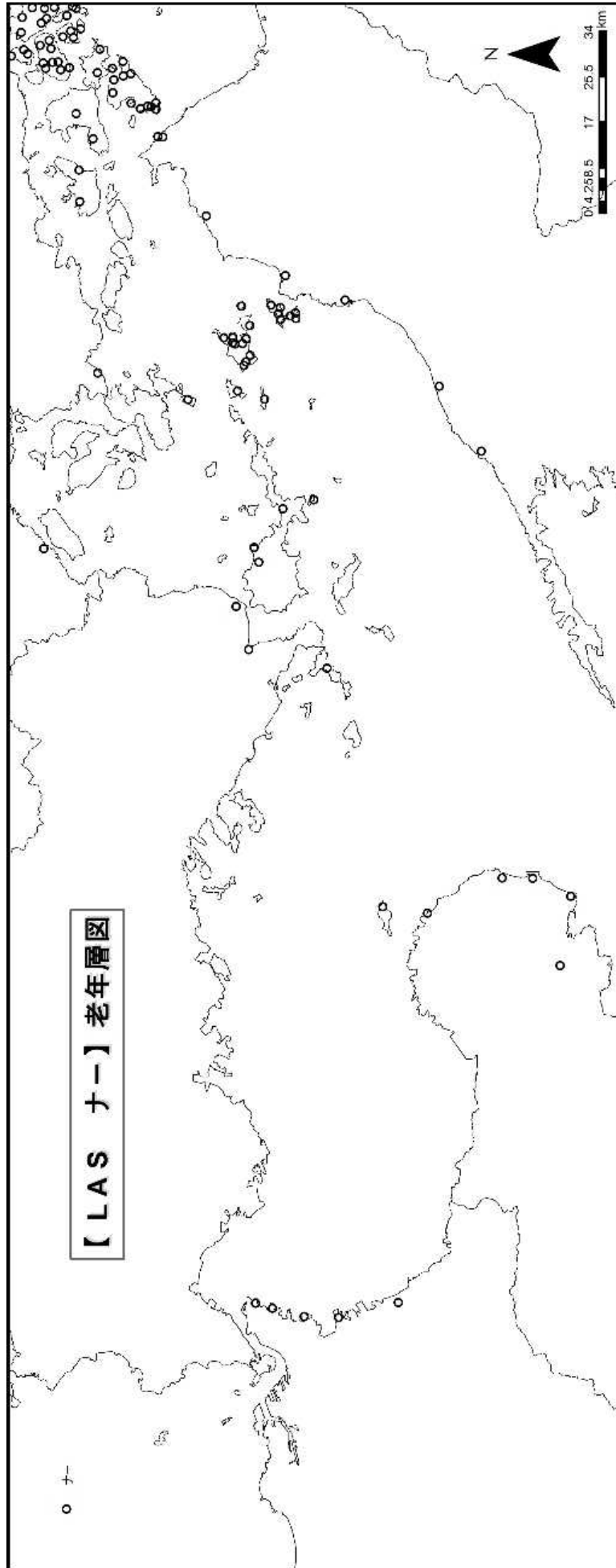


図6 LAS第96図から作図（瀬戸内海西部）

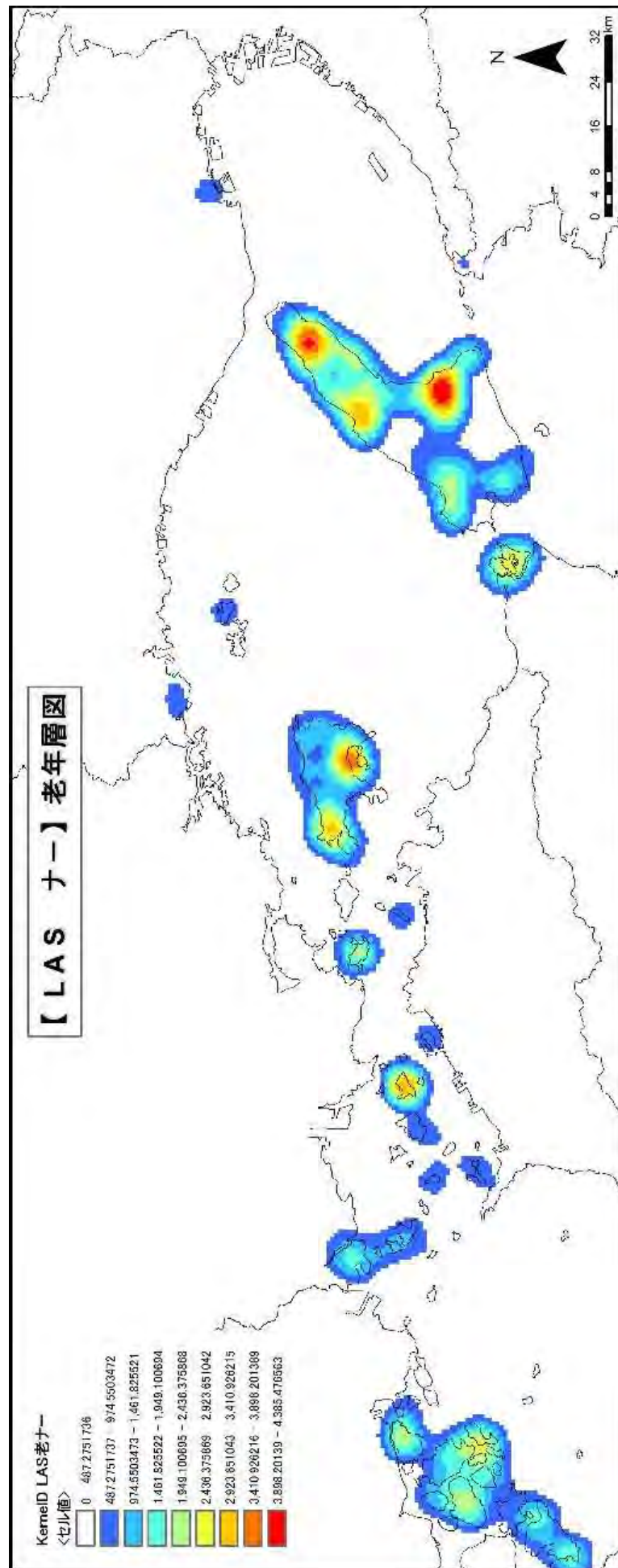


図7 カーネル密度図(1)

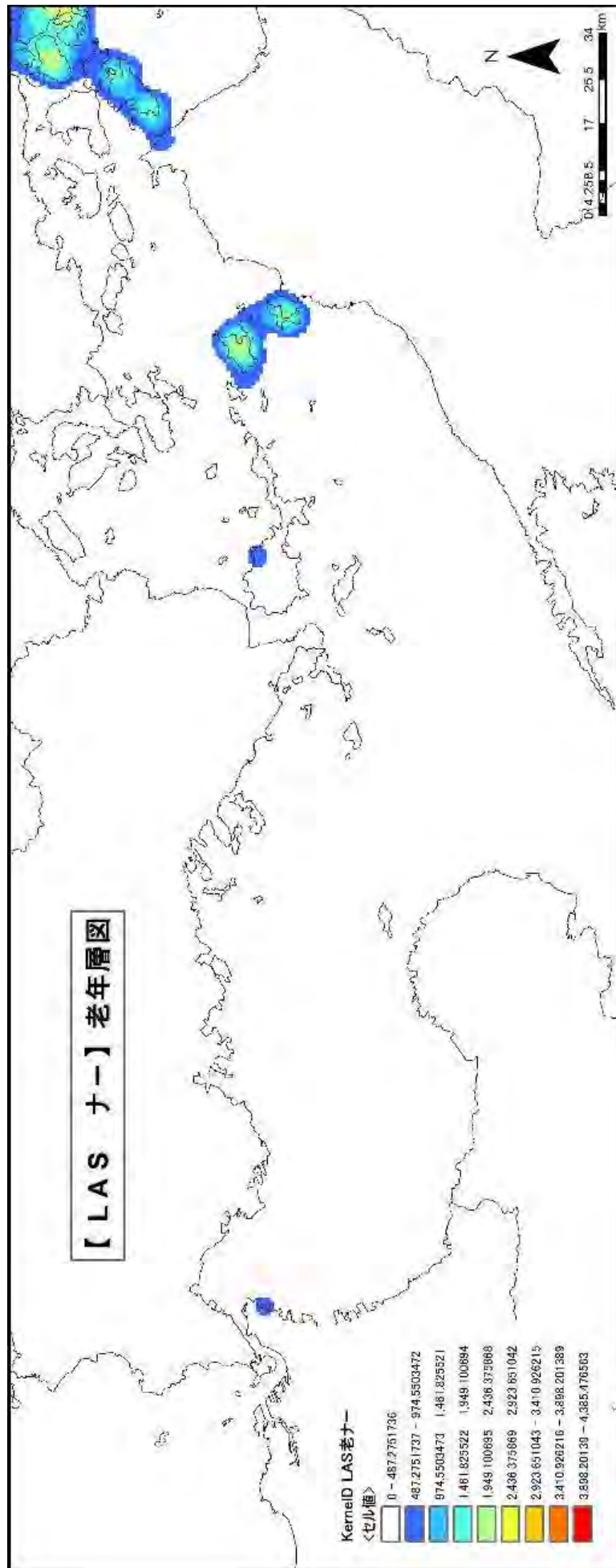


図8 カーネル密度図(2)



図9 LAS第96'図から作図(瀬戸内海東部)

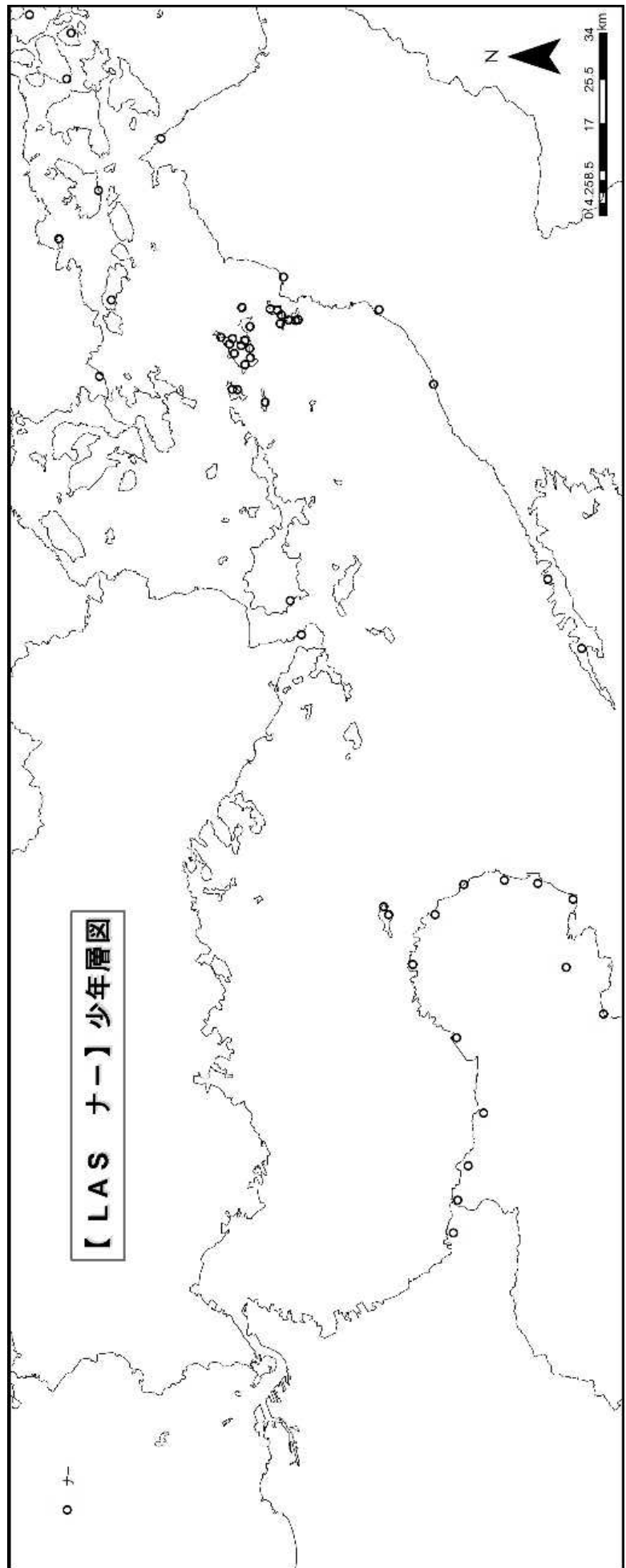


図 10 LAS 第 96' 図から作図 (瀬戸内海西部)

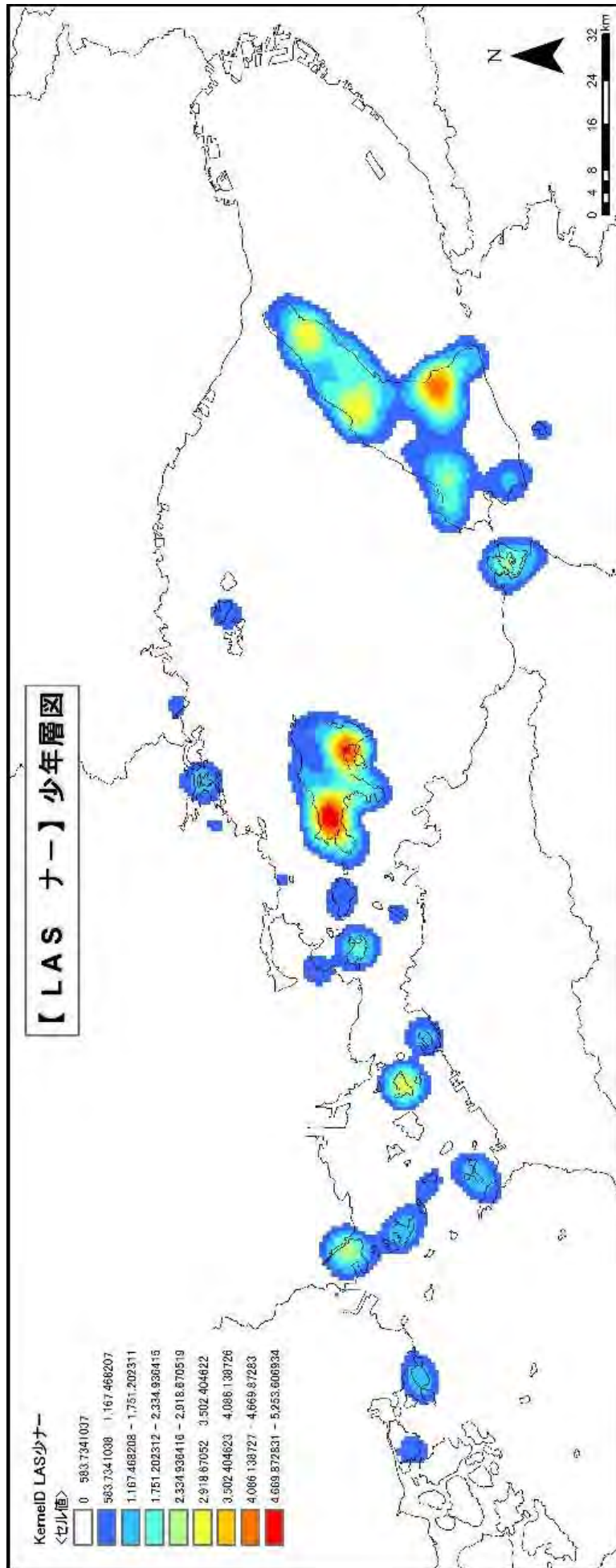


図11 カーネル密度図(3)



図 12 カーネル密度図 (4)

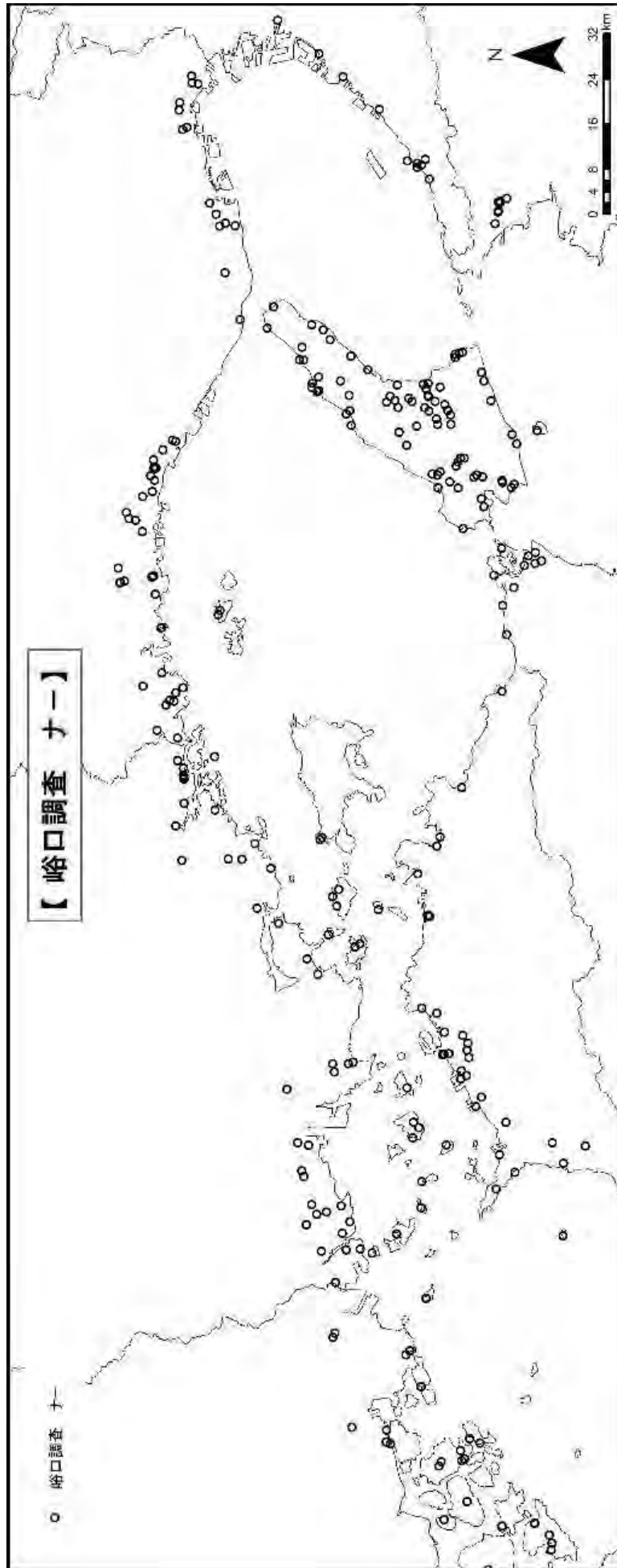


図 13 峪口調査（瀬戸内海東部）

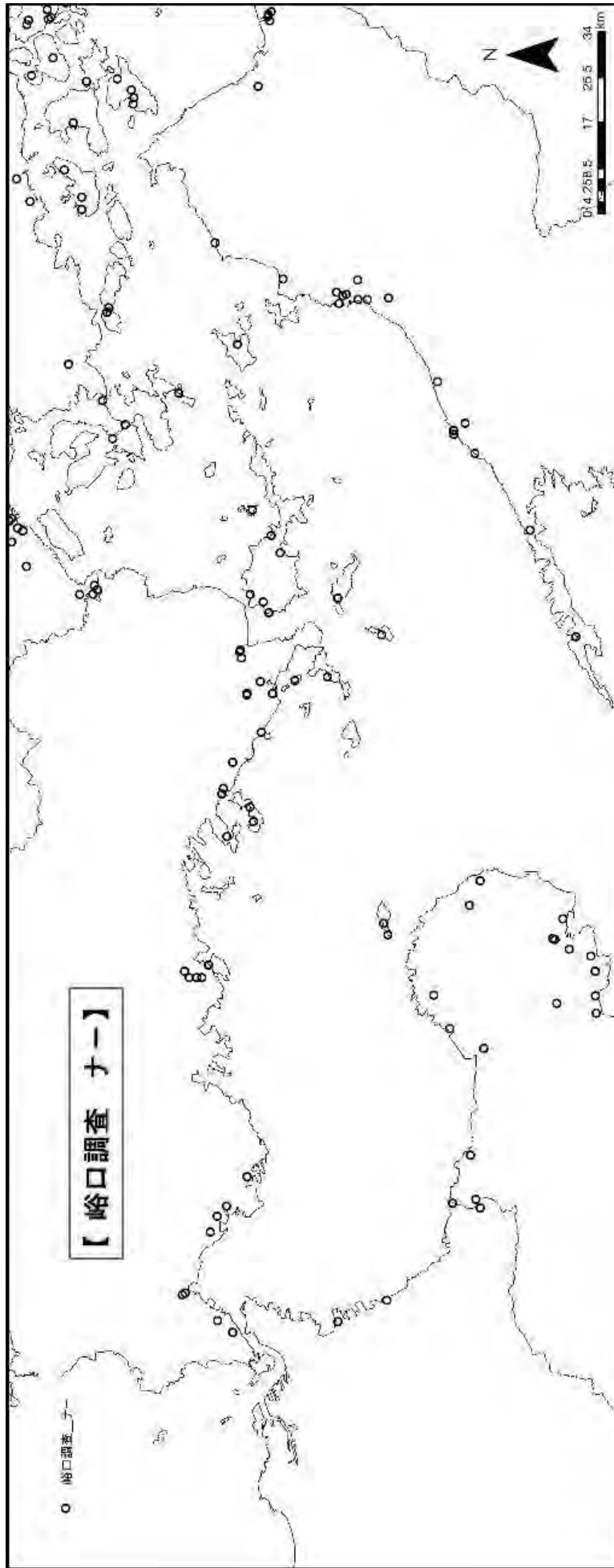


図 14 峪口調査（瀬戸内海西部）

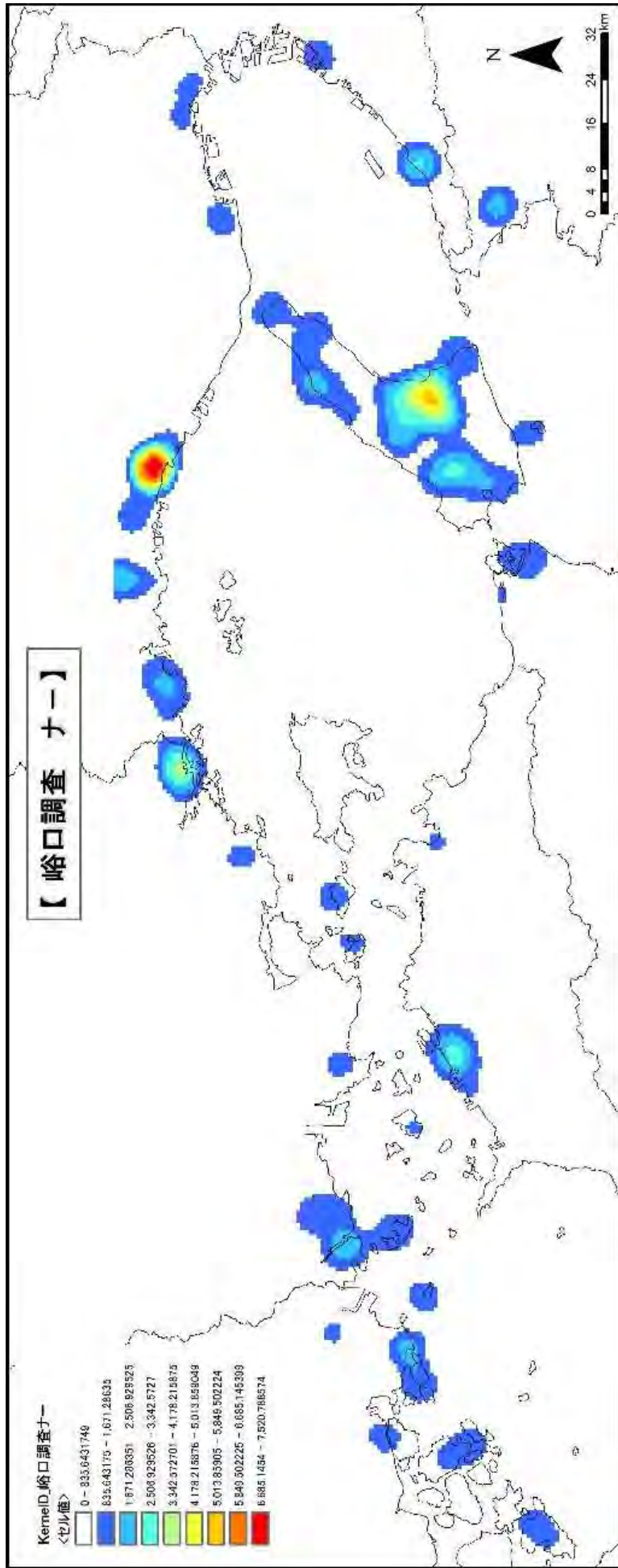


図 15 カーネル密度図 (5)

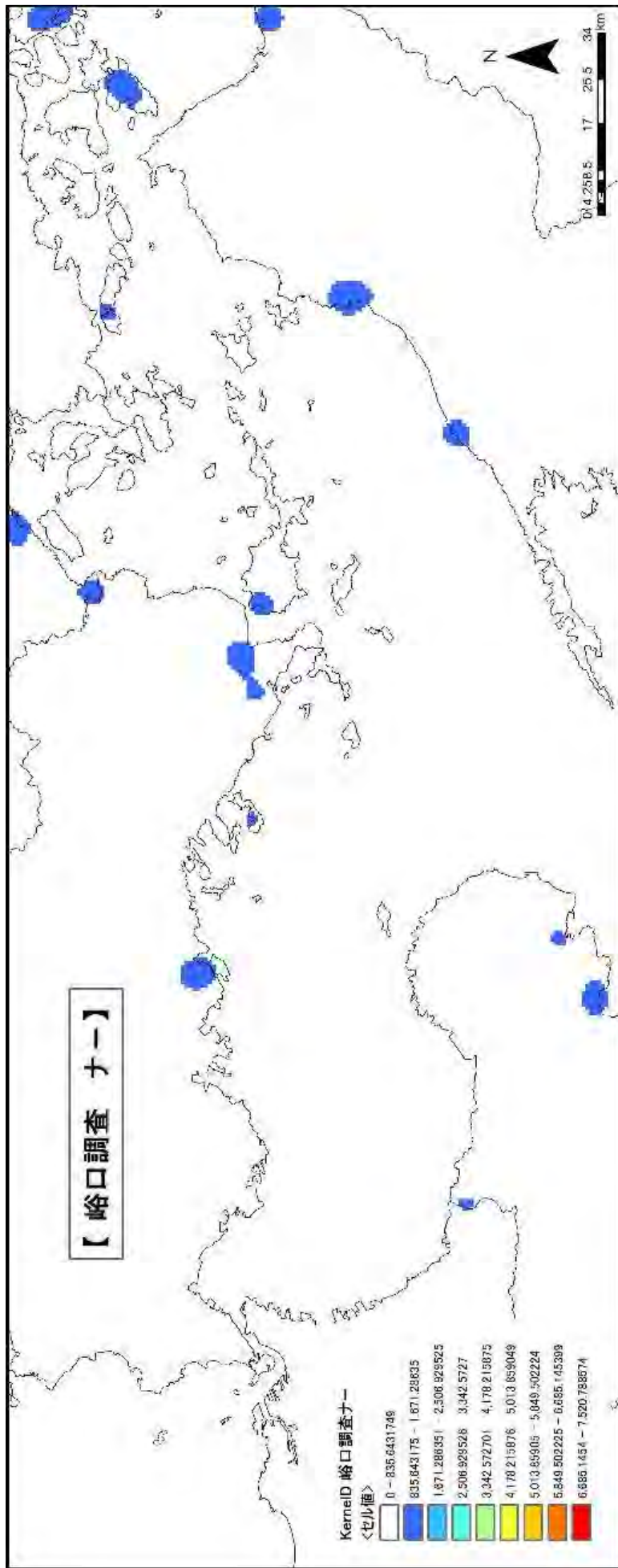


図 16 カーネル密度図 (6)

兵庫県に使用が多いことがわかる。

「ナー」の分布をまとめてみると、瀬戸内海東部では LAS 老年層、少年層、峪口調査と似たような分布をみせ、広く使用が認められる。一方、峪口調査では、瀬戸内海西部まで「ナー」の分布が伸びていっているようである。つまり、「ナー」が西進している様子が窺えるのではないだろうか。

5. 文末詞「ノー」のカーネル密度による方言分布

次に「ノー」についてみていく。図 17・図 18・図 21・図 22 は、LAS 第 96 図「ナー・ノー・ネー・ニー」から「ノー」の分布を取り出し、言語地図化したものである。

まず老年層図（図 17・図 18）からみていく。「ノー」については瀬戸内海全域に使用の確認ができるが、LAS「ナー」の老年層図（図 5・図 6）と比べて、兵庫県淡路島、香川県小豆島に分布が少ない。近畿沿岸には、「ノー」がほとんどない。つまり LAS 時において、「ノー」の分布は、その中心が瀬戸内海中部、西部にあったということになるだろうか。さらに、カーネル密度図（図 19・図 20）をみると、広島県島嶼部から山口県周防大島域にかけて「ノー」の分布が多いことがわかる。また「ノー」は、瀬戸内海西部まで使用されていることが一目瞭然である。

続いて、少年層図（図 21・図 22）をみていく。瀬戸内海東部では、若干使用数が減るものの、老年層図と似たような分布をみせている。さらに老年層と同じく近畿沿岸では「ノー」の使用は確認できない。一方、瀬戸内海西部では、広島県島嶼部では分布が濃厚であるが、山口県島嶼部以西では分布が弱くなっている。

カーネル密度図（図 23・図 24）をみると、「ノー」の分布が老年層図より減少していることがわかる。つまり見かけ時間上の変化で、「ノー」が顕著に残っているのは、瀬戸内海中部の中国側だといえる。

さらに、峪口調査の「ノー」の結果（図 25・図 26）をみていく。瀬戸内海東部、西部ともに広く使用されていることがわかる。6-2でも述べた、「ナー」が西進していく中でも、「ノー」は内海全域で顕在だということが窺える。

カーネル密度図（図 27・図 28）をみると、兵庫県に最も使用が集中していた。また LAS 少年層図（図 24）のカーネル密度と比較をすると、峪口調査のほうが「ノー」の分布が西へとひろがっていた。ここで考えられるのは、LAS 時の老年層で「ノー」は、特に瀬戸内海中部、東部で盛んだったが、少年層の分布が弱くなっていた。ところが、峪口調査の「ノー」は未だに瀬戸内海全体で、顕在であることが判明した。



図 17 LAS 第 96 図から作図（瀬戸内海東部）

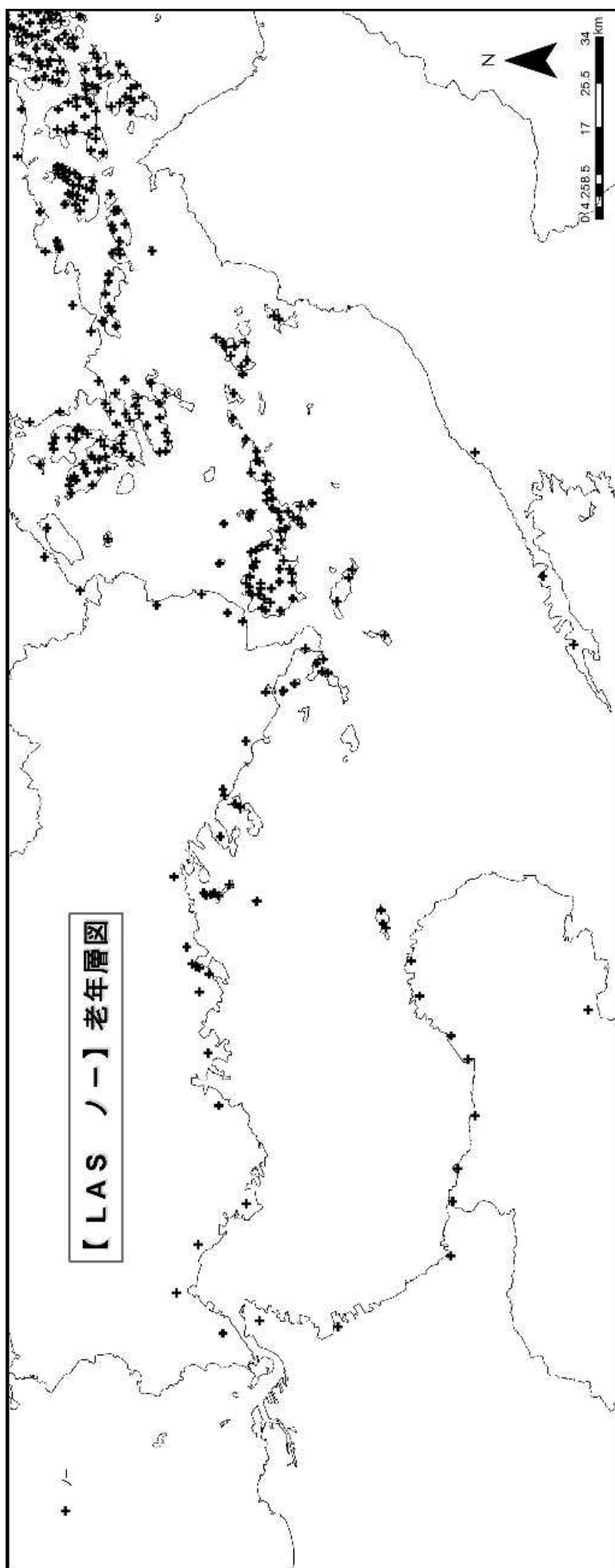


図 18 LAS 第 96 図から作図（瀬戸内海西部）

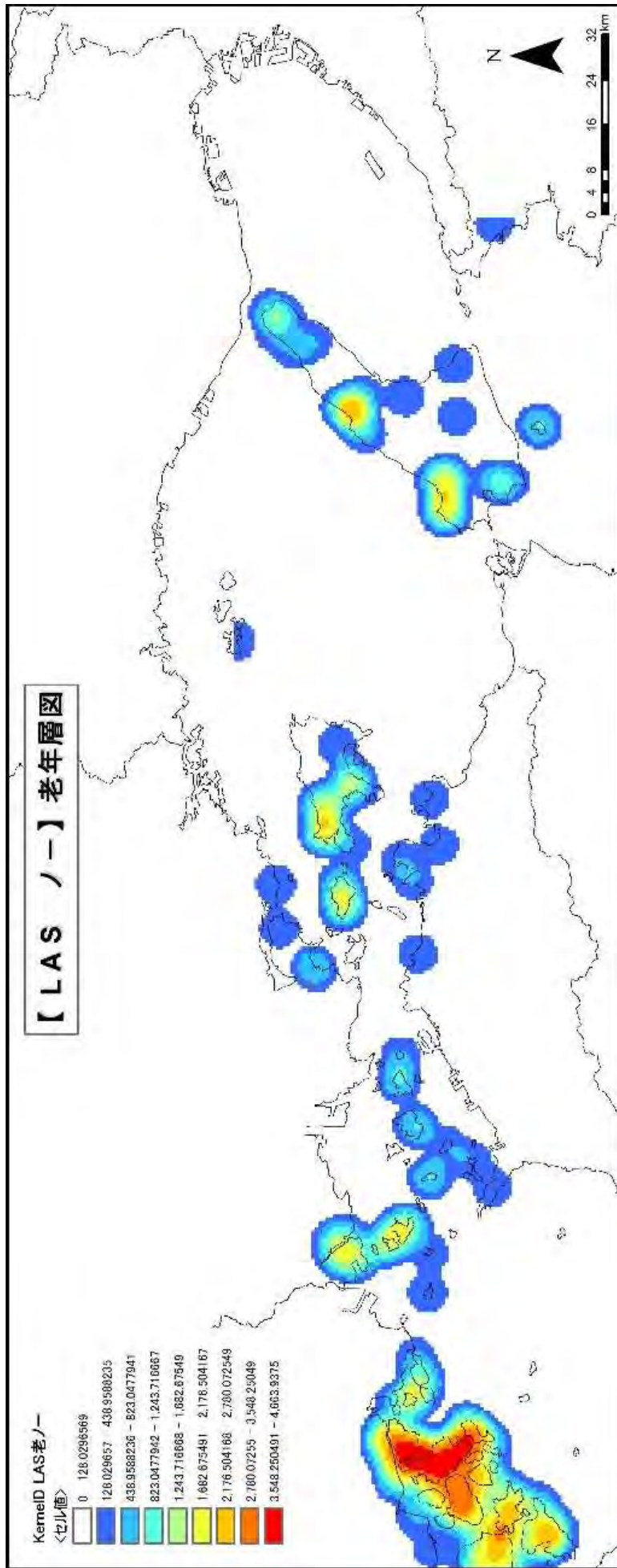


図19 カーネル密度図（7）

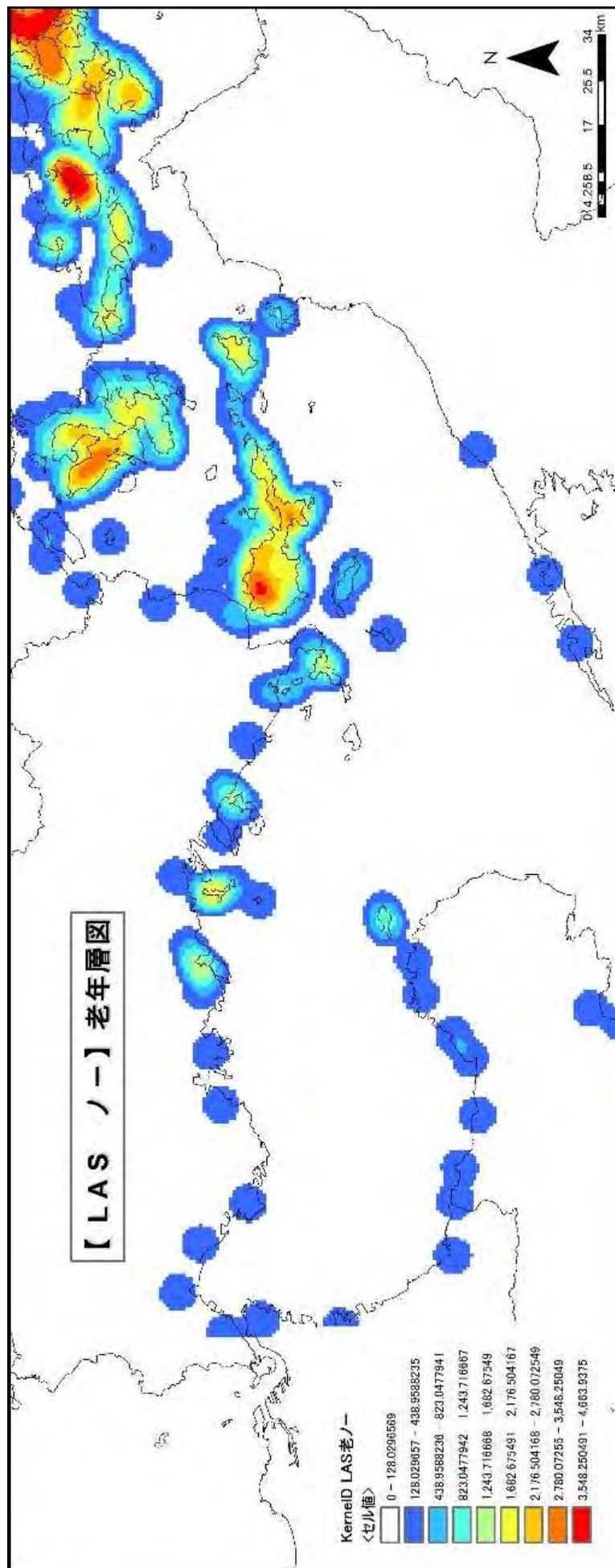


図 20 カーネル密度図 (8)

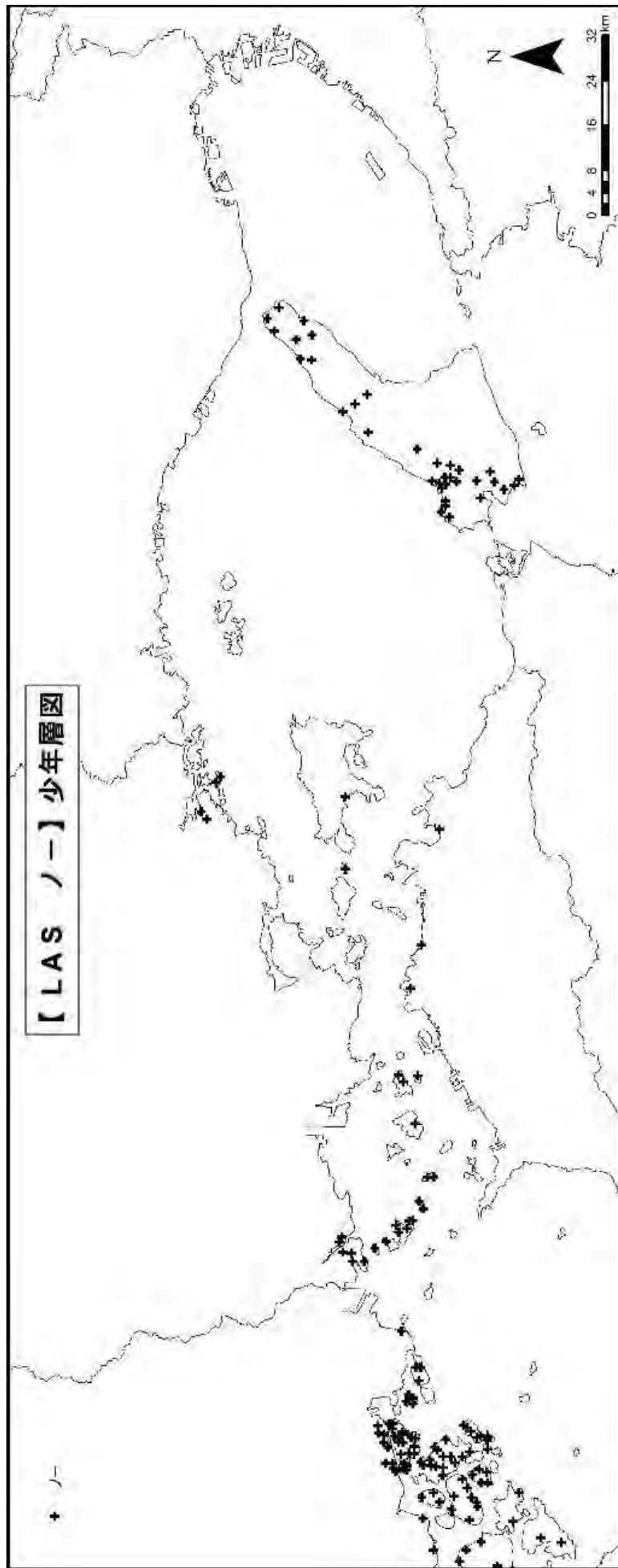


図 21 LAS 第 96' 図から作図 (瀬戸内海東部)

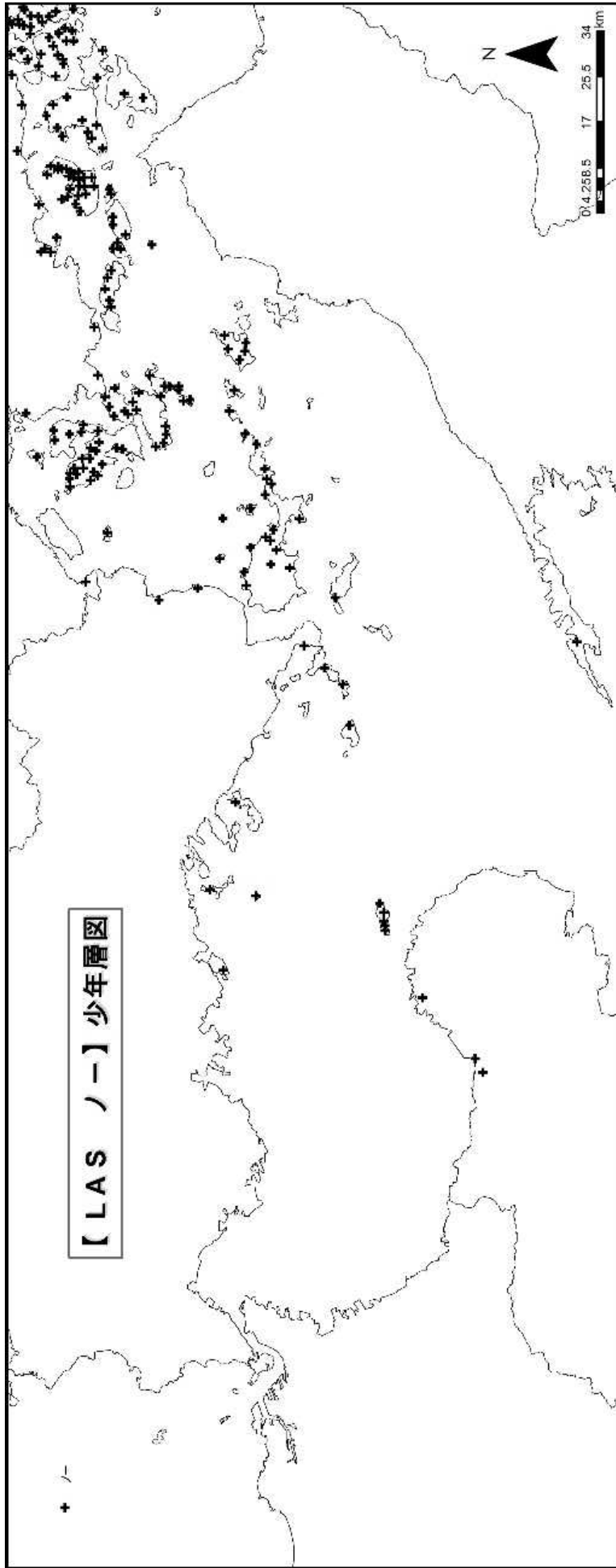


図 22 LAS 第 96' 図から作図 (瀬戸内海西部)



図 23 カーネル密度図 (9)

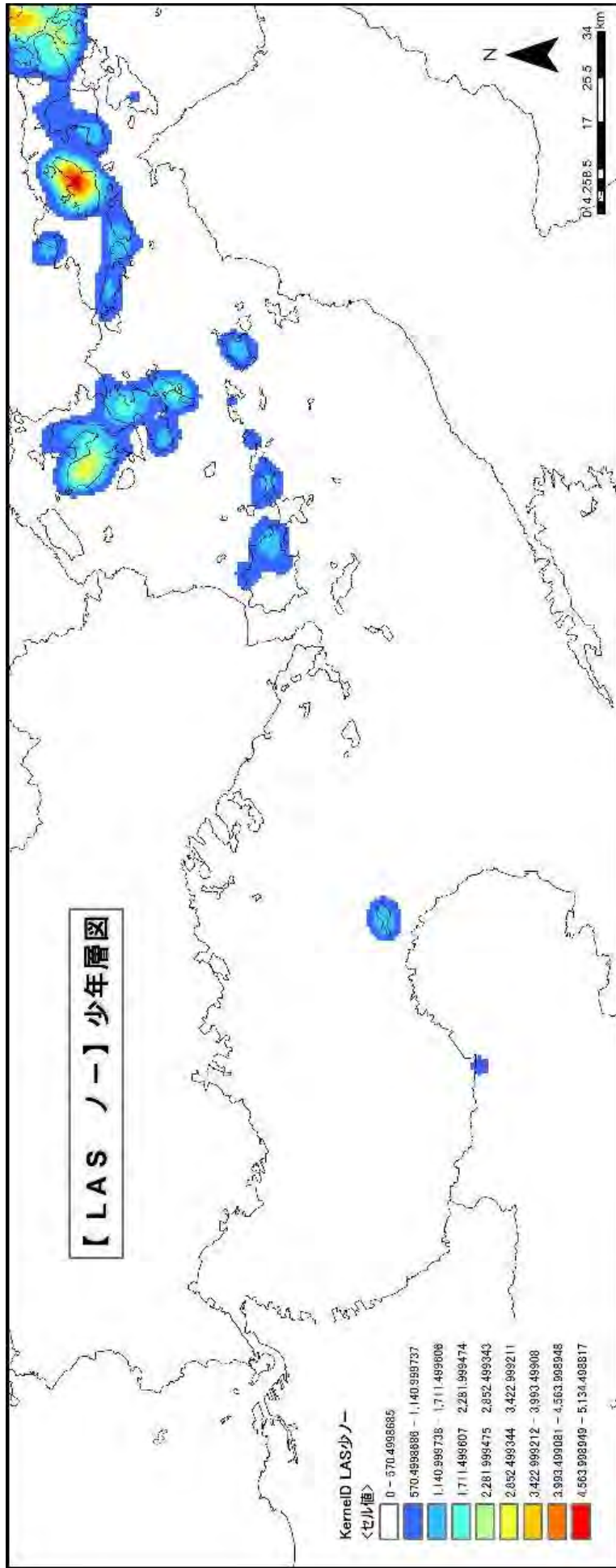


図 24 カーネル密度図 (10)

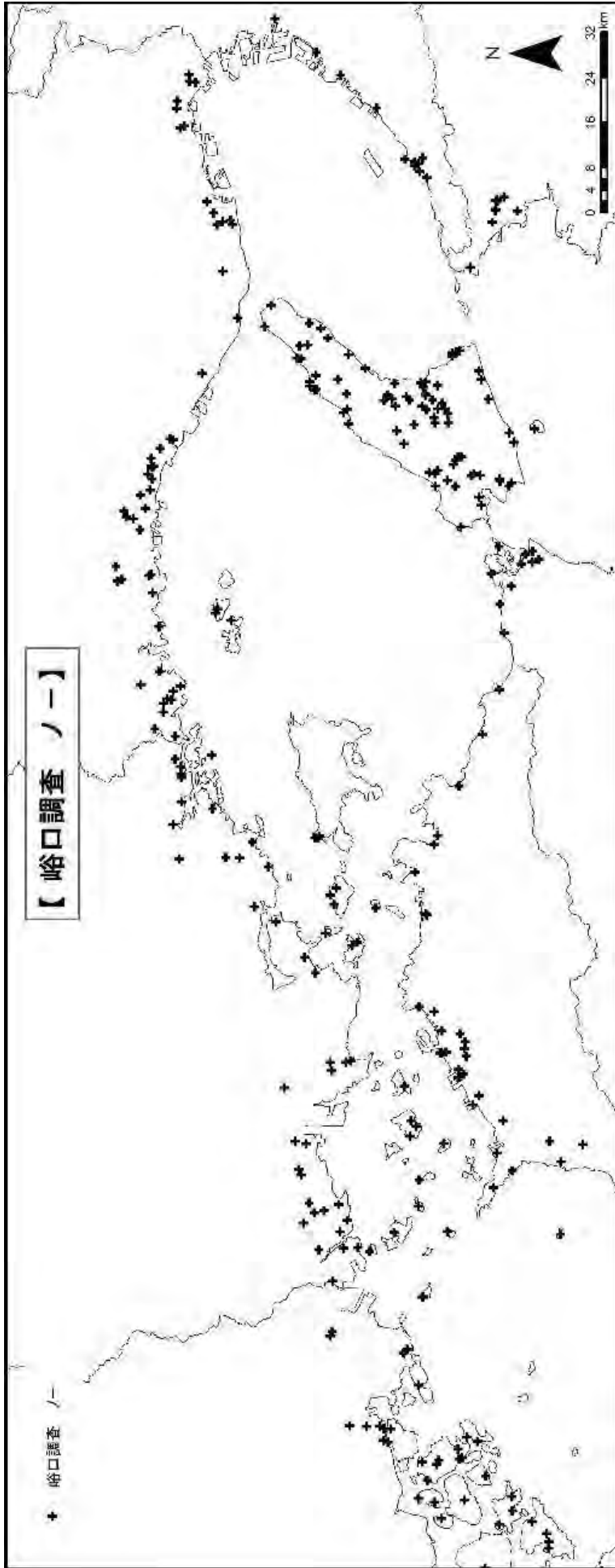


図 25 嶮口調査（瀬戸内海東部）

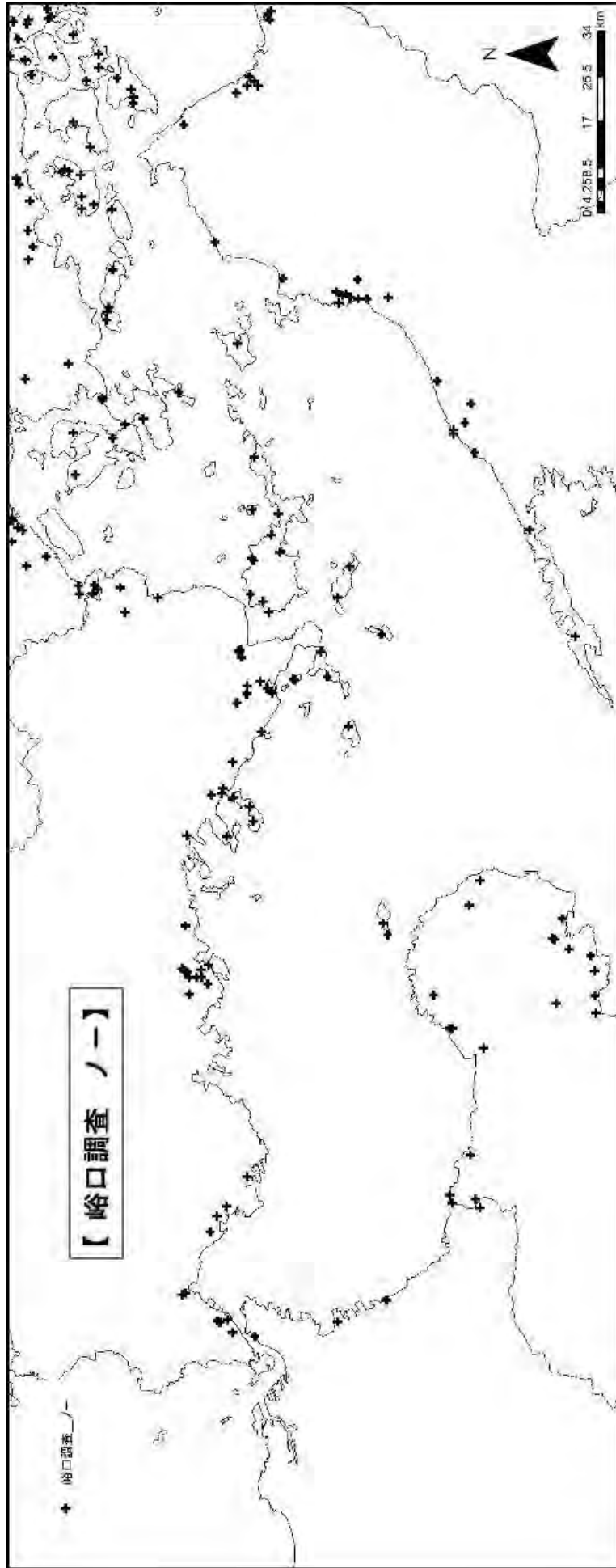


図 26 嶮口調査（瀬戸内海西部）

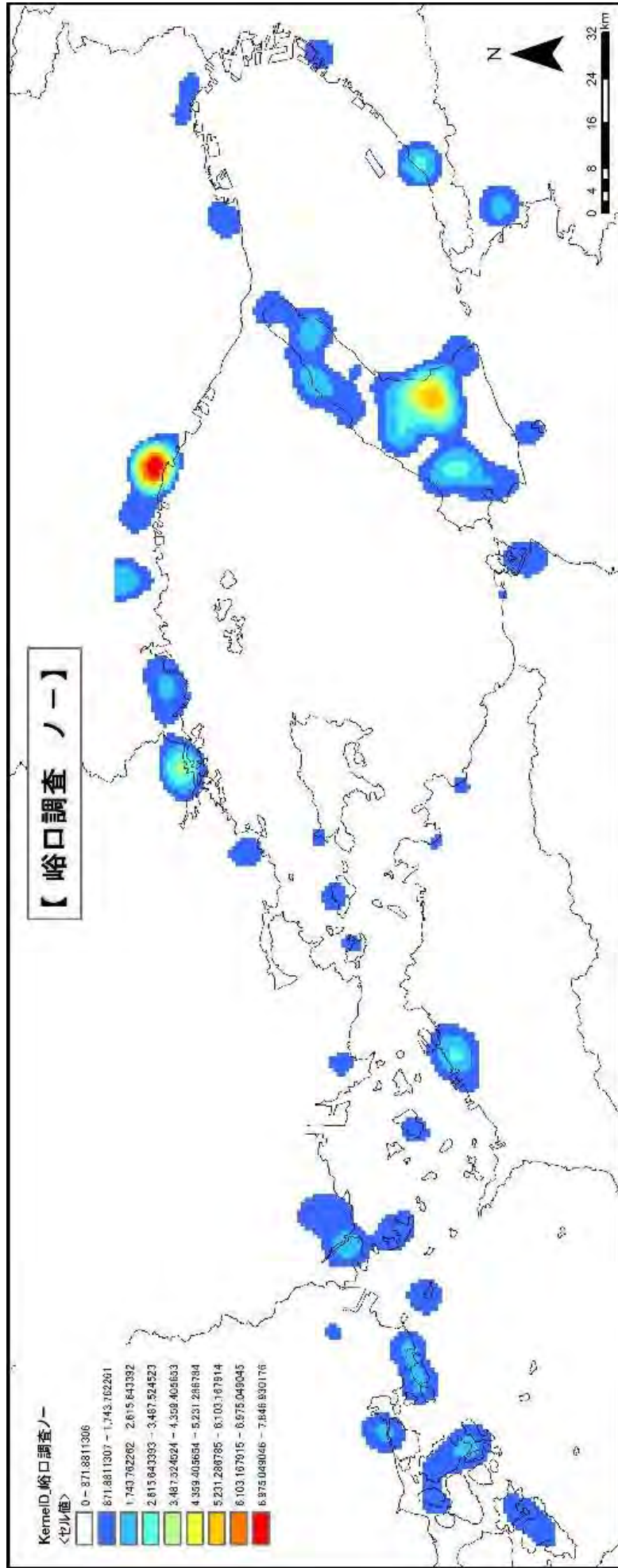


図 27 カーネル密度図 (11)

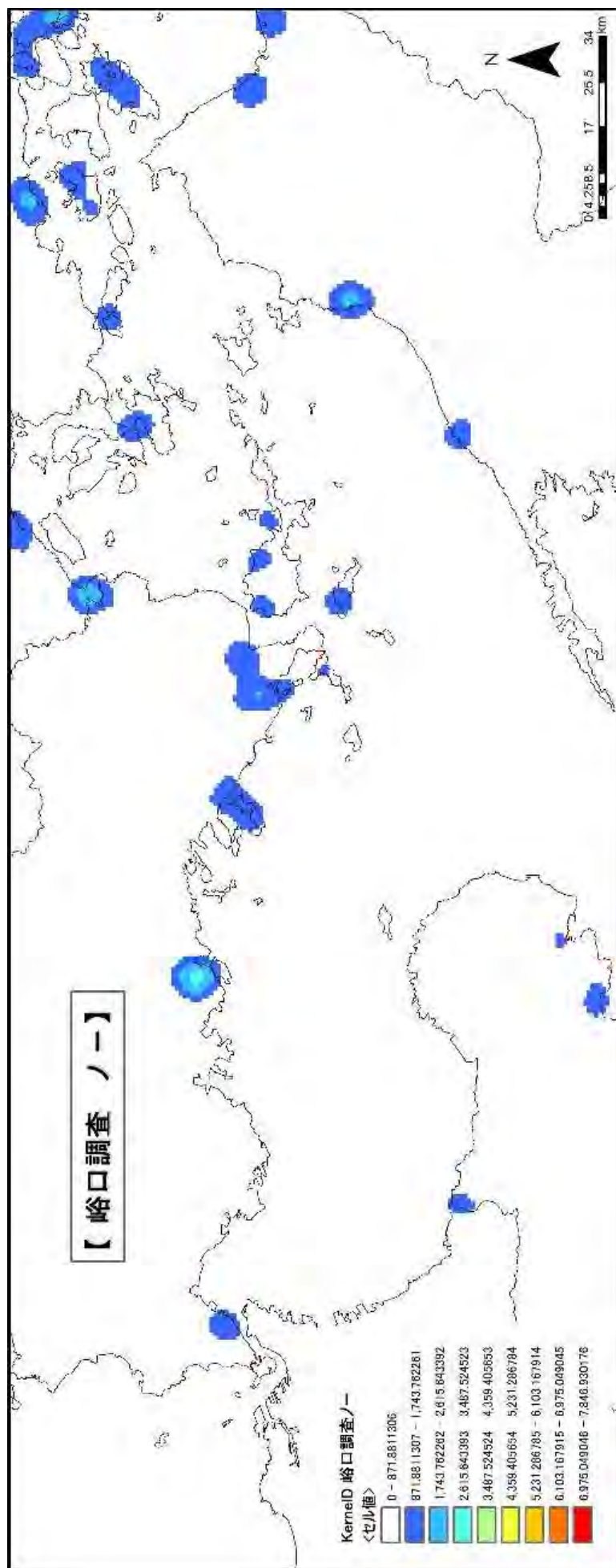


图 28 カーネル密度図 (12)

つまり、見かけ時間の変化だけでは、見いだせなかったことが、追跡調査をすることで明らかになったといえるだろう。

6. 本章の結論

本章では、GIS を利用し言語地図を作成し、LAS の経年変化について、追跡調査の結果を併せて示し地理的分布からみた特徴を整理した。また、空間統計のカーネル密度を算出し、語形間の密度を地理的にみてきた。

文末詞「ナー」は、時間が経過することで、西に進んでいることが明らかとなった。文末詞「ノー」は、LAS 時の老年層で、特に瀬戸内海中部、東部と盛んだったが、少年層の分布が弱くなっていた。ところが、峪口調査の「ノー」は未だに瀬戸内海全体で、顕在であることが判明した。「ナー」「ノー」は、男女差があるものの、瀬戸内海域で根強く使われている、文末詞ということが明らかとなった。

今後は、今回扱っていない文末詞の考察を進め、言語変化の変容プロセスを解明し、言語変容地域における共通語の普及過程や人口移動量の差異との関係なども明らかにしていきたい。

【注】

- 注1 カーネル密度とは、GIS のジオプロセッシングツールの一つのこと、対象フィーチャの近傍におけるフィーチャの密度を計算し表示し視覚化することである。
- 注2 峪口調査の地点は、LAS と比べ広域に調査地点があることから、LAS と同じ調査範囲内のポリゴンデータを作成し、その範囲内のポイントデータを空間検索し取り出し作図を試みている。（空間検索とは、GIS の地図画面上で情報を抽出する方法である）

第7章 標準偏差楕円・メッシュ地図による言語分析

－接続助詞「から」を事例として－

1. 本章の目的

本章では、方言分布の「実時間」上の変化に焦点をあてながら言語変化の動向の一端を探ることとする。

藤原(1999)は、瀬戸内海域を、人間の居住する125島を擁する一言語内「多島海域」とし、かつての舟運などの生業をはじめ、発達した瀬戸内海の海路が、瀬戸内海方言に多大なる影響を与えてきたと述べている。多島海域である瀬戸内海は、近畿・中国・四国・九州といった西日本の諸地方に取り囲まれており、言語接触、言語変化という視点から西日本方言における言語動態を把握する上で恰好のフィールドであるといえよう。

さらに藤原(1999)は、瀬戸内海域の諸方言にも、各地域での方言には独特の特色があり、また、それぞれの方言は時間軸に沿って言語変化が起きており、これらの要因にはさまざまな理由が考えられることを指摘している。

以下では、方言事象としてバリエーションが多い、原因・理由を表す順接の接続助詞「から」に相当する方言を取り上げ、考察する。

2. 調査・地図化の方法と本論の対象

本章で比較・考察の対象とするのは、藤原(1990)、LAS(1974)、峪口調査(2011-2015)、徳島大学における小豆島における調査(岸江・峪口編2015)、である。

藤原(1990)は、中国・四国・西近畿を調査対象地域とした若年層(15歳から18歳の助成)の言語地図である。1933年から二年間かけて実施した、総計833地点での通信調査の結果をまとめたものである。つまり約80年前の若年層を対象とした調査である。

LASは、第2章・4章で紹介した調査概要に準ずる。

峪口調査は、LAS追跡調査を行うため、瀬戸内海島嶼および沿岸における全域調査を2011年から約4年間にわたって実施した。なお本章では、4. 1. 1. では1,300人のデータ、5. では1,512人のデータを用いて言語地図化を行っている。

徳島大学における小豆島における調査(岸江・峪口編2015)は、2011-2015年度文部科学省科学研究費基盤研究(A)「方言分布変化の詳細解明—変動実態の

把握と理論の検証・構築―」（代表：大西拓一郎（国立国語研究所教授））の一環として実施された香川県小豆島調査のことである。徳島大学日本語学研究室のゼミ生が中心となり、すべての地点で面接調査を行った。第一次調査は 2012 年 3 月 24 日～同年 3 月 27 日、第二次調査は 2013 年 6 月 29 日～同年 7 月 1 日、第三次調査は 2014 年 9 月 14 日に実施した。総調査地点は、94 地点である。調査項目は、計 112 項目からなり、挨拶・文法・語彙・アクセント・民俗に関する項目が含まれている。以上の調査結果を随時比較し考察していくことにする。

3. 先行研究

原因・理由を表す接続助詞「から」の全国分布をアツカッタものに『方言文法全国地図』（以下 GAJ と略す）第 1 集・第 35 図「雨が降っているから」がある。

全国共通語形のカラを使用する地域は、北海道のほか、岩手・宮城・福島など東北地方の太平洋側および関東地方である。東北地方の日本海側や中部地方および西日本の各地方ではカラの分布はさほど目立たず、カラ以外の形式が使用される地域が目立つ。九州地方には宮崎県にカリ、宮崎県・鹿児島県にカイ、鹿児島県奄美地方の喜界島にカラニ、加計呂麻島にカランなどカラ系とみられる諸形式の分布が認められる。

青森県から秋田県、山形県、さらに新潟県にかけての日本海側では、さまざまな形式が入り組んで分布しているが、特に注目されるのは東日本の日本海側から近畿地方にかけて、サカイ系の諸種の形式が分布している点である。東日本におけるサカイ類の諸形式は以下の通りである。

青森県 シケァ、シカイ、シケー、スケァ、スカイ、ステ（シテ）
岩手県 サカエ（ニ）、シケー（ニ）、シケァ、スケー
山形県 サゲ（サケ）、サゲテ（サケテ）、ハゲ（ハケ）、ハゲァ、
ハゲテ（ハケテ）
秋田県 ハゲ、バゲエ、ハゲァ

北陸から関西にかけてはサカイ（ニ）、サケなどのほか、ハカイ・ハケ・サカの形式もみられる。大阪府及び奈良県のあたりにはサカイ（ニ）がまとまって分布しており、ヨッテ（ニ）が入り混じった状況を呈している。中部地方に目を転じると、デが広く分布圏を形成している。このデは関西のサカイ（ニ）、サケを挟んで、京都府や兵庫県北部のほか、南九州の鹿児島県に分布している。中四国以西から九州中部に至る地域はほぼケー、ケ、ケニ、ケン、ケンガ、キー、キ、キニ、

キンなどといった形式が広がっている。鹿児島県を中心とする南九州地方ではデが注目されよう。奄美地方から南西諸島の諸方言では、バ、クトゥ、ク、トゥなどの諸形式が分布する。

ところで淡路島では、北部ではサカイ（ニ）、南部ではヨッテ（ニ）が分布していることがわかる。一方、共通語形と同形のカラは淡路北部と近畿地方にも広く分布している。

ちなみにカラとヨッテ（ニ）に関して『皇都午睡』^{註1}に「江戸の人がさうしてから、かうしてからと云を聞ては、京撰者は口まねをして笑ふが、こつちの者に言はずと、よつてと云、さうしたよつて、かうしたよつてと云也、よつてとからとはどちらが古い詞ぢやと問はれると、からの方が古言也」と述べられており、ヨッテ（ニ）よりもカラの方が古いとしている。次にサカイ（ニ）とヨッテ（ニ）の関係についても触れてみることにしたい。

彦坂（2001）によると、サカイ（ニ）とヨッテ（ニ）に関して近畿地方では紀伊半島から瀬戸内海近くにあるサカイ（ニ）が先に生じ、そのあとヨッテ（ニ）が生じたと指摘している。この詳細については小林（1977）や金沢（1998）が指摘しているように近世に入ると圧倒的に多かったヨッテ（ニ）が次第に減り、それまで少なかったサカイ（ニ）が伸びて、ヨッテ（ニ）とサカイ（ニ）が拮抗状態になったとされる。

4. 瀬戸内海域における原因・理由を表す接続助詞「から」の方言分布

4. 1. 1. 瀬戸内海域における方言分布の概観

次に、LAS 第 31 図の老年層図をみていく。まず、広島、愛媛、香川、徳島にケンが分布し、岡山県備中島嶼、広島県備後島嶼、山口県下、九州北部にはケーがみられる。一方、近畿中央部では、大阪を中心にサカイ（ニ）が分布圏を形成しており、和歌山においては、サカとサケ（ニ）が対立をみせている。大阪府及び兵庫県のあたりにはヨッテ類が淡路島を中心にまとまって分布している。この状況は、先に見た GAJ「雨が降っているから、行くのはやめろ（第1集・第33図）」の場合の「から」の分布とほぼ同じ様相を呈しているといえよう。

さらに LAS では、ヤカイという形式が兵庫県家島にみられ、デが兵庫県下および徳島県鳴門市域にみられる。さらに瀬戸内海西部域に目をやると、大分県姫島付近にデー、九州豊後地域にはホデが分布している。また、中国地方では、岡山県東隅島嶼シヨイ、岡山県東隅沿岸と小豆島とにセニ、シニがみられる。少年層の分布状況においても、老年層図とほぼ同様の形式がみられ、両図には大きな差がない。

図1の峪口調査の結果では、LASの老少二層の分布とほぼ同様の結果となり、各地域での諸形式がいまだなお、健在であることが判明した。内海東部域におけるサカイ(ニ)(図3参照)やヨッテ(ニ)(図4参照)、四国および中国地方沿岸から九州北東部域にかけてケン・ケー・キ・キー等(図5参照)をはじめ、内海諸地域にみられる特色ある諸形式をほぼ追認した。

まず、サカイ(ニ)やヨッテ(ニ)は、大阪府や兵庫県など大阪湾沿岸地方を中心とする地域にまとまった分布がみられ、これらの分布領域自体には大きな差はみられないものの、兵庫県淡路島においてかつてヨッテ(ニ)が盛んだったが、今回の調査でサカイ(ニ)の勢力が拡大していることなどが明らかになった。

また、大阪府南部から和歌山県にかけてみられるサケ、サカには分布上の対立については先述のとおりだが、これらの形式と並行して、サカイ(ニ)の進行がこれらの地域にみられる。

LASで広範囲の分布域をもつケン・ケー等については、広島県中央部のケンを挟むような形で、それぞれ広島県東西部及び岡山県、山口県臨海部においてケーが広範囲に分布している。一方、ケンに関しては四国沿岸部及び愛媛県全域にみられる他、大分、広島、岡山、福岡県西部などで分布がみられた。この状況は、ほぼLASと同様であったが、内海域各地に散見されるケニ、キニ、キーなど多様な形式がケンやケーに収束していく傾向が認められた。また、比較的狭い範囲に限定された諸形式である、大分県のホデ、同様に兵庫県家島にみられたヤカイ、岡山県東隅島嶼にあったショイ、岡山県東部域や小豆島にみられたセニ(シニ)などが、峪口調査においては、分布域を退縮させ、衰退の一途を辿っていることが確認できた(図6参照)。

このセニとシニという形式について、柳田(1977)は、もともとは「サニ」という接続助詞から派生したものであり、室町時代に接続助詞的用法として確立したと述べている。藤原(1976)によると、セニやショイは、ゆえぶかい古語法の残形ではないかという。つまり、日本語史上、このセニやシニは峪口調査の凡例の中で最も古い形式であると考えられる。これらは、今後確実に姿を消す運命を辿ることになるだろう。

以上の結果から、大局的には、サカイ、ケン・ケー等、LAS調査で瀬戸内海域において広範囲に分布を形成していた諸形式は依然としてその分布領域を保持しているといえる。

一方、限られた地域にみられた、各地の特色ある形式は分布領域の退縮のみならず、各地での衰退化が激しい。このような背景には、LASの調査時の段階でみられた多様な形式が各地域で勢力のある形式(例えばケンなど)に飲み込まれる

という現象が各地で見られる。

LAS との比較において、もっとも注目しなければならないのは、その分布領域を拡大させた共通語形式と同形のカラである（図 2 参照）。カラはその勢力範囲を拡大させており、従来指摘されてきた、近畿中央部におけるサカイ（ニ）→カラと軌を一にする変化である。カラが共通語形と同形という点で、共通語化という点も当然考慮すべきであるが、瀬戸内海域にみられるカラの分布状況から京阪地方からの直接の影響を考慮すべきであろう。

カラは今後、内海東部域において、やがてサカイ（ニ）やヨッテ（ニ）の分布域を襲い、その分布領域を拡大させていくと考えられる。

なお、峪口調査では、カラの分布領域には、中国地方と四国地方とで極端な差がみられ、中国地方での分布が着実にその領域を拡大させているのに対し、四国地方各地では根づいていないことが判明した。

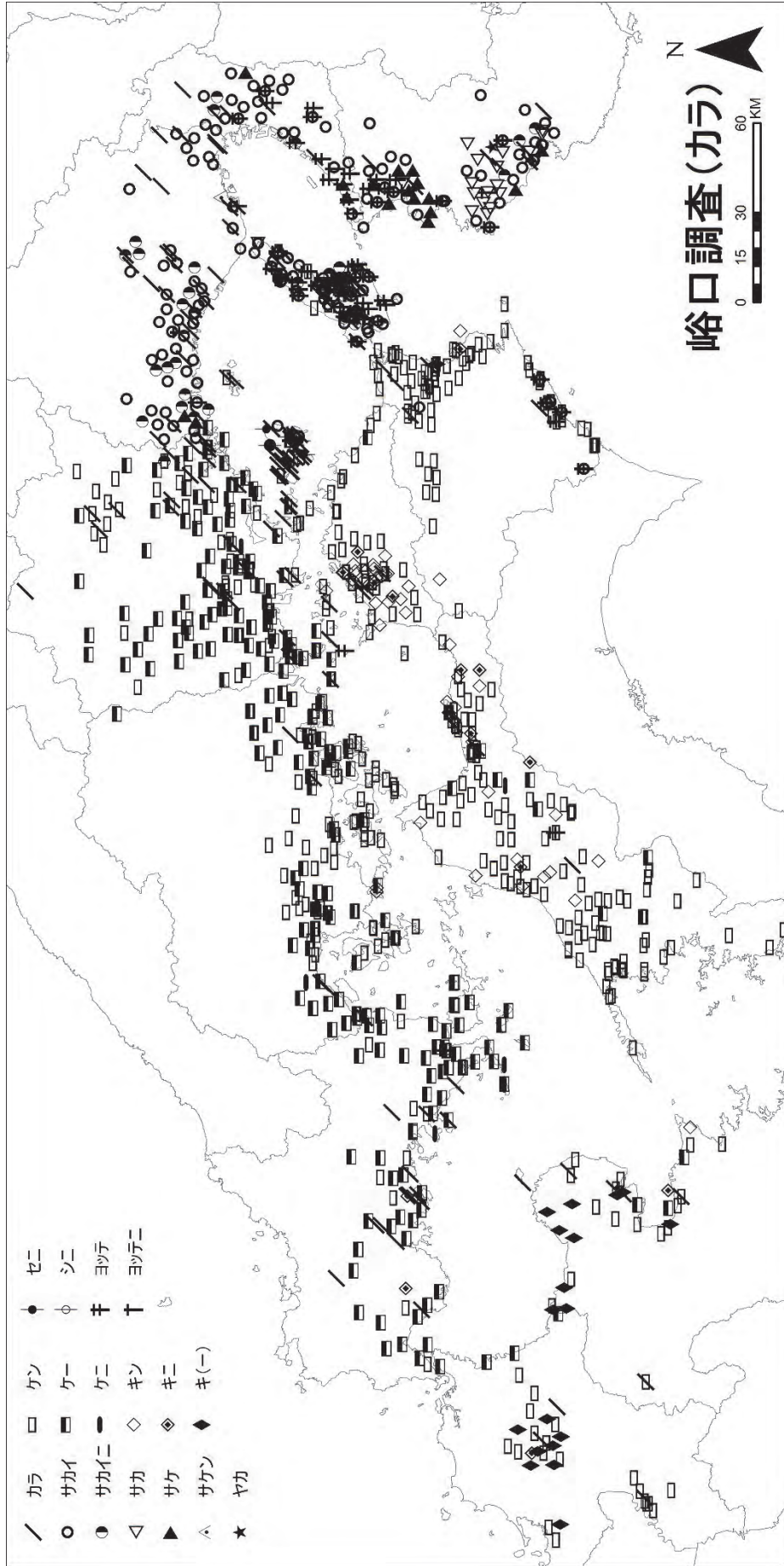


図1 峪口調査「から」

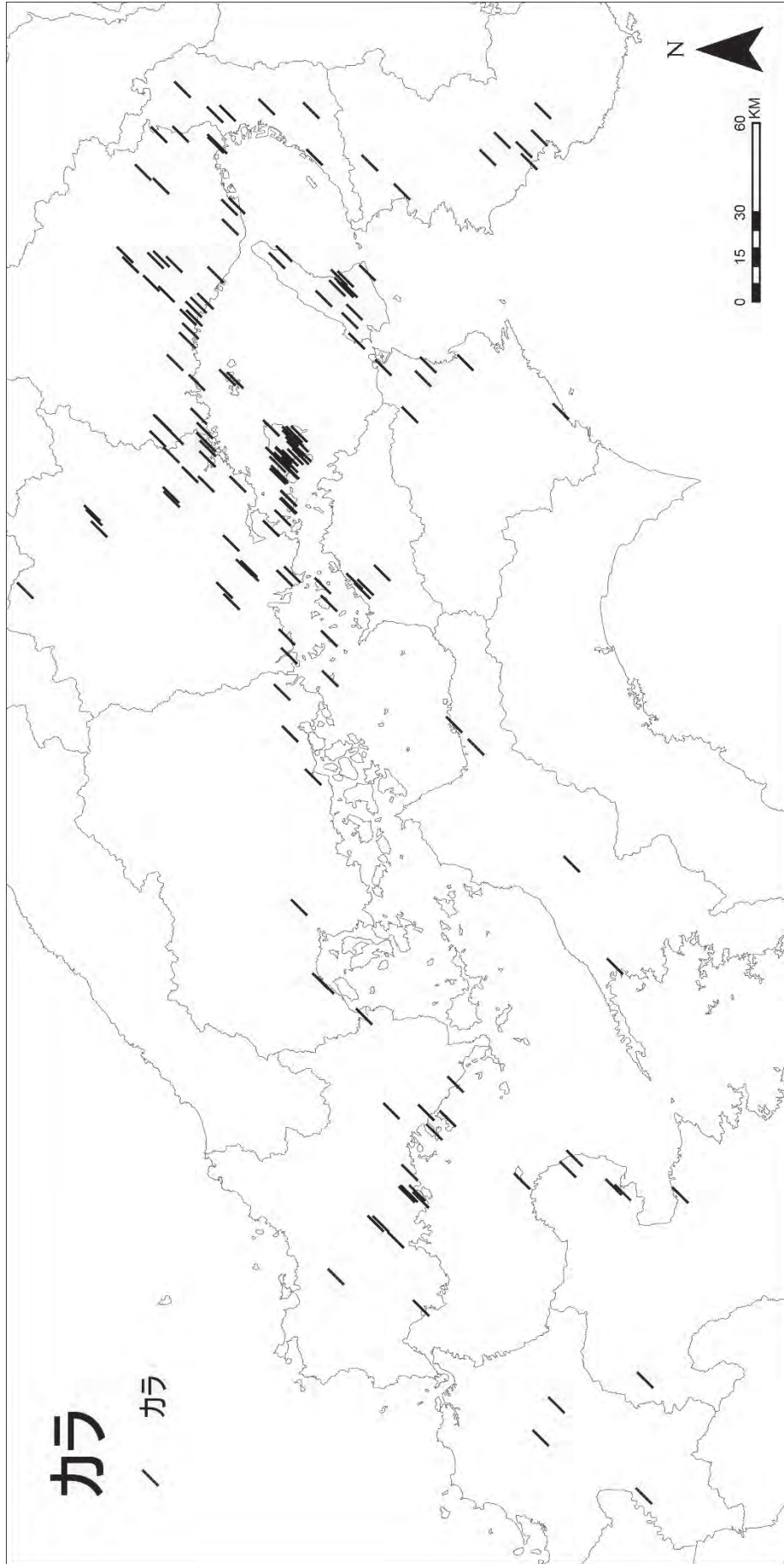


図2 嶺口調査「カラ」(概略図)

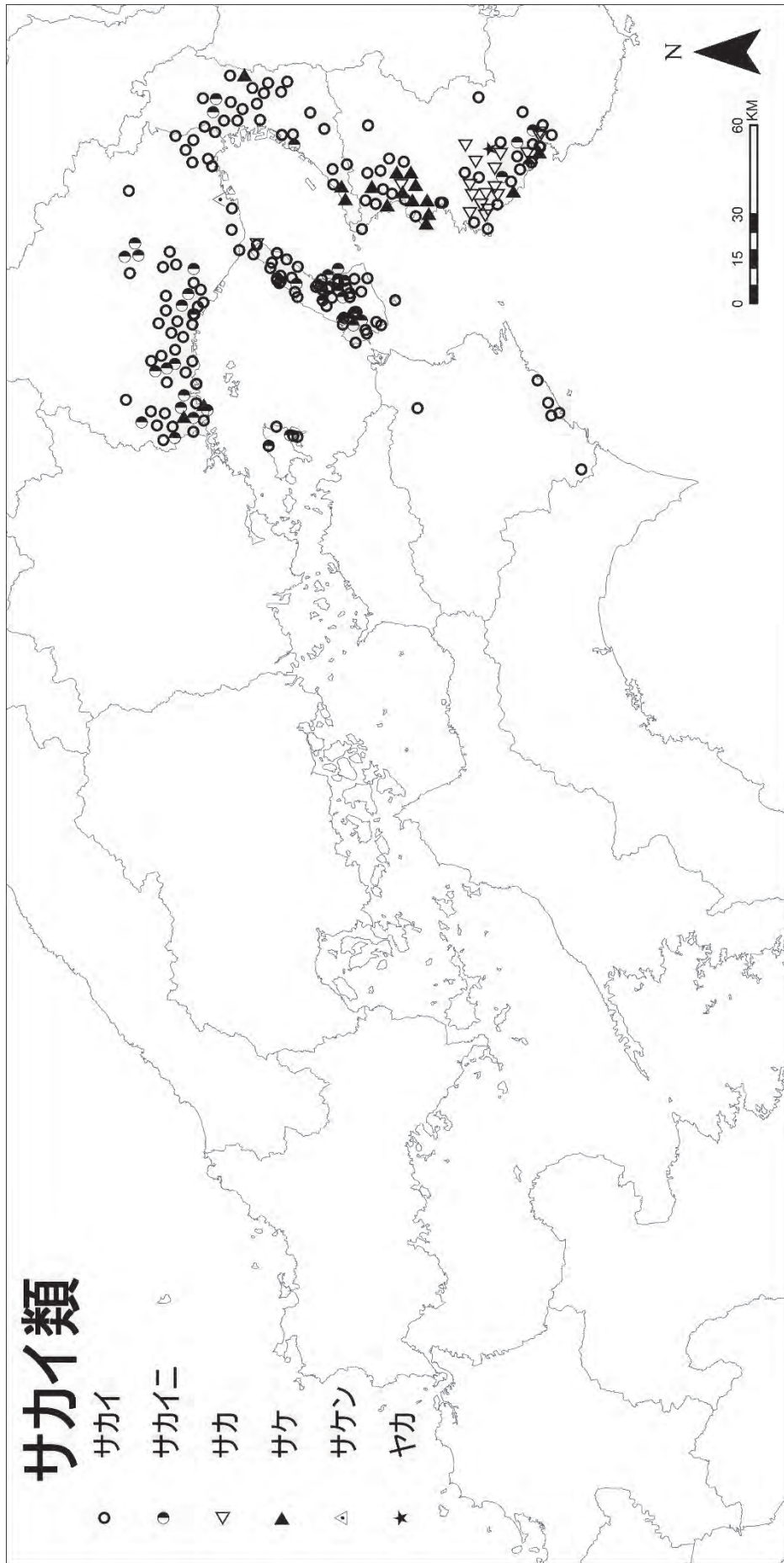


図3 峪口調査「サカイ類」(概略図)

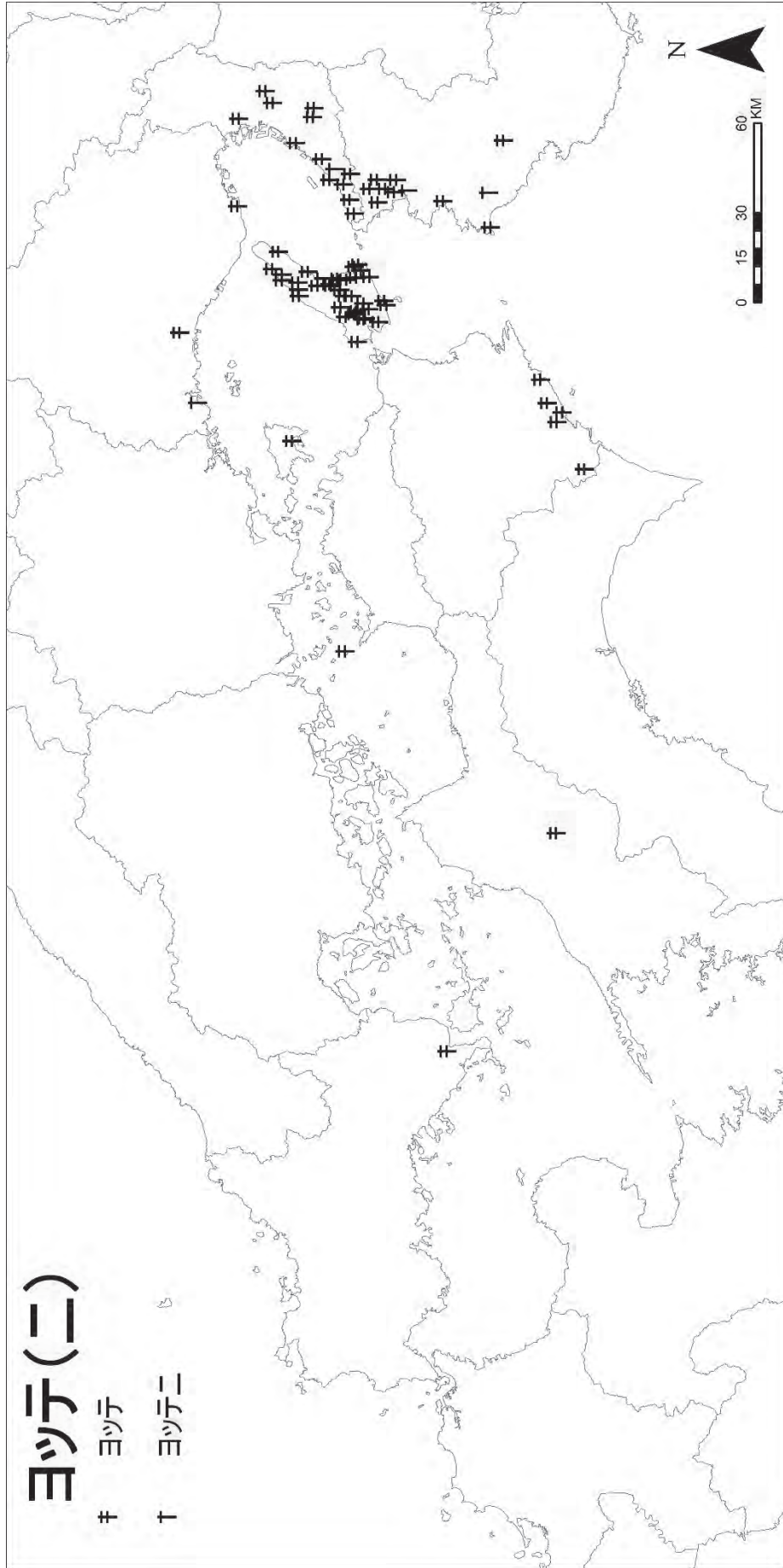


図4 峠口調査「ヨツテ(二)」(概略図)

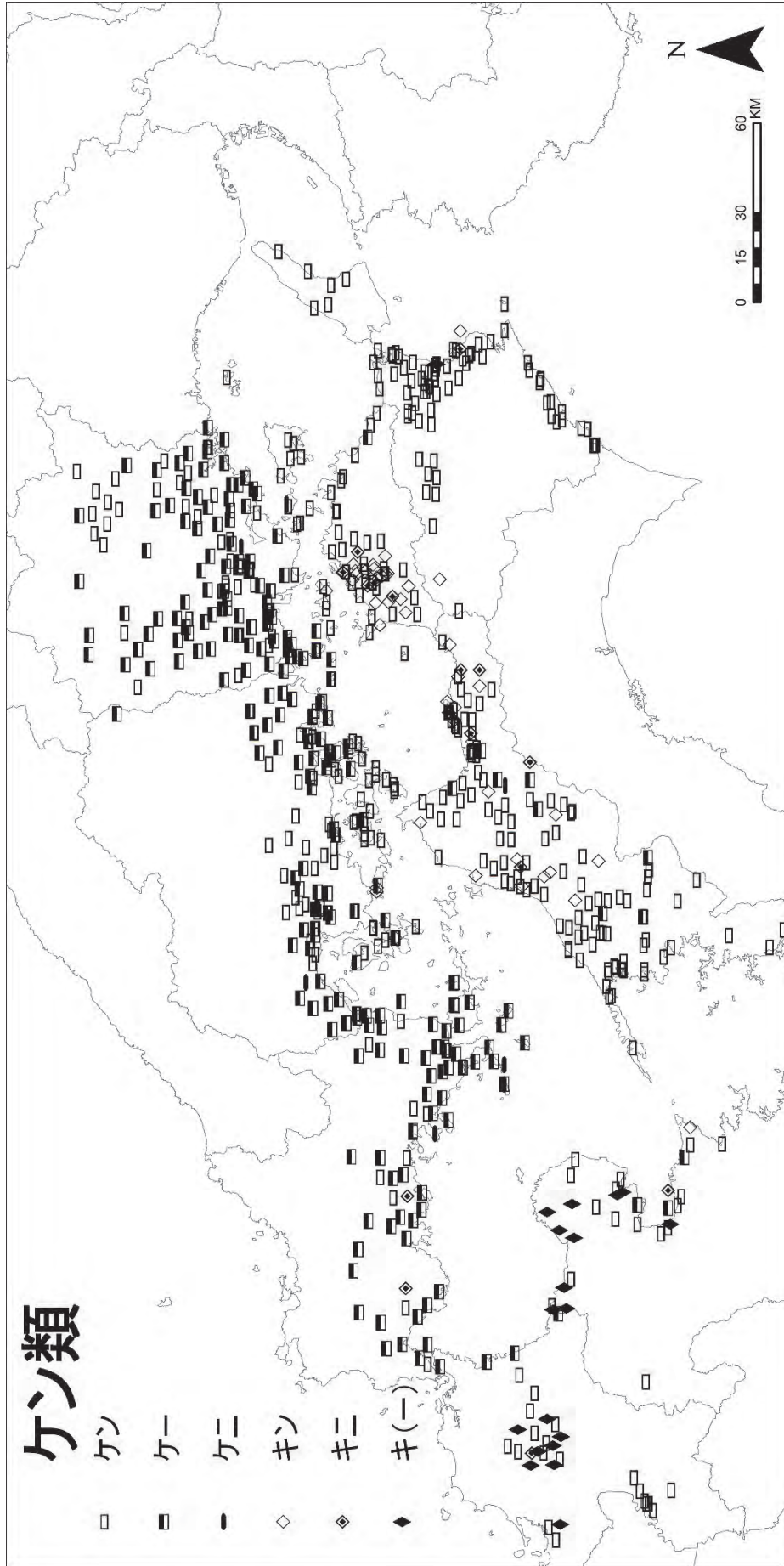


図5 峠口調査「ヶン類」(概略図)

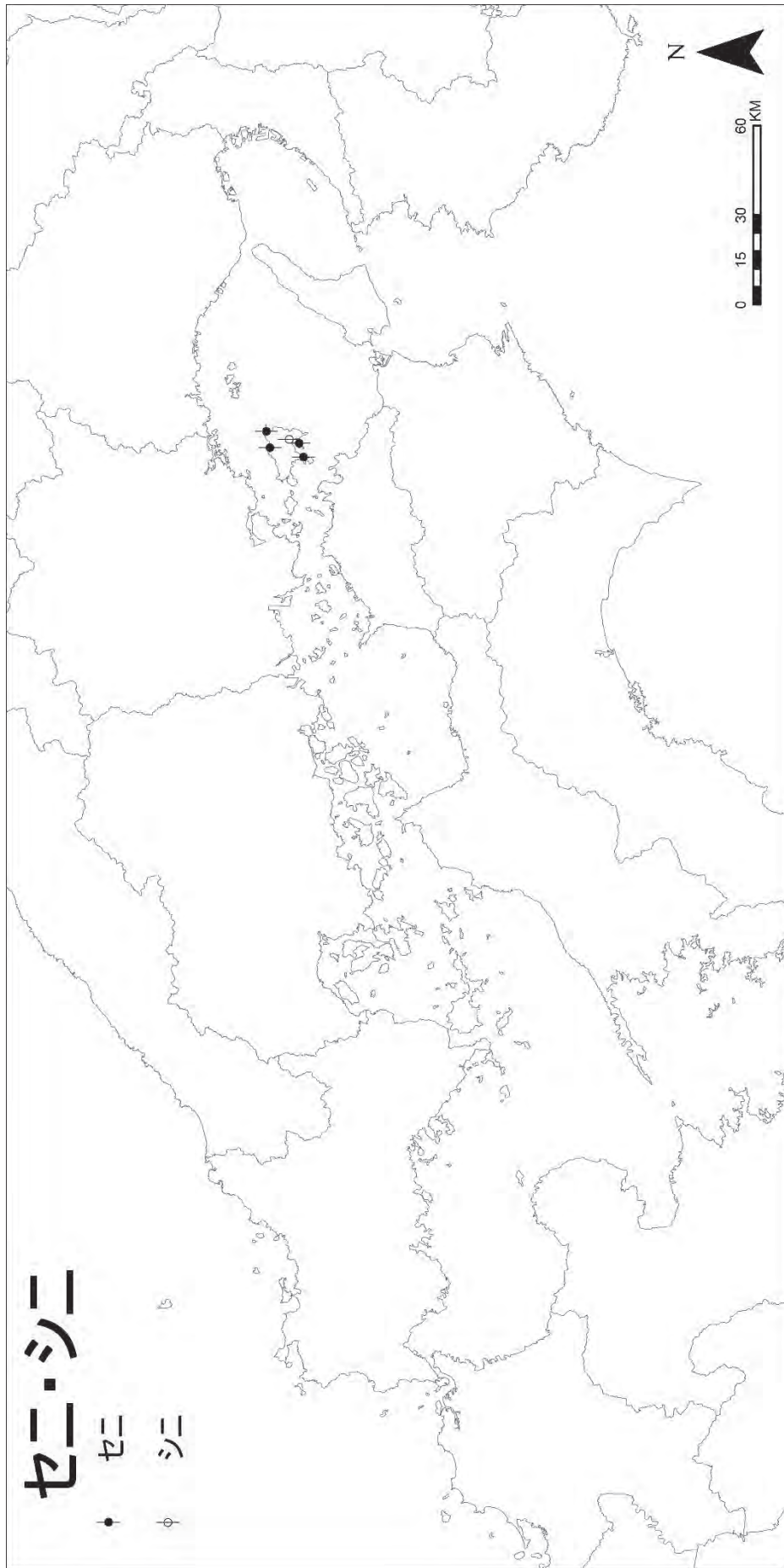


図6 嶺口調査「セニ・シニ」(概略図)

4. 1. 2. 瀬戸内海域「カラ」における地理的分布特性の算出

ここでは、地理的分布特性の算出を援用して分析を進める。

方法論上、調査地点の抽出箇所が同一であるほうが望ましいと考える。しかし、今回は事例研究、モデルケースとして分布傾向をみるために止め、方言学においても地理的分布特性の算出が適用出来るかどうか、空間解析を利用し分析を試みる。

図7は岬口調査における、原因・理由をあらわす接続助詞「から」の代表的な形式「カラ」「サカイ(ニ)」「ケン」「ケー」を取り上げたものである。共通語形カラ199例、サカイ(ニ)212例、ケン437例、ケー279例だけを抽出した空間統計の地図である。

ラインで囲った標準偏差楕円^{注2}は、標準距離偏差では表現できない、点分布の向きの偏りも合わせて表示する指標である。標準偏差楕円において、地理的中心は点分布の平均的位置を、軸の向きは分布の方向、長軸および短軸の長さは散らばりの大きさを表す。

共通語形のカラは、関西に多く分布していることから、関西寄りに楕円が描かれている。重心点は香川県小豆島にある。サカイ(ニ)は、近畿中央部に分布していることから、近畿中心部に楕円が描かれ、淡路島淡路市の東部海域を重心点とし、サカイ類の分布傾向が窺える。ケンは、西日本広い範囲で分布し、愛媛、香川、徳島に多く分布していたことから、楕円の範囲は広く東部は淡路島から四国は広域にカバーし、瀬戸内海地域に大きく描かれている。重心点は愛媛県新居浜市にある。ケーは、岡山、広島、山口にかけて本州側に分布が多い為、ケンとは楕円が狭まるも瀬戸内海島嶼部から中国地方にかけて楕円が描かれている。重心点は広島県尾道市付近にある。

次に楕円各々の比較を行う。これらの楕円からいえることは、どこを中心にするように分布域の広がりがみられるのかということがわかる点である。

つまり、瀬戸内海東部は、サカイ(ニ)の領域、それに重なり共通語形のカラが高松市を中心に広島県西部まで分布をし、西日本のケン、ケーという伝統的語形は瀬戸内海域で広範囲に勢力を保っているが、標準偏差楕円でみるとケンが最も瀬戸内海域で勢力が強いことがわかり、ケーは中国島嶼部域を分布域とし分布していることがわかる。

以上、瀬戸内海域において最も勢力があるこれら4つの形式は、それぞれ重なりをみせつつも、それぞれの勢力分布域を有していることを、標準偏差楕円による分析を試みることで大局的にはあるが明らかにすることができた。

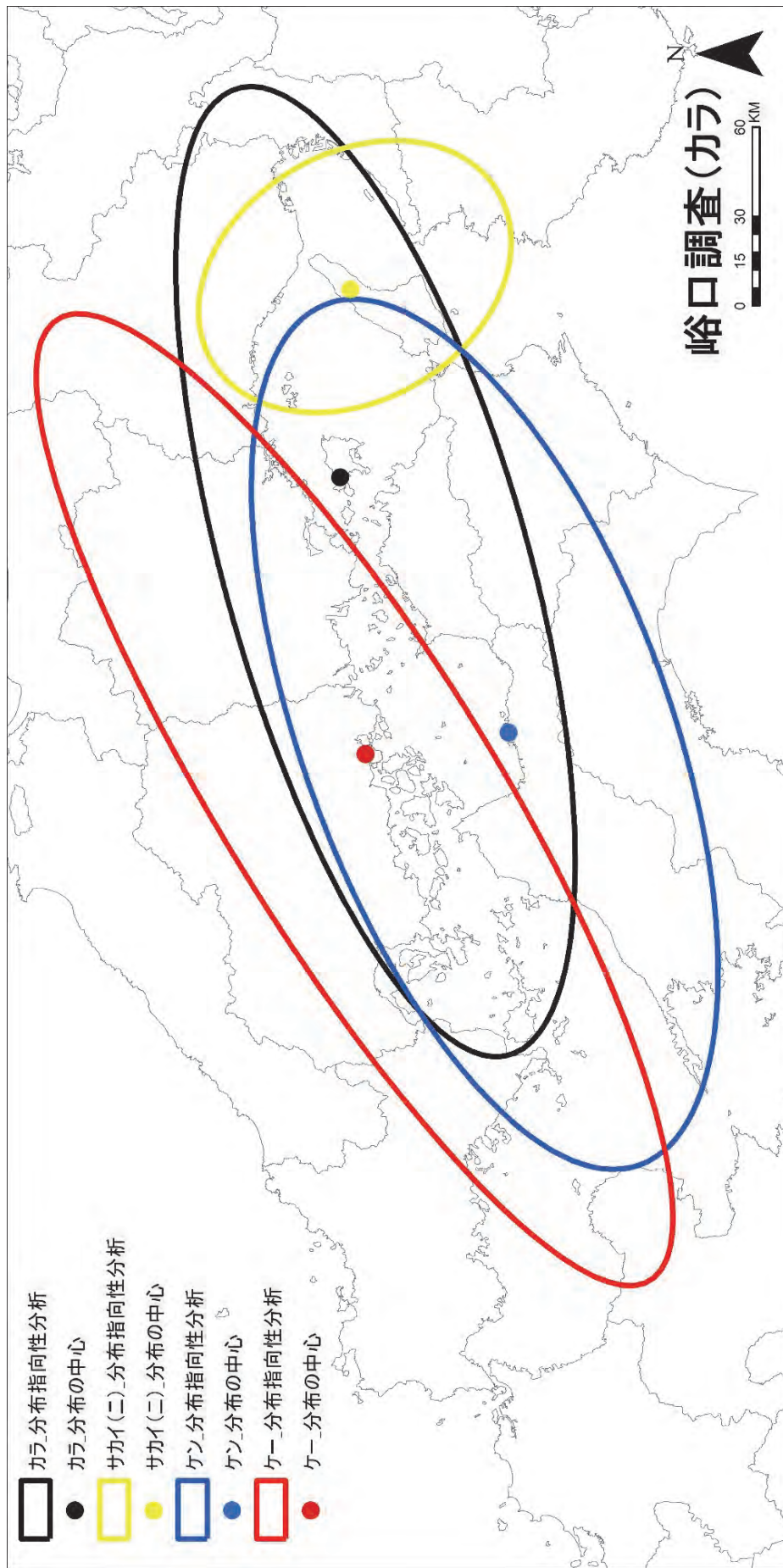


図7 嶺口調査空間解析図

4. 2. 1. 淡路島における方言分布の概観

図8は、LAS第31老年層図から作図した淡路島の言語地図である。全域に「サカイ」と「ヨッテ」が分布している。北部にはサカイ類が、南部にはヨッテ類が広く分布し、南北対立の様相をみせる。

GAJ(第1集・第33図)でも、北部はサカイ、南部はヨッテが分布しており、LASと一致していることがわかる。

日本語史では、中世・室町時代頃からヨッテ、ヨッテニが発達し、その後江戸期から、サカイが出現したとされる。淡路島南部におけるヨッテの残存、退縮は、本州からのサカイに押された結果であることが推察される。一方で、共通語形の「カラ」は僅かな分布がみられる程度である。次に、図9で岬口調査の分布図を概観する。LASよりは調査地点が減るものの、やはりサカイ類の分布が目につく。ヨッテ類も広く分布している。

図8では、サカイ類が北部、ヨッテ類が南部という分布傾向がみられたが、図9ではサカイ類が全域に広がり、ヨッテ類は南部に集中する傾向がみてとれる。ヨッテニは、みられない。南近畿に多い、サカという形式が淡路市室津にみられる。西日本に広く分布し、四国地方で使用されるケンも、LASでは分布が確認できなかったが、ここでは単一回答が2地点、複数回答「サカイ/ケン」が2地点、「サカイ/ヨッテ/ケン」が1地点あった。ケンの使用が5地点あることになる。単一回答2地点のうち、1地点は、淡路市久留麻で、残りの4地点は洲本市に集中している。以上をまとめると、本州側からのサカイの浸透があった一方で、四国側からの影響も受け、ケンが浸透している様子がうかがえる。ケンについては、四国から淡路島西部や南部へ伝播し、それが徐々に洲本市へと直接伝わった、いわゆる地を這うような伝播をしてきたものではなく、洲本市に直接、飛び火したかのような分布の様相を呈している点が特筆される。

4. 2. 2. 淡路島「カラ」における地理的分布特性の算出

ここでは、地理的分布特性の算出を援用して分析を進める。実時間上の変化として、図8、図9との地図の比較を行なう。方法論上、調査地点の抽出箇所が同一であるほうが望ましく、調査地点数にも偏りがあるが、分布傾向をみるには、地理的分布特性の算出は可能である。今回は事例研究、モデルケースとして分布傾向を通じ、方言学においても地理的分布特性の算出が適応出来るかをみるべく、空間解析を利用し分析を試みる。

図10、図11は、サカイだけを抽出した地図である。標準偏差楕円は、標準距離偏差では表現できない、点分布の向きへの偏りも合わせて記述する指標である。標準偏差楕円とは、地理的中心は点分布の平均的位置を、軸の向きは分布の方向、長軸および短軸の長さは散らばりの大きさを表す。点分布の重心を中心とし、分布を最も適切に表現する楕円を描いたものである。

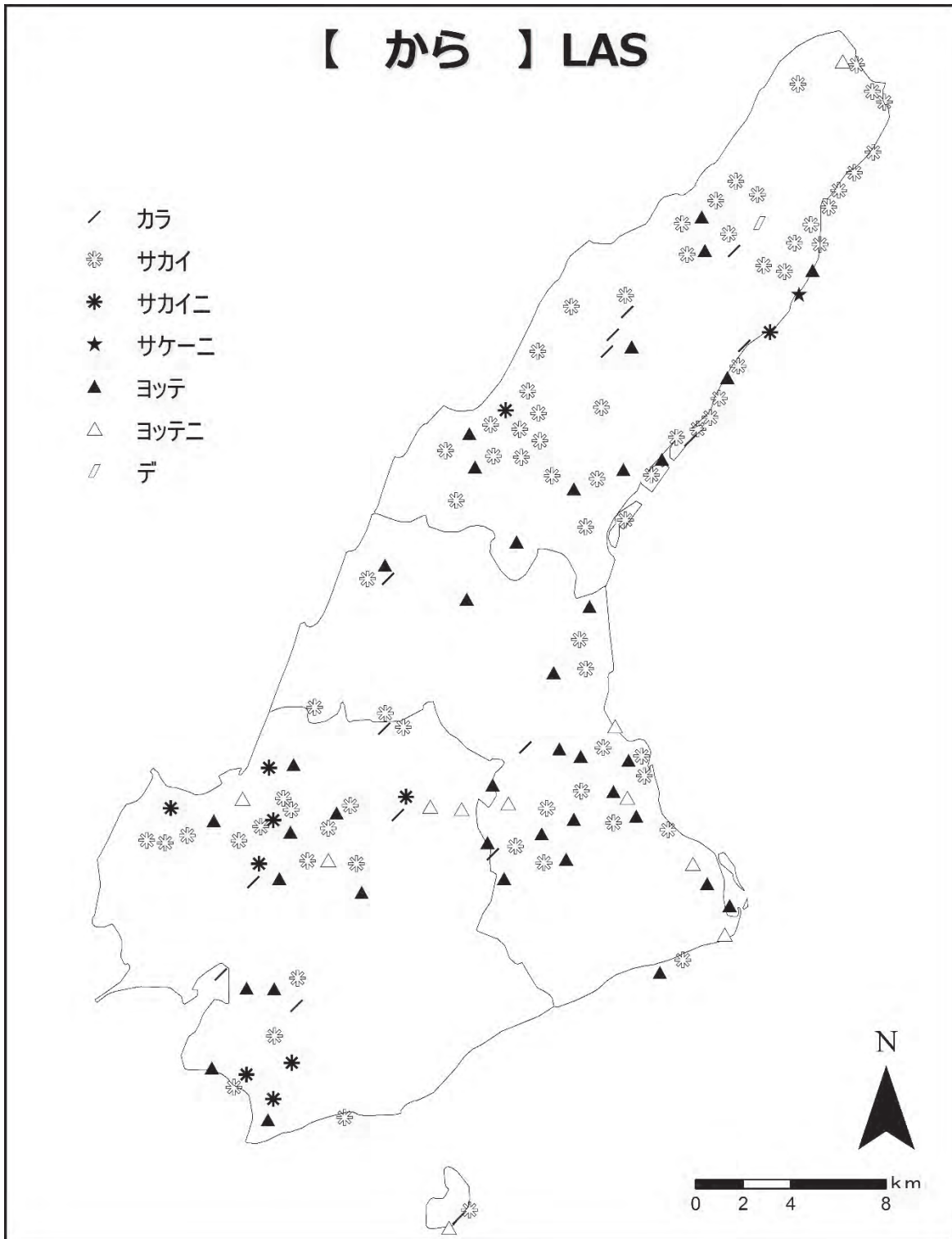


図8 LAS第31老年層図から作図「から」

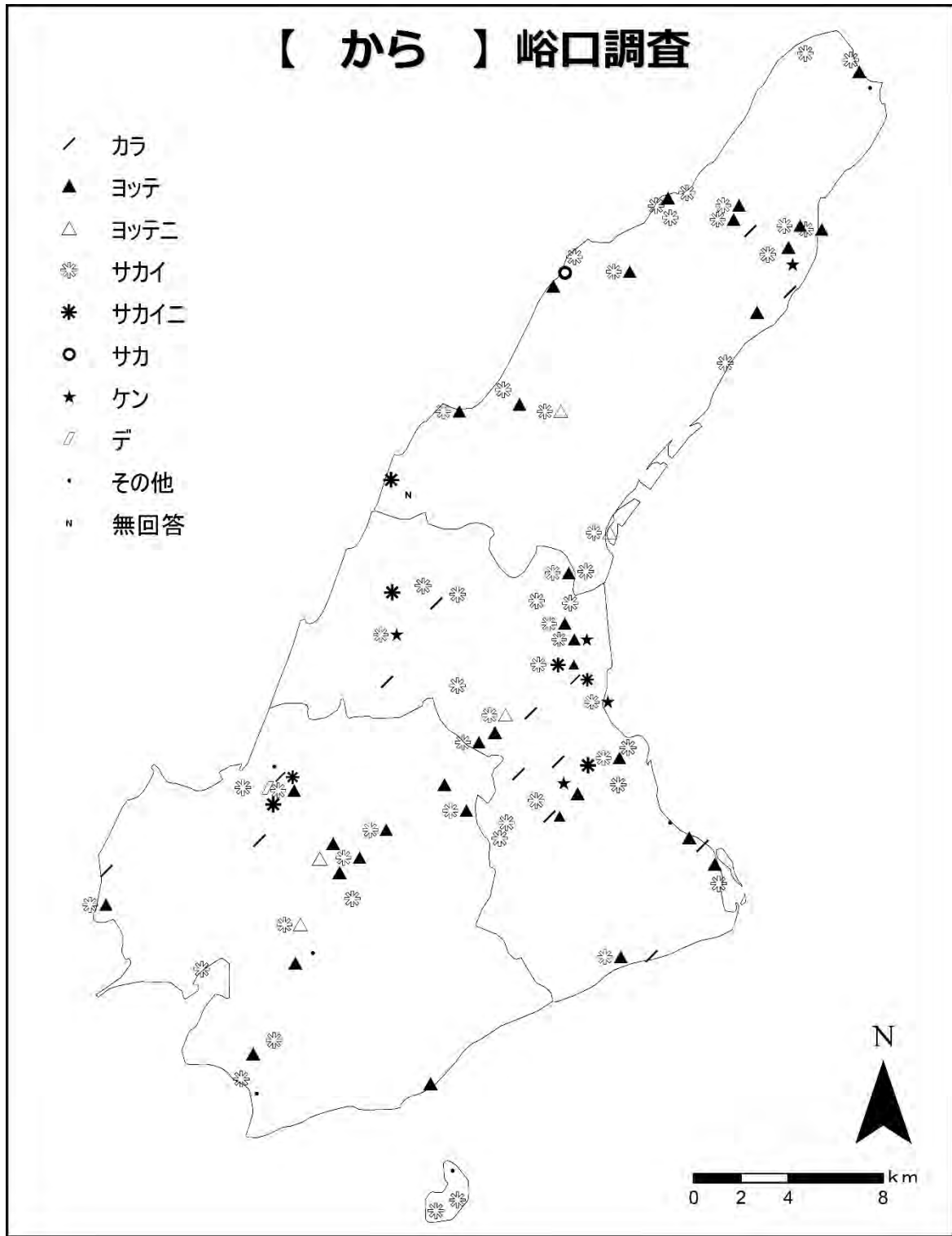


図9 峪口調査「から」

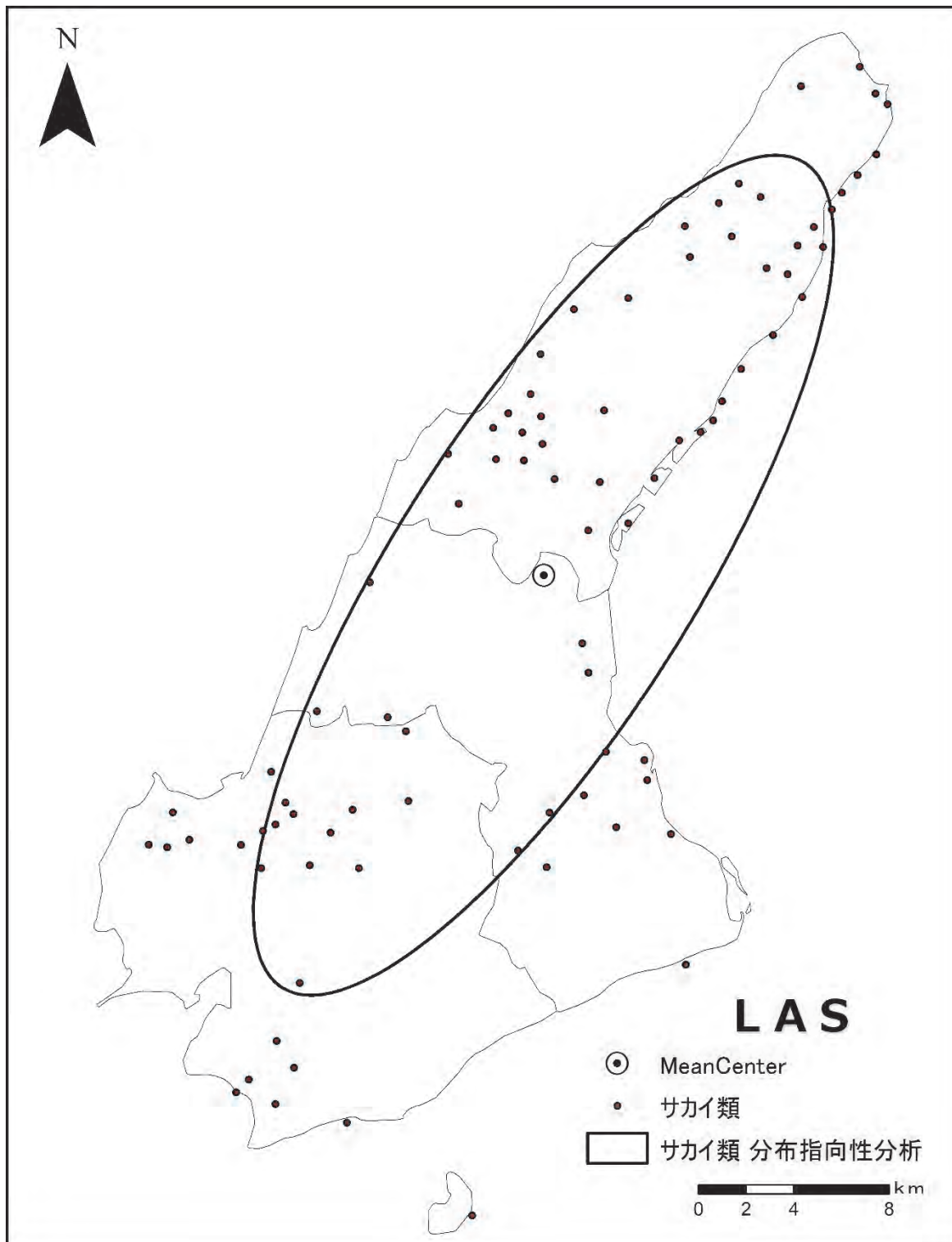


図10 LAS空間解析図「サカイ類」



図11 峪口調査空間解析図「サカイ類」

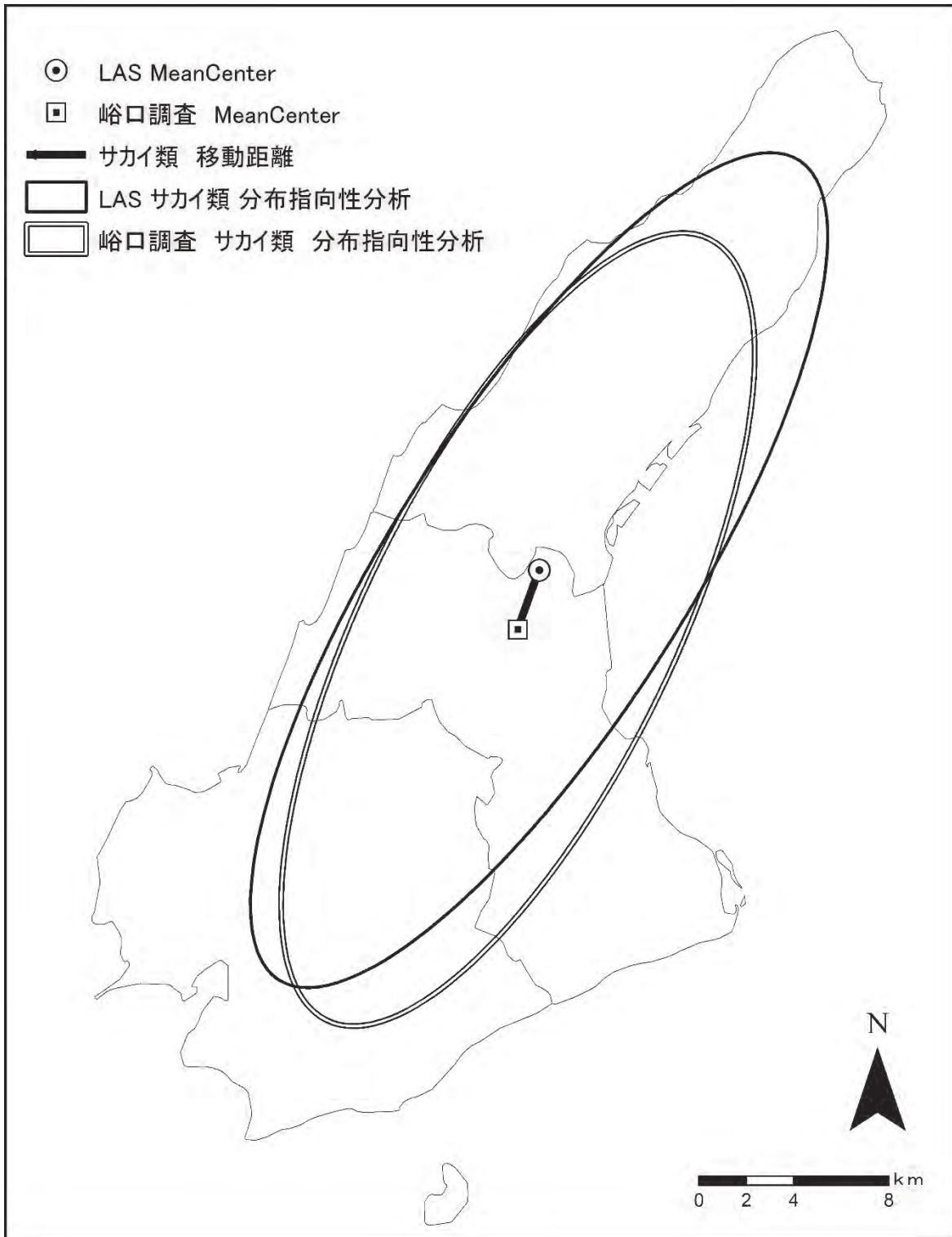


図12 LAS・峪口調査 空間解析図「サカイ類」

図 10 のサカイの分布は北部に偏り、図 11 では分布域が南部に偏り移動したさまが、標準偏差楕円を用いることによってわかる。楕円の長軸、短軸の長さは、図 11 のほうが長い。

よって楕円が大きいことで、分布が地理的中心点から散らばりが多いことがわかる。分布を比較してみると、LAS のサカイ分布は、北部から南部にかけて、楕円が分布している。楕円が意味するのは、分布傾向であるので、淡路島北部ということは近畿からことばが伝播し、広がっていったものと考えることができる。峪口調査では、楕円の分布が南部に移動している。移動したことで、指摘出来るのは、サカイの分布がより南部に進行したことがわかるという点である。或いは北部は近畿中央部から新しい語形が入ってきて、中部から南部にかけてサカイの語形が残存しているかもしれない。四国では、サカイは使用されないので、淡路島南部はサカイの吹き溜まり状態になっている可能性も考えられる。

地理的中心点に注目すると、図 10 では淡路市南部に位置するが、図 11 では、洲本市にプロットされている。さらに地理的中心点を比較するために、図 10 と図 11 の地図を重ねあわせた地図が図 12 である。地理的中心点間の距離を測定してみるためにジオメトリ演算^{注3}を用いて計算をすると移動距離は 2,562m だった。約 2.6km サカイの分布は、南下していることが正確に明らかになった。かつて畿内でひろく使用されていた伝統形式のサカイが、標準語形であるカラに押され南進している様相が判明した。

4. 3. 1. 小豆島における方言分布の概観

図 13 (注4) 原因・理由を表す接続助詞「から」には、主にカラ・サカイ類・セニ・ケン類・ヨッテ・デなどの形式が分布している。

LAS 第 31 老年層図の池田以東(池田、大部、草壁)で使われていたセニが約 50 年の時を経てその勢力を弱めたことがわかる。福田地域付近にセニが確認できることから、かつてセニが小豆島東部で勢力を誇っていたと考えてよいであろう。今回の調査では、セニが各地(吉田、堀越、蒲野、滝宮)に散在している。佐藤(1990)は、「池田以東の地域について「セニ」→「サカイ系」→「カラ」という変化が推測できる。」と指摘している。このときの推測が今回の調査で確かめられたわけである。このセニは、「ゆえぶかい古語法の残形である」(藤原 1976)という。

一方で小豆島西部(土庄、伊喜末)をみると、おおむねカラの分布が多い。LAS では、老年層と少年層とともに小豆島西部ではカラの使用しかみられなかった。西対岸の豊島、北対岸の岡山東部の広い範囲でカラのみが分布している。つまり、このカラの分布は、共通語形による影響とは考えにくく、この地域に古くからある語形であると思われる。四国本土でよく使われるケンが小豆島町に、やや多くみられることがわかる。四国の影響を受け、島嶼部にまでケンの分布域が拡大している様子をうかがうことができるであろう。

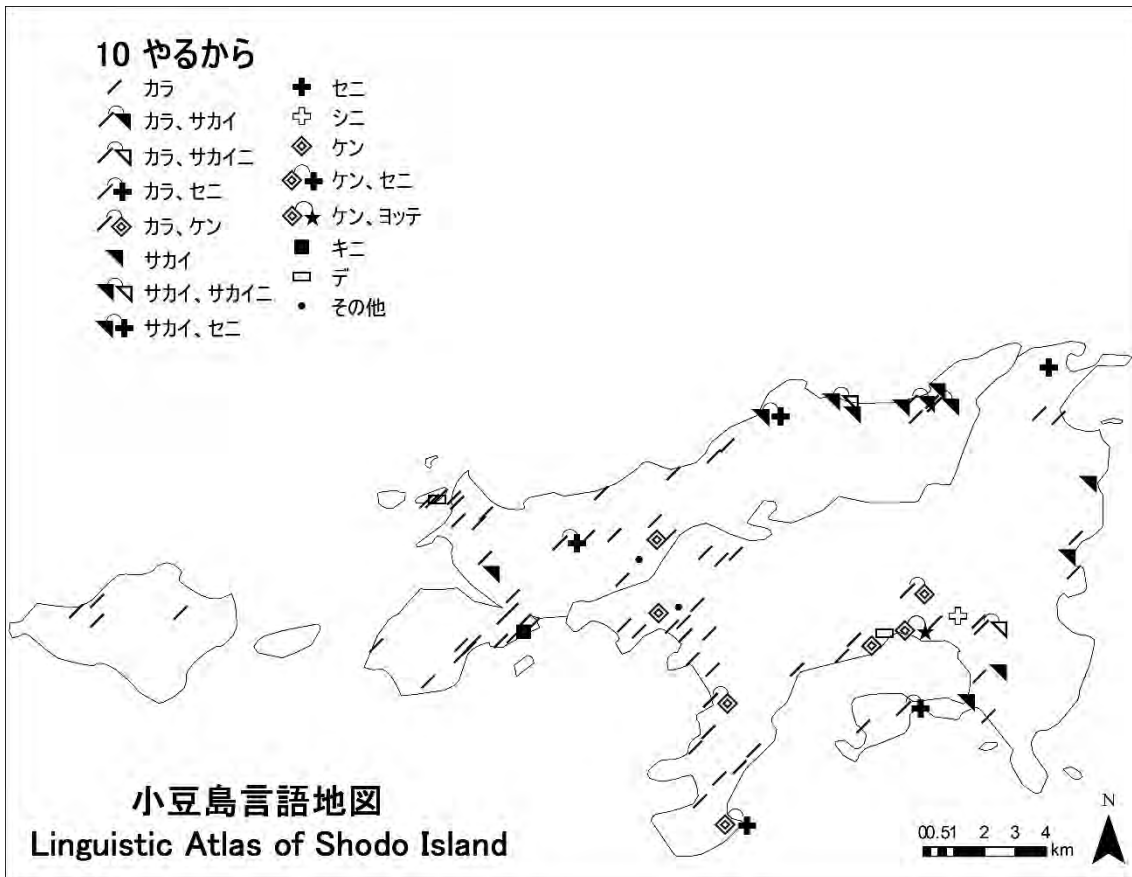


図13 小豆島調査「から」

5. 方言分布から推定される変化の過程

まず、上述した4. 1. 1. LAS 第31 老年層図を整理する。

LAS 老年層図では、ケンが広島、愛媛、香川、徳島に分布がみられ、ケーが岡山県備中島嶼、広島県備後島嶼、山口県下、九州北部などにまとまって認められる。また近畿中央部では、大阪を中心にサカイ（ニ）が分布圏を形成しており、和歌山においては、サカとサケが対立をみせている。大阪府及び兵庫県のあたりにはヨッテ（ニ）が淡路島を中心にまとまって分布している。少年層の分布においても、老年層図とほぼ同様の形式がみられ、両図には大きな差がない。つまり接続助詞「から」については、見かけ時間上の変化はみられなかったといえる

そこで、本稿では、過去 80 年間というタイムスパンにおいて瀬戸内海域のことば「から」がどのように変化していったのかを考察する。

まず、約 80 年前の調査研究である、藤原 1933 年調査の図 14 を概観する。サカイ（ニ）・ヨッテ（ニ）の分布は近畿を中心にひろがりを見せている。一方で、和歌山は、調査地点が少なく、サカ・サケの対立はみることができない。中国地方では、ケ（一）の分布が盛んに

みられ、四国地方ではケニが広範囲に分布域を形成している。また、ケニは、四国に限らず、中国地方や九州地方まで入り込んで分布がみられる。ここで、一番重要なのはケンの使用がみられないことである。

次に、図 15・16 を概観していく。図 15 は、藤原 1933 年調査、図 16 は 嵯峨口調査の、ケニ・ケンのみを取り出し作図した地図である。嵯峨口調査結果を概観すると、図 16 は、四国地方の徳島・香川・愛媛の各県を中心に分布しており、岡山・広島など中国地方にも分布が確認できる。

約 80 年前の調査結果である図 15（藤原調査 1933 年）ではケンの使用がみられず、嵯峨口調査でみられたケンの分布域は、すべてケニ（ないしキニ）であった点が注目される。また図 17・図 18 は、二次メッシュを用いて地図化を行っている。地図の濃淡で使用が確認できる。

つまり、相互の結果を比較すると、過去 80 年間というタイムスパンにおいてケニ→ケン（キニ→キン）という変化が生じ、ケンが広く拡散した様子を知ることができる。嵯峨口調査からは、ケニ（ないしキニ）が分布域を縮小させており、今後、これらの形式はともにケンに統一されていくのは確実である。

図 20 「ケー」をみると、LAS では岡山県・広島県島嶼部、山口県、九州北部に分布をみせていたが、嵯峨口調査では、依然として中国側で分布が優勢だといえる。図 19（藤原調査 1933 年）でも、ケーの分布は中国側でさかんである。ケーに関しては、実時間上の変化をみても、この 80 年間、大きな変化がなかったことが明らかとなった。

サカイ（ニ）の分布は、LAS、藤原（1990）の両調査結果を比較しても、同地域で使用の確認ができる。つまりこの 80 年の間、特に分布域が縮小することもなく、各地で受け継がれ、使用されていることが判明した。

これまでの調査と比較した結果、大局的には、ケー、サカイ（ニ）、ヨッテ（ニ）など、瀬戸内海域において広範囲に分布を形成していた諸形式は、依然としてその分布領域を保持しているといえる。ただ、ケンに関しては約 80 年前の調査ではまったく現れず、現在、ケンを使用する地域では、かつてケニ（ないしキニ）が使用されていたことが明らかとなった。

藤原（1990）の調査から LAS の段階でケニ（ないしキニ）からケンへと変化が生じ、そして現在ではケニ（ないしキニ）がほとんど消え、ほぼケンに統一されていることが判明した。また、LAS 調査でみられた、各地の特色のある形式（セニ・シニ・ショイなど）も分布領域の退縮のみならず、各地での方言形式自体の衰退が激しい。このような背景には、前述したとおり LAS の調査時の段階でみられた多様な形式が各地域で勢力を伸ばしたケンの拡大が大きく影響を及ぼしている。

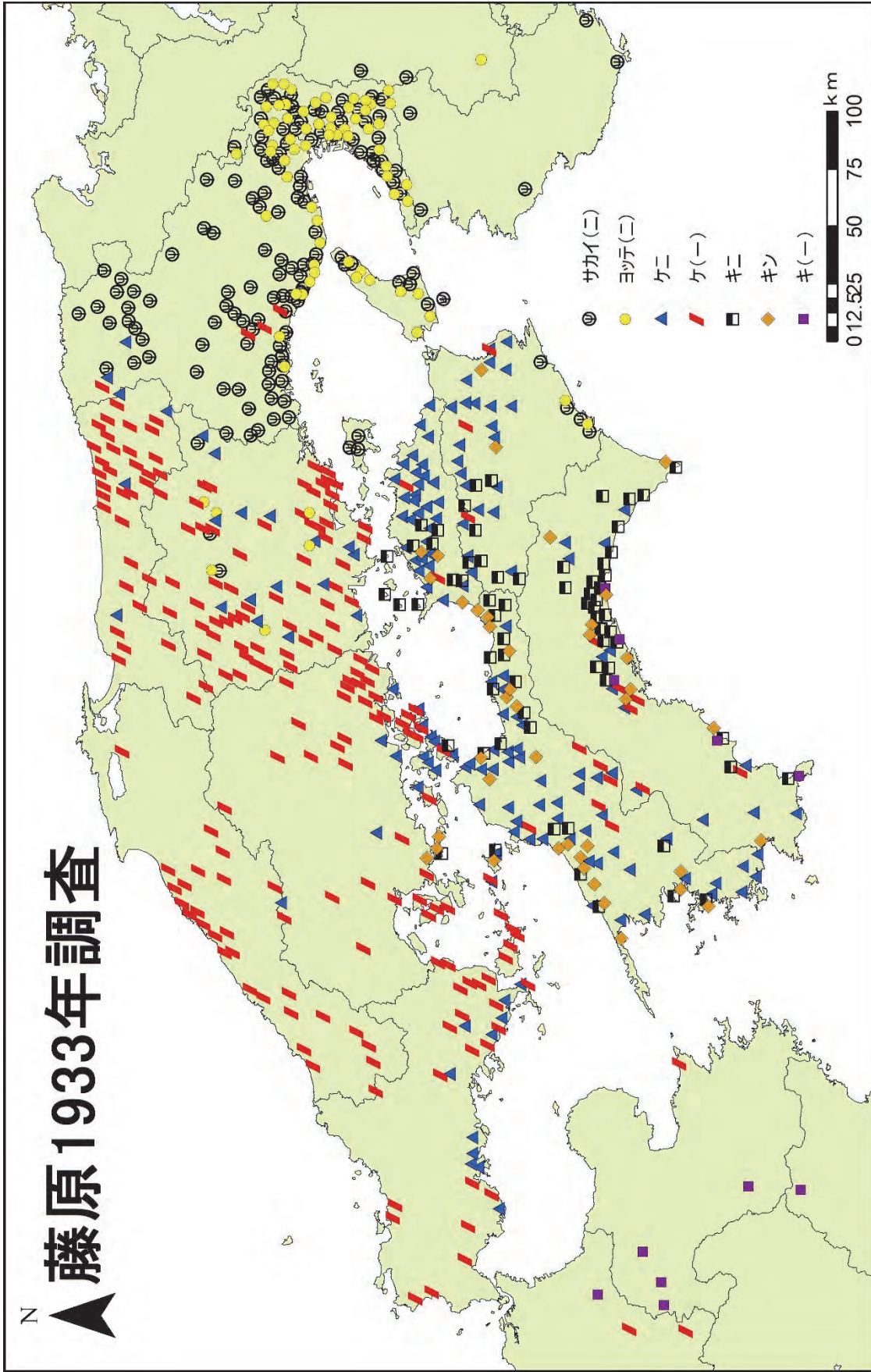


図14 藤原1933年調査（原図から複数）

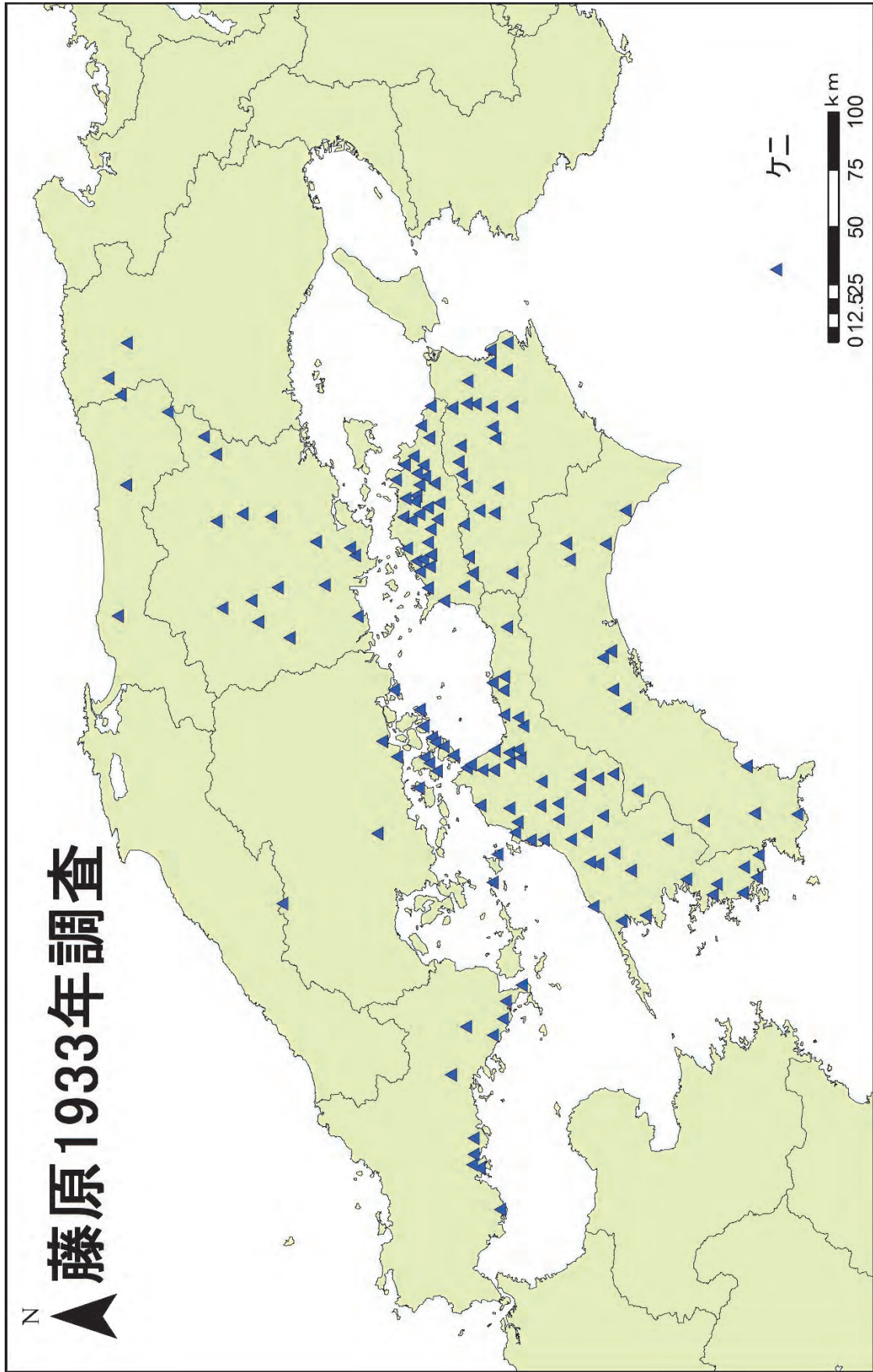


図15 藤原1933年調査「ケニ」

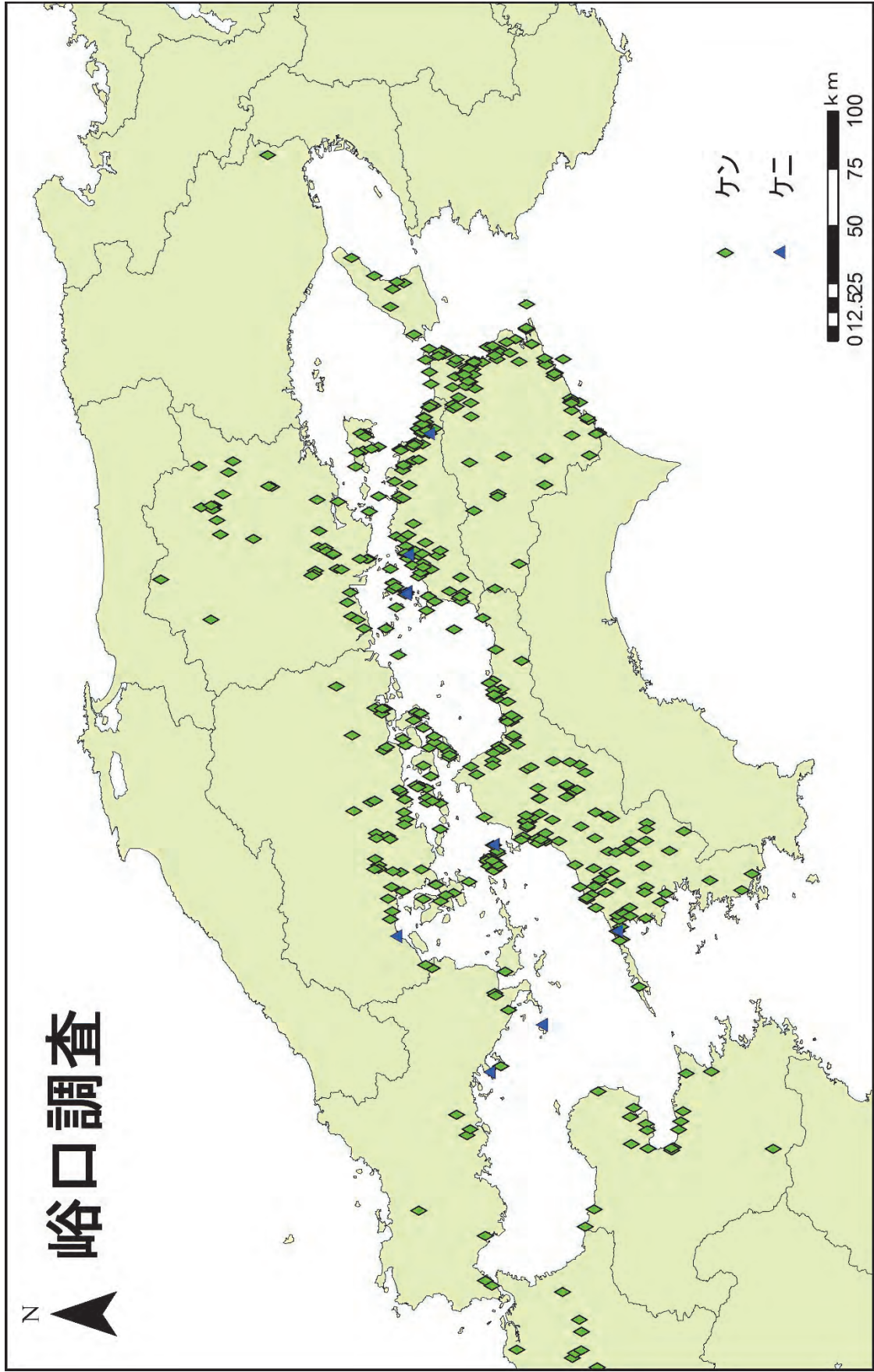


図16 峪口調査「ケン・ケニ」

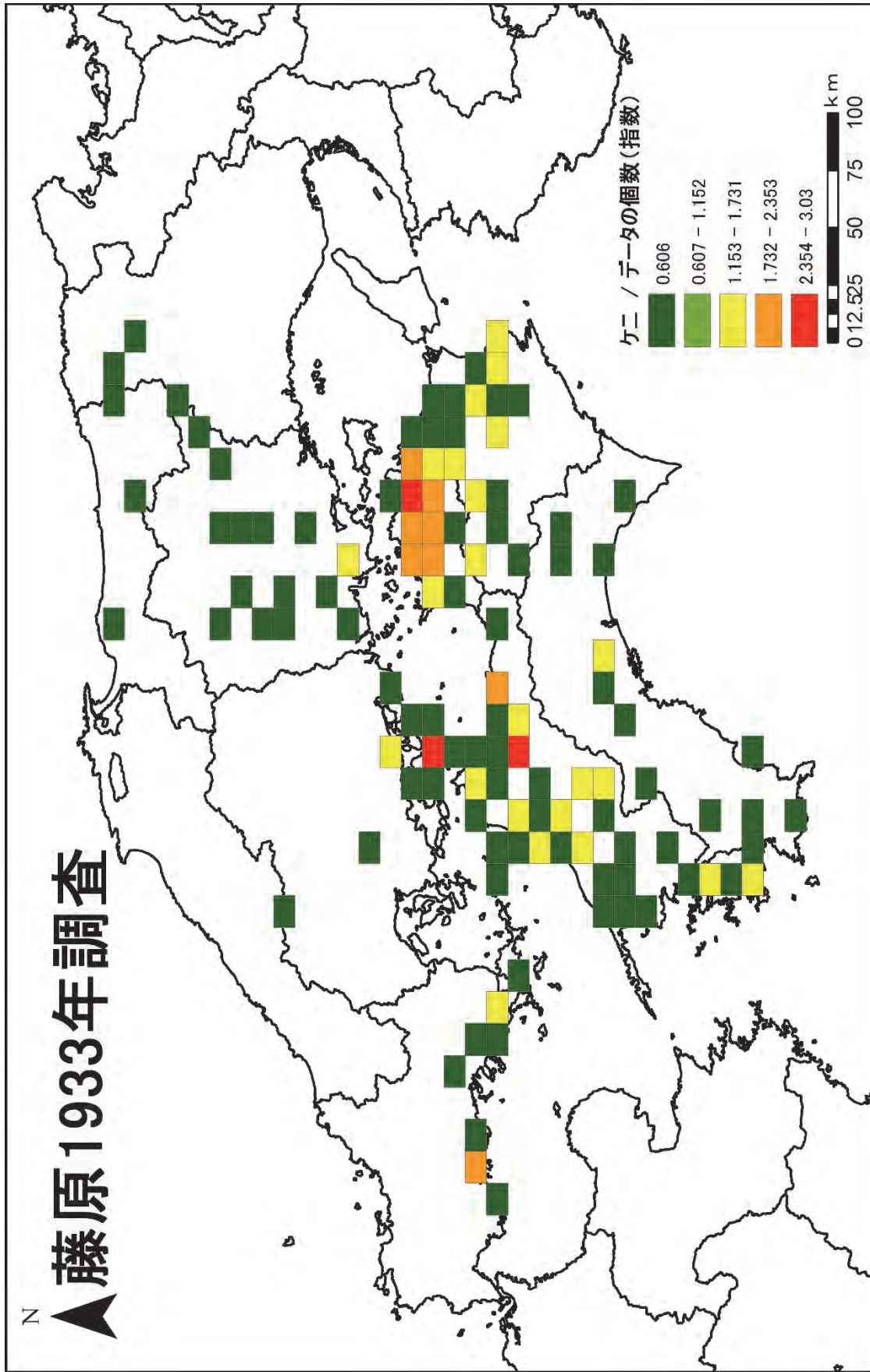


図17 二次メッシュ図「ケニ」

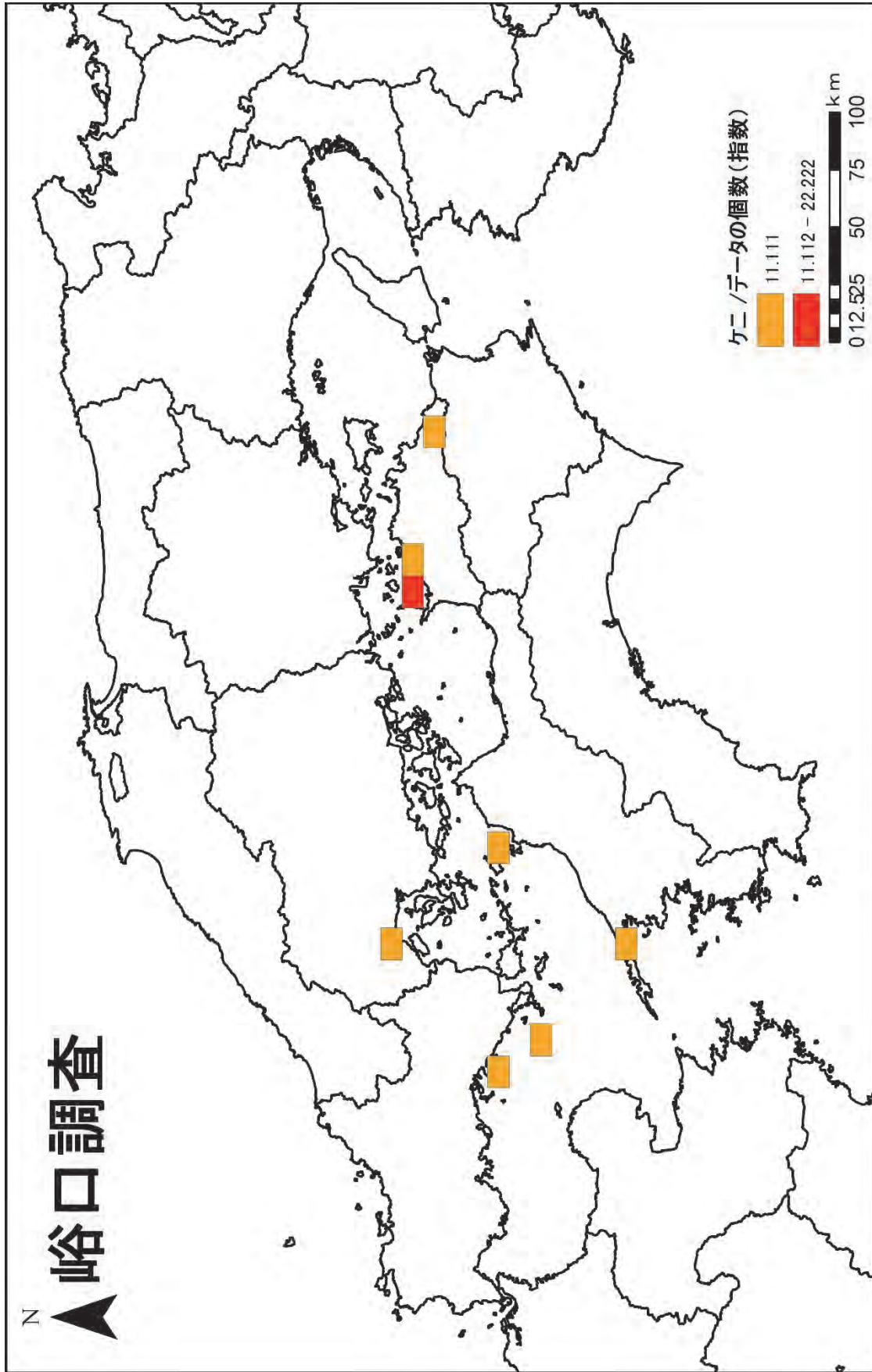


図18 二次メッシュ図「ケニ」

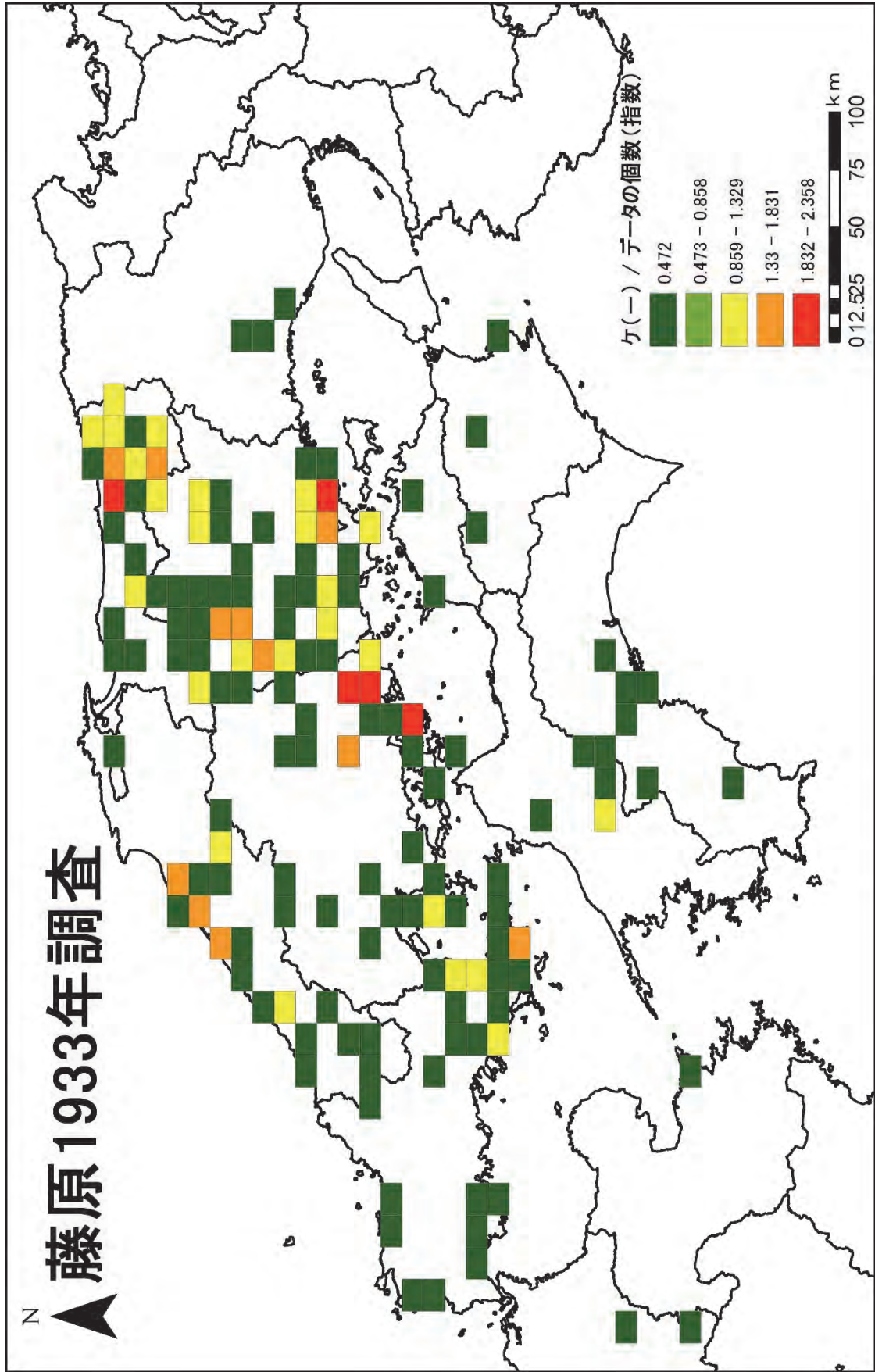


図19 二次メッシュ図「ケ(一)」

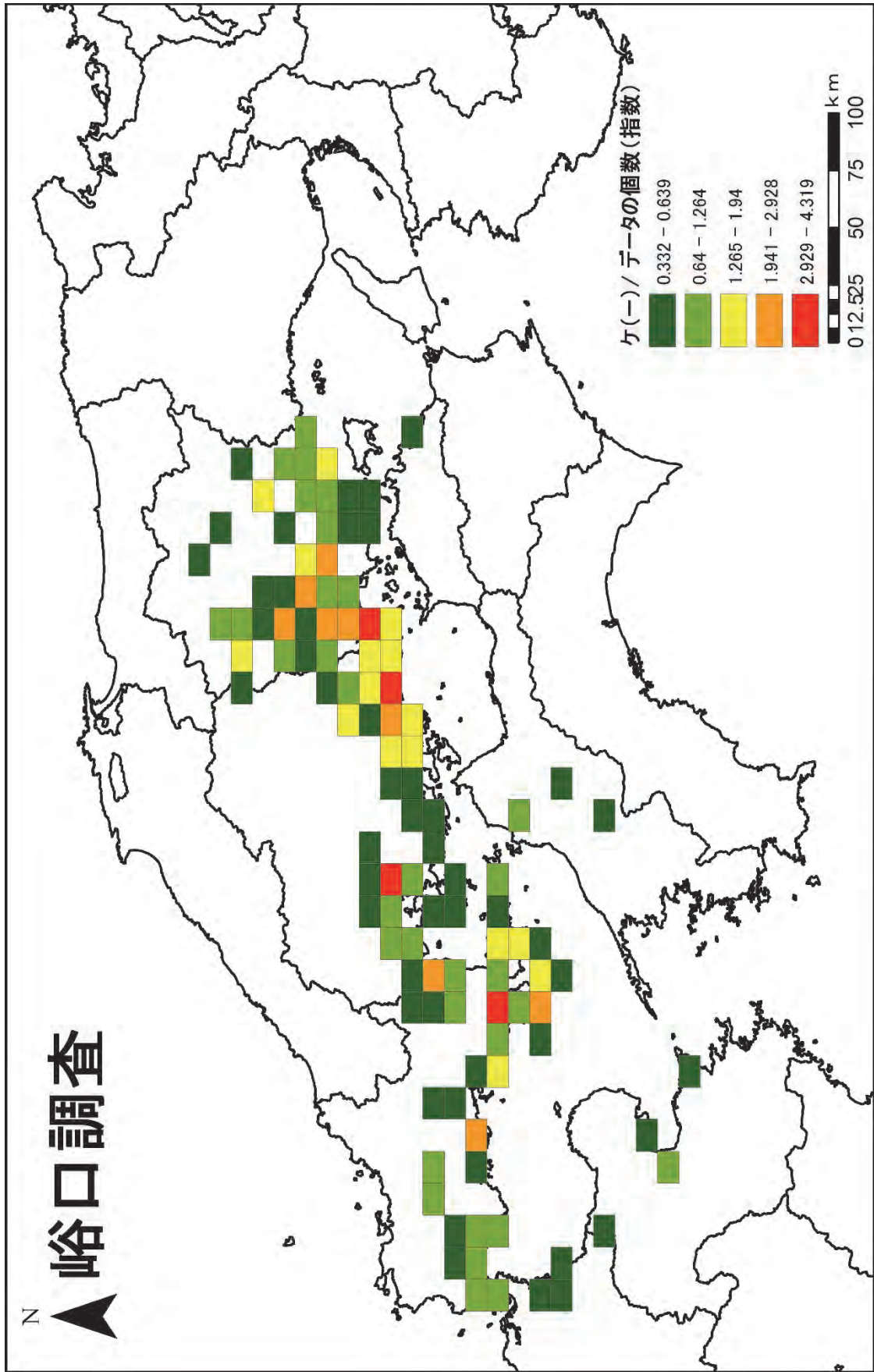


図20 二次メッシュ図「ケ(-)」

6. 本章の結論

これまでの調査と比較した結果、大局的には、ケー、サカイ（ニ）、ヨッテ（ニ）など、瀬戸内海域において広範囲に分布を形成していた諸形式は、依然としてその分布領域を保持しているといえる。ただ、ケンに関しては約 80 年前の調査ではまったく現れず、現在、ケンを使用する地域では、かつてケニ(ないしキニ)が使用されていたことが明らかとなった。藤原（1990）の調査から LAS の段階でケニ（ないしキニ）からケンへと変化が生じ、そして現在ではケニ(ないしキニ)がほとんど消え、ほぼケンに統一されていることが判明した。また、LAS 調査でみられた、各地の特色のある形式（セニ・シニ・ショイなど）も分布領域の退縮のみならず、各地での方言形式自体の衰退が激しい。

これらの結果から、大局的には、サカイ、ケン・ケー等、LAS 調査で瀬戸内海域において広範囲に分布を形成していた諸形式は依然としてその分布領域を保持しているといえる。一方、限られた地域にみられた、各地の特色ある形式は分布領域の退縮のみならず、各地での衰退化が激しいという事実が明らかになった。このような現象の背景には、LAS の調査時の段階でみられた多様な形式が各地域で勢力のある形式（例えばケンの拡大など）に飲み込まれるという傾向が存在すると考えられる。

【注】

注1 西沢一鳳著 1850 刊。原文は、近世デジタルライブラリーにアップされている資料によった。<http://kindai.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/763829/9>

注2 楢円については、STD×1 の範囲は、確率的に約 7 割の点が分布している範囲を示している。

注3 テーブル内で直接面積やラインの長さなど計算する機能を指す。

注4 小豆島言語地図の地図番号は、岸江信介・峪口有香子編（2015）『小豆島言語地図』の地図を掲載している。なお、言語地図の作図は、筆者による。

第 8 章 WEB による言語地図の公開

1. 本章の目的

本章では、瀬戸内海全域の言語地理学的な方言調査を実施し、過去の調査データの追跡調査を兼ね、方言研究で今まで試みられてこなかった、インタラクティブな可視化を実現するため、統計解析言語 R を用い、WEB 上での方言動態の公開の実現を可能とする提示方法とその利便性について明らかにする。

R ソフトは、オープンソースソフトウェアの一つとして、その自由度の高さから、統計解析に限らず、画像解析から地理情報を解析するための機能 (GIS) までその応用は広範囲にわたり利用されている。その R を使った言語地理学研究は、世界をみてもまだなされていないのが現状である。日本の方言研究界においても、調査データの俯瞰と要約のために、インタラクティブな言語地図を作成する試みはなされていない。

本研究は、その新たな言語地図を作成するために、瀬戸内海域をフィールドに設定し、今回実施した方言調査結果を基にインタラクティブな言語地図に要約することを試み、さらにその結果を WEB 上で公開し消滅が危惧される瀬戸内海方言の記録と保存を目指すものである。

2. 分析手法

可視化の事例として、以下では文末詞を取り上げる。質問の項目は以下のように設定した。主に瀬戸内海域でよく使われている伝統的表現の文末詞を取り上げた。なお調査項目は、『瀬戸内海言語図巻上下』調査で扱ったものと同じである。

- 【1】誰かが来たときに、「誰ですか」という時、「誰ぞい」と言いますか。
- 【2】近所の心やすい人に対して「どこへ行くのか」と聞く時に「どこに行くんなら」と言いますか。
- 【3】心やすい人に「そなん、知らん！」という時、「知らんわい」と言いますか。
- 【4】「大きな魚がおったわいやー」というように、「～わいやー」と言いますか。
- 【5】「今日は、暑いの一た」というように、「～の一た」と言いますか。
- 【6】「今日は、暑いのんた」というように、「～のんた」と言いますか。
- 【7】「今日は、暑いの一し」というように、「～の一し」と言いますか。
- 【8】「今日は、暑いのもし」というように、「～のもし」と言いますか。

- 【9】「今日は、暑いなもし」というように、「～なもし」と言いますか。
- 【10】「今日は、暑いなー」というように、「～なー」と言いますか。
- 【11】「今日は、暑いの一」というように、「～の一」と言いますか。
- 【12】「今日は、暑いの一れ」というように、「～の一れ」と言いますか。
- 【13】「お早うがंस」というように、「がंस」ということば使うことがありますか。

回答結果を、地理情報 API^{注1}と連携させた可視化を試みる。OSM^{注2}テクノロジーを利用することで、方言の使用地域や話者の属性などをインタラクティブに確認することが可能になる。また話者の地理的属性として緯度経度を指定することで、回答の地理的分布を容易に確認できる。R では、データを地図情報と関連付けるのに、JavaScript^{注3}に基づく、Leaflet^{注4}というシステムを採用している。Leaflet は WEB ベースの地図システムで、ユーザーのマウス操作により、位置の確認や拡大が容易にできる。つまり、言語データ（方言）のように話者とその地理的分布に紐付けたデータを可視化するには最適なシステムだといえる。

方言データの分析では、多数の項目への回答を、話者のさまざまな属性と照合しながら解釈していく必要がある。ここに話者の地理的属性を重ね合わせようとすると、回答の数だけ地図を用意する必要があり、解釈が困難になる。また分析結果を報告するのも煩雑となる。さらに、項目ごとに分類するには、従来のスタティックな作図では、提示する情報の回答の数だけ地図を作成する必要がある。また作成した地図を印刷する、あるいはパソコンのモニターに表示するなどの手間が必要で、公開できる範囲も限られていた。

OSM の提供する作図機能を利用することで、ブラウザさえあればいつでもどこでも言語地図を提示することが可能となる。また使い慣れたブラウザで表示されるため、誰でも直感的に操作することが可能である。OSM は従来の GIS システムに代わる 21 世紀の地理情報システムとして、ここ数年で急速に普及している。重要なのは、この地理システムが JavaScript や R などの可視化技術やデータ分析技術と容易に連携できることである。以下、R および Leaflet で方言データを可視化した利点のいくつかを紹介する。

3. R と Leaflet による可視化方法

作成した可視化システムを起動すると、図 1 に示すようなページが表示される。そして、質問に対する回答の選択肢とともに、話者の位置情報を色別するなどしたグラフが作成される。表示される棒グラフは各話者の数をそれぞれ表している。

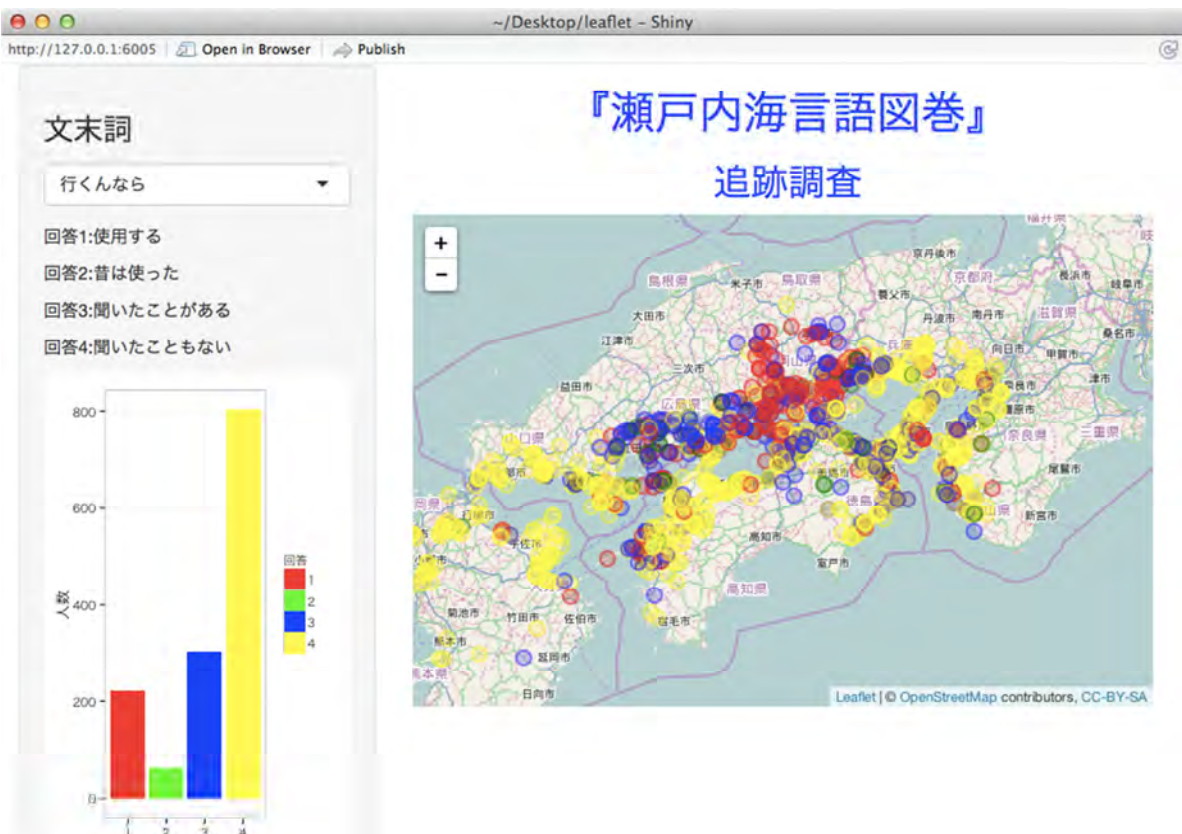


図 1 R による言語地図



図 2 属性表示例

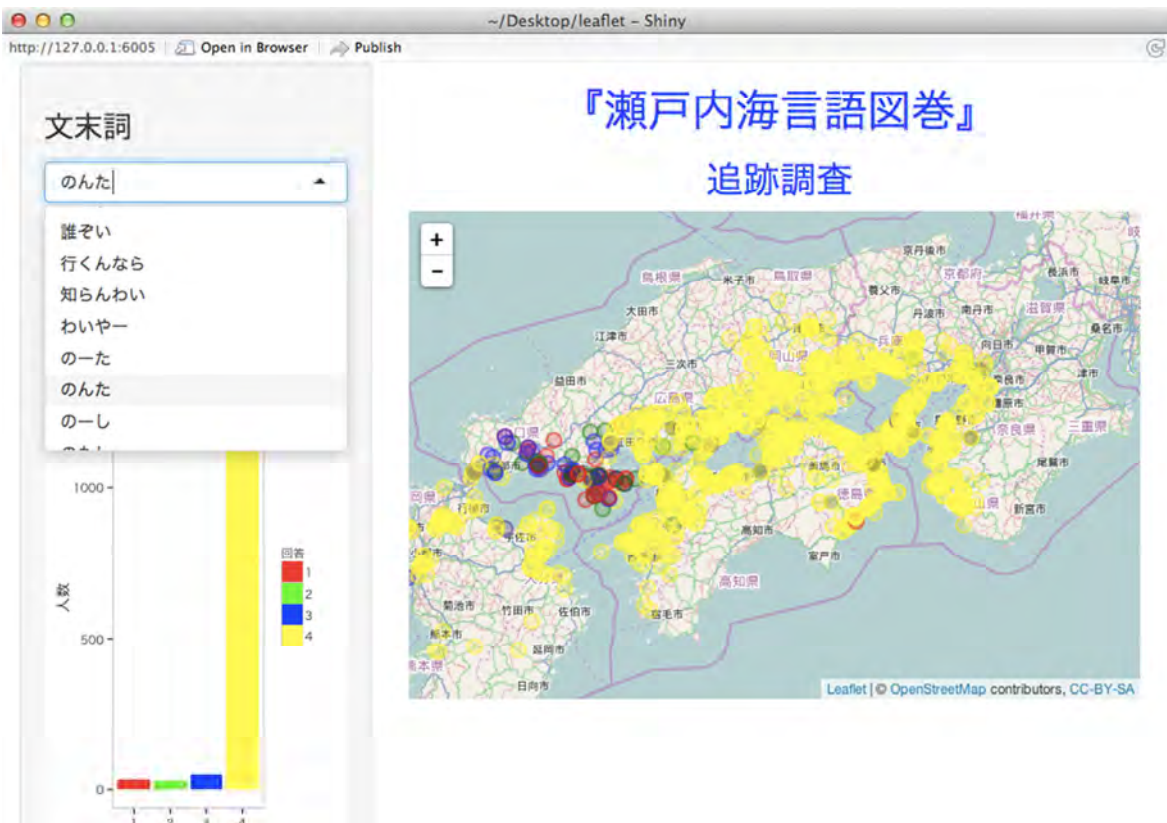


図3 プルダウンメニュー例

回答1が赤色で「使用する」、回答2が緑色で「昔は使った」、回答3は青色で「聞いたことがある」、回答4は黄色で「聞いたこともない」と色別されている。また、地図上に色別されているポイントデータは回答者の位置情報を表し、ポイントの色別により、回答1から回答4までの地理的分布が把握できるようになっている。地図は、自由に拡大・縮小することが可能で、各ポイントデータをクリックすると、話者の属性が表示されるようになっている（図2参照）。これにより、回答選択肢ごとに、話者の地理的偏りや分布の拡がりを容易に確認できるようになる。

また、文末詞は13項目にわたり、プルダウンメニューで選んで、それぞれの言語地図をインタラクティブに変更できる例を図3に示す。それに応じて、自動的に左下の棒グラフが更新される。これらは、すべてRに備わった地理情報API連携機能を活用している。このように、Leafletを使用することで、直感的に操作でき、データの全体像を俯瞰することが可能な言語地図が作成できる。またLeafletでは、多様なプラグインが公開されており、GISで利用されてきたShapeファイル^{注5}も読み込めるようになっている。ここでは、ベースマップにOSMを

利用したが、地図情報 API としては Google Map^{注6}なども利用できる。作成した言語地図は、WEB サイト上に置くことが可能になり、R を利用しなくてもブラウザ一つで閲覧可能となることが最大の利点といえる。

4. 本章の結論と今後の課題

日本の方言研究では、これまで言語地図の電子化を進めてきており、GIS ソフトを用いた言語地図化も試みられている。本章では、方言データを地図情報と関連づけ、なおかつインタラクティブに表示するシステムを構築するため、これまで進めてきた瀬戸内海を対象とした言語地理学的調査の成果に対し R および Leaflet を利用した新たな言語地図の可視化を試みた。

方言が消滅する危機が問題視されているが、方言の全体像を余さず残すには、方言の記述だけでなく、その地理的な分布をデータ化することが必要である。特に今後とも、消滅する方言を記録し、ひろくデジタルアーカイブとして一般に公開されることが重要であり、そのため WEB 上での地理情報システムを利用し、研究成果を提示できるという点は非常に魅力的である。地理情報に関わる世界中の研究者の間にもこうしたシステムを取り入れようとする動向が認められる。今後は、方言形式と実際の音声をリンクさせたシステムや、空間分析結果を並列表示できるよう拡張した言語地図の作成を行う予定である。

【注】

注1 地理情報 Application Programming Interface を指す。以下地理情報 API と称する。

注2 OSM は、Open Street Map のことであり、道路地図などの地理情報データを誰でも利用できる、フリーの地理情報データのことである

注3 JavaScript とは、プログラミング言語のひとつである。

注4 Leaflet とは、地理情報を可視化するための JavaScript ライブラリである。

注5 Shape ファイルとは、「図形情報と属性情報をもった地図データファイル」が集まったファイルを指す。

注6 Google がインターネットを通して提供している地図を指す。

Ⅲ. GIS 地図をベースとした言語分析

第9章 瀬戸内海地域における言語変化

－「コピュラ形式」を事例として－

1. 本章の目的

本章は基盤研究(A)「方言分布変化の詳細解明—変動実態の把握と理論の検証・構築—」(代表:大西拓一郎氏)の一環として実施された香川県小豆島調査で得たデータをもとに過去に同地域で行われた調査結果との比較を通して小豆島の方言がどのような移り変わりを見せているのか、言語地図の経年比較により、方言が生きてうごくすがたを捉えることをおもな目的としている。

香川県小豆島における方言調査では、国立国語研究所編(1966-1974)『LAJ』1-6集、同編(1989-2006)『GAJ』1-6集のほか、瀬戸内海域をフィールドとした方言研究の先駆的な業績として、藤原与一・広島大学方言研究所編(1974)『LAS』がある。これらはいずれも鳥瞰図的な視点に立つ、日本の言語地理学的研究の成果であるといっても過言ではない。

LAS調査が開始されてから50年以上が経過し、瀬戸内海域での言語変化がどのように進んだか、この点を明らかにするため、これまで瀬戸内海域を中心に近畿・中国・四国・九州の各沿岸部も含めた通信調査を実施した。また、おもに淡路島、小豆島といった瀬戸内海島嶼部東部域の島々においては別途、通信調査や面接調査を交えた調査を行った。これらの調査の目的は、いずれも方言の経年変化に目を向けようとするものである。

そこで本研究では、香川県小豆島をフィールドとして設定し、その南と北の対岸および淡路島にも関心を払いつつ、主として下記の調査で収集した資料にもとづき、言語変化がどのように進行しているかに注目する。なお、LAS発刊以後、瀬戸内海域での言語調査報告や追跡調査による報告として、主なものに室山・藤原(1990)をはじめ、友定編(1994)、友定(2001)、町(2002)、高橋編(2005)、灰谷(2010)などがある。また、今回、考察の中心となる瀬戸内海島嶼部東部域の追跡調査として、佐藤編(1990)、佐藤(1990)をあげることができよう。佐藤編(1990)では、LASから25年後のケーススタディとして、小豆島を中心に1986年から1988年の3年間にわたり、小豆島と小豆島四周の島や対岸など計14地点で追跡調査を実施している。こういった先行研究における調査結果にも注意を払いながら半世紀にも及ぶ歳月の流れの中で言語変化がどのように進んだのかを探ることにしたい。

2. 取り扱う調査について

本章で比較・考察の対象とするのは、LAS (1974)、徳島大学における小豆島における調査 (岸江・峪口編 2015) および淡路島調査 (岸江ほか編 2013) のほか、峪口調査 (調査期間: 2011-2014) である。

LAS は、第 2 章・4 章で紹介した調査概要に準ずる。

徳島大学における小豆島における調査 (岸江・峪口編 2015) では、第 7 章で紹介した調査概要に準ずる。なお、この調査の結果については、岸江・峪口編 (2015) に詳しい。図 1 には小豆島内における調査地点を示す。

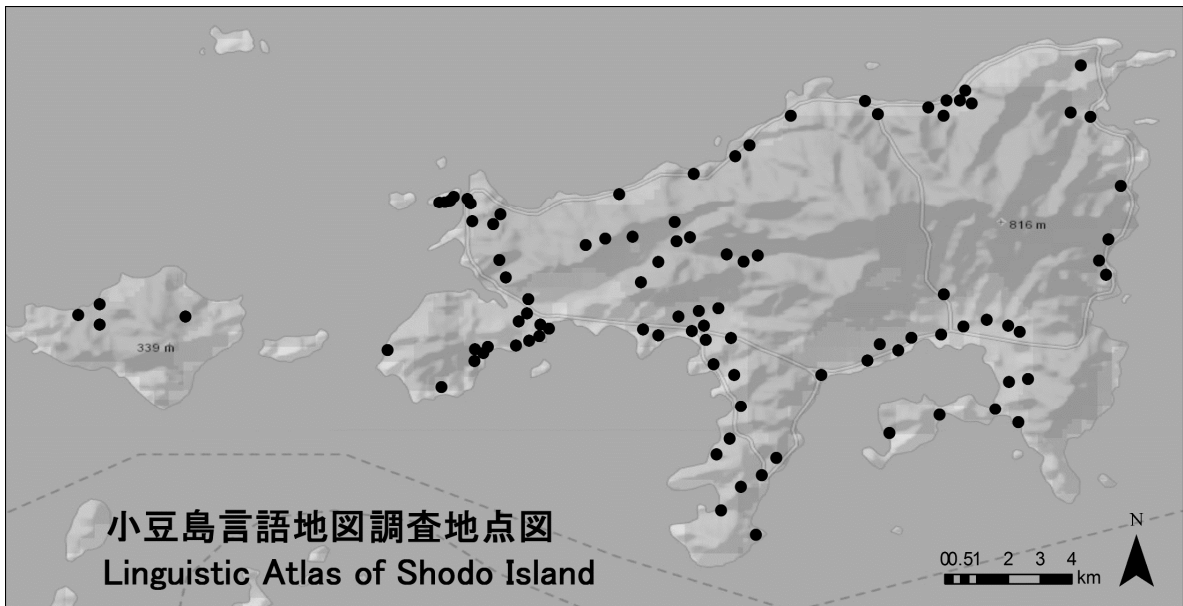


図 1 徳島大学調査地点図

淡路島調査 (岸江ほか編 2013) は、第 4 章で紹介した調査概要に準ずる。同調査報告の全容については、岸江ほか (2013) を参照されたい。

3. コピュラ形式の方言分布

3. 1. 全国分布の概観

本章では、コピュラ形式^{注1}の「だ」を取り上げ考察する。西日本は、伝統的形式として「ジャ」をまたは「ヤ」を用い、山陰は「ダ」を用いる特徴がある。

今までにこの項目を取り上げた全国調査として、国語調査委員会「口語法分布図」19 図 (明治 39 年)・LAJ (第 1 集・第 46 図「今日はいい天気だ」) が挙げられる。これら二つの調査結果で共通しているのは「ダ」が東日本と山陰にみられこと、「ヤ」が北陸・近畿に、「ジャ」がそれ以外に分布している点である。香川県小豆島付近の分布を詳しくみると、まず国語調査委員会の調査では、香川県小

豆島は「ヂャ」となっている。一方、LJ では「ジャ」「ヤ」が分布している。LAS の解説書である、藤原 (1976) では、「ダ」のもとには「デア」[dea] であり、他方「デア」から「ヂャ」[dʒa] あるいは「ジャ」[ʒa] へと変化したあと、「ヤ」が成立したとする。

瀬戸内海域においても日本語史上における断定辞の変遷の過程と同じ道を行んだということができるであろう。例えば「ジャ」の前身である「デア」ないし「デア」は後述するように東讃方言で確かに観察されている (岸江編 2011)。

以下では、コピュラ諸形式の分布の特色を踏まえて、言語地図を概観する。

3. 2. 「一だ」における方言分布の概観

まず LAS 第 59 図「火事だ」から作図^{注2}した図 2 (LAS 老年層図) を取り上げる。瀬戸内海東部域では「ヤ」が和歌山、大阪府、兵庫県など大阪府沿岸部で使用されるのに対し、淡路島北部では「ヤ」を使用し、南部に行くほど「ジャ」の使用が目立つようになる。つまり関西中央部の「ヤ」が淡路島へ流入したあと、南下している状況をつかむことができる。一方、小豆島では「ヤ」はまだこの段階には至らず、「ジャ」が優勢だといえる。兵庫・岡山県境では「ヤ」と「ジャ」が相対峙している様子がわかる。さらに四国地方の沿岸部をみると、「ジャ」の使用が目立つ。これに対して図 3 (LAS 少年層図) では、「ヤ」が西進している様子をつかむことができる。大阪湾岸域で「ヤ」が使用されているのは老年層図と同じだが、明らかに相違する点は島嶼部の淡路島、家島諸島、小豆島で「ヤ」の使用地域がひろがっていることである。淡路島では先述したように、北部から入ったとみられる「ヤ」がその使用領域を拡大させ、南あわじ市にまで達している。ただし、淡路島南部ではコピュラ形式が用いられず、文末詞^{注3}のみの形式が多いことが窺える。さらに小豆島では、小豆島町を中心に「ヤ」が広域にひろがっている。家島諸島でも、老年層図では「ヤ」と「ジャ」が混在していたが、少年層

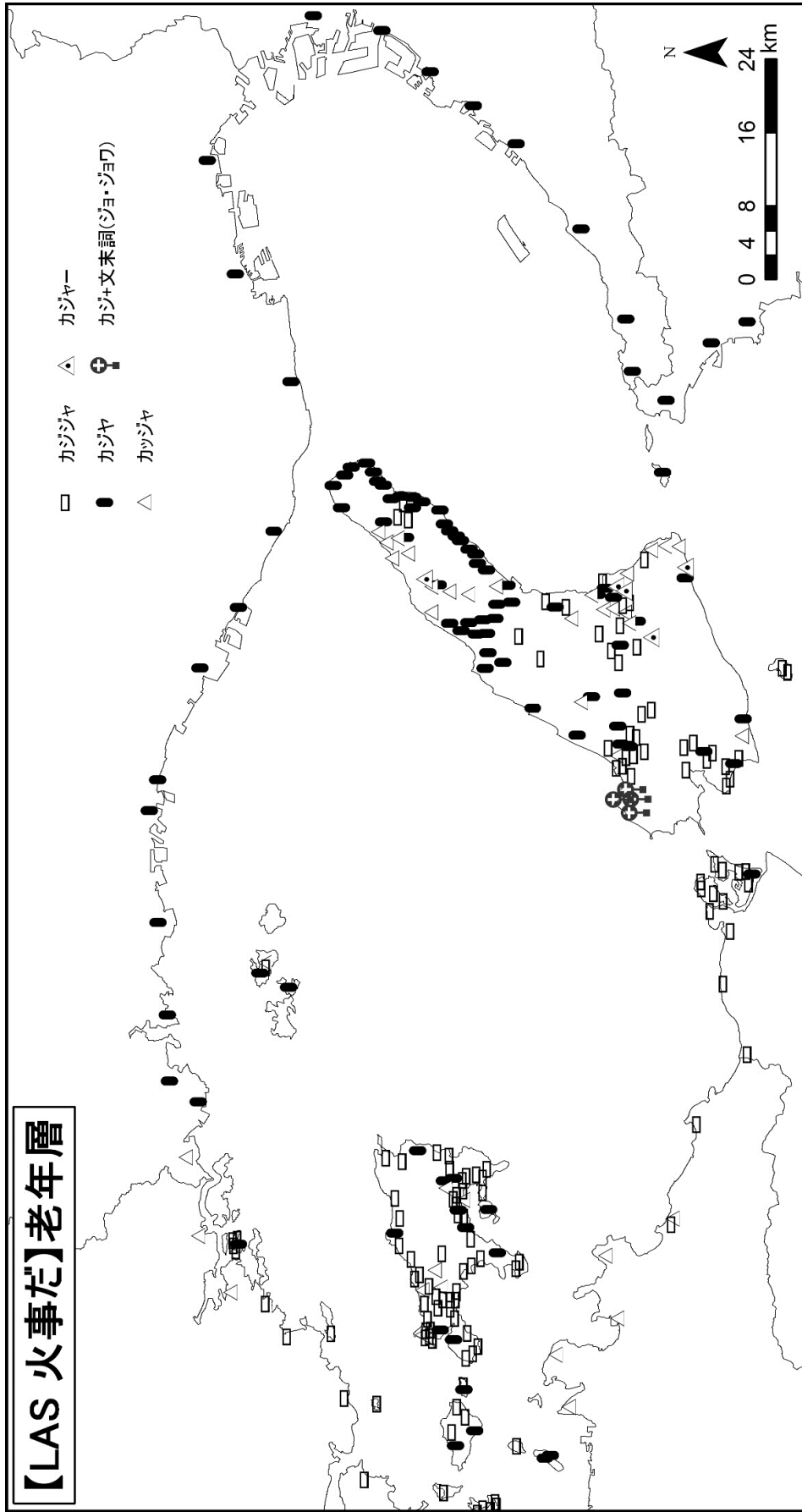


図2 LAS 第59から作図(瀬戸内海東部)「火事だ」

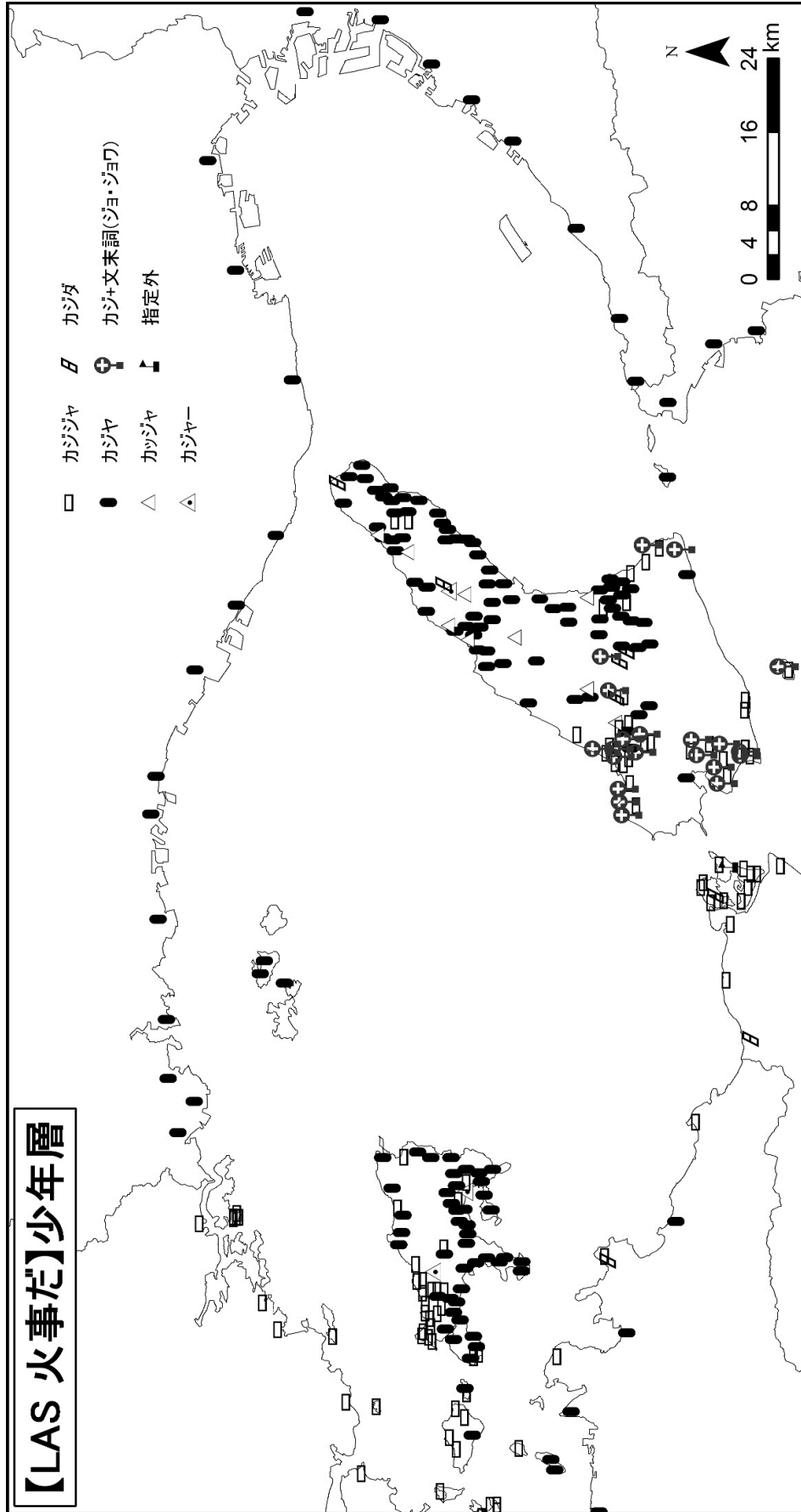


図3 LAS 第59' 図から作図 (瀬戸内海東部) 「火事だ」

図では「ヤ」と「ジャ」が混在していたが、少年層図ではすべて「ヤ」に変化している。つまり、LAS 老年層・少年層の両図は、「ジャ」から「ヤ」に移行していく言語流動の様子を物語っているといっても過言ではない。

徳島大学における小豆島調査の結果から作図した図4を概観する。土庄町と小豆島町とで「ジャ」と「ヤ」が対照的なのが見える。小豆島町の「ヤ」は、「ジャ」からの変化であることが、LAS との比較から一目瞭然であるが、すでに LAS については概観したとおりである。瀬戸内海全域の老年層での分布上の特色として藤原（1976）が「だいたいには、「ジャ」の勢力が、中部以西にかなりさかんである。東部に「ヤ」がよく見られるのは、おそらく後生の「ヤ」が近畿中心に、新しく、その勢力を西にのばしたことを示すものであろう」と指摘しているように、小豆島にもその影響が及んでいるとみることができる。また、四国本土側の香川県各地でも、小豆島町と同様、「ジャ」から「ヤ」への変化が急速に進んでおり、小豆島町はこの変化に足並みをそろえたということもできよう。とくに小豆島町の東部域は、関西方言との関連が濃厚であり、「ジャ」から「ヤ」の変化がすでに完了した関西中央部からの影響であるといえることができる。淡路島では、この変化が老年層においてもほぼ完了している（岸江ほか 2013）こともこの影響を考える上での資料となるだろう。土庄町では、中心部の土庄町土庄で「ジャ」よりも「ヤ」が優勢なのに対し、北西部の四海地区から大部にかけての海岸線の集落や、土庄町の山間部ではジャが優勢である。コンピュータ形式に関しては、小豆島内では伝統的な形式の残存地域が北部で顕著であるといえることができる。これはどのような理由によるものであろうか。「ヤ」は瀬戸内海域を含め、主として、四国・九州などで広がりつつあるが、中国地方へはほとんど浸透していないというのが実状である。小豆島北部域の方言は、中国方言、特に岡山方言との関連が深く、「ジャ」の分布を同地域で考える上で、この点も無視できない点である。

瀬戸内海東部域の現状をみるために、峪口調査にもとづき作成したのが図5である。図5でも、和歌山・大阪府・兵庫県各沿岸部では LAS 図と同様、ほぼすべての地点で「ヤ」が回答されている。淡路島では、南部に位置する沼島まで「ヤ」の使用が目立つ。淡路島では「ダ」の使用が洲本市、南あわじ市にみられるが、これは断定辞とみるよりも文末詞とみるべきものであろう。また四国側の鳴門市付近には「ジャ」が目立つのに対し、香川県沿岸部では「ヤ」の使用が目立つようになっている。一方で、兵庫県と岡山県の県境では、依然として「ヤ」と「ジャ」が相対峙している。岡山方言では近畿圏から「ヤ」の侵入をかたくなに拒否し続けており、「ジャ」→「ヤ」への変化の進行に歯止めかけられているといえることができる。

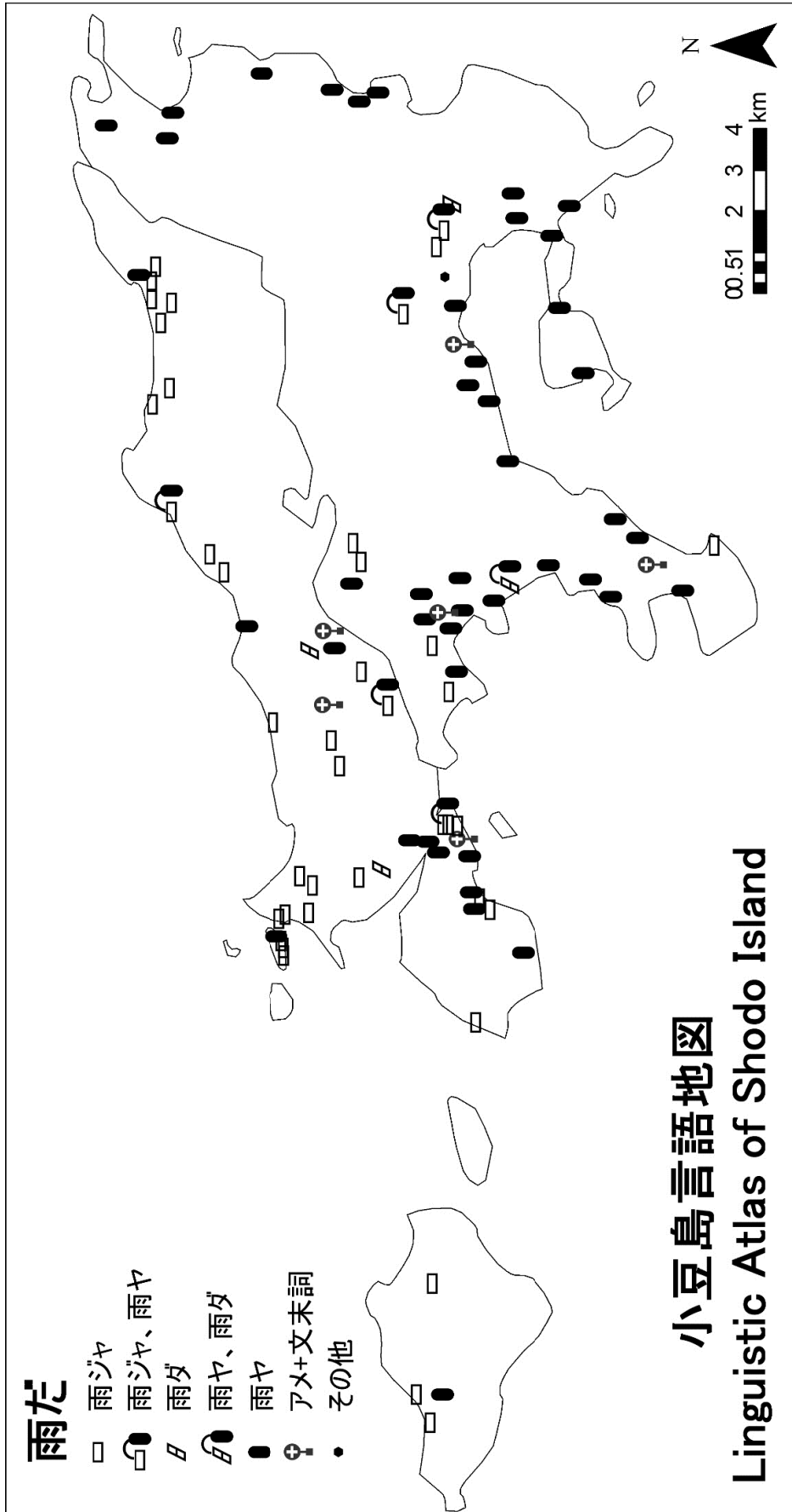


図4 徳島大学調査「雨だ」

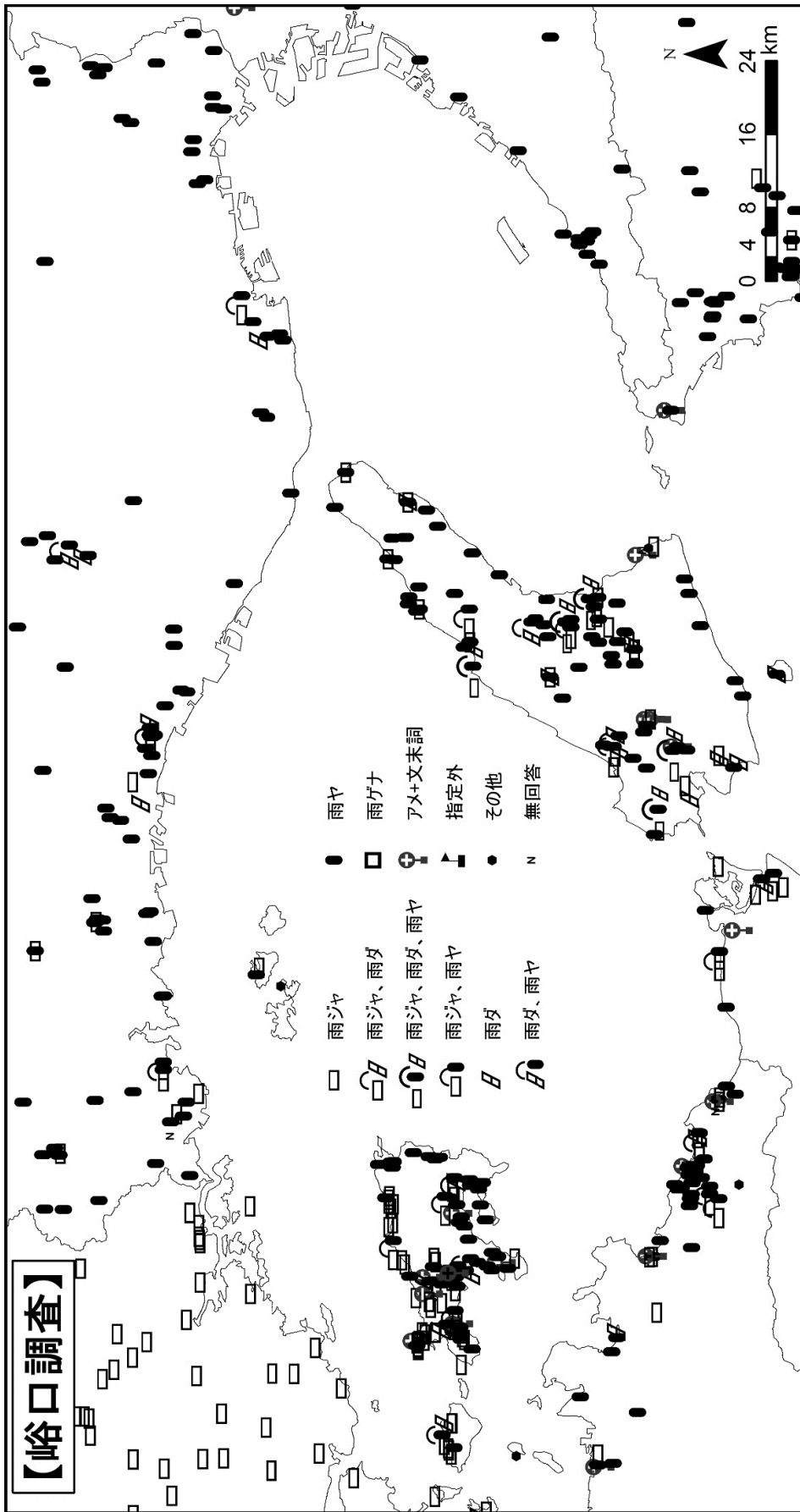


図5 峪口調査「雨だ」

LAS において見かけ時間上に映し出されていた変化が、実時間上においても確かめられ、近畿中央部の「ヤ」が瀬戸内海東部域において着実に西進していく様子が窺える。

3. 3. 「-だった」における方言分布の概観

ここでは、コピュラ過去「だった」についてみていく。LAS では、コピュラ過去の項目は取り上げられていなかったため、徳島大学調査と峪口調査のそれぞれの結果を対照しつつ考察していくことにする。

まず、徳島大学調査による図 6 の結果を概観する。「雨だ」と同様、「雨だった」でも土庄町と小豆島町とで「ジャッタ」と「ヤッタ」の分布が対立している。土庄町では、北部で「ジャッタ」が依然根強く、中心部の土庄旧市街地では「ヤッタ」の回答しかみられない。これに対して、小豆島町では、一部、中山などの山間部に「ジャッタ」があるのを除き、全体的に「ヤッタ」が優勢である。「ジャッタ」から「ヤッタ」への変化が進んでいるが、やはり小豆島町での変化が先行していることがわかる。また、土庄町では中央部から変化が始まっている様子が窺える。小豆島では、「雨だ」「雨だった」のいずれの場合も、「ジャ」から「ヤ」への移行が認められ、特にこの変化は小豆島町で進んでいることが、ともに確認されたことになる。コピュラ形式のテンス現在同様、この場合も、土庄町の北部では中国地方、特に岡山方言の影響が大きく、このことが、この変化の進行に歯止めの可能性をかけていることも否めないだろう。

ところで、香川県および徳島県の東部地域および淡路島では、「雨だ」「雨だった」のコピュラ形式が、岡山（ジャ・ジャロー・ジャッタ）、大阪（ヤ・ヤロー・ヤッタ）とは異なり、足並みが揃わない傾向がある。例えば、徳島や香川東部では、言い切りが「アメジャ」なのに対し、「アメダロ（一）」「アメダッタ」、淡路島でも「アメヤ」に対し「アメダロ」「アメダッタ」といった不揃いとなる地点が多い。

小豆島各地では、これら 3 形式は足並みを揃えており、土庄町の、特に北部域では岡山に近い。一方、小豆島町でも、どちらかと言えば、大阪に近いと考えられる。いずれ関西中央部からの影響が島内各地におよび、ジャ系が衰退し、ヤ系に統一されていくことは必須であると見られるが、今後、中国地方、特に岡山方言などとの比較をはじめ、四国本土側との変化がどのような経過を辿るか、注目する必要があるだろう。

瀬戸内海東部全域の言語変化をみるために、峪口調査による結果（図 7）をみることにしたい。和歌山、大阪府、兵庫県各沿岸部では、ほぼ「ヤッタ」が使用

されているが、淡路島では、「ヤッタ」が島内にひろがろうとする一方で、「ダッタ」の使用もみられる。上述したコピュラ形式の足並みが揃わない傾向が特に淡路島南部にみられる。

小豆島では、「ジャッタ」が各地で散見されるが、「ヤッタ」の勢力が優勢になっている。その中でも「ジャッタ」が土庄町北部域に多いことがわかる。また豊島も「ジャッタ」になっている。さらに兵庫県から岡山県にかけて、「ヤッタ」から「ジャッタ」に移り変わっている。岡山県日生は、兵庫県からの影響を受けている地域で、「ジャッタ」「ダッタ」が入り交ざっている。日生の西部では、すべて「ジャッタ」となるが、この地域はすでに岡山方言の領域である。岡山に近い香川県豊島や井島などの島嶼部は、「ジャッタ」の使用が優勢である。

この点から、香川県の島嶼部は、岡山方言の影響を色濃く受けていることがわかる。四国側に目を移すと、徳島県では「ダッタ」の使用が多いが、「ジャッタ」と「ヤッタ」の分布も確認できる。香川県東部を中心に「ダッタ」の使用も目立つが、一方で「ヤッタ」の勢力が西進している様子を呈していることがわかる。

つまり、コピュラ過去になると、内海島嶼部では「ジャッタ」が「ヤッタ」に次第に変化し、分布域を西へと伸ばしている傾向を看取できるが、中国地方、特に岡山方言の影響が大きく、「ヤッタ」の進行に歯止めの可能性をかけているといえる。一方で淡路島南部や徳島・香川の四国東部地域では「ダッタ」の使用が地域を限定して、増えてきていることも判明した。

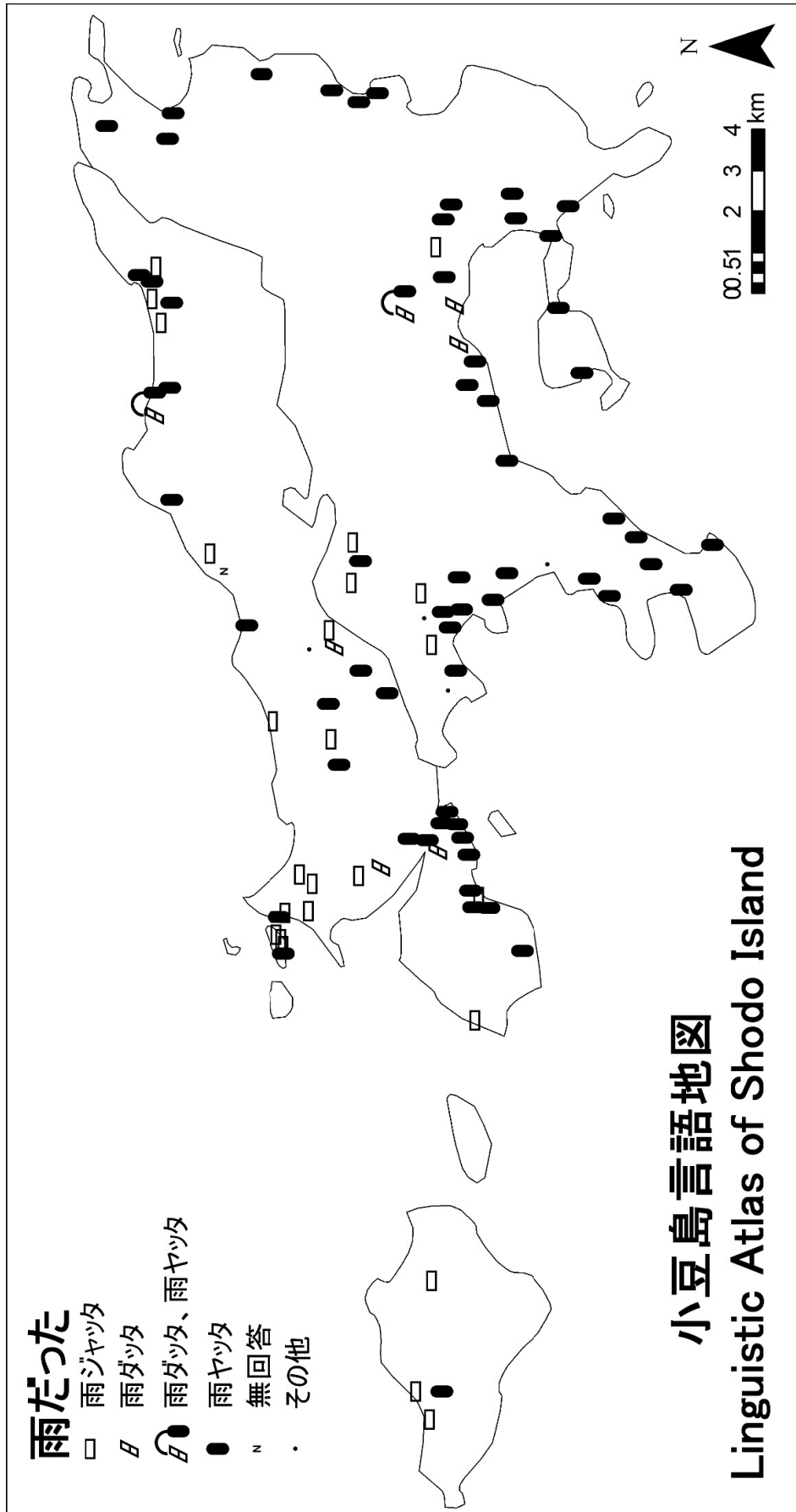


図6 徳島大学調査「雨だった」

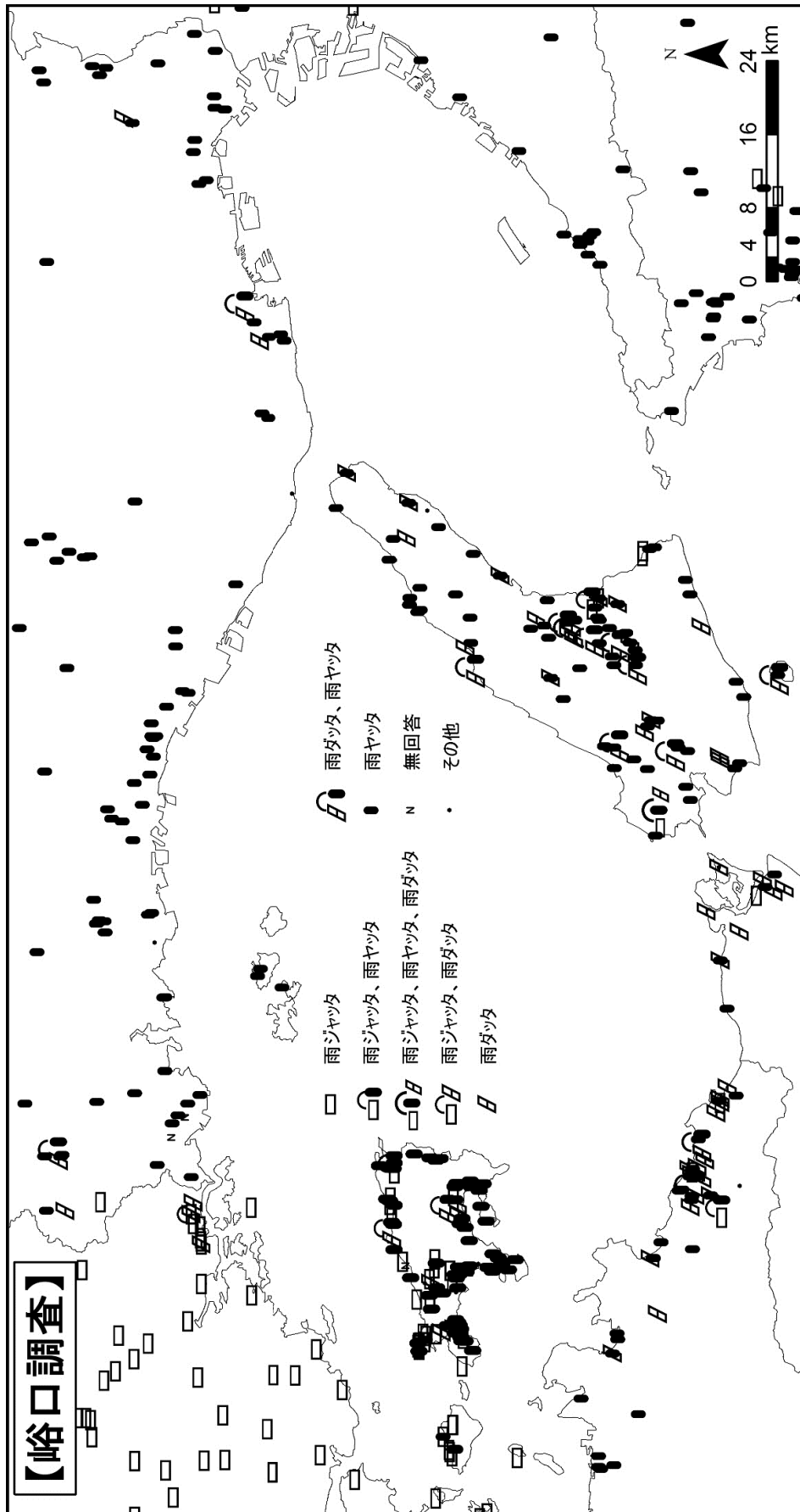


図7 峪口調査「雨だった」

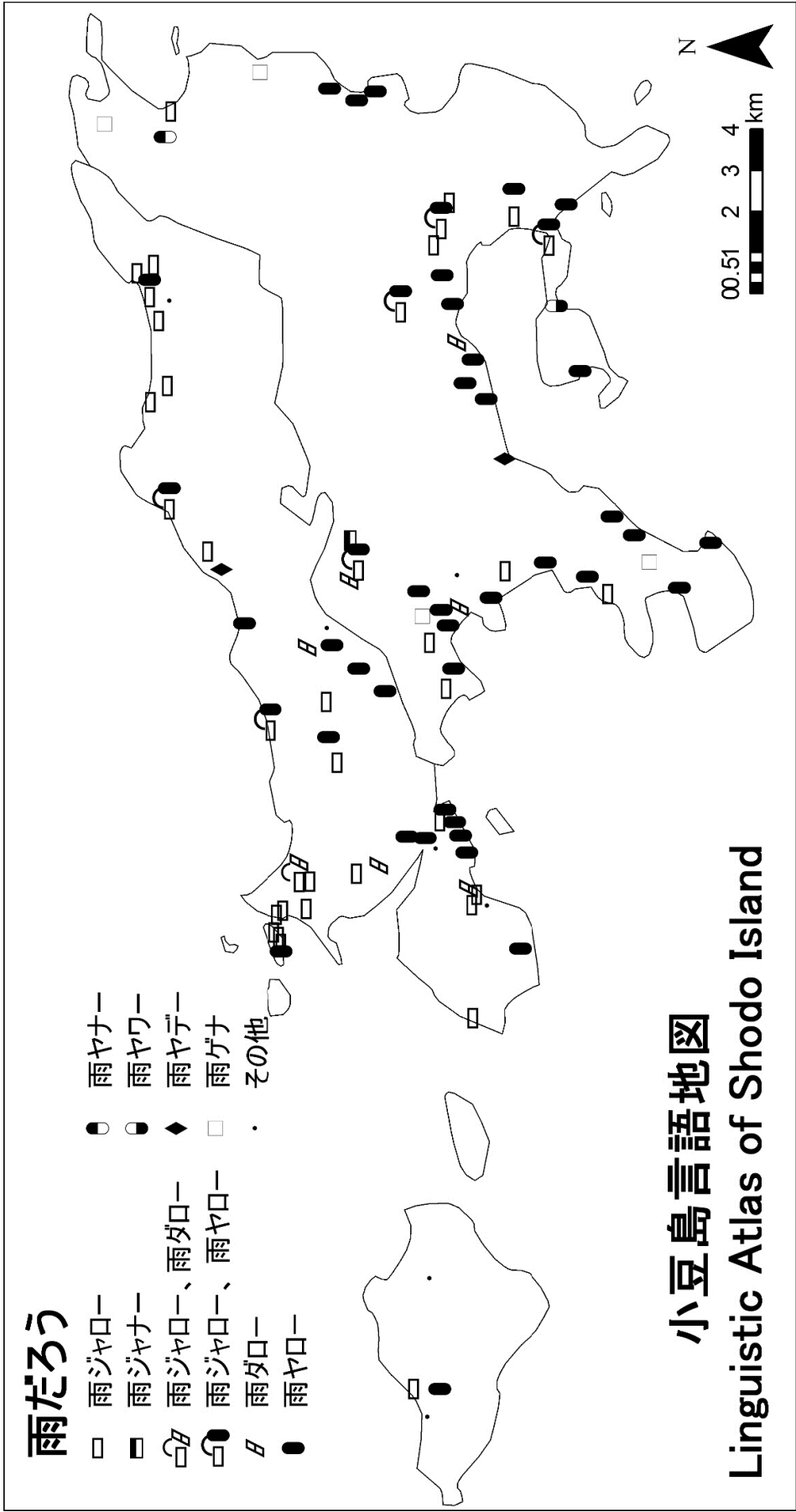


図8 徳島大学調査「雨だろろう」

3. 4. 「-だろう」における方言分布の概観

まず、徳島大学調査の言語地図からみていくことにする。コピュラ形式関連として、推量形式の「雨だろう」についても付言しておきたい。「雨だろう」には、主に「雨ジャロー」「雨ヤロー」「雨ダロー」「雨ゲナ」などの形式が分布するが、先の項目「雨だ」の場合とほぼ並行しており、土庄町では「ジャロー」、小豆島町では「ヤロー」がそれぞれ優勢である。

岸江ほか編（2012）によると、香川県本土側の各地において「ジャロー」から「ヤロー」への世代変化がみられることから小豆島内においても、この変化が進行中であるということができ、さらに土庄町よりもむしろ小豆島町で先行していることがわかる。ただ、注目しておきたいのは、小豆島の中心地である土庄町土庄では「ジャロー」よりもむしろ「ヤロー」の方の回答が多い点である。この傾向は、「雨だ」の「ジャ」「ヤ」の場合でも同様であるが、土庄町内でもすでに中心部では変化がほぼ完了しつつあるとみることもできる。なお、大阪など近畿中央部で起きた変化と軌を一にしていることから四国地方でのこの変化は近畿中央部からの影響によるものであろう。

「ダロー」は、四国東部を中心にまとまった分布がみられる。岸江編（2011）によると、香川県東部と徳島県全域においてダローの分布が広範囲に分布していることが確認でき、小豆島においても西側の集落にこの形式が散見される。岸江編（2013）から淡路島においてもこの形式が特に西部に多くみられることがわかる。この形式は、共通語の直接の影響によるものではないであろう。コピュラ形式の変遷の過程からは「であり」の「であ」から「ジャ」或いは「ダ」へとそれぞれ変化したとみるのが一般的であり、小豆島や淡路島には「であ」の使用はみられないが、四国東部、特に高松市など東讃地域（香川東部）の老年層では、「ダロー」「ダッタ」の前身にあたる「デアロー」「デアッタ」が報告されている（岸江編2011）。

4. 本章の結論

本章では、経年変化を焦点に瀬戸内海東部域におけるコピュラ形式について詳しくみてきた。瀬戸内海東部をみると、時間が経つことにより「ヤ」が西進していく様子をつかむことができた。今回フィールド調査対象地域として設定した小豆島においては、小豆島町と土庄町とでは言語変化に差があることも判明した。さらに、コピュラ形式においては、見かけ時間上の変化は実時間上の変化とほぼ一致していた。

LAS では見かけ時間上の比較として、老年層と少年層の二層の言語地図を掲載

しており、今回の 50 余年を経た今回の一連の追跡調査では、このうちの少年層の結果にも注意を払った。すなわち、LAS の調査時において少年層であった話者は、現在 60 歳を超える年齢に達しており、今回、追跡調査での老年層の結果とどの程度一致するかが興味深く思われる点であった。もちろん当時の話者を探し回答してもらおうということはできなかったが、比較の結果、おおむね、LAS における少年層での結果が今回の老年層を対象とした結果と一致したといえる。

なお、今後さらに瀬戸内海全体へと地域をひろげ調査を継続するとともに、他項目の分析を行い、言語変化と分布変化の関係について考察を加えていく予定である。

【注】

- 注 1 「今日はいいい天気だ」「今日は雨だ」などにみられる、断定の助動詞を指す。
- 注 2 言語地図は見やすくするため、LAS で調査対象とした、瀬戸内海全域を便宜的に二分した。なお、峪口・岸江（2013）で紹介したように、現在、LAS の追跡調査を進めると同時に、LAS の電子化（GIS を利用した言語地図化）を進めている。
- 注 3 LAS と同様に淡路島南部を中心にみられる「カジジョ」「カッジョ」「カジジョワ」などは、凡例の中で「カジ+文末詞」として整理した。

第 10 章 瀬戸内海地域における言語動態

－文末詞「ノーシ・ノモシ」「ゾイ」を事例として－

1. 本章の目的

本稿では、文末詞を取り上げ、当該地域の言語変化を考察する。日本語の文末詞については、藤原（1953、1972）が文末詞の存在と重要性を指摘し、『日本語文末詞<文末助詞>の研究上・中・下』（1982 - 1986）、『文末詞の言語学』（1990）など多岐にわたる研究が進められてきた。

藤原（1990）によると、文末詞を「文表現の末尾に立脚し、遊離独立して、文表現のそこまでの意味作用を発展的に集約するもの」と定義している。方言における文末詞は、表情豊かで親しい者の間の会話には特に使用される。文末詞の中で、最も多用されるのは「ネー」「ナー」「ノー」で、ナ行音文末詞であり、本来は感動の声を表している。ヤ行音文末詞も、感声的文末詞と区別されている。

また通時的研究として、大野（1988）・藤原（1990）はヤ行音の文末詞は、日本語史上、かつて盛んに使用されていたと指摘している。さらに、佐々木・藤原（1998）では、ナ行音文末詞とヤ行音文末詞の分布を地理的に解釈し、近世後期の資料として『浮世風呂』の調査結果を加え、上古から近世後期までのナ行音文末詞とヤ行音文末詞の様相をある程度つかむことができたとしている。

瀬戸内海域においても文末詞は広範にわたり、日常盛んに使用されている。主に、ナ行音文末詞、ヤ行音文末詞、サ行音文末詞、カ行音文末詞、ワ行音文末詞などのほか、これらの文末詞が相互に複合化し、複合形文末詞も多く認められる。瀬戸内海の文末詞については、藤原（1958）、佐藤（1975）、江端（2001）など、大半が記述的研究としてまとめられたものが多く、言語地理学的に解釈した報告はけっして多いとは言えない。

そこで本章では、瀬戸内海域における複合形文末詞の中から「ノーシ・ノモシ」「ゾイ」の分布に焦点をあて、言語地理学的な視点から実時間上の言語変化を探りたい。

2. 取り扱う調査について

本章で比較・考察の対象とするのは、LAS（1974）と峪口調査（2011-2014）である。

LAS は、第 2 章・4 章で紹介した調査概要に準ずる。

峪口調査は、LAS 追跡調査を行うため、瀬戸内海島嶼および沿岸における全域

調査を 2011 年から約 4 年間にわたって実施した。この調査では、通信調査を主とし、一部、臨地調査で補いながら、約 1,500 地点において各地生え抜きの老年層の方々のデータを収集した。なお、峪口調査の地点は、LAS と比べ広域に調査地点があることから、LAS と同じ調査範囲内のポリゴンデータを作成し、その範囲内のポイントデータを空間検査し取り出し作図を試みている。これら二つの調査結果の比較を行い、方言の経年変化といった視点から言語変化の動向を探る。

峪口調査で取り上げた文末詞の質問項目は以下の通りである。

(1)「誰ぞい」(2)「どこに行くんなら」(3)「知らんわい」(4)「大きな魚がおったわいや」(5)「今日は、暑いの一た」(6)「今日は、暑いのものた」(7)「今日は、暑いの一し」(8)「今日は、暑いのものし」(9)「今日は、暑いなものし」(10)「今日は、暑いなー」(11)「今日は、暑いの一」(12)「今日は、暑いの一れ」以上のアンケート項目に対して、4つの回答項目を設けた。「①使用する」「②昔は使った」「③地元の人が使っているのを聞いたことがある」「④この土地では聞いたこともない」である。具体的に取り上げる質問項目は、ナ行音複合形文末詞「ノーシ」「ノモシ」、サ行音複合形文末詞「ゾイ」である。

3. 文末詞「ノーシ・ノモシ」における方言分布の概観

「ノーシ」「ノモシ」について詳しくみていく。まず、「ノーシ」「ノモシ」は、「ノ」の文末詞と「モシ」の複合形である。「モシ」は、「申し」で敬意を表している。また念を押ししたり軽く詠嘆したりする意を表すときに使われる方言である。

藤原(1996)は、「ノーシ」について、すべてあらたまつた丁寧な言い方であると指摘している。藤原(1988)『瀬戸内海言語辞典』から使用例を掲げる。

- マインチ ヨー フル ノーシ。(毎日よく降りますわねえ。老女→中男)
- イマー ノーシ。(今はねえ。中女→老女)

また、間投詞のように使うこともあり、以下が使用例である。

○テマイニャー オゴツツォサンニ ナリマヒテー。(以前には、ねえまあ、家内じゅうがご馳走さまになりまして、ありがとうございます。老女→中男)



図1 LAS 第114図から作図「ノーシ・ノモシ」(瀬戸内海東部)



図2 LAS第114図から作図「ノーシ・ノモシ」(瀬戸内海西部)



図3 LAS第114'図から作図「ノーシ・ノモシ」(瀬戸内海東部)



図4 LAS第114'図から作図「ノーシ・ノモシ」(瀬戸内海西部)

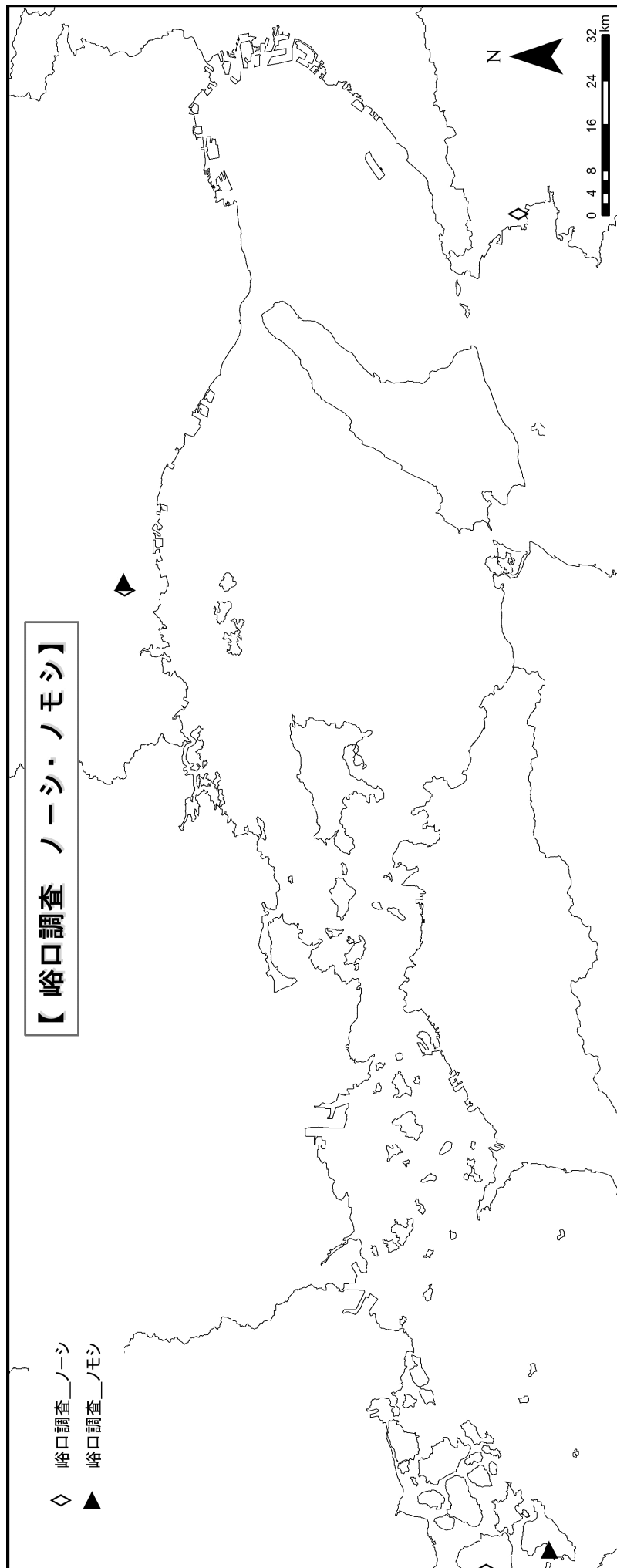


図5 峪口調査「ノーシ・ノモシ」(瀬戸内海東部)

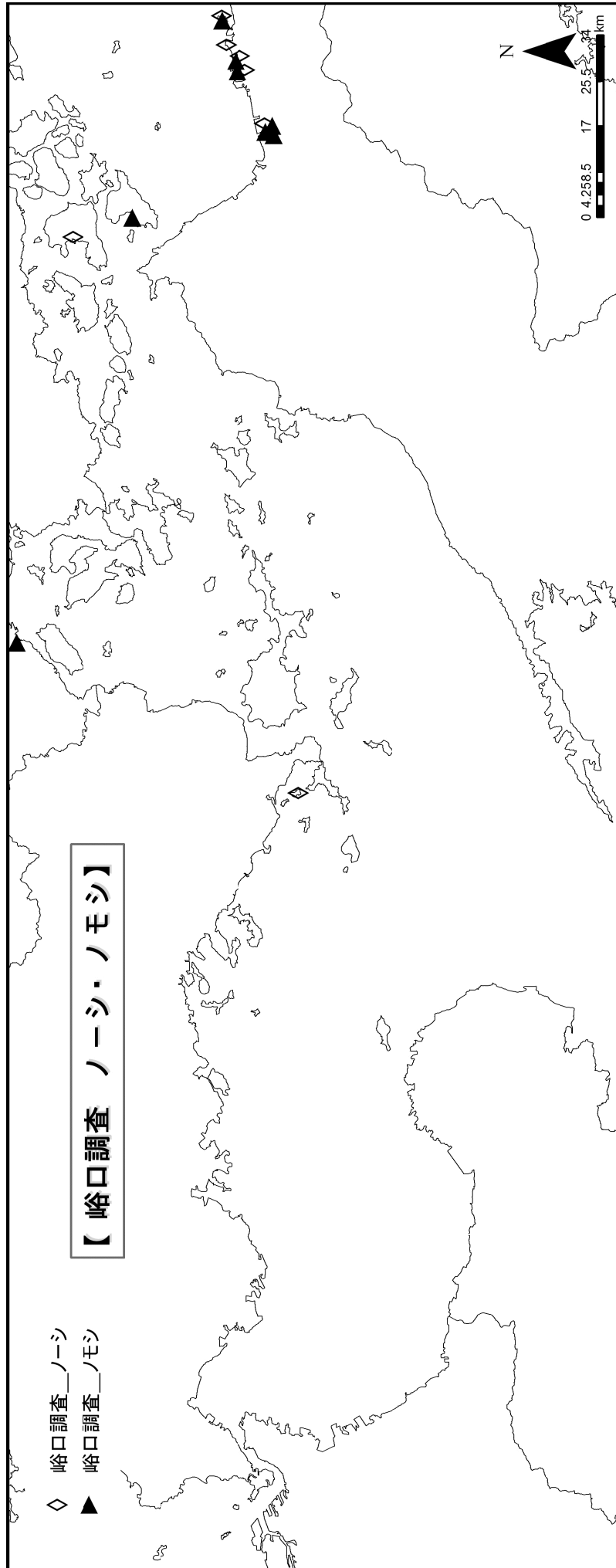


図6 峪口調査「ノーシ・ノモシ」(瀬戸内海西部)

藤原（1986）によると、「ノモシ」は愛媛県下に盛んに使用がみられ、主として県北域で使用されるという。瀬戸内海域で使用の確認ができる地域は、四国では伊予に多くみられ、近畿南部も「ノモシ」類の地域をなしている。

以上の使用法や使用地域を踏まえて言語地図を概観する。

図1・図2は、LAS第114図「ノーシ・ノモシ（文末詞）」老年層図を言語地図化^{注1}したものである。「ノーシ」が、愛媛県大三島と大下島に分布が確認できる。さらに「ノモシ」は、やはり愛媛県大三島と大下島にまとまって分布し、「ナモシ」は、愛媛県西部に分布している。また「ノンシ」が、愛媛県新居浜市大島と広島県大崎下島とに確認ができ、「ノシ」が和歌山県下でも使用されている。和歌山県の「ノシ」以外は、主として愛媛県下にみられ、分布が限られていることがわかる。続いて、LAS第114図「ノーシ・ノモシ（文末詞）」少年層図（図3・図4）をみる。少年層図では、「ノーシ・ノモシ」類の分布がみられない。地図上には使用を示す記号が確認できず、LAS時の少年層においては「ノーシ・ノモシ」が完全に消滅したということを意味している。なお、回答がないにもかかわらず、地図を掲載しておくことにしたのは、経年変化を比較するためである。

次に、峪口調査（図5・図6）の「ノーシ・ノモシ」の結果をみていく。「ノーシ」は、LAS老年層図と同様に、愛媛県大三島に僅かだが、使用の追認ができた。「ノモシ」に関しても、老年層図と同様に、愛媛県大島に僅かだが分布していることがわかった。さらに、LASでは現れなかった地域に「ノーシ・ノモシ」の分布がみることができ。まず、愛媛県東予の沿岸付近に「ノーシ」「ノモシ」の、まとまった分布が確認できる。また、山口県島嶼部、佐合島付近にも「ノーシ」の使用がみられる。さらに和歌山県沿岸に「ノシ」を確認することができた。全体的にみると、「ノーシ・ノモシ」類の分布数は減少したものの、やはり愛媛県島嶼部や沿岸にまとまった分布をみせていることが明らかとなった。そこで、LAS老年層図にみられた分布が、少年層図では分布が消えてしまったのに、なぜ峪口調査で追認することができたのか、考察していくことにしたい。まず、今回の調査では50年前の同一人物に対して追跡調査をしているわけではなく、また面接調査と通信調査といった調査方法の違いにも考慮しなければならないのは言を俟たない。ただ、LAS時、少年だった話者たちは、すでに文末詞「ノーシ・ノモシ」類に関して、当時、高齢者が使用する伝統的な方言形式という認識をすでにしていたと思われ、聞くことはあっても使用しなかったものと思われる。

一般的に使用はしないが、聞くことはあることばの数は、実際の使用語よりもはるかに多く、このようなことばは、使用語に対して理解語と呼ばれることがある。方言が中心となる地域言語社会においても同様で、少年時代、大人が話すこ

とばを理解語として受容するが、その土地で成長するにしたがって理解語は次第に使用語となっていくこともあると考えられる。このことは、Giles & Powesland (1975) による *Speech Accommodation Theory* (アコモデーション理論) によっても裏付けられるであろう。地域社会のなかで子供から大人へと成長する過程で、年齢や地位に応じた話し方へと調整するといった作用が働くのである。地域社会の成員として意識し、成員としてのアイデンティティを確立させるためには、地域の文化や慣習について知る必要があるとともに、大人社会で話される伝統方言を話すことが自ずと求められるのである。

敬語習得の例を取り上げてみよう。少年時代から大人社会で行われている敬語運用を身につけ、誰もが敬語を巧みに運用するとは考えにくい。柴田 (1995) が述べているように、敬語習得の場合には、実社会に出る頃、つまり社会性を獲得する段階に達してから本格的に敬語の運用について学ぼうとする意識が芽生え、敬語運用の方法を獲得するようになるのである。ところで、このようなケースは、決して敬語だけではないはずである。大人社会でしか用いられないような伝統的な慣習や儀式 (例えば冠婚葬祭など) に関することばも同じく、大人社会に入ってから必要に応じて覚え、使用語となるのである。方言社会ではこれら以外にも、伝統方言とされるものは、老年層でしか使用されないというレッテルが貼られているものも多々ある。文末詞「ノーシ・ノモシ」はまさにこれに該当し、少年時代には老年層しか使わないことばという認識があったとみられる。しかし、地域社会で次第に歳を重ねていくうち、使用語へと転じたのである。図7・図8で使用が確認されたのはそのためと思われる。

藤原 (1976) は、少年層図のことを「載せるものがない。「すなわち「ノモシ」「ナモシ」などは、もはや、若い人々には無縁のものになってしまっているのである。」と結論づけているが、おそらく、老年層と少年層の方言の比較、すなわち見かけ時間からの比較においてみられなかったのである。文末詞「ノーシ・ノモシ」は、少年層での使用語は皆無であったものの、衰退し完全に消滅することはなかったのである。文末詞「ノーシ・ノモシ」の使用地域は限定されるものの、使用地域では一旦は理解語として受け継がれつつも、高齢者の仲間入りをした50年前の少年たちによって今、確かに使用されていることが明らかとなった。

4. 文末詞「ゾイ」における方言分布の概観

ここでは、「ゾイ」について詳しくみていくことにする。まず、複合形文末詞「ゾイ」は「ゾ」が「イ」と一緒になったもので、「ゾイ」の下に、さら「ナ」「ノ」などがつくこともある。

「ゾイ」は単独の「ゾ」と比べて、聞き手への働きかけの上で、いくぶんやわらかい印象を受ける。「ゾ」は、強調意図を表したり、感動を表出したりする場合に用いられるほか、聞き手にもちかけたりする働きもある。

これに対して、「ゾイ」は、相手へのもちかけ（働きかけ）がより一層明確である。藤原（1996）は、「ゾイ」は「ゾ」から変化したものであると考察し、問いや誘い、さらには推量を表すばあいなどにも用いられると指摘している。

また藤原（1985）では、通時的な視点から「ゾイ」は、早く、狂言詞集その他にみられると述べ、「ゾイ」が「ゾヨ」から変化し、成り立たと推定している。以下では「ゾイ」「ドイ」の使用例を、藤原（1988）『瀬戸内海言語辞典』から引用する。

○ソナコラニ アロー ゾイ。（そのへんにあるだろうよ。 老女→夫老男）

○ナン ドイ。（それ、何？ 小男→母中女）

また、児童などが使用する場合には、ゾイがツォイのように聞かれることもあるという。あどけなさが残る発音によるものであろう。なお、「ゾイ」の複合形には「ノゾイ」「ンゾイ」などの使用があると記述している。

瀬戸内海域で使用の確認ができる地域は、四国では香川県西部、愛媛県全域、徳島県全域、山口県島嶼部、広島県島嶼部に多くみられ、近畿では兵庫県西部、和歌山県全域と広範囲に渡り使用されている。

以上の使用法や使用地域を踏まえて言語地図を概観する。

図7・図8は、LAS 第103図「ゾイ（文末詞）」老年層図を言語地図化したものである。図7は瀬戸内海東部域、図8は瀬戸内海西部域をそれぞれ表している。「ゾイ」が兵庫県淡路島・香川県小豆島に広く分布している。四国では徳島県鳴門市のほか、香川県島嶼部を経て、愛媛県島嶼部へと、広がっている様子が窺える。

また、「ゾイ」から派生したとみられる「ドイ」が主に小豆島・愛媛県島嶼部に分布している。同様に「ゾー」から変化したと思われる「ドー」は、香川県小豆島・広島県向島・山口県大島長島・愛媛県西部島嶼部などに分布を確認することができる。

続いて、LAS 少年層図（図9・図10）をみると、老年層図と比較して「ゾイ」の分布が明らかに減少していることがわかる。兵庫県淡路島でも、「ゾイ」の使用は僅か1地点だけとなっている。さらに香川県小豆島では、「ゾイ」が消え、「ド類」が増えている様子が確かめられる。島なみ街道、愛媛県島嶼部もほぼ同様で

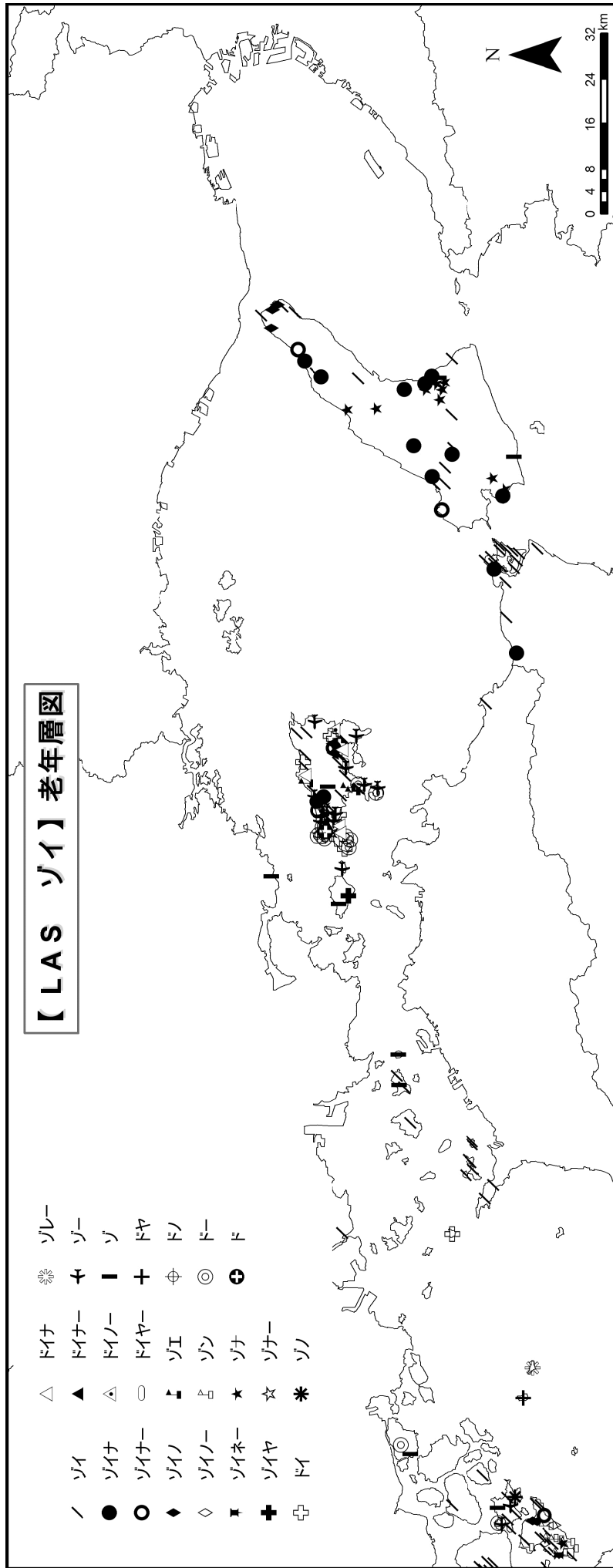


図7 LAS 第103図から作図「ゾイ」(瀬戸内海東部)

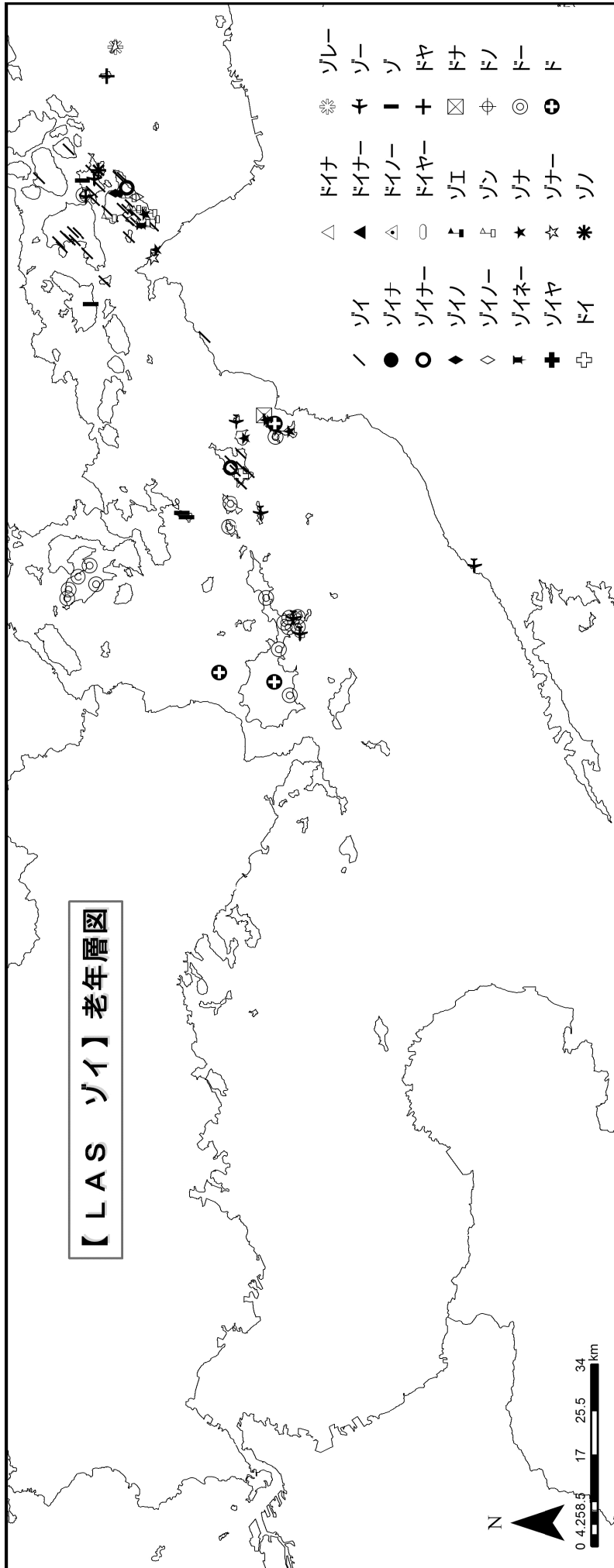


図8 LAS 第103図から作図「ゾイ」(瀬戸内海西部)

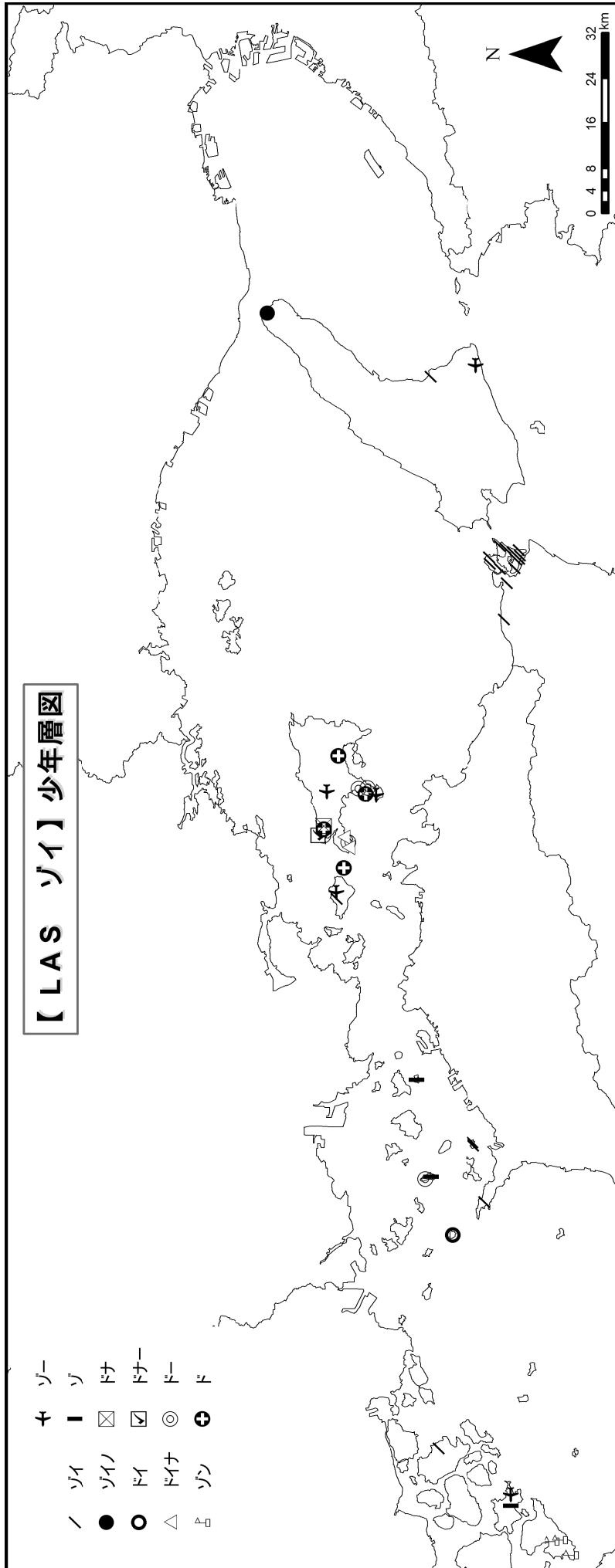


図9 LAS第103'図から作図「ゾイ」(瀬戸内海東部)

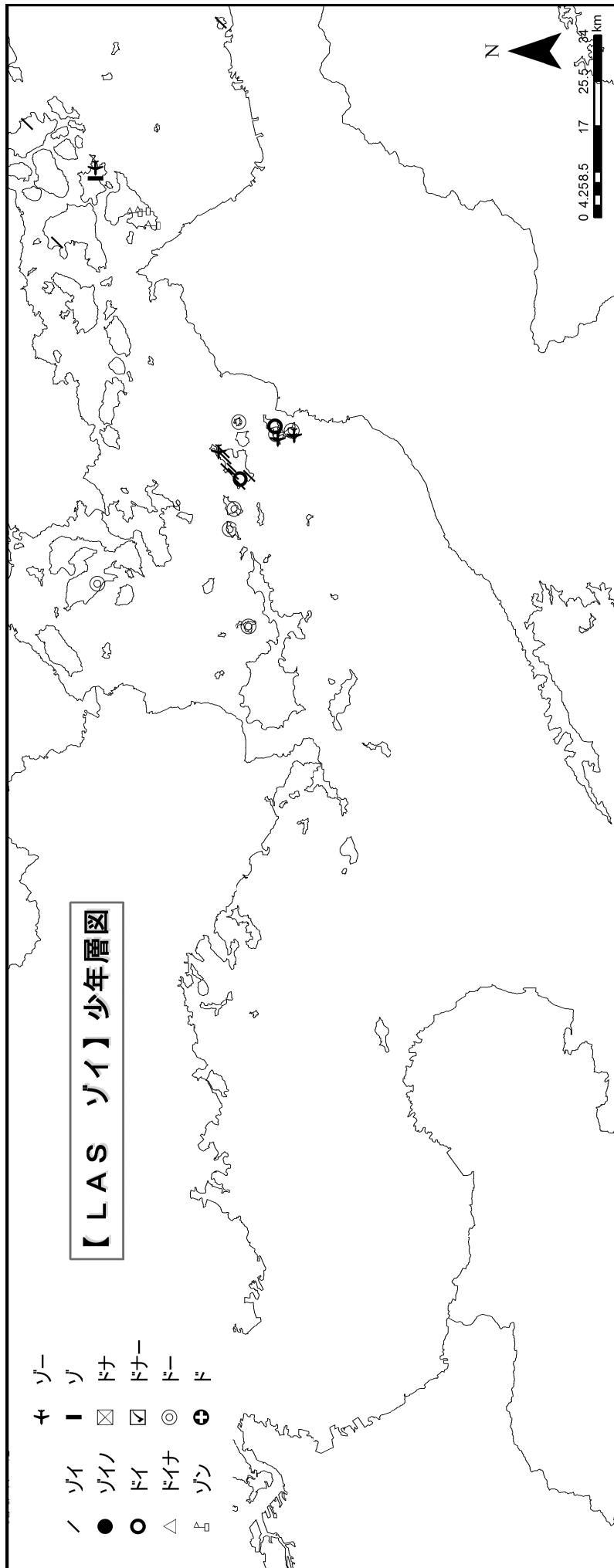


図 10 LAS 第 103' 図から作図「ゾイ」(瀬戸内海西部)

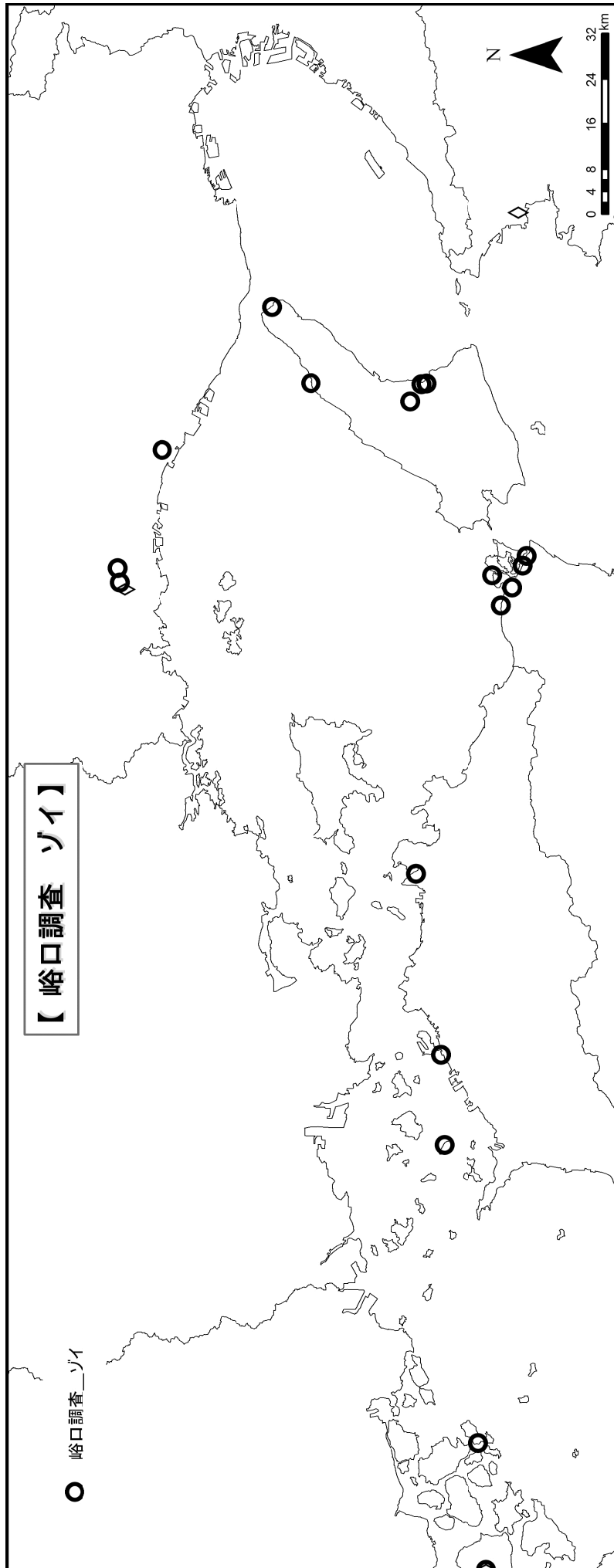


図 11 峪口調査「ゾイ」(瀬戸内海東部)

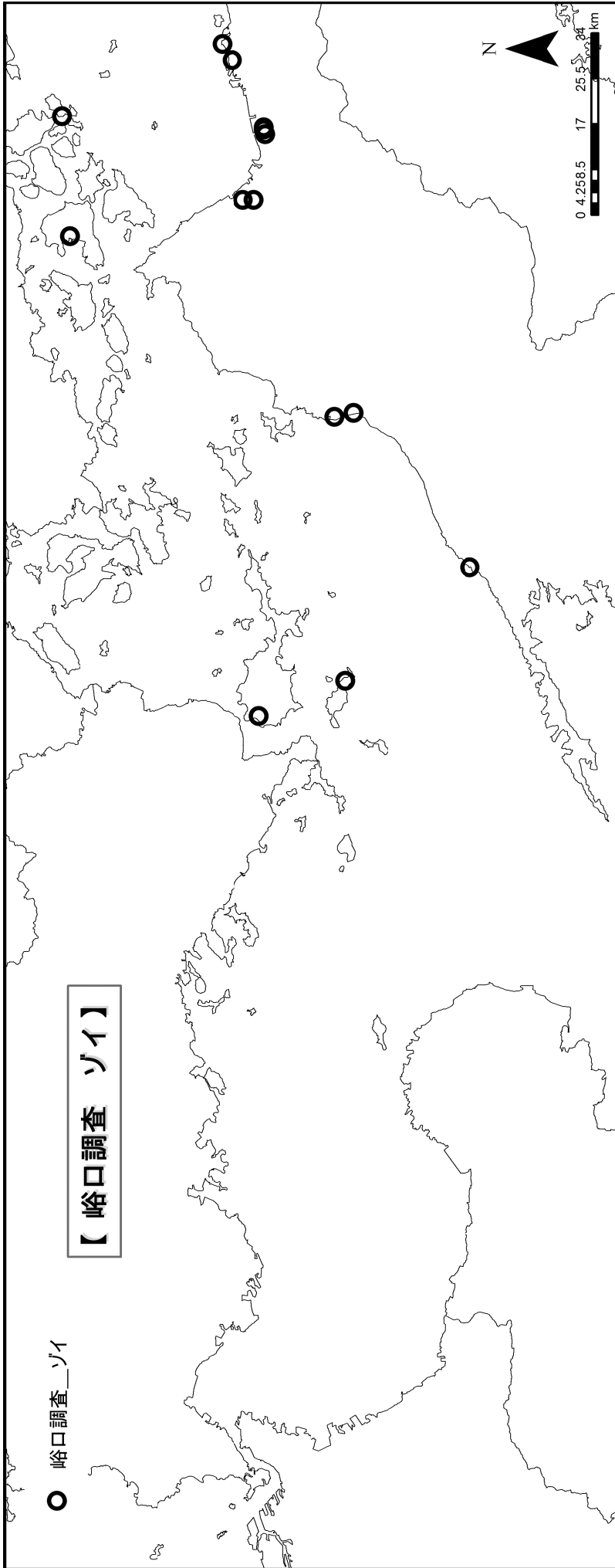


図 12 嶮口調査「ゾイ」(瀬戸内海西部)

ある。

LAS 調査時の、若年層は「ゾイ」類は、地域を限定し残存していることがわかる。しかしながら、分布が各地で減少していることから、藤原（1976）でも、少年層では「ゾイ」はもはや使用されていなかったようであると述べている。

続いて図 11・図 12 は、峪口調査の「ゾイ」の結果である。「ゾイ」は、おもに兵庫県淡路島、兵庫県内陸部、四国各地、広島県、山口県島嶼部などにみられるものの、LAS 老年層図（図 7・図 8）、少年層図（図 9・図 10）と比べて、使用数が減少していることがわかる。香川県小豆島で多くみられた「ゾイ」関連の形式も、峪口調査においては追認することができなかった。

LAS 時に広範囲に確認できた「ゾイ」は大半の地域で姿を消したものの、峪口調査では、徳島県鳴門市付や淡路島において未だに使用されていることが判明した。また、瀬戸内海全域においてもまばらながら残存していることも同時に確かめることができた。

文末詞「ゾイ」は、LAS 時に行われた少年に対する調査では僅かな使用が確認できたが、50 年後の峪口調査でまだ完全には衰退していないことが突き止められた。つまり文末詞ゾイは経年変化をもって衰退していくのではなく、瀬戸内海各地で細々とではあるが、確かに受け継がれてきたのである。

5. 本章の結論

本章では、電子化の対象とした、LAS の 50 年後の変化をみるために瀬戸内海地域島嶼部および沿岸で行っている追跡調査の結果を併せて示した。実時間上の言語変化について考察する上で電子データ間の比較の有効性に触れながら瀬戸内海島嶼部及びその周辺で特徴的な文末詞「ノーシ・ノモシ」および「ゾイ」を取り上げ、その変化について詳しく触れた。

今回の結果を通して、文末詞「ノーシ・ノモシ」では、50 年前少年だった人たちは理解語として受容し、その土地で成長するにしたがって使用語と定着していたことが判明した。また「ゾイ」は瀬戸内全域で衰退傾向にあると思われるが、瀬戸内海という独自の環境の中、島嶼部を中心に根強く残っていることが明らかとなった。

【注】

注 1 言語地図は見やすくするため、瀬戸内海全域を便宜的に二分している。

第 11 章 淡路島における言語動態

— 「じゃがいも」「さといも」を事例として —

1. 本章の目的

本章では、語彙「じゃがいも」「さといも」を事例とした考察を行う。同調査の質問項目は全体で約 180 項目に及ぶが、この中から「じゃがいも」「さといも（里芋）」の項目について、今回、実施した調査結果をもとに分析を行うことにしたい。また、過去において当地域を対象とした調査があり、これらの結果との経年比較が可能である。以下では、これらの結果を併せて示すことにする。

2. 取り扱う調査について

本章で比較・考察の対象とするのは、LAS（1974）、1999 年に実施した徳島大学・神戸松蔭女子学院大学・園田学園女子大学 3 大学合同調査、2012 年度に実施した淡路島調査（岸江ほか編 2013）の方言調査である。

LAS は、第 2 章・4 章で紹介した調査概要に準ずる。1999 年合同調査は第 4 章で紹介した調査概要に準ずる。淡路島調査（岸江ほか編 2013）は、第 4 章で紹介した調査概要に準ずる。同調査報告の全容については、岸江ほか（2013）を参照されたい。以上の調査結果を随時比較し考察していくことにする。

3. 「じゃがいも」の言語動態

3. 1. 先行研究

「じゃがいも」は 1598 年にオランダ船によってジャガタラ（ジャカルタの古名）から長崎にもたらされたが、全国に普及したのはアメリカから優良品種の持ち込まれた明治時代以降とされている。『日本国語大辞典 第二版』によると、栽培の盛んな東日本では、方言の種類が多く、分布も複雑である。その方言形式は収穫に関わるものや地名に由来するもの、形状に関係するものなど多岐にわたる。

【収穫回数との関連】 ニドイモ（二度芋）・サンドイモ（三度芋）

【収穫量との関連】 ゴショイモ（五升芋）・ゴドイモ（五斗芋）

【収穫時期との関連】 ナツイモ（夏芋）・アキイモ（秋芋）

【地名に関連】 ジャガイモ・ジャガタライモ・オランダイモ・カライモ・ナンキンイモ・シコクイモ・キューシューイモ

【外国語に由来する名称】 カンプライモ・アップライモ（馬鈴薯を意味するオ

ランダ語 aardappel に由来)

【色・形状との関連】として、としてアガエモ（表皮の色）、キンカイモ（禿頭のことをキンカと呼ぶことと関係して芋の形が禿頭を連想されることから）

【人名との関連】ジャガタロ（ジャガタラにタロー（太郎）を添加した形式）

また、新村（1944）は「馬鈴薯（ばれいしょ）は馱馬の鈴のように実がなるということからこのように呼称されるようになった」と述べている。

ジャガイモは、江戸後期から様々な文献に登場する。

- 『物品識名』（1809）「同国伊勢街なる柳田鼎蔵と云う者、一種の芋を贈れり。土俗之を咬吧芋（ジャガタライモ）と称す」
- 『救荒二物考』（1836）「馬鈴薯 和名 ジャガタライも、甲州いも、ちちぶいも」
- 『新聞雑誌 - 四一号』（1872）明治5年 四月「目今地味瘦たりと雖も麦と馬鈴薯（バレイショ ジャガタライも）を生ぜざるなく」

（以上、『日本国語大辞典 第二版』等による）

LAJ（第4集・第174図）の「じゃがいも（馬鈴薯）」の全国分布を概観すると、全国各県にはさまざまな形式がみられる。

ホッカイドーイモ（鳥取県・福井県）、サップライモ（福井県）、センダイイモ（岐阜県）、エチゴイモ（滋賀県）、ツルガイモ（岩手県）、カントイモ（愛媛県）、コーシューイモ（東海地方ほか）、シンシューイモ（埼玉県）、ゼンコジイモ（滋賀県）、ゴーシューイモ（徳島県）、イセイモ（兵庫県）、ニドイモ・ゴーシューイモ系（兵庫県淡路島）シコクイモ（新潟県・兵庫県）、ビンゴ（鳥取県）、キューシューイモ（福島県）、ヒューガイモ（奈良県）、リューキューイモ（熊本県ほか）など全国の地名に及び、いずれも名称の地からかけ離れた地方に分布している。

3. 2. LAS と 2012 年調査の比較

まず「じゃがいも」の地図、LAS 第150 老年層図から作図した地図（図1）と2012年調査（図2）の地図をそれぞれ概観することにしたい。

図1によると、淡路市、洲本市においてジャガイモが盛んに使用されていることがわかる。淡路市では、沿岸部の松帆と釜口から県道28号線を下り津名にかけての地域と江井崎・多賀周辺部にジャカイモがみられる。ジャガイモが音声変化し、ジャカイモとなったようである。

2012年調査では、ジャガイモは、淡路島全島に分布が及び、洲本市近辺の方言形式が若干少なくなっていることが確認された。淡路市北部には、一地点のみだ

がショーロイモという形式がみられた。ショーロは、メロン+カンショ（サツマイモ）の組み合わせをし、品種改良された根菜のことをショローということから、ショーロが音声変化を起こした形式だと考えられる。2012年調査においては、ショーロイモは確認できなかった。

LASにおいて、南あわじ市西南部と沼島には、ゴーシューイモとサルキンの使用が目立つ。ゴーシューイモは、四国の徳島県・香川県に分布がみられる。四国のことばの影響を受け、淡路島南部に定着したものであろう。

2012年調査においては、ゴーシューイモの回答はなく、同じ地域にゴーシュという形式で僅かに残っていたにすぎない。また、サルキンに関しては、LAJには分布がみられず、LASで淡路島西南部のみに分布が確認できた。サルキンは、昭和初期頃まで淡路島南部において使用がみられたようである。2012年調査においても、サルキンは南あわじ市旧西淡町のみに残存していた。サルキンの意は「猿の糞丸」を指す俗語のことのようである。おそらく形状からの命名であると思われる。LAS時に淡路島中央部の洲本市でみられたバレーショは、2012年調査において激減しており、洲本市1例、淡路市1例のみみられたにすぎない。分布傾向として、バレーショがジャガイモ・ジャガタライモに置き換えられているようである。

収穫回数と関連がある形式としてニドイモ、サンドイモの分布をみることにしたい。ニドイモはLASでは淡路島中央部にまとまって分布していたが、2012年調査では、洲本市旧西淡町にわずかに一地点しか回答がなかった。ニドイモに関しては、東北と近畿が主な分布領域だが、実際に「じゃがいも」の二期作を行うのは関東以西であるという。二期作は、3月の末から4月の始めにかけて植え、6月末から7月初旬にかけて取り入れる。植えてから3カ月ほどで収穫できるそうである。このように、ニドイモと同様の発想で、ニドイモのそばにサンドイモが分布しているのかもしれない。サンドイモは、LASでは洲本市のみに分布しており、2012年調査では南あわじ市旧西淡町と洲本城付近と洲本大野地域、淡路市富島にみられた。さらにLAJでニドイモとサンドイモの分布を確認してみる。ニドイモの分布は、兵庫県丹波地方、但馬地方、淡路島中央部にみられた。サンドイモは、兵庫県但馬地方、西播磨にみられ、淡路島ではみられなかった。一方、LASでは、サンドイモは洲本市に使用の確認ができた。つまり、農家の生産方法により分布域が若干変化してきたのだといえる。

また「じゃがいも」の品種名である、ダンシャク（男爵芋）が2012年調査で分布を確認できた。

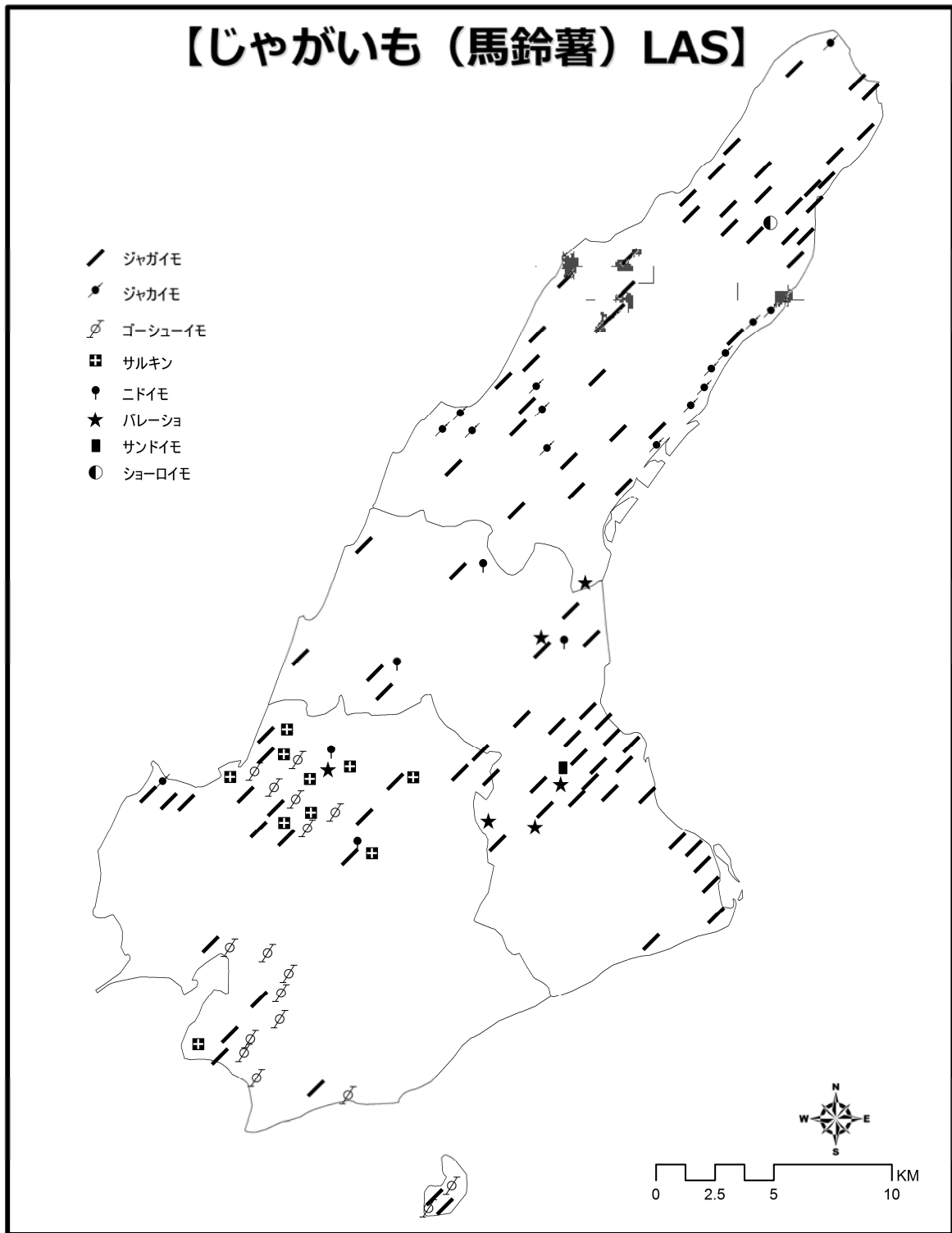


図 1 LAS 第 150 図「じゃがいも（馬鈴薯）」

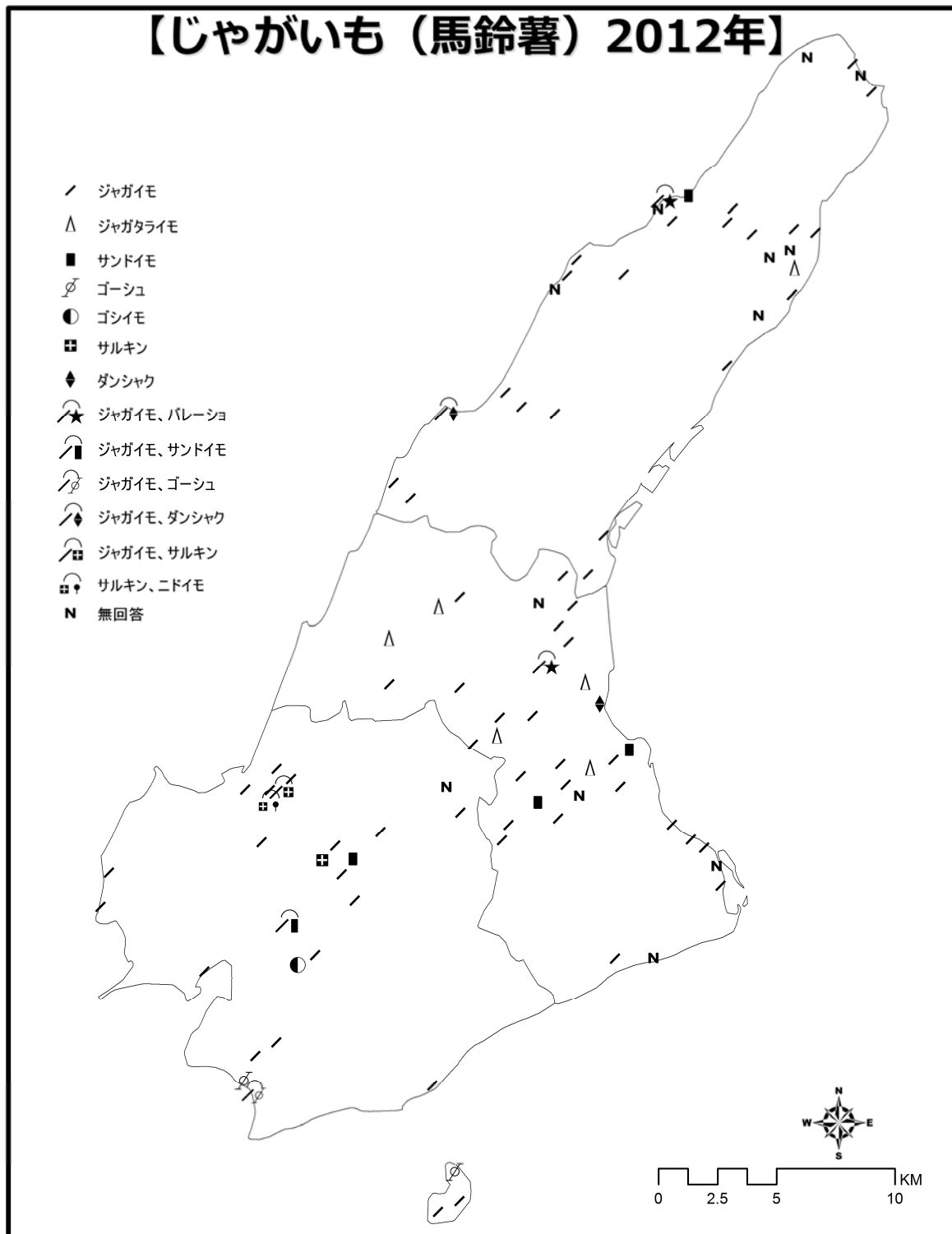


図3 2012年調査「じゃがいも（馬鈴薯）」

4. 「さといも」の言語動態

4. 1. 先行研究

次に里芋について考察したい。「さといも」は、サトイモ科の多年草で熱帯アジア原産である。日本へは古く渡来し、平安期の辞書に「いへのいも」「いへついも」（いずれも「家の芋」の意）とし、山芋などに対して、この芋を家の近くで栽培したことによるものであると考えられ、品種が多く各地で栽培されてきた。また平安期にみられた古称の残存が、広島県や長崎県の五島にエノイモという語形で残っている。

江戸初期からは、様々な文献にサトイモが出てくるようになってきた。以下、『日本国語大辞典 第二版』等を参考にまとめて示す。

- 『松屋会記』・天正一七年（1589）八月三〇日「くわし さといも、きんかん、柿」
- 『本朝食鑑三』（1697）「芋 和名以閉都以毛（いへついも）今訓以毛或称里以毛（サトイモ）」
- 『洒落本・南江駅話』（1770）「土用見まいの里（サト）いもを一斗ばかりも上らねば」
- 『俳諧・杉風句集』（1785）「里芋の長なり畠中の庄司とやらん」
- 『小学読本』（1874）〈榊原・那珂・稲垣〉三「里（サト）芋、唐芋、八っ頭芋、蓮芋、皆茎をも併せ食ふ」
- 『日本植物名彙』（1884）〈松村任三〉「イモ サトイモ 芋」

LAJ 第4集「さといも（里芋）」の地図は、語形が多く、第177図、第178図の二葉にわたっていた。

『現代日本語方言大辞典』の「さといも」の語形には、イモノコ【芋の子】（北海道、石川県）、ハエモ【葉芋】（青森県）、サドエモ・エモノゴ【芋の子】・エモ【芋】（岩手県）、エモノゴ【芋の子】（秋田県）、ハダイモ（福島県）、サドイモ（千葉県）、サトイモ（東京都、静岡県、滋賀県）、チボイモ・ズキイモ（富山県）、タダイモ（三重県）、アカズキ【赤ずき】・オヤイモ【親芋】・タイモ【田芋】・イモメンケツ【芋明月】（滋賀県）、コイモ【子芋】（滋賀県、京都府、愛媛県）、エグイモ（広島県）、ナツイモ【夏芋】・オードノ【里芋の一種】・メアカ【里芋の一種】、ナンキンイモ（鹿児島県）、ムジウ系（沖縄県）などがみられる。

さらに、LAJ 第4集・第179図の、単にイモというときに何を意味するかの地図では、中部内陸部や新潟・東北以北など寒冷地でジャガイモ、それ以外の地域

でサツマイモという傾向がみられるが、栃木・埼玉・東京・静岡・岐阜南部・富山・九州内陸部などがサトイモとなっているのが注目される。「イモの意味」の地図が三種のイモ（ジャガイモ、サツマイモ、サトイモ）の栽培状況とほぼ一致していることがわかる。関東から山梨・静岡にかけてと、富山や、岐阜および九州の広い領域に分布している。これは「さといも」の栽培が盛んな地域とほぼ一致している。

また佐藤（1991）によると、サトイモという呼称は文献の上では江戸期から見られるが、この呼称は、おそらく、関東で生まれて、共通語として全国に広がったのではないかと推定している。関東や九州中央部などには、「さといも」を単にイモと呼ぶところがあるが、昔はイモといえば「さといも」のことであり、サトイモの名称が全国に広がった時期は、サツマイモやジャガイモが普及した後のことではないかと指摘している。また、近畿を中心に北陸や四国に広がっているタイモ（田芋）は、その分布から見て、比較的新しい語形であり、サトイモと同様、山芋に対して、それが栽培植物であることに着目しての命名であるという。

4. 2. 1999年調査と2012年調査の比較

まず1999年調査（図3）、2012年調査（図4）それぞれの地図を概観し、比較・考察を行うことにする。

ここで注目されるのは、イモノコの分布である。LAJにおいて、イモノコは北海道や東北の一部と、飛んで佐賀県と能登半島に勢力をもって分布し、日本列島の周辺地域にみられることから、諸語形の中でも比較的古い語形だといわれている。一方、淡路島のLAJでの分布をみると、サトイモが優勢で、淡路島南部にズキイモと淡路島北部にコゾーイモ、コジイモがみられ、イモノコは確認できなかったが、1999年調査、2012年調査においていずれもイモノコが確認できた。1999年調査では、淡路市と洲本市の南部にみられ、2012年調査では淡路市のみだが、それぞれ使用を確認することができた。このことから、イモノコが淡路島南部にも残存していることが明らかになった。サトイモには、種芋（親芋）と小芋がある。コイモはこの小芋のことを言ったものである。1999年調査では、コイモが淡路島全域で盛んであったが、2012年調査では、淡路市と洲本市のみに分布がみられる程度である。この点で、コイモの分布はやや退縮しつつあるということができよう。サトイモの使用が増え、分布域を広げたことが大きく影響している。また、1999年調査でみられたドロイモ（泥芋）は、LAJによると奈良県での分布がもっとも優勢で、そのほか大阪府と徳島県南部にも分布がみられる。ドロイモは大阪からの影響や、徳島方言との関連も無視ができない。

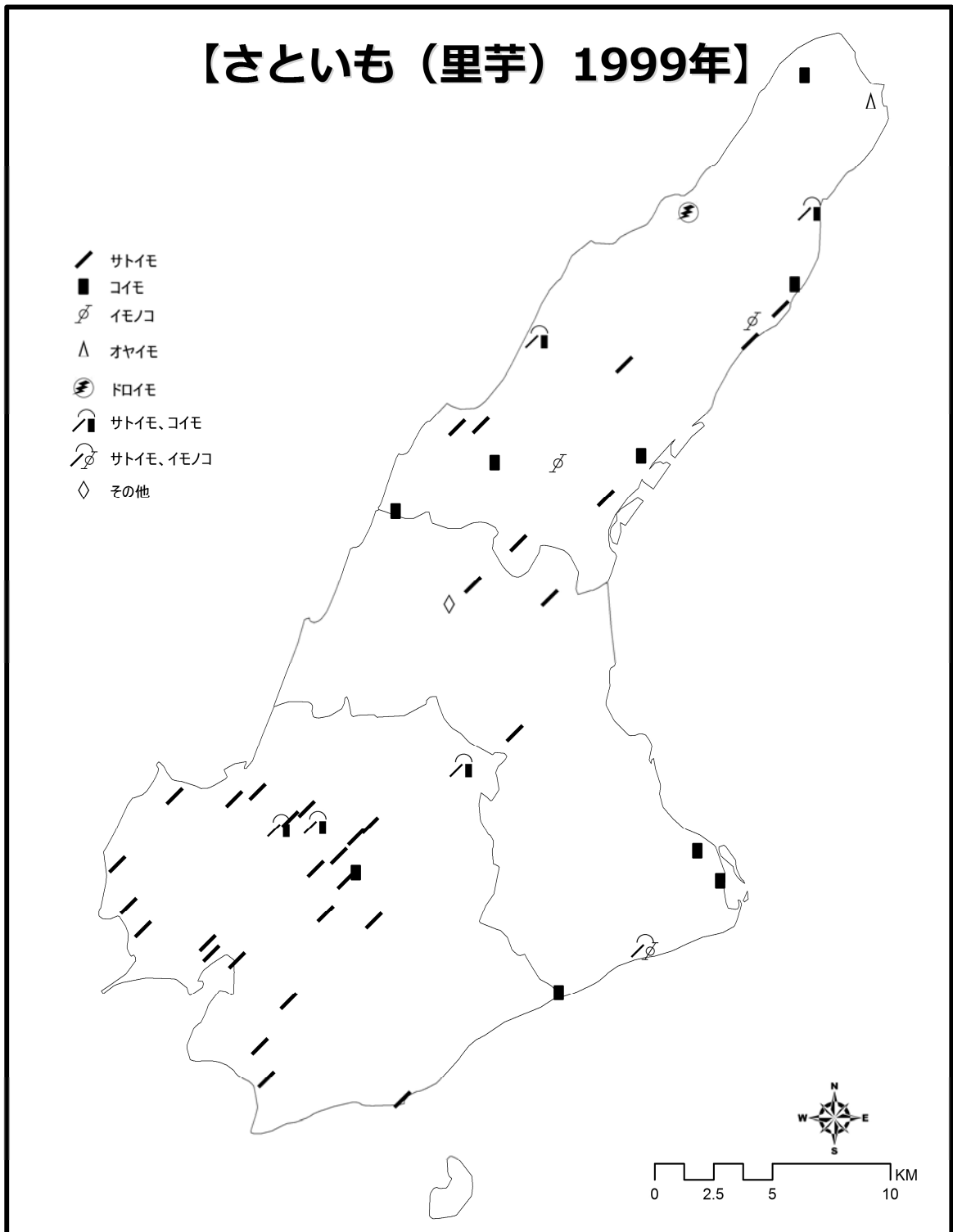


図3 1999年調査「さといも（里芋）」

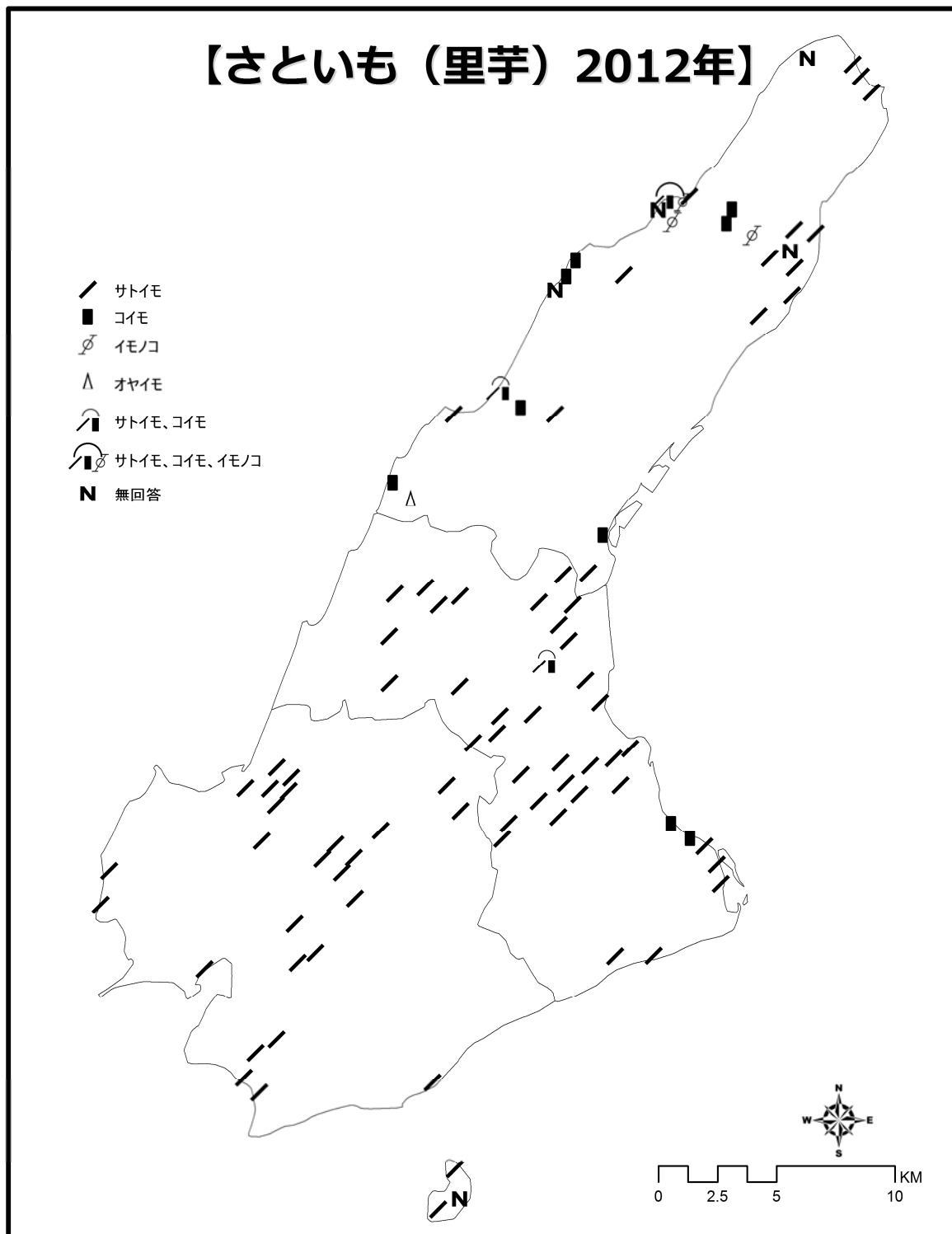


図4 2012年調査「さといも（里芋）」

最後に共通語と同形のサトイモについても触れておくことにしたい。1999年調査においては、全域に共通語のサトイモと方言形が分布をしていたが、2012年調査では、南淡路市はすべてサトイモに置き換えられ、洲本市もサトイモの分布がかなり優勢となっていることが判明した。共通語のサトイモは南淡路市や洲本市を中心に分布を拡大させていることが明らかになった。このことから、どこを起点として言語が変化していくかは、項目により差があるのかもしれない。また今後はサトイモが北部まで押し寄せていくのかもしれない。

5. 本章の結論

以上、本章で論じてきたことをまとめ、結論を述べる。瀬戸内海沿岸をはじめ、淡路島の各調査を比較することにより、淡路島における「じゃがいも」「さといも」の方言語彙の変異を確認した。

藤原（1976）が指摘するように、淡路島は古語が残存しやすい地域であることが追認できた。また語彙により、共通語化が進行中の語彙と、依然として伝統的語形が残存している語彙とに分けられることがわかった。今後は、瀬戸内海域をフィールドにさらに言語変化の過程を探っていきたい。

第 12 章 逆接の接続助詞について

— 「けれども」「そうだけれども」を事例として—

1. 本章の目的

本章では、瀬戸内海東部域における言語の動態について取り上げる。瀬戸内海東部域とは「淡路島」「小豆島」を含む地域を指し、LAS の調査結果のあと、これらの島々で行われた追跡調査の結果を提示し、相互に比較を行うことにする。取り扱う項目は逆接の接続助詞であり、「けれども」「そうだけれど」を事例とした考察を行う。これらの項目を取り上げる理由は、LAS 調査はもとより、淡路島および小豆島で実施したすべての追跡調査においてこれらを調査票に含めたおり、経年比較が可能であるためである。

2. 取り扱う調査について

本章で比較・考察の対象とするのは、LAS (1974)、1999 年合同調査は徳島大学・神戸松蔭女子学院大学・園田学園女子大学 3 大学合同淡路島調査、徳島大学における小豆島における調査 (岸江・峪口編 2015)、淡路島調査 (岸江ほか編 2013) である。

LAS は、第 2 章・4 章で紹介した調査概要に準ずる。1999 年合同調査は第 4 章で紹介した調査概要に準ずる。

徳島大学における小豆島における調査 (岸江・峪口編 2015) は、第 7 章で紹介した調査概要に準ずる。なお、この調査の結果については、岸江・峪口編 (2015) に詳しい。淡路島調査 (岸江ほか編 2013) は、第 4 章で紹介した調査概要に準ずる。同調査報告の全容については、岸江ほか (2013) を参照されたい。

以上の調査結果を随時比較し考察していくことにする。

3. 島別にみた「けれども」の方言分布

3. 1. 淡路島における「けれども」の方言分布

図 1 は、1999 年に淡路島で実施された調査である。この調査での「けれども」の結果についてまず概観したい。淡路島全地域にケンドが用いられているが、共

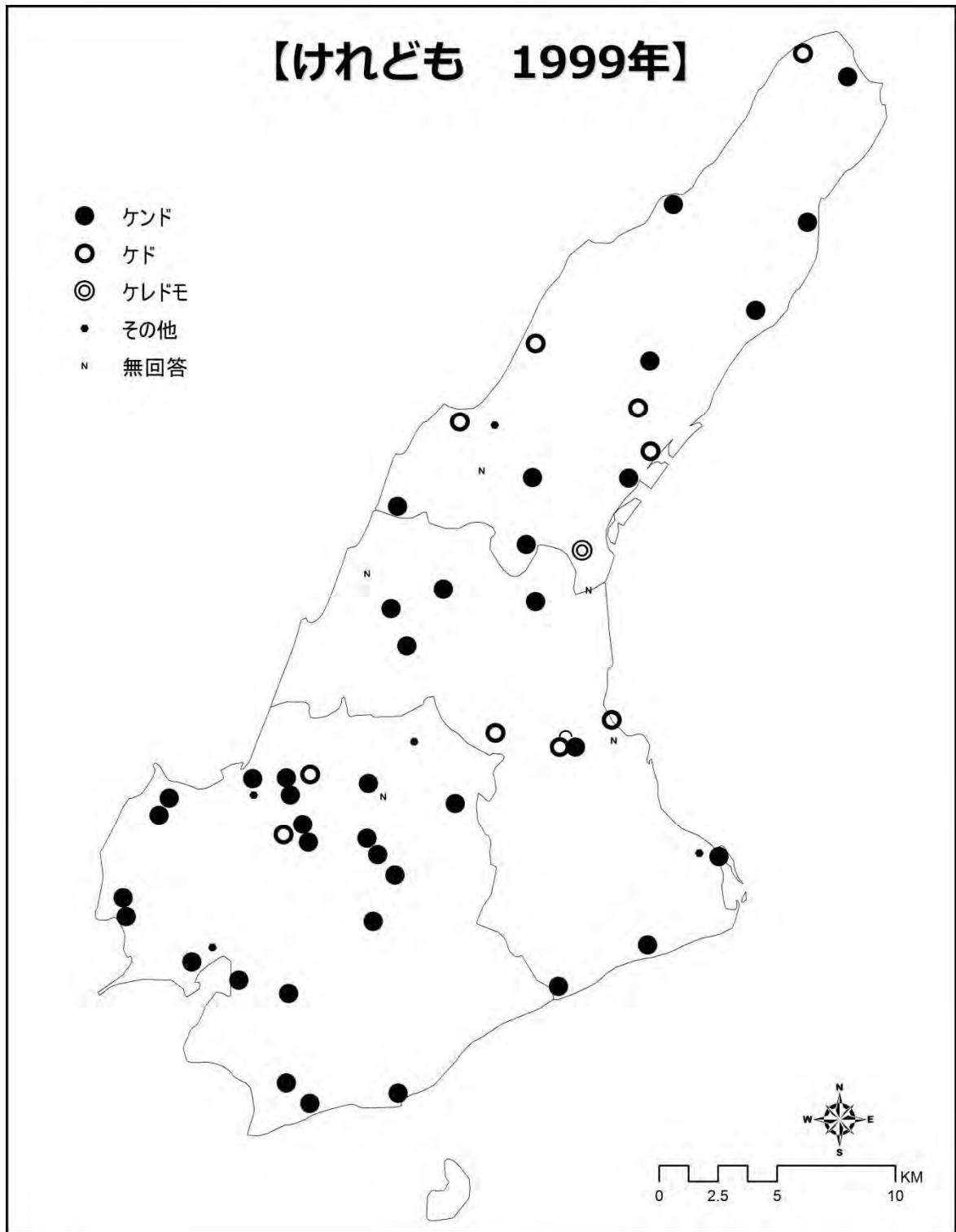


図 1 1999 年調査「けれども」

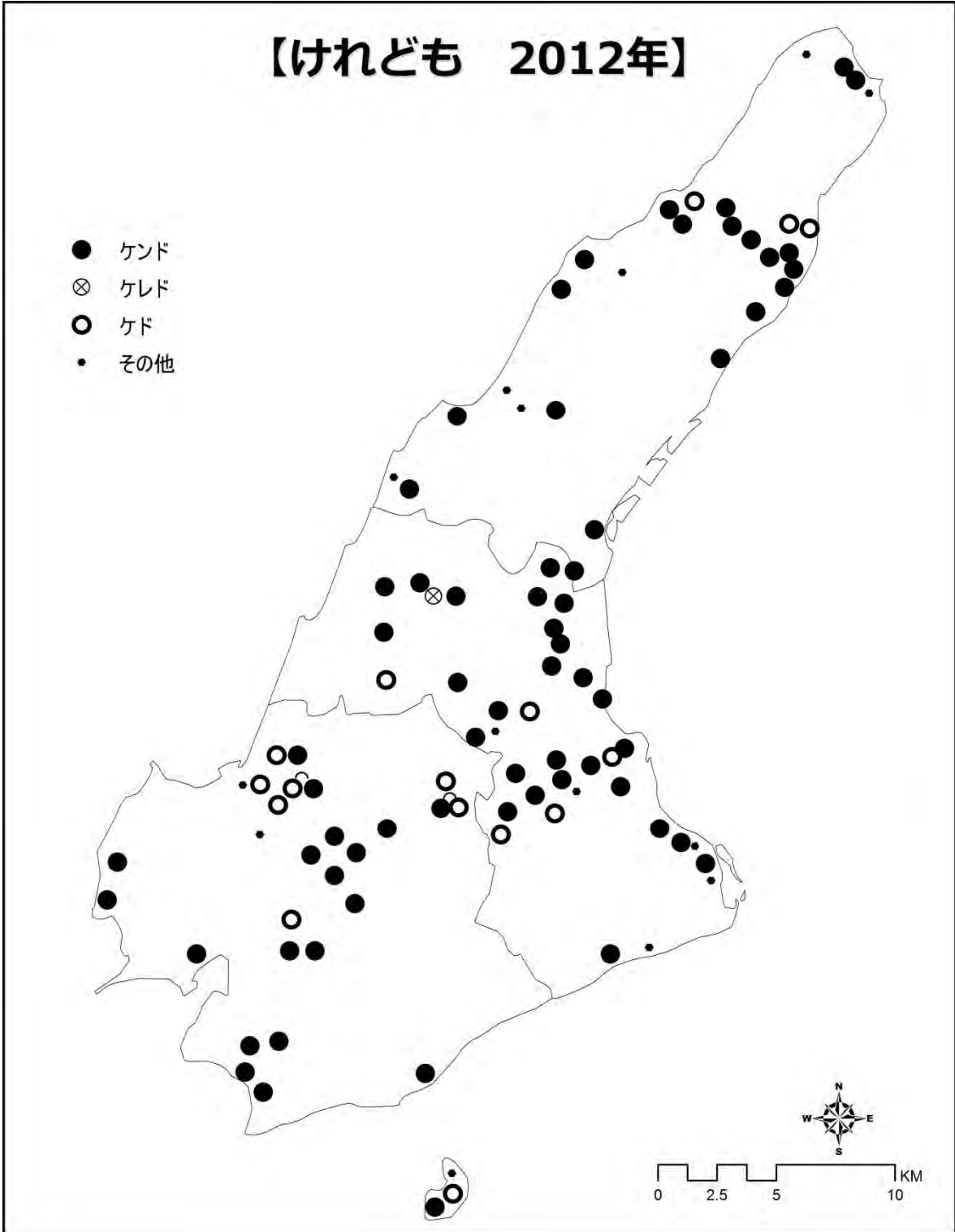


図2 2012年調査「けれども」

通語と同形のケドの使用も一部みられる。ケドは、この段階では淡路島北部から中部にかけてみられ、南部にはまだ達していない様相を呈している。

この項目を扱った GAJ 第 1 集・第 38 図では、近畿中央部がケドであるのに対し、周辺部ではケンド、四国地方では一部、香川県のケドを除いてその他の地域ではケンドである。淡路島では、ケンド、ケドの併用回答もみられるが、依然としてケンドが優勢である。

図 2 は 2012 年調査の結果を示したものである。この結果は、1999 年調査（図 1）、GAJ 第 1 集・第 38 図、LAS 第 38 図と同様、淡路島ではケンドが優勢である。一方、共通語形ケドについては、図 1 と比較すると分布が洲本市、南あわじ市を中心に拡大していることが判明した。また、ケンド、ケドの併用回答もケドの分布領域の近くに確認された。

これらの結果から GAJ、LAS とケンドが優勢だったが、1999 年調査、2012 年調査では共通語形のケドの浸透・拡大が着実に進みつつあることが明らかになった。

藤原（1976）は、瀬戸内海域においては、ケンド（ケード）は、次第に衰退していくものだろうと指摘している。この、藤原の推測通り、ケンドは瀬戸内海東部域に位置する淡路島において今後衰退していく傾向にある。

3. 2. 小豆島における「けれども」の方言分布

LAS 第 40 図・老年層図を概観すると、小豆島町ではケンド、土庄町と豊島ではケドが分布している。さらにその他の語形として、四海地区にケード、中山にケンドモ、安田にケット、坂手にケレドがそれぞれみられる。これに対し、少年層図では、その他の語形はことごとく消え、小豆島町ではケンド、土庄町ではケドが対立をみせるのみである。

藤原（1976）は、ケンドは比較的、近畿・四国に強いという。また、ケンドに近いケードがおおよそ中国的な言い方であるとし、いずれにしてもこれらの語形は、次第に衰退していくのだろうと述べている。このような点を踏まえ、今回の調査結果（図 3^{注1}）をみると、LAS と同様に分布上でケドとケンドの対立をみせていることがわかる。

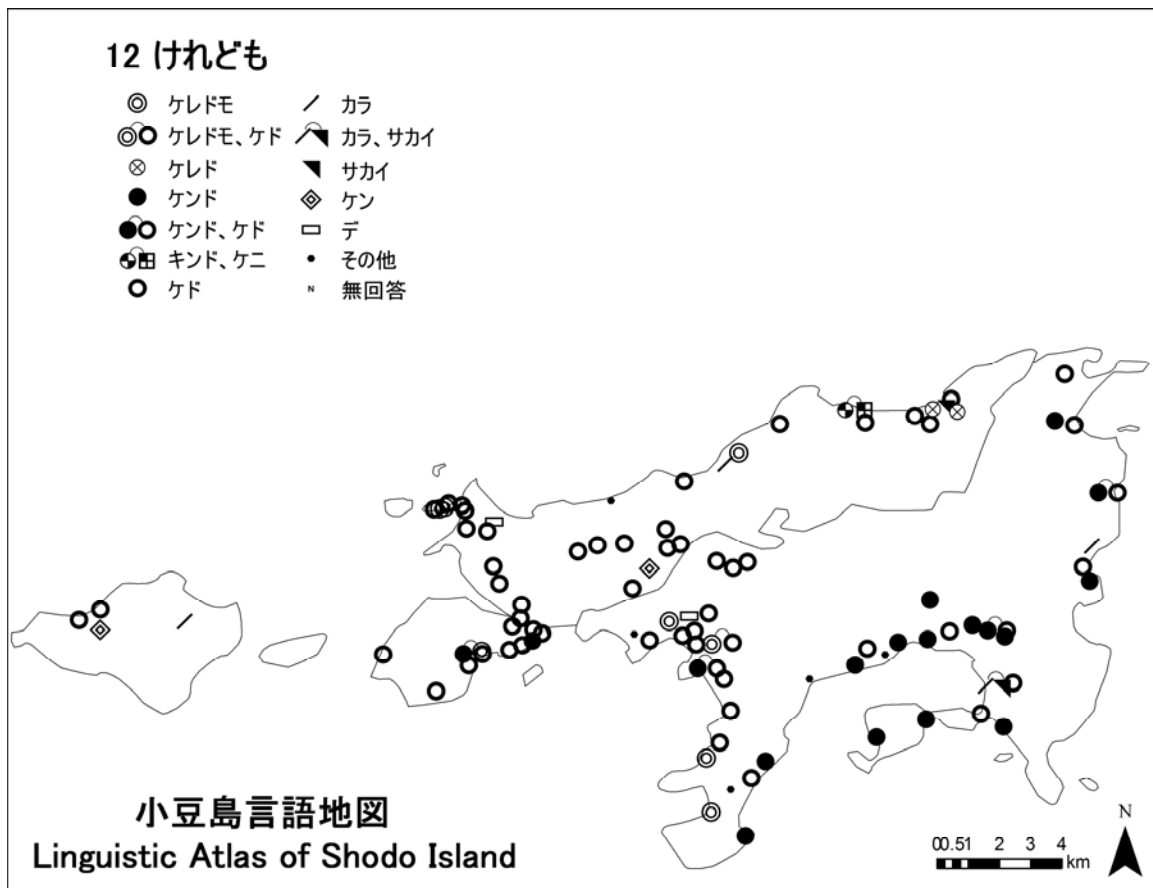


図3 小豆島調査「けれども」

特にケドの勢力が優勢になっており、ケンドをおさえて分布領域を拡大していることがわかる。このことから、小豆島においてはケンド→ケドへと移行しつつあることがうかがえる。ただし、藤原が指摘した、ケンドの退縮は、まだ完全に完了していず、変化が進行中であるということがわかる。

なお、ケドは全島的に分布するのに対してケンドは小豆島東部域から南部にその分布が限られている。この点は LAS 少年層図の結果とも一致している。今回、土庄町大部でキンドが回答された。この語形は本来、香川県西部に見られる語形であるが、香川東部方言に属する小豆島方言では珍しい。

なお、本来「けれども」は接続助詞であるが、今回、採用した質問文（今日は帰るけれども明日また来るよ）が逆接とも順接とも取れる内容となっており、カラ、ケン、サカイなどの順接の諸形式とみられる回答が含まれている。このような事情を認識したうえで、地図化した点を断っておきたい。

4. 島別にみた「そうだけれど」の方言分布

4. 1. 淡路島における「そうだけれど」の方言分布

図4の「そうだけれど」の言語地図を概観したい。淡路島ではソヤケンドの分布が一番多くみられる。これは鎌田（1979）ですでに指摘されているが、接続助詞にソヤケンド、ホヤケンドの使用が多いことが改めて確かめられた。ホヤケンドについても、ソヤケンドに比べ分布域が狭いものの、南部にまとまってみられる。さらに「ホヤ～類」「ホジャ～類」は南部に分布の偏りをみせ、「ソヤ～類」「ソー～類」は北部から中部にかけて分布が確認できる。「ホヤ～類」「ホジャ～類」は徳島など四国方言と同じ傾向を見せている。一方「ソヤ～類」「ソー～類」は近畿中央部からの影響を受けたものであろう。

LAS でもみられた伝統的語形である「～ジャガ」が確認されたことに触れる。GAJ では、全国において分布が確認できないが、LAS では「～ジャガ」が広島県と山口県に確認できる。2012年の調査では、淡路島において洲本市2地点と、淡路市岩屋1地点で「～ジャガ」が確認ができた。この形式は、断定の助動詞「ジャ」+接続助詞「ガ」が組み合わさったものである。今回は淡路島の結果のみで分析を行ったが、瀬戸内海全域で広域にみると、「～ジャガ」は瀬戸内海域で広く残存している可能性も否めない。

図5は、図4の概略版であり、「～ジャ（ヤ）ケンド」と「～～ジャ（ヤ）ケド」というような後続の形式注目し、作図したものである。「～～ジャ（ヤ）ケンド」の分布は図1、図2と同等に優勢であることがわかる。また「そうだけれど」という形式に関しても共通語形の「～ケド」の使用が今後拡大していくことになるだろう。

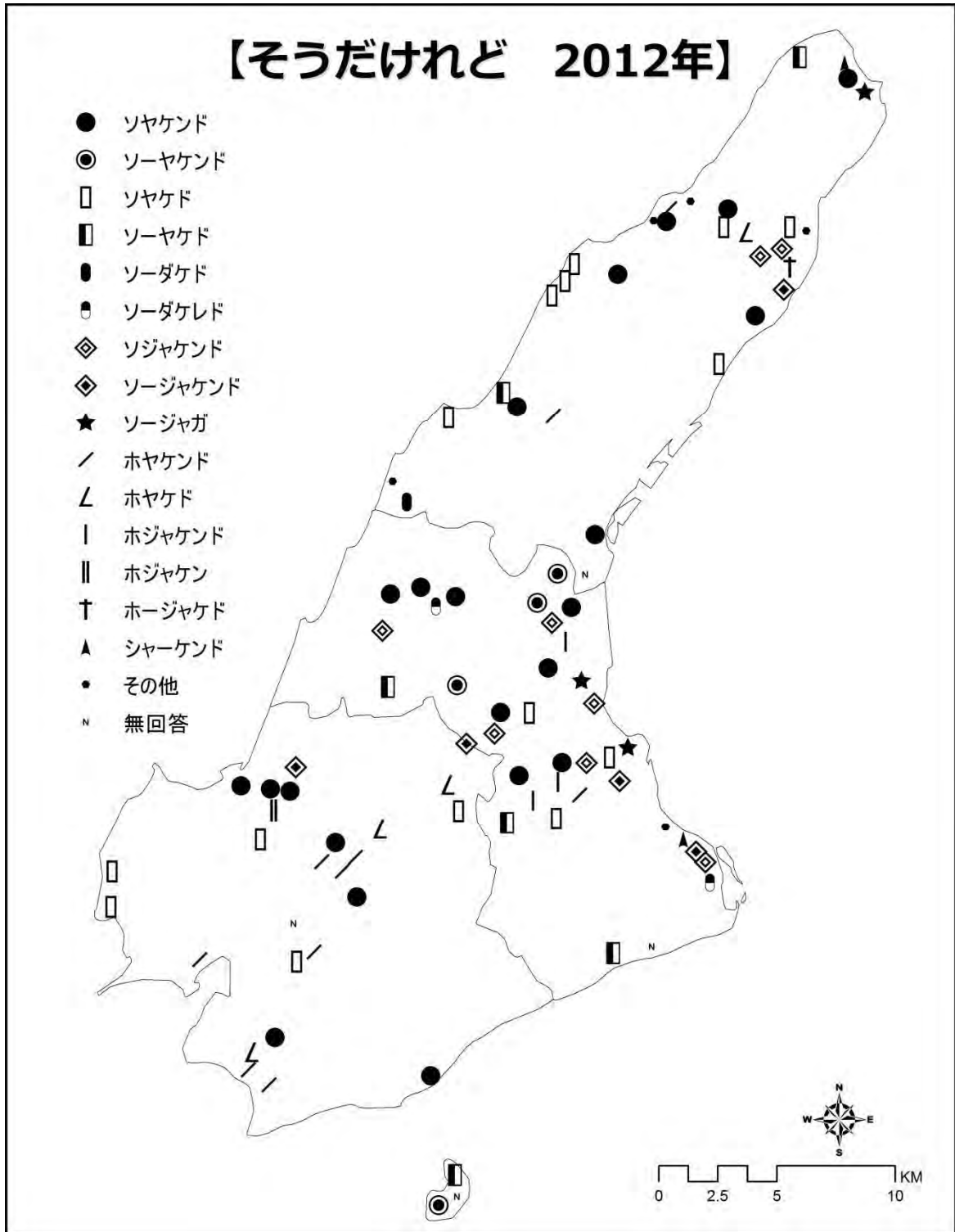


図4 2012年調査「そうだけれど(全語形)」

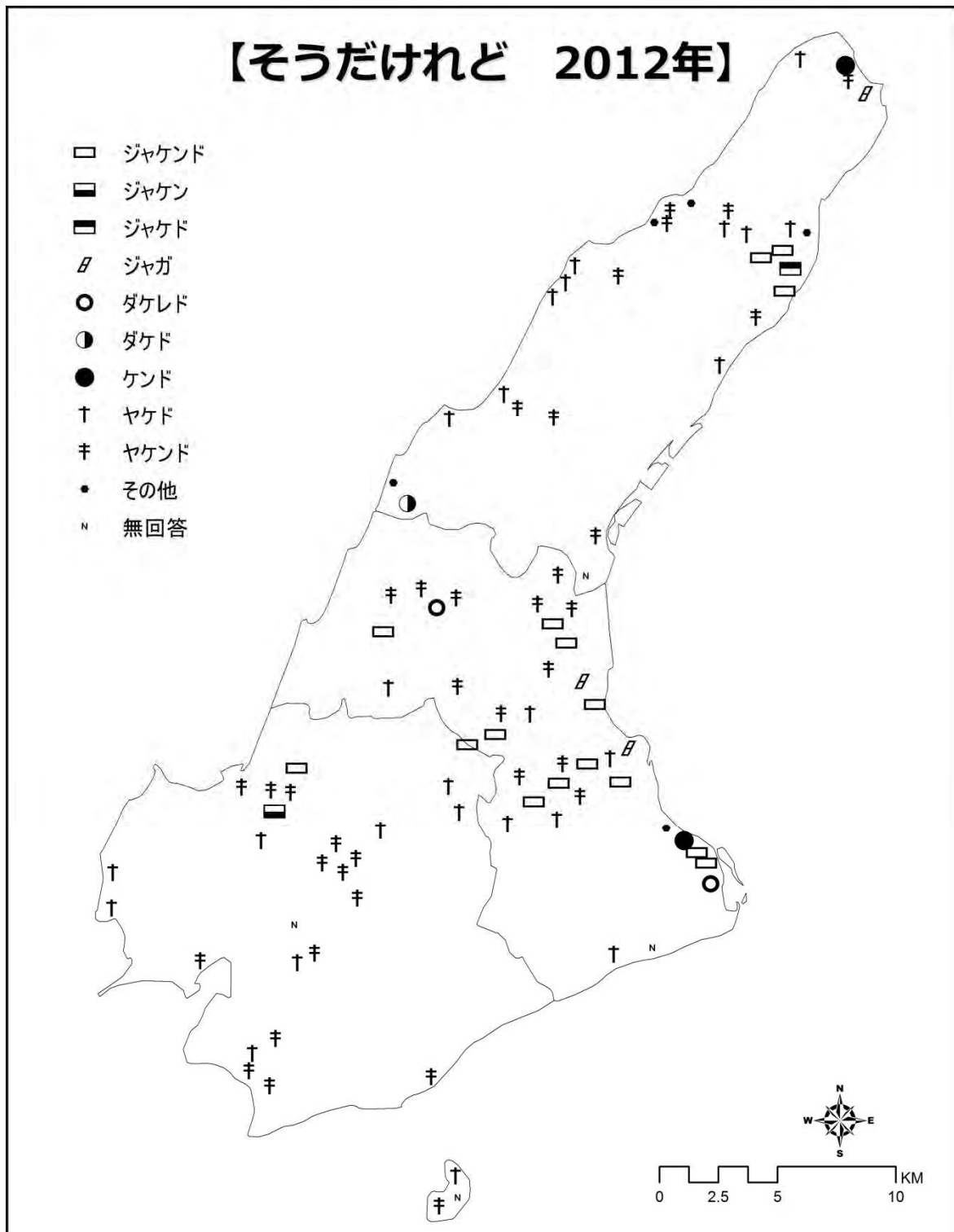


図5 2012年調査「(そう)だけれど(概略図)」

4. 2. 小豆島における「そうだけれど」の方言分布

この項目では、「そうだけれど」の「だけれど」の部分に注目し概観する。まず、島内ではヤケドが広域に分布している。その中でも、小豆島町ではヤケドが多くみられる。これに対して、土庄町ではジャケドが多くみられる。また中心部の土庄旧市街地ではヤケドの回答が多い。図3の「けれども」の分布では、ケンドとケドが対立し、ケンドがケドへ移行しつつあると解説をおこなったが、図6「そうだけれど」においても、ケンドの退縮傾向が窺える。ケンドは小豆島東部（安田・苗羽）に散らばって分布していることがわかる。この結果は、図3とよく似た状況を示している。LASでもみられた伝統的語形のジャガ（断定辞「ジャ」＋接続助詞「ガ」）は、広島県と山口県に分布がみられた形式であり、その分布が小豆島（池田、小部、小江）まで及んでいることがわかる。また、峪口（2013）でも、ジャガは淡路島で確認がなされている。

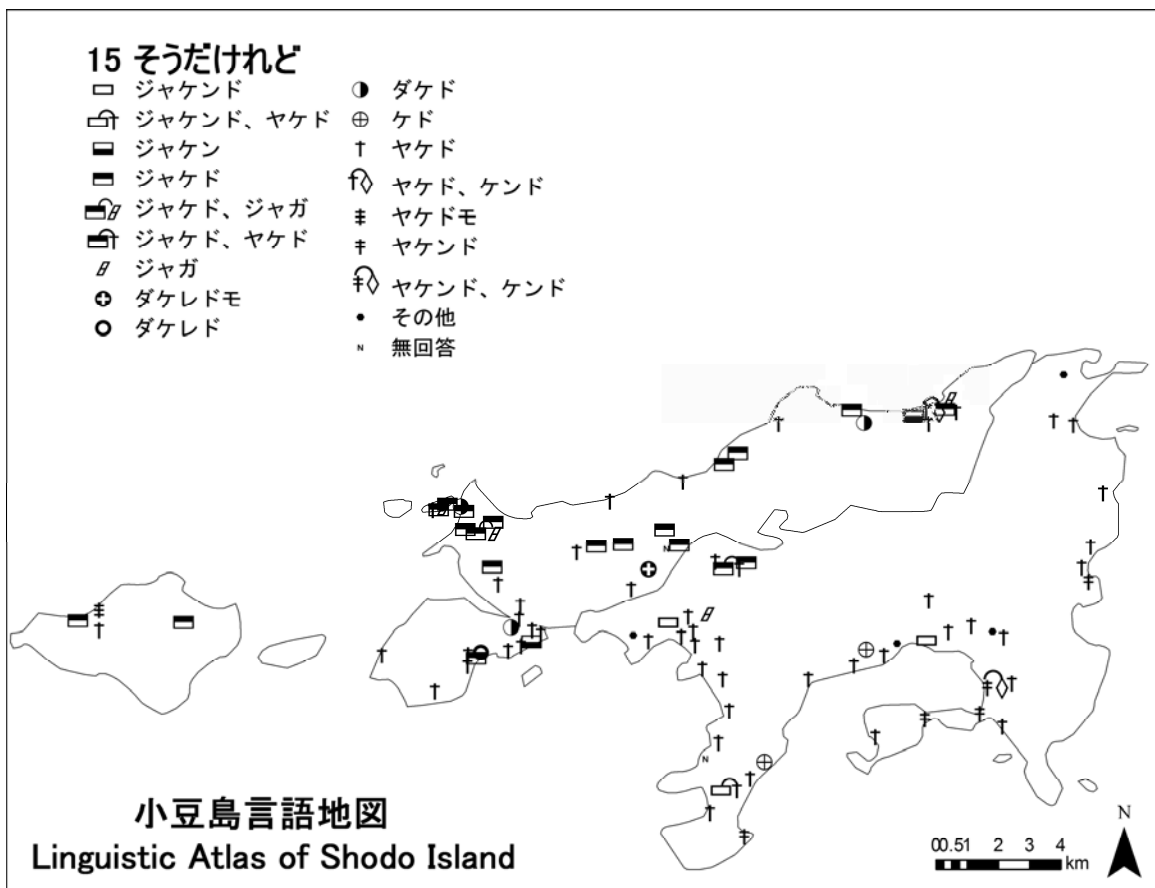


図6 小豆島調査「(そう)だけれど」

つまり、ジャガは LAS 時から、東へ勢力を拡大させたことがうかがえる。なお、本来「(そくだ)けれど」は接続助詞であるが、断定辞の部分についても述べると、ヤは小豆島町で最も多く、ジャは土庄町に集中していることがわかる。土庄町旧市街地では、ヤが盛んである。

LAS 第 59「火事だ」老年層図の分布をみると、小豆島はジャが優勢で、ヤが各地に散見できるのにすぎない。この状況下からみると、ジャ→ヤの変化が進行中であることがうかがえる。この変化は小豆島町で、特に顕著であるといえるだろう。

5. 本章の結論

本稿では、淡路島・小豆島における逆接の接続助詞「けれども」、「そうだけれども」を取り上げ、地理的な分布のみならず追跡調査などの結果を交えて経年変化の観点からも考察を行った。

瀬戸内海東部域に位置する淡路島・小豆島において伝統的語形のケンドとケドがせめぎ合いを見せており、また近畿中央部の影響もあって、次第にケドへと移行していく様子が明らかになった。GAJ「ケド」の分布との比較することによって近畿中央部での「ケド」の分布が、しだいに淡路島や小豆島にまで及んでいることが明らかになった。

【注】

注 1 小豆島言語地図の地図番号は、岸江信介・峪口有香子編（2015）『小豆島言語地図』の地図を掲載している。なお、言語地図の作図は筆者による。

第 13 章 小豆島における民俗語彙

— 「神輿」「葬式」「埋葬地」「墓制」を事例として—

1. 本章の目的

本章では、民俗語彙のうち、「神輿」「葬式」「埋葬地」「墓制」を事例として取り上げ、地理的分布を追いながら考察を行うことにする。同調査の質問項目は全体で約 180 項目に及ぶが、これら 4 項目について、今回、実施した調査結果をもとに分析を行うことにしたい。また、過去において当地域を対象とした調査があり、これらの結果との経年比較が可能である。以下では、これらの結果も併せて示すことにする。

2. 取り扱う調査について

本章で比較・考察の対象とするのは、LAS (1974)、徳島大学における小豆島における調査(岸江・峪口編 2015)である。

LAS は、第 2 章・4 章で紹介した調査概要に準ずる。徳島大学における小豆島における調査は、第 7 章で紹介した調査概要に準ずる。なお、この調査の結果については、岸江・峪口編 (2015) に詳しい。

以上の調査結果を随時比較し考察していくことにする。

3. 「神輿」における方言分布の概観

「みこし(神輿)」の地図を概観すると、まず小豆島全域にミコシ、オミコシなどのミコシ類が優勢であることがわかる。またオミコシサン、ミコシサン、ミコサン、ミコッサン、コッサンという敬称「さん」を付加させた形式も目立つ。この「さん」付けした形式は、関西では人以外にも付くことばが多くある。

また小豆島では、タイコという呼び方が、旧池田町に集中してみられる。これは池田の亀山八幡神社の秋季例大祭で奉納される太鼓台を指して、タイコと答えたものだと考えられる。特に、海路を経て参加する神ノ浦地区の太鼓台などは、内海特有の祭礼形態であり、亀山八幡神社秋季例大祭の特徴だといえるだろう。

また各地でダンジリがみられる。ダンジリは、もともと大阪を中心とした近畿一円でみられる「ダシ(山車)」のひとつを「ダンジリ(地車)」と呼んでいる。ただし、地域によっては、「まつり屋台」「太鼓台」「布団太鼓」「担きもの(かきもの)」などをダンジリと呼ぶところもある。

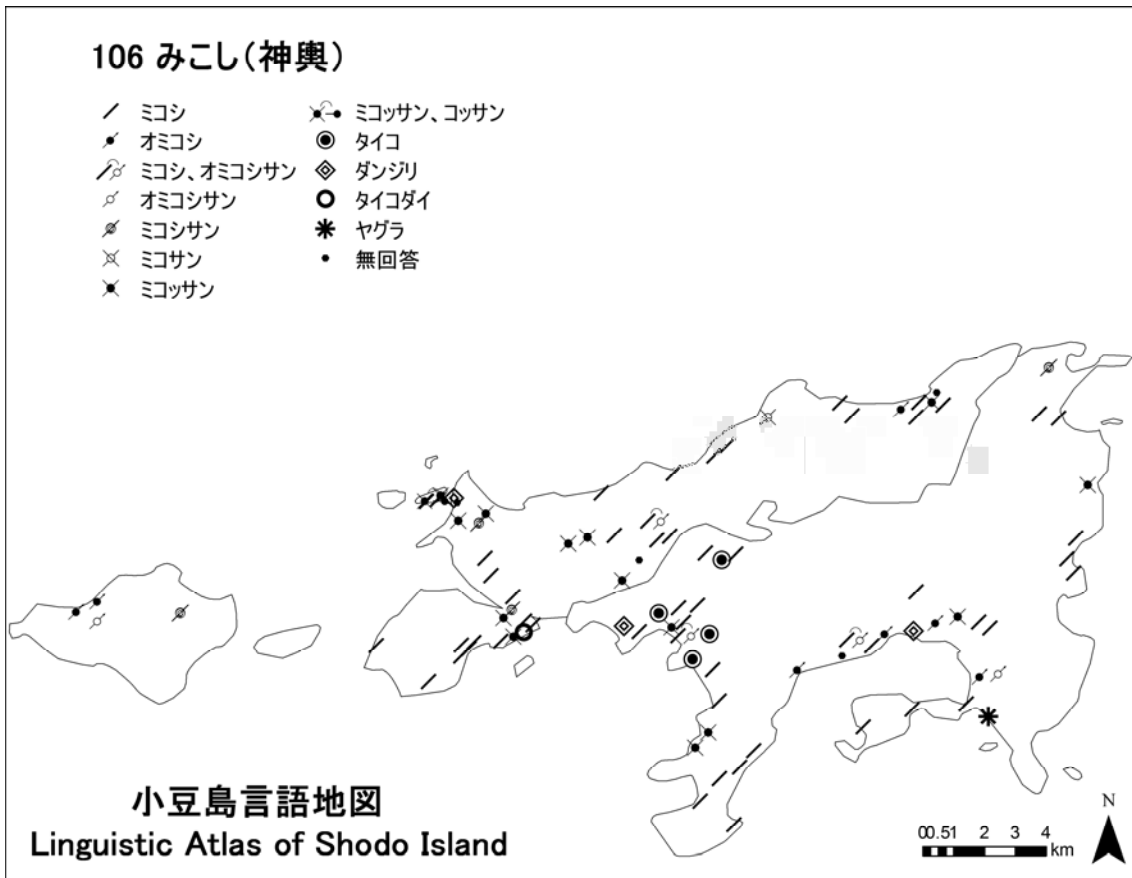


図1 小豆島調査「みこし(神輿)」

つまり、地域によってダンジリが指す対象は異なる。ダンジリに限らず、ミコシ、タイコ、タイコダイ、ヤグラなども地域により指す対象が異なることも断っておきたい。

また小豆島は瀬戸内海の交通の要衝に位置し、特に祭礼形態に関しては、大阪・播州・淡路島などからの影響を多く受けていることがわかる。瀬戸内海各地に散らばる祭礼の発端は、港町や漁師町の生活と密接に関連している。

4. 「葬式」における方言分布の概観

「葬式の名称」として、伝統的形式のソーレン・ソーレ（以下ソーレン類と呼ぶ）などを各地できくことができた。小豆島や豊島では、ソーレン類が優勢だといことがわかる。ソーレンは「葬礼」であり、かつて大阪・京都をはじめとして近畿各地で使用された形式であるが、近畿中央部では、いちはやく姿を消しているが、瀬戸内海東部に位置する淡路島では今でもなお、ソーレン類が優勢である（峪口・鮑 2013）。オクリ類（オクリ、ミオクリ）も小豆島内の各地で使用されている。オクリは、「野辺送り」であり、火葬場や埋葬場までつき従って送ることを指している。かつては、葬式は夜に行うもので、表座敷に祭壇を作り、僧が経を読み、列席者が焼香を行う、焼香が終わると野辺送りとなり、庭で葬列を組むという流れだった。回答例にもあるノベオクリ（野辺送り）、ノベマイリ（野辺参り）に関しても同じ意味合いがあるといえよう。また土庄町甲でみられた、トギ（伽）、トーギは、通夜のことを指している。通夜を行い日が明けると葬式をすることからトギ、トーギと回答されたものと考えられる。さらに、わずか1例だが、トムライという回答も得ることができた。

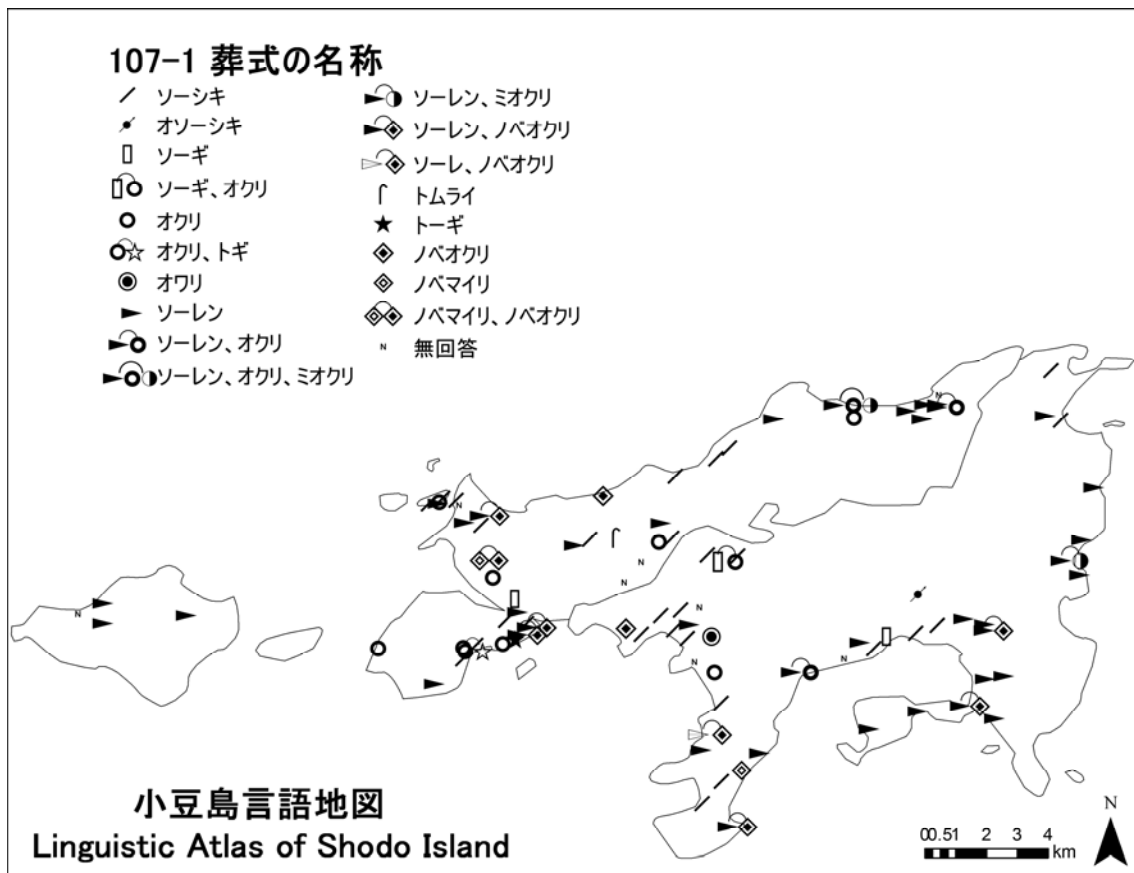


図2 小豆島調査「葬式の名称」

『日本国語大辞典 第二版』(2002)では「とぶらい(弔い)の変化した語」と説明されており、『羅葡日辞書』(1595)では「Necya<略>ビョウショニ フライテ シタル tomurai (トムライ)」としている。以上、葬式の名称にも、様々な語形を確認することができた。淡路島と同様に、葬式という項目に関しては、伝統的語形が多数認められ、共通語化の速度は遅いということがうかがえる。

5. 「埋葬地」における方言分布の概観

「埋葬地の名称」では、伝統的語形であるサンマイ・サンマのことばが各地で散見される。このサンマイについて、柳田國男(1969)にも「三昧即ち埋葬地」とであると述べている。これは、両墓制の「埋め墓(うめばか)」を指している。今回、埋葬地の名称として、ウメバカという回答が得られたのも、このことを意識してのことである。三昧は、『日葡辞書』(1603-1604)にもみられ、「Sanmai (サンマイ)。ハカドコロ<訳>寺院の墓地。あるいは、共同墓地」と記述している。近畿地方では福井県や三重県などにも「墓地」の意味としてサンマイが用いられており、近畿地方にみられる圏分布の一例である。また『小豆島の民俗』によると、埋め墓をミバカともいい、浜沿いに集中的に設けられていたという。

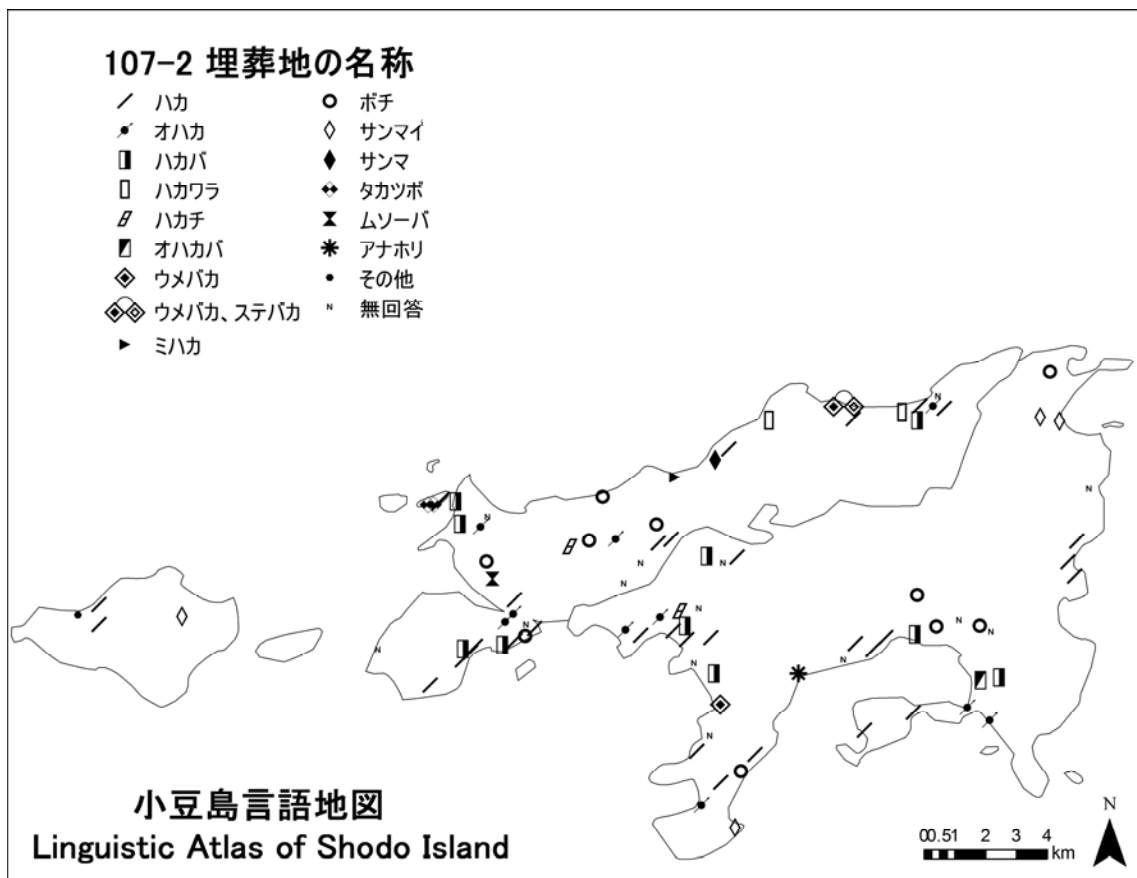


図4 小豆島調査「埋葬地の名称」

ミバカと同類のミハカも今回の調査でわずか1例だが認められた。さらに、ステバカ（捨墓）も埋め墓のことを表している。アナホリに関しても、土葬する際の墓穴掘りのことを指すのだろう。またタカツボという回答も得られたのだが、おそらく土庄町高壺山が埋葬地であったため、高壺山という地名を回答したのであろう。

ムソーバは、『日本方言辞典—標準語引き』（2003）によると愛媛県西宇和郡にみられる語形である。ムソー類は、主に東海から近畿にかけて埋葬地を意味する方言として用いられている。この他「詣り墓」「埋め墓」を区別せず、総称したハカ類（ハカ、オハカ、ハカバ、ハカワラ、ハカチ、オハカバ、ボチ）の呼び方が増えており、一般的になりつつある。両墓制から単墓制になりつつある現在、両墓制の折のサンマイ類が次第に姿を消し、ハカ類に統合されている。

6. 「墓制」における方言分布の概観

「墓制」とは、墓のつくり方のことを指している。墓制の回答例として、「単墓制」「両墓制」「もと両墓制」「無回答」の4種類ある。

ここで注目されるのは「両墓制」と「元両墓制」の多さである。両墓制は、日本に古くより伝わる墓制の形態を指し、墓地を二つにわけ祭祀と埋葬という二つの役割を分離させることをいう。柳田國男は昭和4年の「墓制の沿革について」の中で、両墓制の存在を指摘している。この両墓制の分布は、四国では香川・徳島の二県に限られるとし、香川では三豊・多度津郡の沿岸地方や島嶼部など西讃岐地方に多く分布するという（武田 1987）。つまり、ここでみられる分布から、日本の習俗であった「両墓制」のかつての存在を再確認することができる。

小豆島、土庄瀧崎の話者によると、「昔は、埋め墓はサンマイといい浜辺にあった。遺骸は大かめに入れて違う場所に埋めていた」とのことである。淡路島においても、ほぼ同様であり「両墓制」「もと両墓制」という回答は、ほぼ淡路島全島を占める結果だった（峪口・鮑 2013）。この両墓制は土葬を基本とし、遺体処理の方法が殆ど火葬に切り替わった現代では、すでに行われなくなったといっていよい。

小豆島の多くの集落は、昭和30年代から40年代にかけて、土葬から火葬に移行している。『小豆郡の民俗聞き取り集【土庄編3】四海・豊島・大部地区』によると、大部地区では、火葬になったことに伴い海岸沿いにあった埋め墓を整理し、地区ごとに墓地を整え、小豆島で遅くまで残っていた大部の両墓制の跡はすっかり姿を消したと記述している。

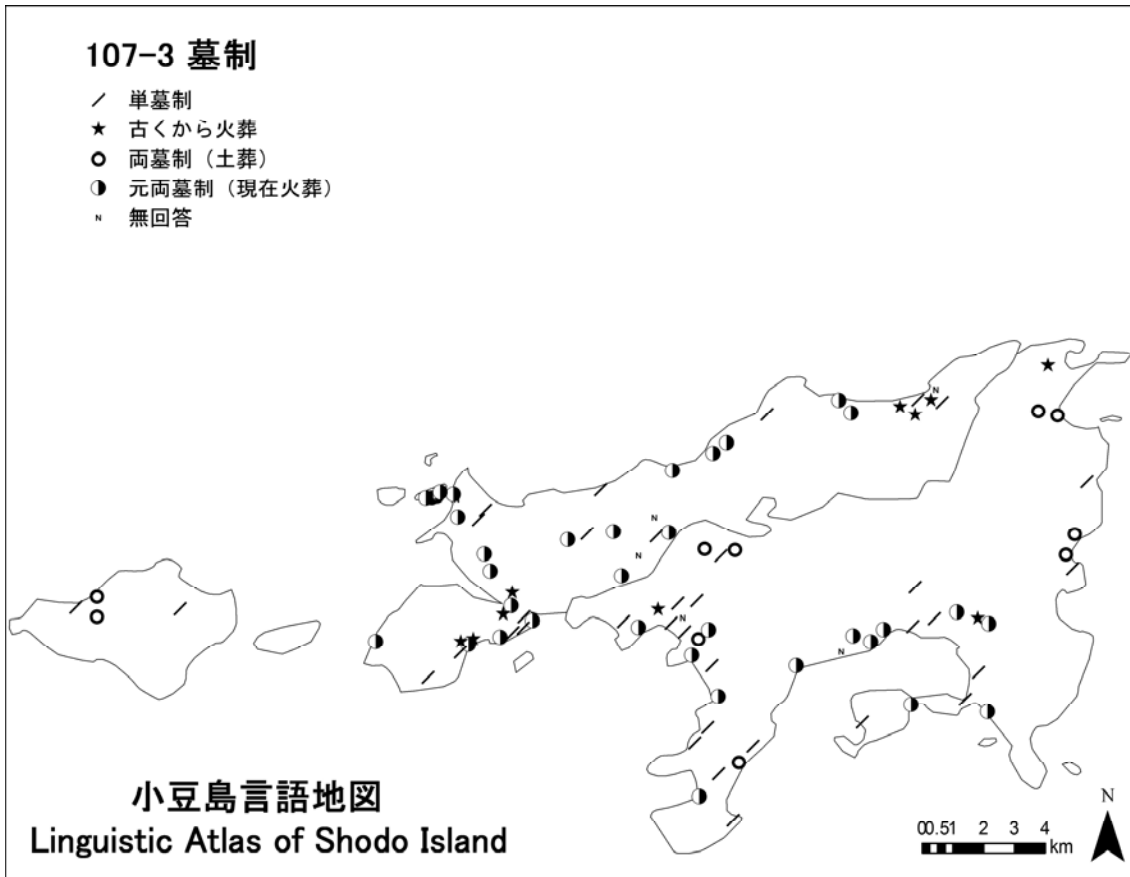


図4 小豆島調査「墓制」

7. 本章の結論

本章では、小豆島における民俗語彙「神輿」「葬式」「埋葬地」「墓制」を取り上げ、考察を行った。

今回扱った民俗語彙については、単に言語面からだけでは解明できない諸要因が潜んでいるようである。

「通夜」の項目で確認できた野辺送りなどは、全国的にみても現在ではめったに目にすることがなくなった。その背景にあるのは生業基盤の変化、車社会の成立、それにとともなう葬祭ビジネスの確立である。かつては、地域住民が組織化された組や講中などの人たちが葬儀の準備や賄いなどを受け持つという分業システムで葬送を執り行っていた。発展という流れは葬送の質的転換をもたらし、葬送の専門業者が、それまで血縁者や地縁者が受け持っていた葬儀に関わる準備などを代行するようになった。かつての野辺送りという葬送が、霊柩車で火葬場に運ばれるというようにならなくなっていった。

つまり地域が共同体としての機能を失い、地縁が希薄になっていったことが変化を進めていった要因になっている。それにとともない、民俗語彙におけ

る伝統的語形「ノベオクリ」「ミオクリ」「オクリ」「ソーレン」「サンマイ」「ハカワラ」「ハカンド」などのことばも葬送形態の変化により衰退の一途を辿っている。

墓制についても、同様なことがいえる。かつて、日本の伝統的な習俗である「両墓制」は減少しているのは事実である。さらに、単墓制の地域が増えていることも起因して、「ハカ」「ハカバ」「ハカチ」という呼び方が一般的になりつつあるのかもしれない。この墓制の変化とともに、伝統的形式である、「サンマイ」「サンマ」がいずれは衰退の方向を辿ることは必須である。

今後は地域性や、土地ごとの風習といった、より多角的な視点から言語変化の理解を深めていき、調査を進めていきたい。

【注】

注1 小豆島言語地図の地図番号は、岸江信介・峪口有香子編（2015）『小豆島言語地図』の地図を掲載している。なお、言語地図の作図は筆者による。

IV. 結論

第 14 章 本論のまとめと今後への提起

1. 本論のまとめ

本章は、本論文の結論にあたる。第 1 節では、本論（3 章～13 章）で論じたことを整理するとともに、第 1 章で掲げた目的に対応させた形で結論を述べる。

まず、第 3 章では、従来の言語地理学研究とは違う方法論を提示した。これまで紙媒体で作成された地図や、この地図を作成するための資料をすべてデジタル化することが不可欠であることを説いた。GIS をベースにした言語地図を作成することにより、地理空間情報の活用がスムーズに行えることになる。

本論文においては、このような状況のもと、主に紙媒体で残されているデータの地理空間情報のデジタル化に取り組み、言語情報の共有化を図ることの重要性を指摘した。そのモデルとなるのが、実際に行った、藤原与一・広島方言研究所編『瀬戸内海言語図巻』の電子化の試みである。この結果をもとに GIS を利用して言語地図化を行った。同図巻が刊行されて以後、約 40 年後に電子化、すなわち GIS 上でデータを分析することが可能になったわけである。

また、これと並行して、筆者が独自で実施した瀬戸内海域での言語地理学的研究の調査結果（本文での『峪口調査』）も当然電子化を行い、GIS での言語地図化を行った。これら電子化の意義は、双方の調査結果をコンピューターの同一画面上で自由自在に比較することができるようになることである。『瀬戸内海言語図巻』は、60 年代の調査であり、峪口調査の時期とは、実に 50 年以上の開きがある。この実時間上での言語変化のありさまが非常に厳密に比較できるようになったのも、電子化データの GIS 化によるものであるといえよう。

日本の方言研究の分野では、GIS の利用はまだ緒に就いたばかりであり、残念ながらこれまで本格的な活用はなされていない。そこで、本論では、半世紀以上も開きがある調査結果について空間情報を利用した言語地図の比較を行い、分析した。言語地理学による言語変化について GIS を活用して一定の結論を出すという試みはこれまでなされていなかった。

以下では、このような空間情報科学をベースに行った分析結果の事例を提示しながら方言がどのような変化を辿ってきたか、その実態について少しく述べることにしたい。

第 4 章では、「サツマイモ」の方言を取り上げた。この事例では、空間分析の空間検索、標準偏差楕円を用いた分布志向性分析を利用することによって、LAS の時代で多くみられていた方言形のイモが、時間が経つことにより、サツマイモという共通語形へと置き換わっていったことが判明した。かつてイモはサトイモ

の名称として使用されていたが、使用される地域や時代によって、イモの意味は、サトイモ・サツマイモ・ジャガイモへと変化していったと考えられる。また共通語形のサツマイモは、空間統計図で確認されたように、瀬戸内海域で使用の拡大がみられた。一方で、かつて江戸安永年間に近畿で使用されたリュウキュウイモという語形が地域を限定して、今でも残存することが認められた。

言語伝播として、言語の地理的な分布が退縮したり、あるいは逆に拡散したりする状況をつかむことができれば言語変異の実態を把握することができるはずである。これまで実時間上での調査結果の比較が確かにこれまでに行われてきたものの、双方の地図を目で追って比較し、分析するというのが唯一の方法であった。このような状況のもと、分布志向性分析を援用したのは、日本の方言研究では最初である。

LAS 調査のデータを用いて標準偏差楕円を描き、また、峪口調査のデータでも同様に標準偏差楕円を描き、これら双方の楕円を重ねることによって時系列的にモデリングすることが可能となる。分布志向性分析と呼ばれる方法である。誰が追試しても同じ結果を導ける。今回のこの分析をもとにして、共通語と伝統方言に着目し、その双方の分布を分析した。今回の事例から明らかになったことは、複雑な分布の中にも、古い語形が次第に淘汰され、共通語形が拡大する一方で、古い語形があくまでも地域を限定してだが、残存する傾向があることを見出した点である。

今後、言語地理学において分布自体を相互に比較するというケースも追跡調査が行われたり、過去の言語地図が電子化されたりすることによって機会が増えることになるはずである。今回試みた、標準偏差楕円をもとにした分布志向性分析が今後、言語伝播や分布領域の状況を判断する手法として活用されることが期待される。

第5章では、「にわか雨」の方言を例に、その方言分布がいかに瀬戸内海域で形成されてきたのかを、これまでに瀬戸内海をフィールドとして行われた三つの方言調査結果にもとづき、方言分布に視点をすえ、分布自体の移り変わりを探りながら論じた。ここでも、標準偏差楕円を用いることで、過去の3種類の調査結果をそれぞれ比較し、空間分析の一つである分布志向性分析を行った結果、ソバエ類は、依然として勢力を保って分布していることが確かめられた。一方、共通語形のニワカアメ、トリアアメ、ユダチとソバエ類を囲むように使用が拡大していることを指摘した。経年データをもとに各々標準偏差楕円を描き、楕円を重ね合わせることによってその方言の存続や衰退などについて客観的な分析が可能になるのである。このような試みと検討は、日本の方言研究界ではこれまでまっ

たくなされておらず、拙稿を機に分布の指向性を探る分析手法として定着することが望まれる。

第6章では、文末詞「ナー」「ノー」を取り上げた。この章では、有限の標本点から全体の分布を推定する、空間分析の一種のカーネル密度を用いた。ここでは、各文末詞の地理的な分布をもとにポイントデータの分布図を面の密度図へと変換し考察を行った。カーネル密度では、ポイントデータをもとに実際には調査されていない地点のポイントデータを推定データとして配置していくという手法である。カーネル密度推定と呼ばれる所以である。

この手法も、日本の方言研究で利用された形跡はなく、今後、言語変化の動向を地理的分布から探るうえで有効な分析法であることは言を俟たない。

例えば、峪口・桐村・岸江（2015）によって進められているツイッターデータなどのビッグデータを対象とした地理的分布の動態などを探るには、これら統計的な推定や分布の志向性を探る分析が必須となるであろう。

なお、この章で扱った文末詞「ナー」は、時間が経過することで、西に進んでいることが確かめられた。また、文末詞「ノー」は、LAS時の老年層で、特に瀬戸内海中部・東部では健在であったが、少年層ではほとんどその使用がみられなくなっていた。ところが、峪口調査の「ノー」は未だに瀬戸内海全体で、顕在であることが判明した。これは、LASが女性だけを対象にした調査であったことが起因している。「ノー」は、過去においては男女ともに使用された形式であったが、LAS時代の少年層（すなわち、少女層）にとっては各地で理解語ではあっても使用語ではなかった。一方、峪口調査は、回答者を女性のみ限定せず、男性も対象とした。「ノー」は瀬戸内海域で男性語としては健在であることが確かめられたのである。「ナー」「ノー」は、男女差があるものの、瀬戸内海域で根強く使われていることを論じた。

第7章では、原因・理由を表す順接の接続助詞である「から」を例に、方言分布の「実時間」上の変化に焦点をあてながら言語変化の動向について論じた。この章では、空間分析の標準偏差楕円とメッシュ地図による言語分析を試みた。これまでの調査と比較した結果、大局的には、ケー、サカイ（ニ）、ヨッテ（ニ）など、瀬戸内海域において広範囲に分布を形成していた諸形式は、依然としてその分布領域を保持しているといえる。ただ、ケンに関しては約80年前の調査ではまったく現れず、現在、ケンを使用する地域では、かつてケニ（ないしキニ）が使用されていたことが認められた。つまり、ケニ（ないしキニ）からケンへと変化が生じ、そして現在ではケニ（ないしキニ）がほとんど消え、ほぼケンに統一されていることが判明した。一方、限られた地域にみられた、各地の特色ある形式は

分布領域の退縮のみならず、各地での衰退化が激しいという事実が明らかとなった。このような背景には、LAS 調査時の段階でみられた多様な形式が各地域で勢力のある形式（例えばケンの拡大など）に飲み込まれるという傾向がみられることが起因していると考えられる。

第 8 章では、方言データを地図情報と関連づけ、なおかつインタラクティブに表示するシステムを構築するため、これまで進めてきた瀬戸内海を対象とした言語地理学的調査の成果に対し R および Leaflet を利用した新たな言語地図の可視化を試みた。また R を援用した可視化技術は、今後ウェブサービスとしての公開を目論んだものであり、言語情報の共有化を図ることができた意義は大きい。

昨今、方言が消滅する危機が問題視されているが、方言の全体像を余さず残すには、方言の記述だけでなく、その地理的な分布をデータ化することが必要である。特に今後とも、消滅する方言を記録し、広くデジタルアーカイブとして一般に公開されることが重要であり、そのため WEB 上での地理情報システムを利用し、研究成果を提示できるという点は非常に魅力的であり、GIS による言語地理学研究が今後さらに飛躍的に前進するという可能性も秘めている。

第 9 章では、瀬戸内海東部域における「コピュラ形式」を取り上げた。瀬戸内海東部をみると、時間が経過するにしたがって「ヤ」が西進していく様子をつかむことができた。さらに、今回フィールド調査対象地域として設定した、小豆島においては、小豆島町と土庄町とでは、言語変化に差があることも判明した。また、コピュラ形式においては、見かけ時間上の変化は、実時間上の変化とほぼ一致していたことが確認できた。50 余年を経た今回の一連の追跡調査では、LAS 調査の少年層の結果にも注意を払った。つまり、LAS の調査時において少年層であった話者は、現在、60 歳を超える年齢に達しており、今回、追跡調査での老年層の結果と、どの程度一致するか、興味深く思われたからである。もちろん当時の話者を探し、回答してもらおうということはできなかったが、全体的な比較を通して、LAS における少年層での結果が今回の老年層の結果とおおむね一致したことを論じた。

第 10 章では、文末詞「ノーシ・ノモシ」「ゾイ」を取り上げた。「ノーシ・ノモシ」の事例では、LAS 老年層図にみられた分布が、少年層図では分布が消えてしまったにもかかわらず、峪口調査ではこれらの使用が再び確認できたという点に関し、その理由に言及した。ここで考えらえるのは、LAS 時、少年だった話者たちは、すでに文末詞「ノーシ・ノモシ」類を、当時、高齢者が使用する伝統的な方言形式という認識をすでにしていただと思われ、聞くことはあっても使用しなかったものと思われる。方言が中心となる地域言語社会においても同様で、少年

時代、大人が話すことばを理解語として受容するが、子ども時代には使わずにいることばは多くある。ただ、その土地で成長するにしたがって子ども時代の理解語が次第に使用語となっていくこともあると考えられる。このことは、Giles & Powesland (1975) による Speech Accommodation Theory (アコモデーション理論) によっても裏付けられると考えられる。文末詞「ノーシ・ノモシ」の使用地域は限定されるものの、使用地域では一旦は理解語として受け継がれつつも、高齢者の仲間入りをした 50 年前の少年たちによって今、確かに使用されていることが明らかとなった。

さらに、文末詞「ゾイ」は、LAS 時に行われた少年に対する調査では僅かな使用が確認できたが、50 年後の岬口調査でまだ完全には衰退していないことを突き止めることができた。岬口調査では、瀬戸内海東部である、徳島県鳴門市付や淡路島において「ゾイ」が、今なお使用されていることを明らかにした。また、瀬戸内海全域においてもまばらながら残存していることも同時に確かめることができた。文末詞「ゾイ」は経年変化によって衰退の一途をたどっている様相を呈しているものの、瀬戸内海各地で細々とではあるが、確かに受け継がれてきたことを確認することができたのである。

第 11 章では、淡路島における「じゃがいも」「さといも」の方言を取り上げた。「じゃがいも」に関しては、LAS 時に淡路島中央部の洲本市でみられたバレーシヨは、2012 年調査において激減しており、洲本市 1 例、淡路市 1 例のみみられたにすぎない。分布傾向として、バレーシヨがジャガイモ・ジャガタライモに置き換えられているようである。さらに「さといも」は、1999 年調査、2012 年調査を比較した結果、諸語形の中でも比較的古い語形だといわれている「イモノコ」の分布が残存していることが認められた。1999 年調査では、淡路市と洲本市の南部にみられ、2012 年調査では淡路市のみだが、それぞれ使用を確認することができた。このことから、イモノコが淡路島南部にも残存していることが明らかになった。

第 12 章では、逆説の接続助詞「けれども」「そうだけれども」を取り上げ、地理的な分布のみならず追跡調査などの結果を交えて経年変化の観点からも考察を行った。瀬戸内海東部域に位置する淡路島・小豆島において伝統的語形のケンドとケドがせめぎ合いを見せており、また近畿中央部の影響もあって、次第にケドへと移行していく様子が明らかになった。GAJ「ケド」の分布との比較することによって近畿中央部での「ケド」の分布が、しだいに淡路島や小豆島にまで及んでいることが判明した。

第 13 章では、小豆島における民俗語彙「神輿」「葬式」「埋葬地」「墓制」を取

り上げた。今回扱った民俗語彙に関する中には単に言語面からだけでは解明できない諸要因が潜んでいるようである。「通夜」の項目で確認できた、野辺送りなどは、全国的にみても現在ではめったに目にすることがなくなった。その背景にあるのは生業基盤の変化、車社会の成立、それにともなう葬祭ビジネスの確立である。かつては、地域住民が組織化された組や講中などの人たちが葬儀の準備や賄いなどを受け持つという分業システムで葬送を執り行っていた。発展という流れは葬送の質的転換をもたらし、葬送の専門業者が、それまで血縁者や地縁者が受け持っていた葬儀に関わる準備などを代行するようになった。かつての野辺送りという葬送が、霊柩車で火葬場に運ばれるというようになり変化していった。つまり地域が共同体としての機能を失い、地縁が希薄になっていったことが変化を進めていった要因になっている。それにともない、民俗語彙における伝統的語形「ノベオクリ」「ミオクリ」「オクリ」「ソーレン」「サンマイ」「ハカワラ」「ハカンド」などのことばも葬送形態の変化により衰退の一途を辿っている。

墓制についても、同様なことがいえる。かつて、日本の習俗であった「両墓制」は減少しているのは事実である。さらに、単墓制の地域が増えていることも起因して、「ハカ」「ハカバ」「ハカチ」という呼び方が一般的になりつつあるのかもしれない。この墓制の変化とともに、伝統的形式である、「サンマイ」「サンマ」がいずれは衰退の方向を辿ることは必須である。

以上の考察を踏まえて、瀬戸内海域の方言分布傾向を以下3点に絞って分類を行う。

- (1) 『瀬戸内海言語図巻』時の地理的分布の領域が拡張・退縮するもの
- (2) 『瀬戸内海言語図巻』時の地理的分布の領域が拡張・退縮しないもの
- (3) 『瀬戸内海言語図巻』時の老年層でみられた語形が少年層では消え約50年経った今、使用の確認ができたもの

- (1) 『瀬戸内海言語図巻』時の地理的分布の領域が拡張・退縮するもの

地理的分布の領域が拡張するものとして、5章で取り上げた「にわか雨」の共通語形である「ニワカアメ」「トーリアメ」「ユウダチ」とソバエ類を囲むように使用が拡大していた。つまり、共通語形の領域は拡張していることが認められた。

6章で取り上げた、文末詞「ナー」、第9章で取り上げたコピュラ形式「ヤ」の分布は、瀬戸内海西部まで分布領域が拡張していた。関西系の言い方が瀬戸内海東部のみならず、勢力を拡大し西進していることが確認できた。

第11章で取り上げた「じゃがいも」は、LAS時にみられた音声変化形の「ジ

ヤカイモ」は、「ジャガイモ」という共通語形に変化していた。

第12章で取り上げた「けれども」「そうだけれども」をみると、LAS時では優勢だった「ケンド」が退縮傾向にあり、瀬戸内海東部域では、次第に「ケド」に移行しつつある様子を確認することができた。つまり藤原（1976）が指摘した、ケンド（ケード）は、次第に衰退していくということが実証された。さらに、GAJ「ケド」の分布との比較することによって近畿中央部での「ケド」の分布が、しだいに淡路島や小豆島にまで及んでいることが判明した。

（2）『瀬戸内海言語図巻』時の地理的分布の領域が拡張・退縮しないもの

5章で取り上げた「にわか雨」の伝統的語形であるソバエ類は、依然として瀬戸内海域で勢力を保ち分布していることから、退縮しないものといえるだろう。

6章で取り扱った文末詞「ノー」は、老年層図で広域に使用されており、一方で少年層図では瀬戸内海中部中心の分布だったが、峪口調査においては、内海全域で使用の確認ができ、つまり「ノー」の分布は、分布領域が退縮しないものといえよう。

7章で取り上げた原因・理由を表す接続助詞「から」は、サカイ、ケン・ケー等、LAS調査で瀬戸内海域において広範囲に分布を形成していた諸形式は依然としてその分布領域を保持しているといえる。

（3）『瀬戸内海言語図巻』時の老年層でみられた語形が少年層では消え約50年経った今、使用の確認ができたもの

第10章で取り上げた文末詞「ノーシ・ノモシ」は、約50年前少年だった人たちは理解語として受容し、その土地で成長するにしたがって使用語と定着していたことが判明した。

大局的には、約50年という歳月が、各地で方言形を衰退させていることはいうまでもなく、年層語形がそのまま使用され続けられているか、かつての少年層語形が定着をみせているか、あるいは老年層で使用されていた語形が少年層では消え、峪口調査で新たに使用の確認できたことなど、言語変化が著しく、かつその方言変容の動きが地域、項目によって一律ではない傾向を空間的に把握することができた。

さらに、近畿中央部を中心に新たに発生したとみられる形式が瀬戸内海を西進していく状況を捉えることができた。つまり、関西中央語が瀬戸内海諸方言に影響を与え、徐々に伝播と拡散を繰り返していったと考えられる。これもまた、本

論文の言語地理学的観点からの比較を行うことで得ることができた知見である。

2. 今後への提起

本稿で取り上げてきた、GIS を活用した方言研究は、言語地理学の目的をあらためて問い直すとともに、方言形成の原理そのものの追及や検討に立ち戻り、新たな方向に向けての再出発を促す契機になると確信する。GIS の空間解析である、空間検索、点分布の分布傾向や拡散を把握するための標準偏差楕円、点分布の密度をみるカーネル密度、点分布の使用割合をポリゴン単位で表示したメッシュ地図および R を援用した可視化技術など、新たな手法を用いた事例研究は、言語地理学にとって初の試みであるといつて過言ではない。また、従来の言語地図では地点で表され、分布図をよむには、地理的解釈や国語史の知見を組み合わせ、言語事象の解釈を行ってきた。ところが、GIS による空間分析を使うことにより多角的な視点から言語伝播の状況を把握することができた。

しかしながら、言語地図の GIS 分析を進めるうえでの課題も多い。その一つに言語地図作成のための GIS 環境が十分に整っていない点が指摘できよう。言語地図の GIS 分析に際しては、紙地図上の調査結果を電子データ化する必要があり、紙地図上にプロットされているすべての方言データをもとに凡例を一つずつ拾いながらデジタル化しなければならない。研究者が個々にポイント・ライン・ポリゴンデータを最初から作成する必要もあり、膨大な時間と労力が求められる。今後、言語地図を用いた GIS 分析が進展していくためには、言語地理学におけるこれまでの研究成果も活用しつつ、全国各地の方言に関わる基礎的な空間データを整備しなければならない。

今後、GIS を活用した言語地理学を推進していくためには、以下の3点が重要な課題となる。

- (1) GIS を活用して、通説となっている方言理論の再検討を迫る研究成果をあげること
- (2) 研究成果を社会に向けて発信し、人々の知的好奇心を刺激すること
- (3) 今までの言語地理学ではなく、地理情報科学・空間情報科学という新しい学問分野との融合の道を示すこと

以上の点をふまえ、今後、これまで集められてきた方言データをもとに作成された言語地図の電子化を進めるとともに、日本各地の言語調査を並行して進め、日本語方言における言語変化がどのような軌跡を辿ってきたか、また言語変化の

変容プロセスを解明し、言語変容地域における共通語の普及過程や言語外地理情報を軸にした分析手法を取り入れるなど、理論化・一般化のために、今後、広く様々な事例を統合して検討していかなければならない。

参考文献一覧

- 池田潤（2006）「GISと言語研究」『一般言語学論叢9』筑波一般言語学研究会
- 伊藤章治（2008）『ジャガイモの世界史』中公新書
- 井上史雄（2003）『日本語は年速一キロで動く』講談社現代新書
- 井上史雄（2004）「標準語使用率と鉄道距離にみるコミュニケーションの地理的要因」『社会言語科学』第7巻1号
- 井上史雄（2008）『社会方言学論考』明治書院
- 今石元久（1980）「岡山鳥取兵庫三県域の方言についての方言地理学的調査研究」『方言研究叢書』第9巻
- 入谷仙介（1991）「淡路島の伝承と民間信仰－神話と古代を尋ねて－」『海と列島文化 第9巻瀬戸内の海人文化』小学館
- 岩城裕之・村上敬一（2004）「兵庫県南西部～岡山市における関西方言受容モデルの構築－コミュニティの状況と人の移動－」『第79回日本方言研究会発表原稿集』日本方言研究会
- 榎垣実編（1962）『近畿方言の総合的研究』三省堂
- 榎垣実編（1962）「兵庫県方言－南部」『近畿方言の総合的研究』株式会社三省堂
- 江端義夫（2001）「方言の係助詞「ゾ」と終助詞「ゾ」との関連分布についての研究」『広島大学大学院教育学研究科紀要』 第二部 第50号
- 大西拓一郎（2003）「方言学とGIS」『人文科学とGIS』富山大学人文学部
- 大西拓一郎（2004）「地理情報誌システム（GIS）を利用した日本語研究」『日本語学』23.15
- 大西拓一郎（2006）「言語地理学の再起動」『日本のフィールド言語学』桂書房
- 大西拓一郎（2007）「方言分布の解明に向けて－原点に帰る言語地理学－」『日本語科学』21 図書刊行会
- 大西拓一郎（2007）「『方言文法全国地図』の特色とデータの活用」『日本語学』明治書院
- 大西拓一郎（2007）「地理情報システムと方言研究」『方言学の技法』岩波書店
- 大西拓一郎（2008）「方言学とGIS」『人文科学とGIS』富山大学人文学部GIS研究会
- 大西拓一郎（2008）「地理情報としての方言」『現代方言の世界』朝倉書店
- 大西拓一郎（2008）「方言資料の現在」『日本語の研究』4-1 日本語学会
- 大橋勝男著（1974-1976）『関東地方城方言事象分布地図』桜楓社
- 岡山民俗学会・香川民俗学会編（1970）『小豆島の民俗』岡山民俗学会・香川民俗学会

- 香川県はなしことば研究会編（2003）『讃岐弁あれこれ』ウエルオン社
- 加藤正信（1971）「方言間対応による分布処理」『国語学研究』11
- 鎌田良二著（1979）『兵庫県方言文法の研究』株式会社桜楓社
- 鎌田良二（1999）『兵庫県の方言地図』神戸新聞総合出版センター
- 岸江信介（1981）「小豆島方言・文末詞の記述（その1・単純感声的文末詞）」『い
ずみ』大阪市立泉尾第二工業高等学校・研究紀要 第12号
- 岸江信介（1983）「小豆島方言・文末詞の記述（2）」『いずみ』大阪市立泉尾第
二工業高等学校・研究紀要 第13号
- 岸江信介編（2011）『大都市圏言語の影響による地域言語形成の研究』科学研究
費補助金（基盤研究C）研究成果報告書、2008年-2010年度「大都市圏言語
の影響による地域言語形成の研究」（研究代表者：岸江信介）
- 岸江信介・品川大輔・清水勇吉・峪口有香子・松田将平編（2012）『四国北部地
方の言語変異—高松・愛南グロットグラム調査から—』徳島大学総合科学部日
本語学研究室
- 岸江信介・村田真実・峪口有香子・曾我部千穂・森岡裕介・林琳編（2013）『淡
路島言語地図』徳島大学日本語学研究室
- 岸江信介・峪口有香子（2015）『小豆島言語地図』科学研究費補助金（基盤研究
A）研究成果報告書、2011年-2015年度「方言分布変化の詳細解明—変動実
態の把握と理論の検証・構築—」（研究代表者：大西拓一郎）
- 清瀬良一（1958）「神戸方言の文末助詞」『方言研究年報』第一巻 広島大学方言
研究会
- 熊谷康雄（編）（2013）『国立国語研究所共同研究報告 12-05 大規模方言データの
多角的分析 成果報告書 —言語地図と方言談話資料—』国立国語研究所
- グロータース（1970）「鳥瞰的広域言語地図と微細言語地図」『方言研究の問題点』
明治書院
- グロータース（1976）『日本の方言地理学のために』平凡社
- 国立国語研究所編（1989-2006）『方言文法全国地図』全6巻 財務省印刷局
- 国立国語研究所編（1966-1974）『日本言語地図』全6巻 大蔵省印刷局
- 小西いずみ編（2010）『広大生の方言地図 2008—2009』広島大学大学院教育学研
究科国語文化教育学講座 私家版
- 小林浩二（2005）「地域研究における地図の役割と課題」『地図 空間表現の科学』
日本国際地図学会 vol.43
- 小林賢次（1992）「原因・理由を表す接続助詞—分布と史的変遷—」『日本語学』
11.6

- 小林賢次（2005）「条件表現史にみる文法化の過程」『日本語の研究』第1巻3
- 小林隆（2002）「日本語方言形成のために」『方言地理学の課題』明治書院
- 小林隆（2004）『方言学的日本語史の方法』ひつじ書房
- 小林隆（2014）「方言形成論の到達点と課題－方言圏論を核にして－」『柳田方言学の現代的意義』ひつじ書房
- 小林千草（1977）「近世上方語におけるサカイとその周辺」『近代語研究』5 武蔵野書院
- 佐々木峻・藤原与一（1998）『日本語文末詞の歴史的研究』三弥井書店
- 峪口有香子・鮑璐萍（2013）「淡路島の民俗（1）－彼岸花・神輿・葬式・墓地・墓制－」岸江信介・村田真実・峪口有香子・曾我部千穂・森岡裕介・林琳編『淡路島言語地図』徳島大学日本語学研究室
- 峪口有香子・村垣涼（2013）「淡路島における順接の接続助詞について」岸江信介・村田真実・峪口有香子・曾我部千穂・森岡裕介・林琳編『淡路島言語地図』徳島大学日本語学研究室
- 峪口有香子（2013）「淡路島における逆接の接続助詞について」岸江信介・村田真実・峪口有香子・曾我部千穂・森岡裕介・林琳編『淡路島言語地図』徳島大学日本語学研究室
- 峪口有香子・岸江信介（2013）『瀬戸内海言語図巻』の電子データ化の試み：瀬戸内海域における方言通信調査による電子データとの実時間上の比較」2013年度日本語学会中国四国支部大会研究発表配布資料
- 峪口有香子・桐村喬・岸江信介（2015）「ツイッター投稿データにもとづく「気づかない方言」の分布解明」『日本語学会2015年秋季大会発表原稿集』日本語学会
- 佐藤虎男（1975）「大阪府方言の研究（3）－泉南郡岬町多奈川方言の文末詞（二）－」『学大国文』（18）大阪学芸大学国語国文学研究室
- 佐藤虎男（1990）「瀬戸内海東部域の言語流動に関する一考察－性向語彙に注目して」『内海文化研究紀要18・19』広島大学文学部内海文化研究室
- 佐藤虎男編（1990）『小豆島と対岸要地の方言事象年層分布図集－『瀬戸内海言語図巻』の25年後追跡調査－』大阪教育大学方言研究会
- 佐藤虎男（1999）「小豆島を中心とした内海東部域の方言の動態」『瀬戸内海圏環境言語学』武蔵野書院
- 佐藤米司著（1971）『葬送儀礼の民俗』岩崎美術社
- 佐藤亮一（1992）「標準語・共通語の地理的背景」『日本語学』11.6
- 佐藤亮一監修（2002）『方言の地図帳』小学館

- 真田信治 (1979) 『地域語への接近－北陸をフィールドとして』 秋山叢書
- 真田信治 (1990) 『地域言語の社会言語学的研究』 和泉書院
- 真田信治 (1996) 『地域語のダイナミズム関西編 (地域語の生態シリーズ)』 おうふう
- 真田信治 (2001) 『標準語の成立事情』 PHP 文庫
- 真田信治 (2001) 『方言は絶滅するのか－自分のことばを失った日本人』 PHP 新書
- 真田信治 (2002) 『方言の日本地図・ことばの旅』 講談社+α 新書
- 真田信治 (2006) 『社会言語学の展望』 くろしお出版
- 沢木幹栄 (1962) 「物とことば」『日本の方言地図』 中公新書
- 柴田武 (1954) 「方言調査法」『日本方言学』 吉川弘文館
- 柴田武 (1969) 『言語地理学の方法』 筑摩書房
- 柴田武 (1995) 『日本語はおもしろい』 岩波書店
- 柴田武 (2003) 「日本全土の方言」『月刊言語』 vol.32 No1 大修館書店
- 島田治 (1999) 『香川県東部島嶼方言における語彙・語法の変容について』 香川県話し言葉研究会
- 小豆郡民俗研究会編 (2013) 「小豆郡の民俗聞き取り集【土庄編 3】 四海・豊島・大部地区」『小豆島民俗研究会紀要』 第 3 集、小豆郡民俗研究会
- 小豆島の民俗を語る会編 (2001) 『小豆島の方言集』 語る会紀要第二集 小豆島民俗資料館
- 小学館国語辞典編集部ほか編『日本国語大辞典 第二版』 小学館
- 尚学図書編 (1989) 『日本方言大辞典』 小学館
- 尚学図書・言語研究所 (1991) 『方言の読本』 小学館
- 杉浦芳夫 (2012) 『地理空間分析』 朝倉書店
- 高坂宏行・関根智子 (2005) 『GIS を利用した社会・経済の空間分析』 古今書院
- 高橋顕志 (2002) 「情報化時代の方言研究」『21 世紀の方言学』 日本方言研究会編 図書刊行会
- 高橋顕志編 (2005) 『「しまなみ」架橋による地域方言の変化』 科学研究費補助金 (基盤研究 C) 研究成果報告書、2002 年-2004 年度 「「しまなみ」架橋による地域方言の変化」 (研究代表者: 高橋顕志)
- 高橋重雄・三条和博・井上考・高橋朋一 (2005) 『事例で学ぶ GIS と地域分析－ArcGIS を用いて』 古今書院
- 田原広史 (2002) 「方言のデータベースコンピュータ言語地図」『朝倉日本語講座 10 方言』 朝倉書店

- 近石泰秋（1976）『香川県方言辞典』風間書房
- 都染直也編（2000）『兵庫県朝来郡神崎郡接境地域言語地図（朝来郡朝来町・生野町・神崎郡神崎町・大河内町）』甲南大学方言研究会 興津憲作（1990）『淡路方言－その特徴・語法・アクセント・語彙－』淡路文化会館運営協議会
- 都染直也（2010）『兵庫県姫路市家島町のことば（1）－語彙・文法・アクセントの地域差・年代差－』甲南大学方言研究会
- 都染直也（2012）「日本語の攻防言語変種グロットグラムでみる方言の動態」『日本語学』31.13
- 東條操（1971）『全国方言辞典』東京堂出版
- 東條操先生古稀記念会編（1956）『日本方言地図』吉川弘文館
- 友定賢治編（1994）『大阪～徳島グロットグラム図集』鳴門教育大学大学院'93 現代語演習 私家版
- 友定賢治（2001）「方言の変容－瀬戸内海を例に－」『現代方言事情－消える方言、生まれる方言－』広島大学教務委員会 広島大学公開講座テキスト
- 友定賢治（1988）「同一話者の25年後の言語変化－『瀬戸内海言語図巻』の追跡調査から－」『文教国文学』第22号
- 友定賢治（1999）『『瀬戸内海言語図巻』の老年層追跡調査報告－岡山県笠岡諸島における－』『瀬戸内海圏環境言語学』武蔵野書院
- 徳川宗賢（1968）「日本言語地図をめぐって」『国語学』74
- 徳川宗賢（1970）「言語地理学と言語史」『文科系学会連合研究論文集』20
- 徳川宗賢（1972）「ことばの地理的伝播速度など」『服部四郎先生定年退官記念論文集現代言語学』三省堂
- 徳川宗賢（1974）「方言地理学と比較言語学」『学習院大学国語国文学会誌』17
- 徳川宗賢（1979）「これからの言語地理学」『国語学』162
- 徳川宗賢（1972）「ことばの地理的伝播速度など」『服部四郎先生退官記念論文集現代言語学』三省堂
- 徳川宗賢（1993）『方言地理学の展開』ひつじ書房
- 徳川宗賢（1993）「電子計算機の「言語地図」作成への適用」『方言地理学の展開』ひつじ書房
- 徳川宗賢（1996）「語の地理的伝播速度」『言語学林 1995-1996』pp.893-909,三省堂
- 鳥谷善史（2002）「電子化言語地図の現状と問題点」『日本語研究センター報告』vol.10 大阪樟蔭女子大学日本語研究センター

- 鳥谷善史(2003)「社会言語学における GIS の萌芽とその展開」『人文科学と GIS』
富山大学人文学部 GIS 研究会
- 鳥谷善史 (2006)「GIS を用いた既存言語地図データベースの試み」『日本フィールド言語学：新たな学の創造にむけた富山からの提案』日本海総合研究プロジェクト研究報告 4 桂書房
- 中井精一・坂口直樹 (2000)「データベースソフトによる富山県言語動態地図の作成について」『富山大学人文学部紀要』33 富山大学人文学部
- 中井精一 (2012)『研究叢書 423 都市言語の形成と地域特性』和泉書院
- 永家忠司・外尾一則・北川慶子・猪八重拓郎 (2011)「東日本大震災の被災地域における社会福祉施設の立地特性について」土木計画学研究・講演集 44
- 永田良太 (2010)「接続助詞ケドの発話解釈過程と聞き手の言語的反応との関わり」『鳴門教育大学研究紀要』第 25 巻
- 新村出 (1944)『外来語の話』新日本図書のうち講談社文芸文庫
- 丹羽哲也 (1998)「逆接を表す接続助詞の諸相」『人文研究・大阪市立大学文学部紀要』第五十巻 第十分冊
- 野間晴雄ほか (2012)『ジオ・パル NEO 地理学・地域調査便利帖』海青社
- 禰宜田龍昇 (1986)『淡路方言の研究』神戸新聞出版センター
- 灰谷謙二 (2010)「「しまなみ海道」と瀬戸内海方言の東西流通」『尾道大学地域総合センター叢書 3』尾道大学地域総合センター
- 橋本雄一 (2009)『地理空間情報の基本と活用』古今書院
- 橋本雄一編 (2012)『GIS と地理空間情報 ArcGIS10 とダウンロードデータの活用』古今書院
- 彦坂佳宣 (1997)「原因・理由を表す助詞の分布と歴史 (ノート) - 『方言文法全国地図』の解釈 -」『日本語の歴史地理構造』明治書院
- 彦坂佳宣 (2001)「原因・理由を表す助詞の分布と歴史」『全国方言地図と文献との対照による助詞・助動詞の発達・伝播に関する研究』科学研究費補助金 (基盤研究 C) 研究成果報告書、1998 年-2000 年度 (研究代表者：彦坂佳宣)
- 彦坂佳宣 (2005)「原因・理由表現の分布と歴史 『方言文法全国地図』と過去の方言文献との対照から」『日本語科学』17 pp.65-88
- 広島大学方言研究会 (1986)「大分県姫島方言の研究 第 2 部 文法・語彙・方言の動態」『広島大学方言研究会会報』第 29 号
- 広戸惇 (1965)『中国地方五県言語地図』風間書房
- 平山輝男ほか編 (1992)『現代日本語方言大辞典』明治書院
- 兵庫県高等学校教育研究会国語部会編 (2003)『兵庫県ことば読本』東京書籍

- 藤井豊監修（1998）『小豆島秋まつり太鼓台』マルシマ印刷
- 福嶋秩子（2008）「世界の言語地図作成・活用状況に見る言語地理学の現状と課題」『日本語科学』23、国立国語研究所
- 福嶋秩子（2010）「分布をどう読むか」（上野善道監修『日本語研究の12章』明治書院
- 藤原与一（1953）「日本語表現法の文末助詞：その存立と生成」『国語学』10輯
- 藤原与一（1958）「方言「文末助詞」（文末詞）の研究について」『方言研究年報』第一巻 広島大学方言研究会
- 藤原与一（1962）「方言地理学の方法」『方言学概説』武蔵野書院
- 藤原与一（1972）「方言文末詞（文末助詞）の研究」広島大学文学部紀要 特輯号2
- 藤原与一（1974）『瀬戸内海言語図巻』上・下巻 東京大学出版会
- 藤原与一（1976）『昭和日本語の方言第三巻瀬戸内海三要地方言』三弥井書店
- 藤原与一（1976）『瀬戸内海域方言の方言地理学的研究 —『瀬戸内海言語図巻』付録説明書—』東京大学出版会
- 藤原与一（1982）『昭和日本語方言の総合的研究 第三巻 方言文末詞<文末助詞>の研究（上）』春陽堂書店
- 藤原与一（1985）『昭和日本語方言の総合的研究 第三巻 方言文末詞<文末助詞>の研究（中）』春陽堂書店
- 藤原与一（1986）『昭和日本語方言の総合的研究 第三巻 方言文末詞<文末助詞>の研究（下）』春陽堂書店
- 藤原与一（1988）『瀬戸内海方言辞典』東京堂出版
- 藤原与一（1990）『文末詞の言語学』三弥井書店
- 藤原与一（1990）『中国四国近畿九州方言状態の方言地理学的研究』和泉書院
- 藤原与一（1996）『日本語方言辞書—昭和・平成の生活語—<上巻>』東京堂出版
- 藤原与一（1996）『日本語方言辞書—昭和・平成の生活語—<中巻>』東京堂出版
- 藤原与一（1997）『日本語方言辞書—昭和・平成の生活語—<下巻>』東京堂出版
- 藤原与一（1999）「瀬戸内海圏環境言語学志向」『瀬戸内海圏環境言語学』武蔵野書院
- 前田勇（1964）『近世上方語辞典』東京堂
- 牧村史陽編（1989）『大阪ことば事典』講談社学術文庫
- 馬瀬良雄（1977）『方言圏論再考』『言語生活』312
- 町博光（1979）「第9章 方言伝播の道（1）—海路と川路の場合—」『日本語方言学—その課題と方法—』東京堂出版

- 町博光 (1999) 「中国山地域方言の動態～『瀬戸内海言語図巻』との比較から～」
『瀬戸内海圏環境言語学』武蔵野書院
- 町博光 (2002) 「瀬戸内海域方言の動態：『瀬戸内海言語図巻』の追跡調査による」『瀬戸内海に関する研究：創立 15 周年記念事業』福武学術文化振興財
- 馬瀬良雄 (1992) 『言語地理学的研究』桜楓社
- 松丸真大 (2003) 「社会言語学における GIS アプリケーションの活用と評価－ArcView を用いた言語変化研究の試み－」『人文科学と GIS』富山大学人文学部 GIS 研究会
- 村山祐司ほか (2009) 『生活・文化のための GIS』朝倉書店
- 室山敏昭・藤原与一編 (1999) 『瀬戸内海圏環境言語学』武蔵野書院
- 室山敏昭 (1977) 「愛媛県温泉郡中島町大浦の方言－『瀬戸内海言語図巻』の 25 年後追跡調査－」『内海文化研究紀要』第 5 号
- 室山敏昭 (1999) 「瀬戸内の一島嶼における生活語彙と環境－環境言語学の一つの試み－」『瀬戸内海圏環境言語学』武蔵野書院
- 室山敏昭・藤原与一編 (1990) 『瀬戸内海圏環境言語学』武蔵野書院
- 柳田國男 (1946) 『毎日の言葉』創元社。なお、参考資料として『柳田國男全集 第十九卷』(1969)筑摩書房に再録分を利用
- 柳田國男 (1969) 「先祖の話」『定本柳田國男集』第 10 卷、筑摩書房
- 柳田國男 (1980) 『蝸牛考』岩波文庫
- 柳田國男 (1990) 初刊一九二七「雷神信仰の変遷」『柳田國男全集 11』筑摩書房
- 柳田征司 (1977) 「原因・理由を表わす『～サニ』の成立と衰退－『史記抄』を資料として－」『近代語研究』第五集 武蔵野書院
- 脇田順一 (1975) 『讃岐方言の研究』図書刊行会
- 和田實・鎌田良二編 (1992) 『ひょうごの方言・俚言』神戸新聞総合出版センター
- Bailey, Guy. Real and Apparent Time, J.K. Chambers, Peter Trudgill, and Natalie Schilling-Estes (eds.), *The Handbook of Language Variation and Change*. 312-332. 2002. Blackwell.
- Chambers, J.K. (2002) Patterns of Variation including Chang. In J.K. Chambers, Peter Trudgill, and Natalie Schilling-Estes (eds.), *The Handbook of Language Variation and Change*. 358-361. 2002. Blackwell.
- Giles, H., & Powesland, P.F. (1975) *Speech style and social evaluation*. London: Academic Press.

Lameli, Alfred, Ronald Kehrein and Stefan Rabanus (2010) Language and Space: An International Handbook of Linguistic Variation: Language Mapping (Mouton De Gruyter, Berlin)

参考 URL

西沢一鳳 (1883) 『皇都午睡』 甫喜山景雄 (「近代デジタルライブラリー」提供)
国立国会図書館公開 <http://kindai.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/763829/9> (閲覧 : 2015.01.19)

既発表論文との関係

第3章 LASの電子データ化の試み

峪口有香子・岸江信介（2013）『瀬戸内海言語図巻』の電子データ化の試み：瀬戸内海
域における方言通信調査による電子データとの実時間上の比較」2013年度日本語学会
中国四国支部大会研究発表配布資料

第4章 空間検索・標準偏差楕円による言語分析

－「さつまいも」を事例として－

峪口有香子・岸江信介（2013）「淡路島の方言語彙に関する研究－じゃがいも・さつまい
も・さといも－」『徳島大学言語文化研究』（21）徳島大学総合科学部

第5章 標準偏差楕円による言語分析－「にわか雨」を事例として－

峪口有香子（2014）「讃岐方言のにわか雨・雷の方言」『香川の民俗』（76）香川民俗学会
峪口有香子・平井松午（2014）「淡路島方言の実時間上の言語変化－『瀬戸内海言語図巻』
との比較を通じて－」『徳島大学人間社会文化研究』（22）徳島大学総合科学部

第6章 カーネル密度による言語分析－文末詞「ナー」「ノー」を事例として－

峪口有香子（2014）「瀬戸内海域における言語変化－『瀬戸内海言語図巻』との比較を通
じて－」『徳島大学国語国文学』（27）徳島大学国語国文学会

第7章 標準偏差楕円・メッシュ地図による言語分析

－接続助詞「から」を事例として－

峪口有香子（2013）「GISによる言語地理学的研究－瀬戸内海沿岸における方言調査を事
例に－」『国立国語研究所時空間変異研究系合同研究発表会 JLVC2013 予稿集』国立国
語研究所時空間変異研究系

峪口有香子・平井松午（2014）「淡路島方言の実時間上の言語変化－『瀬戸内海言語図巻』
との比較を通じて－」『徳島大学人間社会文化研究』（22）徳島大学総合科学部

峪口有香子（2015）「解説」『小豆島言語地図』科学研究費補助金（基盤研究 A）研究成
果報告書、2011年-2015年度「方言分布変化の詳細解明－変動実態の把握と理論の検
証・構築－」（研究代表者：大西拓一郎）p31.

峪口有香子（2015）「瀬戸内海地域における言語変化の動向－『瀬戸内海言語図巻』との
比較を通じて－」『第100回日本方言研究会発表原稿集』日本方言研究会

第8章 WEBによる言語地図の公開

峪口有香子 (2015) 「統計解析言語 R による言語地図の可視化」『文理シナジー学会誌』
(20-2) 文理シナジー学会

第9章 瀬戸内海地域における言語変化—「コピュラ形式」を事例として—

峪口有香子・岸江信介 (2015) 「瀬戸内海地域における言語変化—小豆島をフィールドとして—」『国立国語研究所時空間変異研究系合同研究発表会 JLVC2015 予稿集』国立国語研究所時空間変異研究系

第10章 瀬戸内海地域における言語動態

—文末詞「ノーシ・ノモシ」「ゾイ」を事例として—

峪口有香子 (2015) 「瀬戸内海方言の実時間上の言語変化—『瀬戸内海言語図巻』との比較を通じて—」『次世代人文社会研究』(11) 日韓次世代学術 FORUM

第11章 淡路島における言語動態

—「じゃがいも」「さといも」を事例として—

峪口有香子・岸江信介 (2013) 「淡路島の方言語彙に関する研究—じゃがいも・さつまいも・さといも—」『徳島大学言語文化研究』(21) 徳島大学総合科学部

第12章 逆接の接続助詞について

—「けれども」「そうだけれども」を事例として—

峪口有香子 (2013) 「淡路島における逆接の接続助詞について」岸江信介・村田真実・峪口有香子・曾我部千穂・森岡裕介・林琳編『淡路島言語地図』徳島大学日本語学研究室

峪口有香子 (2015) 「解説」『小豆島言語地図』科学研究費補助金(基盤研究 A) 研究成果報告書、2011年-2015年度「方言分布変化の詳細解明—変動実態の把握と理論の検証・構築—」(研究代表者:大西拓一郎) pp.33.36

第13章 小豆島における民俗語彙

—「神輿」「葬式」「埋葬地」「墓制」を事例として—

峪口有香子 (2015) 「解説」『小豆島言語地図』科学研究費補助金(基盤研究 A) 研究成果報告書、2011年-2015年度「方言分布変化の詳細解明—変動実態の把握と理論の検証・構築—」(研究代表者:大西拓一郎) pp.152-155

※第1章・第2章・第14章については、新たに書き下ろした。

本研究を遂行し学位論文をまとめるにあたり、始終暖かい激励とご指導、ご鞭撻を頂いた岸江信介教授に心より感謝申し上げます。時に応じて、厳しくご指導いただいたこと、またやさしく励ましてくださったことを通して、私自身の至らなさを実感することができたことは今後の努力の糧になるものであります。学位論文審査において、貴重なご指導とご助言を頂いた、平井松午教授、高橋晋一教授に心より感謝申し上げます。

最後に、本研究を進めるにあたり、日本学術振興会科学研究費補助金（特別研究員奨励費、研究課題番号：13J08268）「GIS による言語地理学研究－瀬戸内海地域をフィールドとして－」の援助を受けましたことに対し、深く感謝の意を表して謝辞と致します。